
異世界を渡る旅人達～クレア編～

コノハ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界を渡る旅人達〜クレア編〜

【Nコード】

N4166H

【作者名】

コノハ

【あらすじ】

異世界の存在を知り、異世界を自由気ままに旅する旅人、ルウ・ペンタグラム（外見15、6歳）とサラ・イーストスカイ（外見15、6歳）。ルウの義理の娘、ミリア・ペンタグラム（外見20歳前後）。そして、特殊な能力ゆえに元の世界を追われた少女、クレア（10歳）。4人の中で一番年少者のクレアは、気ままな旅から一転、小学校生活に。果たして彼女は学校生活を楽しめるのか？ご期待ください！【注】この作品は『異世界を渡る旅人達』の続編です。未読の方はそちらへどうぞ。

プロローグ（前書き）

この作品は『異世界を渡る旅人達』の続編です。未読の方はそちらを読まれたほうがよろしいかと思えます。

プロローグ

私がお父さんの娘になってから、3年近い時が流れた。

信じられないくらい長生きのお父さんからしたらあまり長くはないのだろうけど、私の中では一番長く、幸せな時間だった。

お母さんと、ミリアお姉ちゃんと、お父さんと、私。

4人の旅は苦しいことや悲しいこともあったけど、とても楽しかった。

旅をして、いろんなことが知れた。

でも、お母さんが言うには私には教育が必要らしい。

なんでも、私には集団行動ができない、とか。

……集団行動なんてできなくても旅はできるのにね。

私はそう思うんだけど、他のみんなは違うみたい。

私に『学校』っていうところに行ってほしいらしい。

私はお父さんとお母さんに命を救われた。だから、お父さんやお母さんの望みは、できるだけ応えてあげたい。

……でも、男がいるところに放りこまれるのは、嫌だ。

嫌だけど、我慢しなきゃ。今の幸せな人生があるのは、二人のおかげなんだから。

そういつたいきさつで、私は『学校』に入るようになった。

どつというわけか私は4年生から入るらしい。

確かに、私は10歳だけど、1年生になったことがないのに、いきなり4年生で大丈夫かな？

お父さんにそう訊いてみたら、

「4年生から入って大丈夫か、だって？ 大丈夫さ。君は基礎の勉強は小さい時からしているし、精神も年齢以上に成熟しているしね。集団行動を学びに行くだけならどの学年に入っても一緒だと、僕は思うな。……それに、年齢もあるし。というか理由の全てな気

がするよ」

とのことだった。

……お父さんが言うなら、大丈夫なのだろう。

なにしろお父さんは外見15歳なのに何十人もの養子をもつ、子育てには馴れきった人なのだ。

世界と世界を渡る、不老の父親……

銀髪の髪に、青の瞳。服装はいつも長Tシャツと長ズボン。

優しいし、かつこいいし、何より欲がない。

私は元の世界で虐待を受けていて、その影響で今でも男が怖いのだけれど……お父さんだけは別だ。欲がないから、警戒する必要もない。

お母さんも旅人で、同じく外見15歳の不老なんだけど、まだそんなに年を経えていないらしい。

赤い髪に赤い瞳の、かなり美人のお母さん。

火炎を自由に扱える能力を持っていて、戦いではいつもお父さんより強かった。

でも、まだ子供っぽい印象があるので、相談相手というよりは、気の合うお友達、みたいな感じだ（こんなこと思ってたら失礼かな？）。

「学校ってどんなところ？ そうねえ。教科書的に言うなら、勉強するところかな。それだけじゃないけどね。……それだけじゃないから、問題もいろいろあるけど。ま、クレアなら楽しめると思うわ。この3年で、かなり常識が身についてきたからね」

なんでも気軽に相談できるのは、ミリアお姉ちゃんだ。

外見年齢は20歳ぐらい（実年齢はかなり長生き）。

長くて墨に染めたみたいに黒い髪に、綺麗な茶色の瞳。

背は高く、女の私でも息をのむぐらいの美人さん。

私はいつも困ったことがあったらミリアお姉ちゃんに相談する。
長く生きているから、知恵や知識はいっぱいあるのだ。

「学校に行く意味？ …… 難しい質問ね。確かに勉強する、とか
集団行動を学ぶ、とかそういう意味も確かにあるのよ。 …… でも、
それだけじゃないの。教えてもらうこともあるけど、自分で学ばな
いといけないこともあるの。」

友達の作り方とか、恋のしかたとかも、学校では教えてくれない
けど、学校でしか学べないことよ。

だから、あなたは学校に行くべきよ。あなたは学校で教えてくれ
る勉強とかはちゃんとできるの。でも、それだけじゃ足りないの。
あなたが学ぶべきは、その学校が教えてくれない、でも学校でしか
学べないことなの」

ミリアお姉ちゃんは、そう言ってくれた。

『学校』でしか学べないこと。

それを、私は学びに行くべきだと、言ってくれた。

いつもなら、相談すれば不安や戸惑いは露みたいに消えた。でも
今は違った。

お父さん、ミリアお姉ちゃんに相談してみても、不安が消えたわ
じゃない。まだ、漠然とした、恐怖に近い感情が、心の中を渦巻
いている。

……でも。

少しは、学校が楽しみになってきたかな。

やっぱり、相談してよかったな。

……ありがとう、お父さん、お母さん、ミリアお姉ちゃん。
私、『学校』でがんばってみるよ。

ブログ（後書き）

感想、ご意見ぜひお寄せください！あなたの様のご意見が、作者の勉強になります！（返信率100%）

第1話　転校初日

どこにでもある、普通の世界。

平和な平和な、日本、東京、琴乃若。

私は、ここ私立^{はひま}玻座真学校の校門前にいた。

厳かな雰囲気醸し出す黒い門に、レンガ造りの塀。そこには『私立玻座真学校』とやたら大きく名前があった。

資料で見た限りでは、この学校は広く、本棟と部室棟、寄宿舎に分かれている。

寄宿舎を利用するのは遠くから通っている生徒で、全校生徒の4分の1に当たらしい。

この学校は小中高一貫の学校で、進学は全てエレベーター式。よって、勉強にはあまり力を入れているわけではなく、クラブや行事に力を入れているようだ。

生徒会の権力は生徒の進退学にも関与できるほど強いらしい。

この学校は、子供たちが作り上げるひとつの国みたいなもの。

私はお父さんたちの話を聞いてそう思っていた。そしてこの学校はちよつとやさつとじゃ逃げられないような作りになっている。

つまり、社会のいいところも悪いところもまるごとひっくるめて箱庭にしたような、そんな学校。

「……私は、ここに……」

私は、そんな特徴の学校に転入することになった。

きっと、いろいろあるだろうけど。

できることなら、楽しみたいな。

私が思ふことは、ただそれだけだった。

「……こんにちは、みなさん。今日からこのクラスで一緒に勉強することになった、クレア・ペンタグラムです」

玻座真学校小等部、4年3組の教室。机はクレアの分も含めて32ほど並んでいる。

6列あつて、窓側の列と廊下側の列だけ、6人分席がある。

普段は騒がしいが今は静まりかえった教室。生徒たちはみんな、教卓のそばにいる少女を見ていた。

腰まで届く黒髪に、漆黒の瞳。

もうそろそろ夏も盛ろうかという季節なのに、裾が足首まであるジーンズ地のコートをしっかり着こんでいる。

彼女を、4年3組のクラスメイトは凝視する。

（うわ、かっこいい……）

ほぼ全員が、そう思った。

落ち着いた表情。理性的な瞳。孤高な雰囲気。女子にしては長身なので、さらにその印象を際立たせている。格好の奇抜さも、さらにその独自性を際立たせていた。

「えつと……しゅ、趣味とかはないの？」

簡潔な自己紹介をただけで黙ってしまったクレアに、担任の教師が訊いた。

新人の女教師で、正義感が強く、生徒と教師の絆を信じているよ
うな、そんな教師。

クレアは担任に一瞥をくれることなく教室を見渡したまま、

「……ないわ」

とだけ答えた。

静かだった教室が、さらに静まりかえる。

「え、えつと……じゃ、じゃあみんなから質問はあるかな？」

担任はもはやそう言うしかなかった。
しかし。

「質問は受け付けない」

びつくりするぐらい澄んだ声で、クレアは言った。

彼女は教室を見回し、自分の席の見当をつけるとその席にそばに
行った。

教室窓側、後ろから二番目。

「……この席？」

確認するように、クレアは言う。彼女は教師の無言を肯定と受け
取り、その席に座る。

席に座ると彼女は腕を組み、荘厳に言う。

「授業はどうしたの？ 私はいいから早くはじめたら？」

「え、え？」

戸惑いながらも、ほとんど言われるがまま教師はチョークを手に取り、

「えっと、じゃ、じゃあ……算数の教科書を出して……」

沈黙の中で、教師の声はよく響いた。

しかし、静寂はすぐにこそこそと話す声になり、気がついたところには、いつもの騒がしい授業に変わっていた。

「……」

クレアはそんな授業風景を、じっと、見つめていた。食い入るように、じっと。

授業が終わると、みんなクレアのもとに集まった。
みんながみんな、クレアに興味を示し、質問したいと思っていた。
しかし。

「……ごめん。私は質問には答えないわ」

そう言うと、教室から早々に立ち去ってしまった。
クレアが消えて、教室中がぽかんとする。

「……フン！ なんですよ、あの態度！」

真っ先にそう憤慨したのは、高飛車な印象の女子。

彼女の名前は柊風羽。
ひいらぎ ふうわ

琴乃若を代表する豪族、柊家の一人娘である。

この町、琴乃若は3つの豪族に支配されている。

財力の柊。
ひいらぎ

権力の帝。
みかど

暴力の崇。
たたり

この3家の言葉は、この町の言葉。

もちろんこの学校にも、家が持つ力は関わってくる。絶対的な経済力を誇る柊家。

彼女はその家の権力を重ね着て、クラスの中心的存在になっていた。

「そうです！ 普通、クラスの権力者である風羽様に挨拶するべきなのに！」

取り巻きの女子が、同調して言う。つられて周りの女子も、「そうよね」とか「ほんとに失礼ね」とか言い始める。

「たしかになんであんなに無愛想なんだろう？」

心底不思議そうに、クラス1の美男子、神宮克樹じんぐう かつきが言った。

「緊張してたんじゃねえか？」

男子の一人が言った。それに触発されて、男子は口々に「そうだよ、緊張してたんだよ」とか「きつと照れ屋なんだ」とか言い始めた。

そんな状況を一人あたふたとしながら見ている女子、黒月沙耶くろつき さや。

「なんですの！？」 男子はあんな女の肩を持つんですか！？」

風羽が、克樹をにらみながら言った。その声には異常なほどの敵意が込められていた。

「女子こそ、決めつけ過ぎじゃねえのか！？」
そっち

克樹もそれに怒鳴って返す。

「……えっと、……そうだ！」

今に男子VS女子の構図になるうとしている教室を、沙耶が何かを思いついて出たが、それに気づく者はだれもいなかった。

「おーい！ いたいた！」

ぶらりと校内探索をしていたクレアは、声をかけられ振り返った。本棟3階の渡り廊下。窓からはコの字型の校舎の形がよくわかる。その中ほどにで、クレアは立ち止った。

「はあ……はあ……ど、どこまで行くつもりなのよ……ここから先は中等部で、小等部の生徒は、……はあ、た、立ち入り禁止………なのよ………」

さっきまで走ってきたのだろう、その女生徒は息は切れ切れ、上半身を屈して言った。

「……なにか用？」

クレアはとことん無関心に、そう言った。

女生徒、黒月沙耶はそんな態度に戸惑いつつも、

「……あの、あなたがあんな抜け方するから、クラスが、なんだか喧嘩、みたいなのを、してて、それで、その」
「行かないわよ」

『一緒に来て』

と言おうとした矢先、クレアにそう言われた。

「な、なんで……」

顔を上げ、クレアを見ながら訊く。

「……男がいるから」

「……は？」

沙耶はその答えを聞いて、あっけにとられた。

「ど、どういうこと……？」

わけがわからず、訊く。

「……私、男の人が怖い。だから、男が何人もいるところ、行きたくない」

先ほどまでの冷静な雰囲気はどこにもなく、クレアの表情には怯えの色が見て取れた。

沙耶はその様子を見て、今まで女子校に行ってたんだ、と見当をつけた。

「でも、行かなきゃ。これからずっと過ごすクラスメイトだよ？」

沙耶は諭すように言う。

「いや、行きたくない。きっと、みんな私を問い詰める。女の子

の質問は大丈夫だけど、男の質問には答えたくない。男には私のことを知られたくない！」

なんでこんなに男の子を怖がるんだろう、と沙耶は思っていた。口には出さなかったが。

「大丈夫、男の子の質問には私が答えてあげるよ。だから、ね？」

沙耶はできるだけ優しく、言った。彼女を早くクラスに溶け込ませてあげたい――

そんな純粋な気持ちでの言葉だった。

「……そ、そんなに言うなら、行ってあげる」

そして、その気持ちは通じた。

クレアはぶっきらぼうに言って、来た道を戻りはじめる。沙耶もそれに続く。

「……ねえ、趣味とかないの？」

歩きながらふと、沙耶は訊きなくなつた。さつきはない、と答えていたが、もしかしたら知られるのが怖かったただけではないかと思つたからだ。

「……道具作りよ」

案の上、クレアは答えた。頬を指でかきながら、照れくさそうに。

「へえーそうなんだ。じゃあ、ねえ……。お姉ちゃんとかいるの？」

「……30人近くいるわ」

「へ、へえー。いっぱいいるんだ」

数の多さにびっくりするが、あまり突っ込まずすぐに気を取り直して、

「じゃあ、好きなタイプは？」

訊いてから、しまったと思った。クレアは男が怖いと言ったところなのに。

しかし、沙耶のそんな懸念はクレアの、

「男じゃない人」

という冗談めかした回答によって霧散した。

「あはは！面白いね！」

沙耶は声に出して笑う。

「……そうね」

クレアは、表情に出さずに言う。

二人はもう、すっかり仲良くなっていた。

第1話〜転校初日〜（後書き）

さて、ここでキャラ紹介などを。前作を見られた方も、そうでない方もこの物語を楽しめるよう、キャラについて知っていただきたいなあ……と、思ったので。

クレア・ペンタグラム（本名クレーシア）

あらゆる武器に触れるだけで即座に理解、使用ができる特殊能力『ユージュアクシオン』を持つ異世界の少女。

本名で呼ばれることを嫌い、会う人に必ずクレアと呼ぶよう言う。最初からクレアと名乗ることもある。

もともと孤児で、能力に目を付けた男に、酷い虐待を受けていた。そのため、情緒が不安定であったり、男性を極端に嫌ったりするようになってしまう。

口調は母親、サラのものと姉、ミリアのものが時々入り混じる。

「……なのよ」

と言う時もあれば、

「……よ」

と碎けて言うときもある。

親しい仲と話す時ほどサラの口調に近くなる。

趣味は道具作り。魔法道具も含む。

好きなものは両親。

嫌いなものは男。

コメント、感想、ぜひお寄せください！読者様の言葉が、作者の

原動力になります！

第2話　喧嘩のあとには

教室に二人が帰ると、すでに教室は戦場となっていた。

「なんですの、あなたたち男は！　野蛮で、考えなしで！」

「うるせえ！　女だって野蛮な時あるじゃねえか！」

「ハン！　男ほどではありませんわよ！」

「なんだと！？」

「やりますか！？」

柊風羽と神宮克樹を中心に、男子VS女子で完全に対立している。

教室の真ん中を線に、きつちりと二分している。

「ちょ、ちよつと、みんな……」

沙耶の制止の声も、怒りに目を曇らせた彼らには届かない。

「みんな、やめてよう……」

涙目になって、沙耶は言う。

それでも、言い争いは止まらない。

「お前な、少しは落ち着いてものを見たらいいんじゃないか！？
転校生みたいにさあ！」

「フン！　何かにつけては転校生、転校生！　そんなにあの子が
よかつたんですか！？」

「いい悪いじゃねえだろ！　あいつみたいにしたらどうだって言
ってんだよ！」

「お断りですわ！ 何が悲しくてあんな無愛想、見習わなくては
いけないんですか！」

「無愛想は関係ねえだえろ！」

「関係ありますわ！」

「んだとお！？」

ほとんど無意識的に克樹の手が風羽の胸倉に伸びた。

それに気付いて、風羽は身をよじってよけようとするが、逃れられない。

「……！」

しかし、克樹の手は阻まれる。

震えながらも、風羽を守ろうと飛び込んできた、クレアの手によ
って。

「あなた、なにをしているの？」

クレアの声はわずかに震えていたが、克樹はそれに気付かない。
言い表せないような圧倒感に、彼もまた震えていたから。

「な、なにつて、それは……」

「それは、なに？ 女の子の胸倉つかもつとするなんて、一体ど
ういうつもりなの！？」

克樹の手をつかんだまま、とがめるような視線を向ける。

その瞳の奥にある本物の敵意に、普通の生活をしてきた小学4年
生の子供が怯えないはずがなかった。

幼いころから人を殺し続け、虐待に耐え、身も凍るような経験を

しなければ身に付かないような、本物の、敵意。

この敵意は、すぐにでも殺意に変わる。それぐらいなら、克樹にでもわかる。

「う、あ……」

経験したことのない敵意に怯え、克樹は手を振り払い、数歩、下がる。他の男子生徒も、それにつられて下がる。彼らはみな、クレアが発する殺意に敵意にただ怯えるばかり。

「私は、あなた達男が怖い。……でも、他の女の子が男に何かされるのはもつと怖い。私と同じような目に、他の誰かが遭うなんて、絶対に嫌だ！ あんな痛い思い、誰にもして欲しくない！」

手を女子をかばうようにして広げる。敵意の瞳は変わらないが、目には涙が浮かんでいた。

「ま、まてよ、俺達はクレアをかばってたんだぜ？ 普通なら、感謝すべきなんじゃないか？」

克樹が、弁護するように言った。それでも、クレアの敵意に満ちた瞳は力を失わない。

「誰が、頼んだのよ！ かばってって、一体誰が頼んだのよ！ 勝手にかばわないでよ！ 私は男になんてかばわれたくない！」

クレアは必死に叫ぶ。

彼女は男に親切にされても、裏があるのではないか、何か企んでいるのではないかと疑ってしまう。彼女はそれがたまらなく嫌だった。

男がみんな悪い人間でないのは、父親を見て理解できた。

けれど、それをわかっていても、疑わずにはいられないのだ。

親切にされて、しかしそれを悪意で返してしまう。

その度に彼女は自己嫌悪してしまう。自分が最低な人間だと、どうしても思ってしまうのだ。

どうせ悪意にしか感じれないなら、最初から親切になんかされたくない。男とはしゃべるのも辛い。

そう彼女は思っている。

「もう、優しくしないで、話しかけないで！ 私のことなんて、無視しててよ！」

彼女の叫びは、喧嘩していたことすら忘れていたクラスメイトに、誰ひとり聞きもらすことなく届いた。

それから、一週間。

クレアの望みどおり、クラスの男子はほとんど話しかけようとは

しなかった。男子が彼女に話しかけるのは、事務的な連絡をする時だけであった。

いくら好奇心旺盛な男子でも、怖がり、怯える女の子にちょっかいをかけようとはしなかった。

向けられた尋常でない敵意もそうだが、それ以上に、『男に対する恐怖』が彼女の中で強大なのをクレアの叫びで理解したからであった。

そして、彼女に否定的だった柊風羽も、少しづつではあるが仲良くなってきている。

自己紹介の時無愛想だった原因がはつきりしたため、頭から否定する理由がなくなったからである。

「ねえ、クレア」

昼休み。給食の真っ最中、クレアと一緒にの班である黒月沙耶が、そう、切り出した。

隣にいるクレアはパンを食べる手を止め、

「うん？ なあに？」

と親しげに言った。

あの一件から、沙耶とクレアの仲はともよくなっている。一番最初に話した仲だからか、単に気が合うからか。

それはともかく……

「私たちって、友達、だよな？」
「……もちろんよ、沙耶」

どうやらクレアは、学園生活を楽しむことができそうである。

第2話〜喧嘩のあとには〜（後書き）

はい、どうでしたか？

クレア編の始まりはこれにておしまいです。

これから彼女がどのようにして学校生活を送っていくのか！？
楽しみなところです。

では、読んでくださりありがとうございました！

コメント&感想、ぜひ書いてください！読者様の言葉が、作者の
原動力になります！

では、また次回、お楽しみに！

第3話　予感

「……さて、小藤君」

玻座真はりま学校、校長室。

大仰な座イスに、小太りの初老の男性が座っていた。
紫檀の偉そうな机の向かい側、一人の女教師がおっかなびっくりに立っている。

「……君のクラスの生徒で、クレーシアという子がいただろう？」

初老の男性、柊喜一郎ひいらぎいちろうは女教師に確認するように言った。

彼こそがこの小中高一貫の玻座真学校の創始者にして、校長。

琴乃若一の財力を誇る豪族、柊家の党首であった。

年齢20にして琴乃若の実権を握り、50になる今までその能力でこの町を支えてきた実力者である。彼がいなければ、この町の財政は三日と経たずに崩壊してしまうだろう。

喜一郎はそれほど重要な人物なのだ。

「は、はい……」

それに対して、新任教師、小藤楓ことうかへはどこにでもいる人間だった。

家柄、なんてものはこの町においては柊みかど、帝たたり、崇の3家以外にはないに等しく、彼女の家も昔はそれ相応の豪族だったのだが、今ではすっかりどこにでもある普通の家になった。

しかし彼女の両親は人柄がよく、常に『人に優しくしなさい』と教えていた。

そのかいあってか、楓は今の職業に就いている。まだ二年ほどしか教師をしていないが、十分優秀だと言えるだけの力量はある。

「その子を、しっかりと見張るようにな」

その言葉に、楓は疑問を持った。

「見張る？ 注意しろ、ではなくてですか？」

「そうだ。見張れ、監視しろ。気を抜くな」

「なぜ生徒をそんな扱いしなきゃならないんですか！」

なにかの敵のように語る校長に、楓は憤慨した。まだなつたばかりの頃を忘れられないのか、彼女はときたま熱血教師のような行動をする。

実際、彼女はその心意気が認められ、この難関校に赴任してきたのだ。

「……君がそういう性格だということは、よく知っている。そしてそれで、成果を上げてきたこともね。……しかしだな、小藤君。世の中、そんな綺麗事だけでなり立っているわけではないのだよ。わかるかね？」

怒鳴るように言った楓をとがめるような口調はどこにもなく、それどころか優しく諭すような口調だった。

「……しかし！ 教育の面だけは、その綺麗事を成り立たせるべきです！」

「たしかにそうだ。君の言いたいことはよくわかる。嫌というほど、よくわかる。どんな時でも、子供には純粹でいてもらいたいのだからな。……しかし、だ。その観点から見れば、クレーシアは実によくない。……彼女の両親は15、6歳の子供だそうだ。……言っている意味が分かるかね？」

楓は息を詰ませた。

「高校生じゃないですか……」

「そうだ。高校生だ。まだ精神的にも経済的にも発展途上の年頃だ。……君はそんな彼らが、まともな教育ができると思っかね？」

楓は顔を振った。

まだ高校生なのに、まともな教育ができるとは到底思えない。まだ、精神的に未熟なのだ。なにか間違った教育をしている、おかしくない。

「……わかりました、よく見張るようにします」

一礼と共に、楓は校長室から下がる。

パタン、と軽い音がして、楓はこの部屋からいなくなる。

「……くすくす。やっぱり人間は愚かだね」

代わりに、声と共に『誰か』が校長の隣に現れた。

何の前触れもなく、突然に。

その『誰か』は、この学校の高等部の制服を着ている。真っ白な

雪のような髪に、銀色の瞳。

背は平均的で、どこまでも中性的。

彼、とも言えるし彼女、とも言える容姿をしていて、声もまた中性的なため、見ただけでは性別を判断できない。

「……君が彼女を？」

校長が、いぶかしげに訊いた。

彼のような彼女のような『誰か』は、くすくす、と嘲笑するように笑った。

「まさか。ボクはそんな簡単に力を使ったりはしない。……しかし、本当に彼女は愚かだね？」

再び、先ほどのセリフをその『誰か』は繰り返した。

「……なぜ、そう思うのかね？」

校長が、そう訊いた。

しかし彼は、そう訊きたかったのではない。訊かされたのだ。

そう、口を開けば勝手に、その言葉を紡ぎだすような、そんな感覚。校長ももはや馴れきったものなので動揺しないが、最初にやられた時は彼も驚いた。

「なぜ？ それは決まっている。彼女は、いや、キミもそうだな。なぜ、高校生が子育てができないなどと決めつける？ 子供だからか？ 精神が未熟だから？」

不敵に、『誰か』は笑う。くすくすと、心底可笑しそうに。おかしそうに、言う。

「なら……大人なら、絶対確実に、子供を導けるのだろうね？」

第4話　作文

4年3組の担任、小藤楓^{ことうかへ}は、普段通りに授業をはじめた。

（大丈夫、この年頃に本当に悪い子なんていないんだから……）
それが彼女の持論である。

子供はだんだん汚れていく。それは今の大人を見ればあきらかだろう。だから、この教育の場で、少しでも汚れないように育てあげようと、彼女は教壇に立つのだった。

「さあみんな、今日は作文書いてもらうよー！」

生徒の前では明るく、快活にするのも、彼女の信条だ。例えどんなに嫌なことがあっても、それを教室では出さないようにする。

原稿用紙を配りながら、彼女はさつき注意を受けた児童——クレシアを見る。

「えー！？」とか「めんどくせー！」とか叫ぶクラスメイトを尻目に、一人腕を組んで冷静にしている。

後ろの席の黒月沙耶に話しかけられても、無視している。……仲が悪いのだろうか？

実際はそんなことはなく、ただ両親の「授業中は静かにしなきゃだめ」という教えを守っているだけなのだが。それを楓が知るはずもない。

「はい、みんな原稿用紙ある？じゃあ、今日は将来の夢を書いて、発表してもらいます！」

そう彼女が言うとともにざわめきが大きくなる。けれど一部の生徒は鉛筆をとり、書き始める。

クレシアもそのうちの一人だ。だが……

（は、早い……）

異常な速度で鉛筆を進める。まったく迷わずに、文章を書いていく。

（きっと、大きな夢があるんだろうな……だから、すぐに書ける

んだ)

ほほえましい表情で、楓はクレेशアを見つめる。

今のクレेशアを見てみると、何か問題があるとは、とうてい思えなかった。彼女は、どこにでもいる、ちょっと冷静な女の子だ。

楓には、そうとしか思えなかった。

「はい、じゃあ、克樹君、読んでくれるかな？」

みんなが書き終わったところを見計らって、一番先頭の生徒から発表させていく。

クラスでも人気の高い男子、神宮克樹はいやそうに立って、原稿用紙に書いた自分の夢を発表する。

「『おれの夢は、消防士になることです。火事で死ぬ人を、おれはなくしたいからです。おわり』」

それだけ言うと、「もう十分だろ」と言わんばかりに座った。

楓も特に何も言わない。

「よし、じゃあ次の人——」

こうして、観察第一日目の授業は始まった。

ついに、クレेशアの番が来た。

「……はい、じゃあクレेशアさん」

そう楓が呼ぶと、

「私をクレेशアって呼ばないで！私はクレアよ！」

冷静な彼女では珍しく、声を張り上げてそう主張した。

その勢いに負けて、つい楓は、

「え、ええ……じゃあ、クレアさん、読んでくれる？」

と、言いなおしたのだった。

クレアは呼ばれると起立し、将来の夢が書かれた原稿用紙を読み上げる。

「では、読み上げます。……『私の夢』」。

『私の夢は、両親に恩返しすることです。』

私の命を救ってくれたお父さんと、私に生きる意味を教えてください。お母さんから受けた恩を返すことです。

両親が私にくれた愛情と優しさは、私の知らないものばかりでした。いつも恐怖と苦痛しか感じていなかった私は、両親に出会って変わりました。

優しさや愛情は、本の中だけのフィクションではないということ。を、両親のおかげで知れました。

今はこの学校に通って、仕事もできないけど、いつか私は向けられた恩に報いたいと思っています。誰かの力を借りることなく、私だけの力で、両親を助けてあげたいです。

何もできなかった私に、いろんなことを教えてくれた両親に、私は報いてあげたいし、報いるべきだと、思っています。だから、明日をも知れない人生だけど、もし将来というものがあるのなら、私は恩返しがしたいです。家族にお礼がしたいです。お姉ちゃんに恩返しがしたいです。

……たとえば、この命を失ってでも。』

——以上です」

そう言って、クレアは何事もなかったように座った。

（え？え？？ど、どうということ？）

しかし、彼女の文章は楓の平常心を失わせるのには十分だった。

（ど、どうということ？恐怖と、苦痛って……そんなの、嘘にしては現実味がありすぎるし、もし本当だったら……）

本当だったら、クレアは誰かに虐待されていたことになる。

それが彼女の両親でないことは、先ほどの文章を見れば十分に分かる。あの文章を読んでいる時のクレアの表情はとても生き生きとしていて、心の底から両親を慕っているということがありありと見て取れた。

「じゃ、じゃあ、最後、黒月さん」

できるだけ平静を装いながら、楓は言った。

クレアの文章の意味がわかる生徒が、この中に何人いるだろうか。「え、えと、『私の夢は、看護婦さんになることです。なんですか』と言うと——」

楓は混乱しながらも、頭を回転させ、クレアをどうするべきか、考えていた。

——けれど、楓にはどうしても、彼女の両親が間違った教育をしてると思えなかった。

第5話　昔話

ざわざわとした教室の中、私は自分の席で一人腕を組みその様子を眺める。

次の時間は体育。私が楽しみにする教科の内の一つだ。

「ねえ、クレアは着替えないの？」

私が斜に構えていると、親友の黒月沙耶くろつき さやが話しかけてきた。

黒い髪のに漆黒の瞳。子供らしい純粋さと、大人のような清楚さがある女の子。

彼女が転校当日に話しかけてきてくれたからこそ、今私はクラスで完全に孤立せずに済んでいる。

「ええ。男がいるし、コート脱ぎたくないし」

私がそう言くと、沙耶は呆れたように首を振った。

「やれやれ……そんなになんで男が嫌いななの？……べつに、言わなくてもいいけどさ。それはいいとして、なんでコート脱ぎたくないの？さっきの名前のこととか関係してたりする？」

名前のこと、と言えばさっきの授業の、時間のことが。

私は担任に本名を呼ばれて、らしくもなく感情を爆発させてしまった。

「……クレシアって、愚か者がいました」

私は、どこか遠い国で起こった出来事のように話し始める。

確かに起こったのは遠い世界だけど、当事者はここにいる。

「その子は本当に、どうしようもなく愚かでした。親が無く、他に家族もいないので、常に飢えていました。——愛というものに「これがお父さんたちと出逢う前なら、『ありもしないもの』と加えていただろう。」

沙耶は私の言葉に真剣な表情で聞いている。……そんなに耳を傾けたところで、いいことなんて一つもないのに。

「だから、その男が言った言葉に、愚か者は心奪われてしまいま

した。男はこう言いました。

『俺のもとに來い』
と。

その言葉を自分に家族ができると早合点した愚か者は、必死で氣に入られようと、無邪氣で無垢な笑顔で、言いました。

『わたし、くれーしあ。あなたはなんてなまえなの？』

と。すると男は笑いました。邪惡で酷薄な笑みでした。しかし、愚かな彼女は笑顔の意味に気づきません。男は言いました。

『俺の名前は、——』

そこで、話を止める。止めざるを得なかった。急に、吐き氣が込み上げてきたから。

「——！」

口を押さえ、必死で耐える。氣持ち悪い。世界が急に、遠くに行つてしまつたみたいに、音が聞こえにくくなった。

沙耶が私に背をさすり、名前を呼んでいる。クレーシアではなく、私が望んだ私の名前を。

まだ？もう3年以上も経っているのに、まだ、あいつの名前も呼べないの？呼び捨てにすることが、怖いのか？刷り込まれた恐怖心が、消えないのか？

別に、呼び捨てにしたところで罰が与えられるわけでもないのに、もう、苦痛に怯えることはないというのに！？いつになったら、私は解放されるのか？

「クレア！無理に話さなくていいから！」

沙耶が叫んでいるのがどこか遠くに感じる。

吐きそうになるのを必死で押さえて、私は話す。これだけは、知ってもらいたかったから。お母さんにも言つたことのない秘密を、知ってもらいたかった。

「——だ」

男の名前を、愚か者は必死で覚えようとします。何度も何度も名前を言う愚か者を、男は嗤わらいます。しかし、愚か者はその愚かさゆ

えに、男が自分に微笑んでくれているものだとばかり、思っていました。

『うん、おぼえたよ！おじちゃん！じゃあ、おじちゃんのおうちにいこう！』

愚か者はそう言っで、自ら、地獄へ向かおうとします。男もべつに、それを阻もうとはしません。

『ああ、早く行こうな。歓迎してやるからよ』

その歓迎の意味も理解できない愚か者は、そのまま、地獄の釜へと、飛び込んでいきました、とさ……」

やっと、それだけを言っで、急激に意識のボリウムが下がっていった。

きつと、昔のことを思い出しすぎたせいだ。だから、早く忘れるためにも、一度意識を落とそうとしているんだ。

……こんな気分、嫌だな。

だから、そう大して抗わずに。

私は、意識を失った。

……過去の話をしただけで気絶してしまうなんて、私はなんて弱いんだろう？

第5話〜昔話〜（後書き）

はい、今回は少し更新が遅れてしまいました。すみませんでした！
少し書くのに手間取ってしまい、気が付いたら12時を超えていて……本当にすみませんでした！

第6話　笑顔

次の授業は、体育だったはず。

それなのになぜ、私の生徒はここで倒れているの？

4年3組担任、小藤楓はクレアが横たわるベッドを見ながらそう思っていた。

楓は保健室からのクレアが倒れたという連絡を受けて、ここに来たのだった。今はクラスは自習、という形をとっている。

楓はベッドのそばにある丸椅子に腰かけている。隣には、クレアの手を心配そうに握っている黒月沙耶がいる。

「ごめん、ごめんね。思い出したいくないことだったんだね。ごめんね」

沙耶はしきりに、そう言って謝っている。

この状況で沙耶に『どうしてこんなことになったの？』と訊くわけにもいかず、ただ座っていることしかできない。

「ん……」

クレアがうつすらと、瞼を開けた。

「クレア！」

沙耶は声をあげて喜んだ。彼女の瞳には、涙の痕がうかがえた。よほど心配だったのだろう。

「……さ、や？」

上半身だけベッドから起き上がると、クレアは疑問の声をあげた。「クレア、ごめんね。話したくないことだったんだね。無理に訊いてごめんね」

沙耶は深く頭を下げた。

「……いいわよ、別に。ちょっと精神が混乱しただけだから。それに、一度思い出したおかげで、整理がついたわ。ありがとう、沙耶。あなたのおかげで、少しは救われたわ」

楓にはクレアは無理をしているように映ったが、全てが嘘、とい

うわけではなさそう。救われたのは、事実なんだろう。

「そんな……それでも、ごめんね。もう訊いたりなんかしないから、安心してね」

沙耶は申し訳なさそうに言う。

会話を聞いている限りでは、クレアが倒れたのはどうやら沙耶が何かを訊いたかららしい。その何かが気になるけど……訊いてはいけないことみたいね。

楓はそう結論をだすと、もうクレアから事情を聞き出すという選択肢は彼女の中からなくなった。今回倒れた原因を生徒のトラウマを掘り出してまで説明しなければならぬことだとは、思えなかったからだ。

「……ねえ、沙耶。私は、いろんなことをみんなに隠してるわ。名前のことだってそうだし、コートのことだってそう。他にもいっぱい。……それでも、いいのかな？」

不安そうに、クレアが訊いた。きっと今回のことは、そういった不安から、話さなければ、と思って無理をしたから起こったんだろう。

「……大丈夫よ」

答えたのは、沙耶ではなく、楓だった。

「大丈夫よ、クレア。人間、大なり小なりの隠しごと、生きていれば誰だってできてくるわ。それを言わなきゃいけないなんてことはないのよ。隠したければ隠せばいいの。言いたければ言えばいいの。……でも、今後、倒れるようなこと、やめてね。先生心配しちゃうから」

最後に微笑んで、楓は言った。

笑顔。それが人間を癒す最高の表情だと、楓は思っている。

笑顔にもいろんな種類があるけれど、他人のための笑顔は、人の心に一番届く。

それを証明するのは、彼女の経験とか、そんなものではなく。

「……そうね。もう、無理はしないわ。自分のペースで、過去と

折り合いをつけていくわ」

「わ、なんかクレアって大人っぽいね！」

「そうかしら？沙耶こそ大人らしいんだけど……」

「え？そんなことないよ！」

「そうかしら？」

「そうだよ！」

この二人が、たがいにたがいを認めあつて、

「 $\frac{1}{9}$ 」

「あは……」

こうやって、数秒前の重苦しい雰囲気を忘れて、

「あははははははははは！」

笑いあえることが、何よりの証明だ。

私は保健室でしばらく休んだあと、沙耶と一緒に教室へ戻った。からりと教室の引き戸を開け、教室に入る。

「……大丈夫ですか、クレア」

このクラスの委員長でもある高飛車な女の子、柊風羽^{かざは}が意外にもそう言っただけ私たちを歓迎した。

「ええ。大丈夫よ。少しめまいがしただけ」

苦しいいいわけかな？とか思ったが、

「そう」

これまた意外にあっさりと納得してくれた。

「……みなさん、あなたのことを心配していました」

そして急に、何かを話し始める。風羽の顔は少し朱に染まっていた、いつも威風堂々な彼女らしくなく少しうつむき気味だ。

「しかし、もし大変な病気だった場合、大人数で質問攻めというのもなんですから、代表でクラス委員の私が仕方なく、あなたに訊いたのです。……いいですか、クラス委員だからです。決して、あなたが心配だったからというわけではなくて……いや、その……だからと言って完全に心配じゃなかったかといえばそうではなく……と、とにかく！大丈夫というのなら、この先の授業はしっかりと受けていただきますよ！構いませんね？」

なるほど、どうやら照れているらしい。普段は高飛車で嫌な性格だな、と思っていたけれど、こうやって顔を真っ赤にしながら威勢を張る彼女を見ると……その、心の奥がポワツとなる。この感じがかわいい、ということなのだろうか。

「もちろん、受けるわよ」

そんな感情をできるだけ出さずに、私は答えた。

「フー！なら、いいのです。では、ごきげんよう」

そう言っただけ風羽は取り巻きたちのところに戻っていった。

「……じゃ、席に戻るうか」

後ろの沙耶に、私は言った。彼女はほっとした表情をしている。このクラスの首領たる彼女と私がもめごとを起こさないか気が気でなかったのだろう。

「ええ。行きましょ」

そう言って、沙耶は自分の席について、自習をしようと準備を始める。まだ担任は来ていないので、自習は解除されないままだ。監督教員もいないのでみんな好き勝手やっているのかと思ったら、ちゃんと勉強している。

……私もやろうかな。

私も自分の席についた。沙耶が後ろなので、すぐに話ができるというのが嬉しい。

……あ、そう言えば。

さっきの昔話で、ひとつだけ言い忘れてたことがあったんだ。

「……クレーシアという愚か者は、ルウという若者に引き取られ、名前をクレアと改め、仲のよい友達や信頼できる家族とともに、幸せに暮らしているんだと、さ。……続く」

小さく、誰にも聞こえないように気をつけながら、呟いた。

いくら私でも、面と向かって『あなたのおかげで幸せだ』とは、言えない。
でも。

「沙耶」

私は後ろを向く。

「なに、クレア？」

「ありがとう」

「……どういたしまして」

……でも、ありがとうぐらいは、言っておきたかった。

第7話　呼出

「……くすくす。彼女、今日倒れたそうだよ？なんでも、過去の話をしていたせいだとか」

校長室に、声が響く。少し低めの女の声にも、少し高めの男の声にも聞こえる中性的な声だ。

「思い出話をしただけで倒れるものかね？」

ふかふかの偉そうな椅子に座った校長はいぶかしげに訊く。

「くすくす。キミは本当に教育者かい？キミは一体彼女の何を知っている？あの子はもしかしたら死ぬような目に何度も遭って、それがトラウマになっているかもしれないのに噂だけで判断するなんて、とてもじゃないが校長先生のすることだとは思えないな」

すると声があざけるように笑った。

「……で、なんの用かね？」

反論できないからか、話題をそらすように校長が言った。声はそれをとがめることはしなかった。むしろ、ようやく本題に入れて喜んでいるところか。

「いや、簡単な頼みごとだよ。放課後、ボクのところへ彼女を招待したいと思つてね。その準備……つまり、放送室の使用許可を得たくてね。構わないかい？」

そう声が訊くと、校長はやれやれと嘆息しつつ、こう言った。

「君は別に私に許可を得なくともとも構わないよ。校則でも、物理法則でもそう決まつてる。……自由に使いたまえ」

「実にありがたい。今日を逃したらチャンスはないかもしれないと思つていたんだ。彼女にボクを知ってもらう機会は、そうそうないと思うからね」

それきり、声は聞こえなくなった。放送室へ行ったのだらう。

「……まったく、振り回される日々から、早く抜け出したいものだな」

一人になった校長はそう一人ごちた。
しかし、彼自身それが叶うことがないとあきらめていた。

なぜなら、声の主の能力が絶対的で、終わりが無いことを理解していたからだ。

気を失ったせいとか妙に長く感じた一日を終え、放課後。
両親とミリアお姉ちゃんが待つ家へ帰ろうとした時だ。
ピンポーンと、校内放送が入った。
なんだろう？と私は注意して聞こうとする。

『えー、4年3組、クレア・ペンタグラム。今すぐ生徒会室に来るように。生徒会室は一階職員室の隣にあるから、迷うことはない

と思う。……では、ゆつくり待っているので用事があつたら先に用事を済ませて来てくれたまえ。以上』

簡潔に用件だけ、というわけではないがどこか事務的な口調。

「クレア、何したの？」

「え？」

沙耶が疑いの目を私に向けている。……なぜ？

よく見れば、教室も私を見てひそひそと話している。

「……この学校の生徒会に呼び出される、その意味をあなたは理解していないようですね？」

そんな私に追い打ちをかけるように、柊風羽^{かぜは}が説明しようとしていた。

「いいですか？この学校の生徒会は、他の学校の生徒会とはわけが違います。この町、琴乃若^{おさ}の長、それが生徒会というものなのです」

ふむふむ、琴乃若のトップが、この学校の生徒会、ということかなるほど。

「……そんなこと、信じれると思う？所詮は子供の集まりよ？それが大人の世界を牛耳つてるとでも？」

あり得るわけがない。まともな政治や経済ができないと、長なんてできない。そんなの、子供にできるわけがない。

「信じるも信じないも、事実なのですから仕方ないでしょう？私のお父様も柊の党首ですけど、生徒会長には逆らえませんもの」

……それは、きつと弱みを握られているから頭が上がらないだけなのでは？

口には出さずに思ってみる。

あながちあり得なくもない。

少なくともこの町が学校の生徒会によって支配されているなんてことよりは、よっぽど現実的だ。

「……生徒会長って、どんな人？」

まあ、仮にこの町を支配しているのだとして、その人がどんな人

間か、すこし知りたくなってきた。もしかしたら会うかも知れないし。

「高等部の生徒で、雪のような白髪の人、としか。あまり人前に出てこられない人なので……」

真っ先にお父さんを私は思い浮かべた。

だって、高校生で白髪ってまずいない。まあ、可能性としては考慮に入れておこう。

「で、ここの生徒会に呼ばれるのはどういう意味なの？」

最初はこの話題だったはずなのに、生徒会のことばかりに話がいってしまった。まあ、知らないことを知れたから悪くはないが。

「生徒会に呼ばれる人間とは、たいていが犯罪者です」

「なっ……」

なにそれ。なんで犯罪者が生徒会に呼ばれるわけ？

「そして、生きて帰ってくる人間はいません」

「なっ……！」

もっとなにそれ。なんで生きて帰ってくる人間がいないの？まさか、殺して……

「……と、無駄話がすぎましたわね。生徒会に呼ばれた人間が、遅れてはいけませんから。……では、ごきげんようクリア」

そう言って、風羽は教室を出ていった。取り巻きたちもそれに続く。

今は放課後なのだ。いつどのタイミングで出ても誰からも文句は言われない。私も待つてと言えない。

「……行くか」

生徒会に呼ばれるという意味を再認識して茫然としている沙耶は、教室を出ようとした私についてこようとはしない。まあ、危険な目に遭わせるわけにもいかないし、いいけど。

……危なくなったら、暴れるだけだ。何も心配はいらない。

放送であつたように、職員室の隣に行くと、扉があつた。
信じられないぐらい大きな扉が。

ここだけが、他の部屋と違って感じるのは、何も扉のそばにある
『生徒会』と達筆の表札だけのせいではないはずだ。ここが他の部
屋と違うのは、いくら転校したての私でもわかる。

ギイ……

恐る恐る、豪奢な扉を開ける。かなり重いので、力を入れないと
ビクともしない。

苦勞して扉をあけると、声が聞こえた。

「ようこそ、生徒会へ」

部屋の中に入ると同時に、扉がゴウンと音を立てて閉まった。

部屋は暗く、照明はつけられていない。重苦しい雰囲気かしな
い。今までの経験則から、今すぐ逃げ出したい衝動に駆られる。

でもなぜだか、もう逃げられないという気がした。

「……さて、自己紹介を始めよう」

そう言ったのは、お父さんそっくりの人。

白髪頭で、でもそれがとてもかっこいい。

目の色は暗いから分からないけど、背格好もそこはかとお父
さんに似ている。

暗いけど、顔つきがお父さんに似ているのは分かる。

違いと言えば、声と、中性的、というところだ。

お父さんは男だってはっきりわかる容姿をしている。

でも、この人はお父さんに似ているのに、性別が判断できない。

声も中性的だから、さらにわからなくなる。

「キミの名前から言っていこう。キミはクレシア・ペンタグラ
ム。しかしキミ自身はクレアと呼ばれたがっている。ボクもそれに
応じてあげようと思う」

……？

この人は自己紹介をしようと言ったはずだ。それなのになぜ、私
のことを言っている。

……というか、どこでそれを！？

「ボクはこの程度のことなら分かるくらいには、地位があるつも
りだ」

つまり、この人は自分の情報収集力のすごさを証明するためだけ
に、私のことを言ったのか。

一応用心のために右手はコートの中に入れている。掌にはすでに

拳銃の感触が伝わっている。

「……さて、ボクの名前を言おうか、クレア・ペンタグラム」
彼とも彼女ともいえる人は、指を鳴らした。
すると、灯りがついた。

彼のような彼女のような人は、いくつもの長机が円卓状に並べられた部屋で、その空いた中心に立っていた。

円卓には誰もいないが、それがかえって様になっている。
彼のような彼女のような人は、腰に手をあてて偉そうに、

「ボクの名前はトレース。トレース・トレスクリスタルだ」
そう名乗った。

第7話へ呼出（後書き）

そろそろ忘れられている人もいるでしょうから、補足説明を。
ちなみに、前作『異世界を渡る旅人達』を閲覧していない人のために、ざっと特徴も記しておきます。

クレアが言う、

お父さん〃ルウ・ペンタグラム

ルウ・ペンタグラム

異世界を旅する旅人で、外見16歳、実年齢不明。

白い髪に青い瞳が特徴。

優しい性格で、悲惨な目に遭っている子をほっとけないという理由で養子という形で引き取っている。結果、息子、娘合わせて6人近い人数に。

しかし、彼らはほとんどが旅人であるため、一同に会すことはめったにない。

現在はサラ、長女のミリア、娘のクレアと共に旅をしている。

以上で補足は終了です。

コメント、感想ぜひお寄せください！読者様の言葉が作者の原動力となりますので、よろしくおねがいします！

第8話 説明

「……トレース・トレスクリスタル？」

変な名前だ。私は真っ先にそう思った。

「なぜそこで疑問形になるのか訊きたいね？」

彼のような彼女のような……ああ、もう！

「あの、つかぬことを訊きますが……性別は？」

できるだけはつきりと訊く。恥ずかしさが残らないようにするには、こう訊くのが一番だ。

「ボクの性別かい？ボクは『女』だよ。生物学的にも、精神的にも完全に女性だ」

その恥ずかしさを理解してか、あっさりと答えてくれた。

……女の人だったんだ。

手の拳銃を離し、コートから手を出す。

「さて、その『おまじない』には一体どんな意味が込められているのか……ボクに教えてくれるかい？」

彼女は意地の悪い笑みをたたえながら言った。

「……別に。男から身を守るためのおまじないよ」

私はそっけなく答える。女の人、と分かったからよかったものの、この人が男だったらどうしようと思っただけでも行動できるようにしていたのだ。

それ以上の意味はない。

「そうか。では、本題に入ろうか、クレア・ペンタグラム。ボクがキミを呼んだのは他でもない。キミに本当のことを知ってもらいたくてね」

「本当のこと？」

私はいぶかしげに訊く。トレースは私の質問に、まるでどこかの悪役のような笑顔をもって答えた。

「そうさ。本当のこと。……つまり、キミが父と呼んでいる人物、

ルウ・ペンタグラムについて、だ」

「お父さんについて？」

トレースの話しに、私は引き寄せられた。お父さんはまったく底の見えない、ある意味では不気味な人だ。お父さんは人間ではないということまでは分かっているのだが、『何か』までは分かっていないし、お父さんも分からせるつもりはないようだ。

だから、知りたい。

「キミのお父さんはね、実は……」
と、そこで。

「トレース、一体何を、僕の娘に吹き込むつもりなんだい？」

重苦しい扉が開く音がして、お父さんが生徒会室に入ってきた。

「おとう……さん？」

私は呟くように言った。

なぜ、お父さんがここに？ 家にいるんじゃないのか？ 学校にはいかない、ってお父さん言っていたのに……なぜ？

お父さんが登場すると、トレースのさっきまでの傍若無人な雰囲気はどこにもなくて、弱々しい感じになってしまっている。

「……なんでもないさ。ただキミの素晴らしさを今一度クリアに理解してもらおうと……」

「トレース。君は、一体誰にものを言っているんだい？」

言い訳のように取り繕いはじめたトレースに、お父さんがそう言った。

常に笑顔を人にふりまき、文字通り聖人君子のような、お父さんが、そう言ったんだ。

私はすぐには、信じられなかった。

「ねえ、トレース。君は僕に嘘を吐くのかい？」

お父さんにしては本当に珍しい怒りの感情。それに、高圧的な言い草も珍しい。

「う……す、すまない。ほんの出来心で、からかいたかっただけなんだ。嘘をついたわけでは決してない。信じてくれ」

両手を祈るように組み、上目づかいに涙目で懇願する彼女を見ていると、本当に女の人なんだな、と思う。

「……わかったよ。じゃあ、答えてもらうよ。クレアに何を言うとしたの？」

少し優しい口調に戻って、お父さんが訊いた。

「その、ボクとキミの関係を、あの、キミの娘さんにも知ってもらおうと……」

しどろもどろになりながら、トレースは答えた。彼女には怯えの色さえ見えるが、なぜか幸せそうだった。

「……そう。ならいいんだ。いいかい、トレース。その言葉、僕は信じてるからね。……この意味、分かるよね？」

何かの念を押すように、お父さんが言った。

トレースは少し嬉しそうな顔になって、

「ああ、わかってるさ。キミに言ったことだけは、真実だ」

「ならいいんだ。じゃあね」

そう言って、お父さんはこの部屋を出ていった。

ついに、私に話しかけることすらしなかったな。

何か話されてはまずいことでもあるんだろうか？

……まあいいや。今は少しでも情報が欲しいところだ。この人の話を聞いて、損はないはずだ。

「……さて、話を戻そうか」

さっきまでのしおらしさはどこへやら、一転して尊大な態度になってトレースは言った。

「まず、ボクのことから話そうか。ボク自身のことはいくらかでも話していいってことになってるからな。ルウの信用を裏切ることにはならないだろう」

尊大だが、それでもお父さんの言いつけを守ろうとする彼女に、私はますます疑念が増える。

ここまでしてお父さんに従おうとするのはなぜ？

私たち娘は、家族だから上下関係なんかない。お父さんも命令しようとしたりしない。でも、この人は違った。お父さんは確実に命令してた。直接じゃないけど、間接的に逆らえないような雰囲気を作り出していた。

……あんな風に命令されたら、逆らえそうにないなあ……

私は男が怖いし、男に逆らえない。逆らおうとしても最後の最後で疎み上がってしまうのだ。

警戒をとくのは、もう少しあとね。

私はお父さんに対しては警戒しなくてもいいんじゃないかと最近思い始めていた。でも、あんなことができる人間に気を許すわけにはいかない。

「ボクは、この世界のものではない」

……まあ、それぐらいは予想してたけど。改めて聞かされるとやっぱり驚くものね。

そうやって冷静にトレースの話を聞いていたのだが、次の言葉で私は平常心を失った。

「ボクは人間じゃない。万能無限の秘宝、トレスクリスタルの人形だよ」

は？なに、
それ。

第9話　昔語

「ある世界に、トレスクリスタルという万能無限の秘宝がありました」

トレースは流れるように語り出す。今日体育の授業の前に私がしたみたいに、昔話風に。

私はその話に聞き入っていた。と、いうか聞き入らされていた。

彼女の言葉が何者にも阻害されることなく頭に入ってきて、全想像力を総動員して情景を想像させられる。

彼女の声には、そんな不思議な力を感じる。

「その秘宝は、その優秀さ故に、封印されていました。しかし、道具でありながらどういいうわけか意識を持っていたその秘宝は、封印を解きたいとばかり思っていました」

その秘宝は自分で自分を使うということができなかったため、その封印を解くことができませんでした。なぜなら自分に命令する言語を発する機能を知らなかったからです。誰かの命令には完璧に对应えられる秘宝でしたが、自分の望みは何一つ叶えられなかったのです。

……しかし」

そこまで言うと、トレースの声に喜びのような感情が交じり、私もそれに感化されて嬉しくなる。

「しかし、救いの手は差し伸べられました。ある少年が、秘宝のために封印を解いてくれたのです」

その少年とは、お父さんのことだ。

強制的にイメージさせられなくてもそれぐらいは想像がつくが、頭の中ではかなり美化されたお父さんが朗々と呪文めいた言葉を紡いでいる姿が想像されていた。

「助けられた秘宝は、初めて目にした言葉を話す生物、つまり人間のモチーフにその少年を使い、少女として少年、ルウの前に現れ

たのです」

ああ、それでお父さんとトレースが似ているのか。謎がひとつ解けた。

「そして、感謝の気持ちでいっぱいになった少女は、本来の用途以上に、少年に使われることを望みました」

イメージが勝手に入ってくる。

お父さんにひざまづいて、誓いの言葉を言うトレース。

そして、お父さんもそれを了承して、イメージは終わる。

「……そして、全てを支配する能力を持った秘宝は、ルウの道具として、日々主人のために尽くしているのであった」

そう、彼女は締めくくった。

想像を強制されることもその言葉を最後に終わる。

「なぜ、あなたはお父さんにそこまでして従おうとするの？あんなに怯えていたのに」

経緯は分かった。しかし、解けた疑問は少ない。

「……キミは意外と察しが悪いな」

「なんですって？」

普通の質問をしただけなのになぜそこまで言われなければいけないのだ。

「……さて、ここでひとつ質問だ。古来より、女が男に、男が女に従い、尽くそうとするのには、どんな感情が原因だと思う？」

まるでお父さんみたいに、彼女は言った。でも、言ってる意味が全くわからない。

「……何が言いたいのか？」

そう返すと、トレースは心底不思議そうな顔をして、

「キミは本当に察しが悪いな」

と再び言った。続けて、彼女は言う。

「それはね、簡単なことだよ、クレア・ペンタグラム。恋愛感情に決まってるじゃないか。歴史に名を残す英雄とて、その例外ではないのだ。一介の万能道具がそれに該当しないわけがないだろう？」

「……」

えっと、その、つまりあれだ。

こんなにも言葉を尽くしてこの尊大な人が説明したのを要約すると、こうなるのではないだろうか？

『ボクはルウが好きで、だから気に入られなくて従っている』

……あながち間違いではない気がする。

「つまり、お父さんに従うのは、あなたの恋愛感情に依っている、ということね？」

私がそう言っていると、

「いや、それだけではない」

そうトレースは否定した。

「確かに、主人を決めたのはボクの恋愛感情に依ったのは確かだ。しかし、今もし、ルウへの恋心が消えたからと言って、ボクがルウに従わなくなるということはない」

そう言いきった。そして私が質問を繋ぐ前に補足を入れる。

「なぜなら、ボクの奥底がこう言っているからさ。『一度決めた主人には何があっても従い続ける』とね。この法則だけはいかなる力をもつてしても破ることができない。だから、たとえボクがどんなにルウのことを嫌悪していても、従うのをやめることはできないのさ。これで、理解できたと思うけど？」

たしかに、理解できた。でも、同時に全身に嫌な汗が流れる。

「なによ、それ。体のいい奴隷じゃない。そんなこと、お父さんはあなたにしているの？」

お父さんが、そんな子を使っている？子供ではなく、道具として本来の意味で、使っている？

「……キミが勘違いする前に言っておくが、ボクは望んで、ルウのそばにいる。ルウは嫌になっただけに従わなくていいと言った。けれどボクは従うのをやめない。……この意味はさすがに、理解できるだろう？」

……つまり、トレースはまだ、お父さんのことが好きなんだ。

「……あなたは望んで、道具になることを選んだのよね？」

最後に確認する。確かに、人の形をしたものを道具のように扱うのは嫌気がする。私も道具のように扱われていたから、嫌々従わされる苦痛を知っている。

でも、本人たちが望んで、納得しているのなら……別にいい気がする。

本人たちが幸せだと思っていれば、それでいいのだ。

例え、傍^{はた}から見てどんなに歪んでいても、周囲に迷惑さえ掛けなければ、それでいいと、私は思う。

「……ふむ、物分かりがいい子で助かったよ。ルウの娘に説明すると何度かボクとルウの関係を否定されたことがあるのでね、不安だったんだ」

「……そう。ところで、あなたの能力は？」

そこにはあまり興味がないので、話題を変える。

万能無限の秘宝の能力、かなり気になる。道具作りを趣味にしてから、私は魔法、特殊能力関連にかなり興味を持つようになった。

私は能力『ユージュアクション』に魔力を全部吸い取られているせいで魔法を使えないため、特殊能力のほうが若干好きだ。

まあ、道具を作る時に魔法が要る時はお母さんに手伝ってもらってからいい。

そして、特殊能力は知れば知るほど、面白い。

「ボクの能力かい？簡単さ、『全てを支配する能力』だよ」

……たまに、こんな風に異常なまでに強い能力まであるから、なおさら。

「『支配』？」

私はオウム返しに訊く。

「そうさ。さっきの話で使っただろう？あれは言葉からキミの脳を『支配』して強制的に想像させたんだ」

ふうん……って、ちょっと待って。

「そんな能力、ありえないほど強いじゃない。なにそれ？なんで

もできるんじゃないの?」

なんでもできる。そこまではさすがに言いすぎかとも思ったが、

「そうだな。なんでもできるだろうな」

そうでもないようだ。

「たとえば、物理法則を変えたり、都合のいいよう歴史を改変したり、世界をひとつの町だけに収縮させたり、その世界を一介の生徒会が牛耳るよう操作させたり、などが可能だ」

……後半すでに実行済みなんじゃないか?

そう思わずにはいられないほど局所的な例えだった。

第10話　誘惑

「……それ、すでにやってるわよね？」

信じられないほど局所的な例えを出されたので、私は思わず言ってしまった。

「ふむ、その通りだと言えるね。……しかし、だ。クレア・ペンタグラム。ボク 능력はそんな程度では終わらないよ」

トレースはお父さんそっくりの顔で、お父さんが絶対にしないような冷酷で残忍な笑みを浮かべた。

「いいかい？ボク 능력はなんでもできる。そう、なんでもだ。」

ボク能力が一番使えると思うところは……人心を操ることにある」その笑みのまま、耳を疑うような言葉を口にした。

私は驚きで二の句が継げない。

「人の心を操る……これほどまで強い能力が他に存在するだろうか？ボクの『支配』に逆らえる物質なんて存在しない以上、ボクの思い通りに、世界は操れる。つまり、ボクにとって世界とは、ルウに氣に入られるための引き立て役と、オモチャ以上の意味はないんだよ。」

きつと、キミは思ったことだろう。なぜこの町は生徒会が支配しているのか。それには明確な答えが存在する。『そうなるように、ボクがこの世界を弄ったから』さ。

この世界の誰もが、『この町が生徒会に支配されている』という事実を遺伝子レベルで刻み込まれているのだよ。……それだけじゃない。そのことに関する疑念も、一切抱けないようにしてある。だから、この世界の人間はこの学校を中心に生活していることになるね。

犯罪者がここに呼び寄せられる理由も、言っておこうか。キミはきつと柊家の令嬢にその話を聞いているはずだからね。……ボクは生徒の心には一切タッチしていない、と注釈をつけておかないと

誤解を生みそうだね」

そう言われても、信用できない。沙耶や風羽の心を操っていないわけではないのだ。

人の心を弄ぶ^{もてあそ}なんて、最低だ。

私は警戒心を強めた。

「この世界の犯罪者は、一度法的機関に送られ、裁判を受ける。

そして、生徒会に呼ばれるのは、死刑囚だ。余計な精神被害を防ぎたかったからね。ボクが手を下すことにしているのさ。……死でしか償えないと判断されるような人間の屑に、善良な市民が気に病む必要なんて、どこにもないだろう？ だから、人を殺しても何も感じないボクが殺しているのさ」

言っていることは過激だけど、ここだけは素直にすごいと思った。見下しているように見えて、ちゃんと支配されている側のことも考えている。

……おかしいことには変わりないが。

「……あ、そうそう。ついでだから、この世界の人間は生徒会の人間やルウに刃^{やいば}を向けることができないようにしてある。

そして最後に、今回キミをここに呼んだ理由がもう一つある。そうだな、いろいろ言っても伝わらない。単刀直入に言おう。キミに生徒会に入ってほしい」

最後に、申し訳程度に用件を言って、トレースはいったん言葉を切った。

私は何も言えない。バカらしくて、何も言えない。

生徒会に入れ？こんなに歪んでいる生徒会に？

そして、次のトレースの言葉で、私の意思は確定された。

「キミにとつてもいい話だとは思わないかい？この生徒会に入るというだけだ。何もなくていい。ただキミはこの権力と支配の能力をむさばれば、それでいいんだ。

生徒会に入れば、この世界に生きている限りはなんでもできる。敵は殺そう。味方は生かそう。

この学校でキミは崇め奉られ、苦勞も苦痛も一切なく、何もかも言葉ひとつで手に入る。

豪華な家、きらびやかな服、至上の美食、絶対の服従を誓う下僕、気に入らない人間の削除、考えうる全ての快樂、永遠の命。なんでも思いのままだ。

キミに世界が低頭するんだ。

世界はキミのものになる。

キミが『神』になるんだ。

ただ、この生徒会に『入る』と一言ひと言言うだけで。

両親に恩返しがしたいのだろうか？生徒会に入って、存分に両親に樂をさせてあげたらどうだ？

……まあ、本来ならそこまでしないのだがね、キミはルウの娘だ。特別に全てをキミにあげよう。ボクにとって全てなど、『支配』できる従者にすぎないんだ。キミにあげることもなんてわけないさ。…

…さあ、今一度訊こうか。キミは、生徒会に、入る？入らない？

安心したまえ。この選択には『支配』の能力は使わない」

私はそう、ささやかれた。距離は離れているのに、そう感じた。

きつと、そうした方が聞きやすいと思ったのだろう。

實際問題、かなり魅力的な内容のお誘いだ。なんでも支配できる能力が、一時的に味わえる。

きつと、気持ちいいのだろう。苦勞など何一つないのだろう。

だから、私はトレースの問いに一瞬たりとも迷うことなく、答えた。

「
.....私
は、
.....」

第11話 返答

私は、一瞬たりとも迷うことなく、トレースの問いに答えた。

「私は、入らない」

トレースは私の答えを聞いて、面食らったようだ。しかし、すぐに悪役面にもどって、言った。

「ほう、なぜだい？キミは何もいらないのかい？快樂は欲しくないのかい？永遠の命は？きらびやかな服は？豪華な家は？至上の美食は？かしく下僕は？……キミは、両親に恩返しがしたくないのかい？両親に恩返しをする方法は、これしかないんだよ？キミは力のない子供だ。そんな子供がどうやって両親に樂をさせてあげるんだい？生徒会に入って、全てを手に入れるんだ。そうすれば両親に恩返しができるよ？」

そう誘惑するように言うトレースに、私は叫んだ。

「バカにするな！」

今度こそ、トレースは黙り込んだ。

「ふざけるのもたいがいにして！私は愚かだけど、本当に大切なものを見失うほどじゃない！」

豪華な家なら働いて買う！きらびやかな服ぐらい、すぐにでも作れる！家族と一緒に食べる以上の食事なんてあるもんか！下僕なんて必要ない！私は自分のことは自分でできる！永遠の命なんて、疲れるだけだ！快樂なんて、いらない！

恩返しの方法を、あんたが決めるな！私は私の方法で、私の考えで、私の価値観で、私が決めるんだ！

お父さんとお母さんは、なんの苦勞もせずに手に入れたプレゼントで喜ぶほど馬鹿じゃない！

私のことを聞いただけみたいな情報で、判断するな！それ以上私と両親を侮辱するなら、殺す！」

ふざけるな。私は愚か者のクレेशアの時から全く変わっていない

あまりにも笑い声が多いので聞き逃しそうになったが、気になる言葉があった。

「あんた、今『冗談抜きで世界をあげても』って言ったわよね？」
トレースはそう言った私に、ほめるように微笑んだ。さっきまでのキャラと正反対。ちよつと不気味。

「そうだよ。今までののは冗談、というか試験だね。ルウの娘たる資格があるかどうかの」

「お父さんの娘たるかどうかの、資格？」
オウム返しに訊いてしまったのは、別に分からなかったからではなく、補足を求めるためだった。

「そうさ。資格。実のことを言うと、ボクはルウの道具なんだが、彼の娘息子たちとかなり密接に関わっていてね。もちろんルウも既知のことだよ？勝手に行動する道具なんて、要らぬ問題を起こすだけだからね。何か行動する時は必ずルウに言わなければならない。」

……話を戻そう。ボクはキミを試した。そのためにキミの個人情報を見た。知られたくないであろう過去も含めて。それに関しては純粹にすまないと思う。本当にすまなかった」

そう言つて、トレースは深く頭を下げた。その様はあまりにも潔く、傲岸不遜な態度の彼女らしくない。

おそらくそのギャップが私に、

「……もう気にしてないからいいわよ」

と、言わたのかもしれない。

「そうか。本当に悪かった。しかし、こうでもしなければいけない理由も、たしかに存在するのだ」

「……その理由とは？」

私は腕を組んで言う。なんかこの人には敬意を表さなくてもいい気がした。彼女も別に気にしてないので、同級生と同じと扱うようにしよう。

「簡単さ。キミが興味を持った、能力さ」

悲しそうに、自分の手のひらに視線を落とすトレース。

「ボク達旅人の力は、異常なまでに強力なのが多い。その中でもさらに強力な絶対的なものを集めた勢力が、『イノベート』と『ペンタグラム』さ。方や異世界根絶を目指す排他集団。方や不幸な子供を救い、育てる孤児院じみた大家族。……その二つは完全に相反するものだと思うだろう？でも、『異世界の強力な能力者を集める』のと『能力が強すぎるゆえに行き場を失った子供を育て、家族にする』のでは、結果に大した差はでない。ボクは『ペンタグラム』じゃないから数に入っていないけど、ボクに似た能力なんて、かなりある。過程は違ってても、結果が一緒になるなんてこと、よくあることだよ。……ミリアとララが、その例かな？」

ミリアお姉ちゃんは、未来を見通す『未来視』。ララお姉ちゃんは見透かす『心透視』。似てる能力だとは思えないけど……

「キミはミリアと話していて、口にしようとしたことが先読みされたことはあるかい？」

頷く。

「そして、ララと会話すると、同じことをされる。つまり、言おうとしたことを読まれるわけだ。……さて、結果に違いがあるかい？」

違う、と言いきれない自分に、なぜか腹が立った。

第12話 再誘（前書き）

第12話　再誘

「結果『だけ』なら違わないわ。でもそれってこじつけじゃないの？」

どうせ考えることお見通しなら、思ったことを口にしよう。そう思ってたけれど、言ってから、あ、この人の能力もミリアお姉ちゃんと同じなんじゃないだろうか、と思った。

「ふむ、たしかにこじつけの部分もある。しかし、今はそれでいい。ボクが言いたいことは、もっと他にあるのだから」

なら、そのことをさっさと言ってくれと思う。私は早く家に帰りたいのだ。こうやって延々話を聞かされるために私の放課後はあるんじゃない。

「ここまで話してようやく、本題に入れる。さて、ボクは『イノベート』という名前をさも当然のように出したが、その活動本意を言えるかい？」

「……異世界を滅ぼすことですよ？」

お母さんから『イノベート』には気をつけなさいと言われているので、記憶していただけたが。

「そこまで知っているなら大丈夫だ。……ボクがキミを試したのには、それが関係する。つまり、ボクが試したかったのは、『心の強さ』だ。彼らはあの手この手でキミを組織に入れようとするだろう。そのためにはキミの友人さえも使う。そしてそれに対してなんの感慨も抱かない。彼らは総じてそんな性格なのだよ。本題は、ここからだ。心して聞きたまえ」

そう言って、一度言葉を区切るトレース。

「クレア、生徒会に入らないか？」

「……は？」

どんな重大なことだろうと身構えていた私は、肩の力が抜けた。

「生徒会に入れて……さっき誘わないって言ったばかりじゃない」

「確かに言った。しかし、今度は条件が違う。何もあげられない。どこか、キミから何かを絞り取ってしまうかもしれない。ボクが頼むのは、そんな危険で、残虐なことなんだ」

先ほど誘った時とは比べ物にならないぐらい真剣なまなざし。

「キミの力がどうしても必要なんだ。ボクと一緒にこの学園を、この世界を『イノベート』から護って欲しいんだ」

余計な飾り文句は一切付けず、要点だけを伝えてきたトレースの雰囲気はどこかお父さんに似ていた。

「……本当にそれだけ？もう、なにも企んでない？」

一度騙されたのだ。警戒するに越したことはない。

「ああ。ただ純粹に、一緒に生徒会で仕事をしようと言っただけだ」
トレースの瞳には、ある種の懇願のような色があつて、すぎるような目をしていた。それでも態度を変えないのは、彼女のポリシーかプライドか。

「……今回、彼女は純粹に、試験の意味合いなしで、生徒会に入つて欲しいと言っている。」

……生徒たちを、守ってほしいと。
なら、答えはひとつだ。

「いいわ。生徒会に入つてあげる」

「そうか。ありがたい」

トレースは、そう言った。

それだけしか言わなかったけれど。

彼女が心底喜んでいると思ったのは、
見間違いではないはずだ。

第13話　帰路

それからしばらく私とトレースは生徒会に関する話をして、解散となった。

新しい情報といったら、トレースが生徒会長だったということだけで、結局他はなにもわからなかった。

いろいろ質問したのだけれど、全部はぐらかされた。

「……く、くれあ？」

釈然としないまま、部屋を追い出された私が最初に見たのは、目に涙を浮かべて生徒会室の前にいた沙耶だった。

「……沙耶？　なんでいるの？　もう7時よ？」

私の質問に答えることなく、沙耶は私に抱きついてきた。

「えっ……さ、沙耶？」

バランスを崩し、私は沙耶を抱きかかえたまま、尻もちをついた。「ひくっ……えぐっ……よ、よかった……クレア、死んじゃったのかと、思った……！　生きてて、よかったよぉー！」

ぼろぼろと、大粒の涙を流して沙耶は言った。

「……大丈夫よ。私は大丈夫。だから、泣かないで？」

私は抱きかかえた背中を、優しく撫でる。

少しずつ、泣く声が小さくなる。

「……クレア、どうしたの？　大丈夫？　ホントになんにもされてない？」

「ええ。私は大丈夫よ」

力強く、私は答える。沙耶にはそれで伝わる。

「……帰ろう？」

私の提案に、沙耶は目をぬぐいながら首肯した。

「……でね、私生徒会に入ることになったの」
私は帰り道、沙耶に生徒会室であつたことを話していた。歩く道
はもう十分に暗く、電灯の光のみが、あたりを照らしている。

「へえ、トレースさんって言う人が誘ってくれたんだ。で？生徒
会ってどんなことするの？」

沙耶の何気ない質問に、私は凍りついた。

……こ、答えられない！

いや、秘密だからとか、そんな理由じゃなく。

私、活動内容を一切知らない！

「えっと……その、ええっと……あの……」

まずい。まさか知らない、なんて言えないし、沙耶に嘘は言いた
くない。

「もしかして……訊き忘れた、とか？」

沙耶が苦笑いしながら言った。

「そう、訊き忘れちゃって……ごめんね」

私も苦笑で返した。

「いや、別にいいよ。……あ、もう分かれ道だね」

住宅街の丁字路で、沙耶はそう言った。

「また明日、クレア」

「また明日、沙耶」

私たちそう言って、別れた。

私は家までの道を警戒しながら歩いている。

友達や両親と一緒にならそうでもないのだが、一人になるとどうしても昔の癖を思い出して、自分でも気付かないうちに警戒態勢に入ってしまうのだ。

いつもはお父さんに警戒しすぎてはいけない、と言われていたの
でできるだけ警戒しないよう注意しているのだが……どうも、うま
くいかない。

しかし、今はそれほど後悔していなかった。

「……やあ、お譲ちゃん。こんな時間にどうしたんだ？」

みるからに怪しい全身黒マントの男が、家に行く道を遮っていた
からだ。

引き返して別の道から帰ってもいいが、それをしたらただでさえ
遅くなった帰りがさらに遅くなる。

「……今から帰るところよ。どいてくれない？」

私がそう言うと、男は虚を突かれたような表情になった。

「へえ、見たところ小学生だっていうのに、ちゃんと一人前の警
戒心をもってるのか。意外だな。……それに免じて、襲わないでお
いてやるよ」

こんどは得意げな表情になってそう言うと、男はマントを翻し、
闇に隠れた。

「俺の名前はリンク・ソル・ジェイド！この夜を統べる王、吸血
鬼だ！覚えておくがいい、お譲ちゃん！」

痛い言葉を残して、残滓も残さず消えていった。

……なんだったんだろう、あれ？

まあ、今は家に帰ることが優先だ。お父さんにも訊かなきゃいけ

ないことあるし。

しばらく歩いて、玄関まで辿り着く。どこにでもあるような一軒家だ。

そこには漢字で『ペンタグラム五芒』とかいてある。

インターホンは鳴らさずに、私は門扉を開け、扉をあけた。

「……ただいま、お母さん、ミリアお姉ちゃん」

私は、ようやく長い一日が終わったような気がした。

第14話　詰問

クレアが出ていったからの生徒会室――

「……これでよかったのかい、ルウ？」

一人残ったはずのトレースは、何もない空間に語りかける。
本来なら、返事は返ってこないはずだった。

しかし、トレースの後ろから、声はした。

「うん。ありがとう、十分だよ。本当に、助かった」

声は、トレースそっくりの少年、ルウ・ペンタグラムだった。
ルウはこの学校の制服を着ていた。それはルウがこの学校の生徒であることを意味し、その胸元につけられた生徒会バッジは、ルウが生徒会の人間であることを証明している。

彼はあらかじめ話が終わったら生徒会室へ自分を転送するように指示しておいたのだ。

「そうか。役に立ててうれしいよ。……ところで、なぜ、試験なんか？他の娘の時はしていなかったのに」

クレアに言ったのはほとんどが嘘八百だった。

トレースという道具の存在を知っているのなんてミリアぐらいだし、もちろん試験なんて一度もしたことがなかった。

それなのになぜ、クレアだけが試されたのか。

「……クレアはね、不安定なんだ。子供らしい面と、大人っぽい面がころころ変わる。だから、『イノベート』に付け入られたり、脅されたりしないかな、って心配になったんだ」

ルウはクレアが出ていった扉を見据える。まるでその扉から未来を見るかのように。

「あの子はきっと、『イノベート』かそれに近い人間に利用される。それを防ぐのは、僕でも、君でも、サラでもない。あの子自身なんだ。『力』は十分。なら、あとは『心』だけさ。ちゃんと、判

断できる心を持っているか……それだけが見たかったんだ」

トレースはそこまで聞くと、ふと、疑問に思ったことを口にした。
「……なら、もし試験に失敗していたら……どうするつもりだったんだ？まさか殺すのか？」

ルウは首を振った。

「まさか。どんなに愚かでも僕の娘だよ。『生きたい』と思っ
ている以上は、僕が手を下すことはないね。……まあ、旅人にするつ
もりは、ないけど」

つまり、あの試験はルウの娘かどうかを試すものではなく、旅人
としてやっていけるかどうかを試すものだった、というわけだ。

「そうか。……そうだ、ルウ。家まで送ろうか？」

突然、トレースはそう提案した。

「……なんで？一人で帰れるよ」

ルウは楽を好む性格ではないので、それを断った。トレースの言
う『送る』、とは家まで一緒についていく、ではなく文字通り『転
送』するのだ。家まで誤差一秒で瞬間移動させる。それが、トレ
ースの送る。

「いや、クレアより先に帰りたいだろう？送らせてくれよ」

なおも食い下がるトレースに、ルウは冷たく、

「いい、と言ったんだよ？君は僕の言うことが、聞けないのかい
？」

そう言った。途端にトレースは青ざめ、

「す、すまない。……悪かった」

そう、とりもなおさず謝った。

トレースにとってルウは主人であると同時に想い人。だからルウ
だけには従順で、一切逆らうことがない。そして嫌われたり、捨て
られるのを極端に忌避している。

平謝りのトレースにルウは微笑んだ。家族にも向ける、優しい笑
み。

「分かればいいんだよ。……じゃあ、僕は先に帰ってるから、リ

ンクが来たら連絡して」

ルウは生徒会室の重厚な扉をなんなく開くと、トレースに笑みを向けた。

「……この世界、ずいぶん心地いいよ。ありがとう、トレースよくやったね」

ボタン。

その音を最後に、ルウの声は完全に聞こえなくなる。この部屋は防音なので、外の音も一切入ってこないのだ。

一人になった空間で冷静な瞳のまま、呟く。

「……ルウ。キミのその一言で、ボクはもう、報われたよ」
その時の彼女は、恋する乙女そのものの表情をしていた。

私は家に帰ると、手も洗わずにいるはずのお父さんを探した。

と、いつても二階建の4LDK、すぐにお父さんは見つかった。

「お父さん……！！」

自分の部屋で普段着のままソファにゆったりとくつろいでいるお父さんを見つけると、コートからとりだした護身用拳銃デリンジャーを向けた。

「……帰っていきなり、何事だい？」

冷静にしらばっくれるお父さんに、私は吠えるように言う。

「お父さんとトレースのこと、納得のいく説明をしなさい！」

私はまだ、このことが許せなかったのだ。

第15話　返答

私はお父さんの部屋の入り口で、ソファでゆったりとくつろいでいるお父さんに拳銃を向けている。

普通の家庭なら警察沙汰なのだろうが、私の家は幸いなことに普通じゃない。

私は文句がある時はいつもこうやって拳銃片手に、でもけして撃たずに話しあう。

弱い立場の私はこうでもしなければ話し合いなんてできない。

もし、拳銃^{これ}がなかったら、お父さんはいつでも暴力をふるえる。そんな一方的な暴力を、この拳銃は防いでくれるのだ。

「……説明なら彼女からしてもらったと思うけど？」

お父さんはしれつとそんなことを言う。

「聞いた！でも、お父さんから聞きたいの！お父さんがトレースをどう思っているのかが、知りたいの！」

お父さんもトレースのことは体のいい奴隷とか思っているのだろうか？いつでもなんでもどんなことでもできる道具だと、思っているのだろうか？

「僕がどう思っているか？僕にとってトレースは仲間であり、友達であり、弟子であり、兄妹であり、道具であり、奴隷であり……とにかく、一言で言い表せるような関係じゃないんだよ」

「そんなふうにして、はぐらかさないで！」

お父さんが言いたいののはつまりこうだ。一言で言い表せれない。だから訊くな。そんなものでは、私は引っ込まない。

「……ふうん。そんなに言うなら話してあげる。僕が彼女を奴隷として扱うわけをね。」

僕は最初君みたいに、彼女人として扱おうとしたんだ。でも、どれだけ言っても何度言っても『命令を、命令を』ってバカの一つ覚えみたいに繰り返してたんだよ。今の彼女は人間らしいけど、最初

は本当に人の姿をした道具って感じだった」

そう言うお父さんは真剣で、とても嘘を言っているようには見えない。

「だからね、こう言ったんだ。『そうだな、じゃあ命令を与えよう。君は自分で考え、自分で行動し、自分で生きれる人形になれ』ってね。……僕なりの解雇通告だったんだけどね、トレースはそうとらなかった。急に人格レベルが上がったかと思えば、ひざまずいたんだ」

その時の様子はトレースの話しにも出てきたので、よくわかる。

……ってか、あの人もいると端折りすぎだろう。自分とお父さんの仲をアピールしたかったのか？

「……正直、今でも覚えてるよ。一言一句思い出せる。なにせ、衝撃的だったからね。」

『キミが乾いた時にはボクの血を捧げよう。キミが飢えた時にはボクの肉を捧げよう。キミの罪はボクが^{あがな}購い、キミの咎^{とが}はボクが償い、キミの疚はボクが背負い、ボクの誉れの全てをキミに献上し、ボクの栄華の全てをキミに奉納しよう。

最強の盾としてキミと共に歩き、キミの喜びと共に喜び、キミの悲しみを共に悲しみ、斥候としてキミと共に生き、キミが疲れた時には全身を持ってキミを支え、この手はキミの手となり得物を持ち、この足はキミの足となり地を駆け、この目はキミの目となり敵を捕え、ボクの全てをかけてキミの情欲を満たし、ボクの全霊をもつてキミに奉仕し、キミのために名を捨て、キミのために誇りを捨て、キミのために心を捨て、キミのために感情を捨て、キミのために理念を捨て、キミを愛し、キミを敬い、キミ以外の何も感じず、キミ以外の何ものにもとらわれず、キミ以外の何も望まず、キミ以外の何も欲さず、キミの許しなくては眠ることもなく呼吸することもない、ただキミの言葉のみ理由を求める、そんなみじめでなさない、キミにとってまるで取るに足りない一介の下賤な道具になることを、

ここに、誓う』

……ね、ずいぶんな文句だろう？ここまで言われたら、むげに断ることもできないだろう？」

私は頷く。ここまで言われていたのなら、分からなくもない。口ぶりかするに、だいぶ昔、それもミリアお姉ちゃんにも出逢う前だ。愛の告白も交じってるこの文句、トレースの心情にはぴったりだな。

「……で、僕は仕方なく了承して、今に至る、というわけさ。分かってくれた？」

分かった。理解した。でも。

「なんでまだ奴隷のままなの？」

その時だけ仕方なく、なら解雇すればいいではないか。

「……僕だって、奴隷なんてやめて欲しいさ。僕だって、心苦しい。でも、『契約を解除してくれるのならそれでもいい。……ボクは無に還るから』とか言われると、やめるにやめれなくて……」

……それは、トレースが卑怯なだけだろう。……つまり、今トレースが奴隷なのは完全に彼女の意思なわけであって、望んでなっている、と。

「……まあ、納得したわ」

私は拳銃を下ろした。今さらになって、なんでお父さんに突っかかっていったんだろうと疑念がわく。

だって同じ疑問、はトレースにもうしたのだ。それなのに、なぜ、わざわざ二度手間になるようなことを？

「……どうかした？」

あ、そうか。私、お父さんと話したかったんだ。信じきれなくなつたから、トレースと言っていることが一致するかどうか、確かめなかったんだ。

「あ、あといい質問。なんでお父さん、学校にいたの？」

あと、質問と言えばこれぐらい。

「僕もあの学校に通ってるからだよ。サラムミリアもそうだよ」

……うそ！？

「うそ！？お父さん、学校行ってるなんて一言も……」

「ああ、それはね、別にわざわざ知らせなくても、学校で会った時に説明すれば済むことかなって……それに、驚かせたかったし……」

……」

いつも最後に茶目つけがでるよね、この人。

まあ、疑惑も晴れたことだし、もう休もう。部屋で少し休んで、ご飯食べて、お風呂入って、眠ろう。

「じゃあ、ご飯できたら呼んでね。私部屋にいるから」

私は踵^{きびす}を返し、言った。

「あ、そうそう。お父さん、この辺変質者^{変質者}でるから気をつけた方がいいかも」

最後に、あの痛い人のこと、言つとかなきゃ。

「……変質者？」

「そう。なんて言ったかな、リンク・ソル………なんとかって名乗ってた」

私がそう言つと、お父さんは急に、

「ふふふ………あはははははははははは！」

珍しく本気で笑った。

「ど、どうしたの？」

気になったので訊いてみる。てか、本当になんで？なにか面白いこと言つた！？

「いやあ、ごめんね。クレア。それは……」

次の言葉で、私はまた、疑問が増えるのだった。

「彼は永遠を生きる吸血鬼。
『異界士』にして、僕の古くからの
友人だよ」

第16話 親友

その日の深夜、2時。

ルウの家の屋根の上に、2つの人影があつた。

瓦の屋根にまるで地面に座るかのような自然さで胡坐をかいてい
る二人は、楽しそうに話している。

「まだ君は趣味、続けてるのかい？」

二人を照らすのは、綺麗な円を描く月のみ。

「ん？もちろんだ。趣味とは、続けてこそだからな。逆に言えば、
続けばなんでも趣味になりえるのさ」

そう哲学的に語るのは、全身黒マントの怪しい吸血鬼、リンク・
ソル・ジエイド。

黒髪に黒目なので、闇に同化しきっている。黒以外の色は、顔の
肌色のみ。

全体的に整った顔立ちをしており、美少年のルウと並んでも全く
引けをとらない。

「ふうん……じゃあさ、今やってる性格、やって見せてよ」

リンクの趣味……それは、『気分で性格、および口調を変えるこ
と』。

永遠を歩むリンクは、ただ普通に生きていたのではすぐに飽きが
来る。

だから、わざわざ危険に身をおいても、全然充実しない。

そこでルウが提案したのは、『性格を変えてみる』こと。

性格とは、人間を構築する重要な部分。それをあえて変えること
で、新しい人生を歩む気分を味わう。その提案に乗ったリンクはそ
れを趣味に発展させるほどはまりこんだ。

……おそらく、変えた性格で彼の妻、エリアがどんな反応をする
かが楽しみだからだろう。

「ん？だめだめ。俺が変えた性格を見せるのは、エリアの前と、

お前ら家族以外の前だ。ルウ、お前らの前だけは、俺のデフォルトでいいだろ？」

リンクはいつもそう言っただけでルウに変えた性格を見せることはなかった。気恥ずかしいのか、それともただ勝手に自分の『元』を消したくないのかはわからないが。

「そう。別に無理強いするつもりはないよ。……あ、そうだ。忘れてた。リンクに言っとなきやいけないことがあるんだ」

ルウは納得すると、即座に話題を変えた。

「なんだ？」

「いや、うちの娘に手を出さないでくれるかな？」
は？と、リンクが凍った。

「まてよ。誰がそんなことするか。サラちゃんならまだわかるが、よりにもよってお前の娘に手を出すなんてこと……」

リンクはそう弁解するが、

「……クレアって小学生ぐらいの女の子、食べようとしたでしょ？」

そのルウの言葉で、ピンときた。

リンクは吸血鬼。血を吸う、というのは自身を構成する『血の力』を集めることにほかならない。なり立ての吸血鬼などは血の力が足りないため、多く吸血する必要があるが、年長の吸血になどは一年に一回ペースの吸血で事足りる。リンクもその年長の吸血鬼の一人なのだ。

「あ、その子ってやたらに警戒心の強いこんな夏にコート着込んだ女の子？」

「うん。僕の娘。最近迎え入れたんだ」

「へえ、また新しい子入れたんだ。……お前も、つくづく物好きだよなあ。普通、ほっとくぞ？」

呆れたようにリンクは言ったが、ルウはまったく気にも留めずに、続ける。

「だから君は万年暇なんだよ。子供を育ててみなよ、きつと暇つ

ぶしにはなと思うよ?」

ルウの言い方は自然で、言われたリンクも一瞬、あっけにとられた。

「はあ!? お前、暇つぶしで子供育てたのかよ!? 最低じゃねえか!?」

「まさか。僕は放っておけなかったから引き取ったんだ。趣味とか、暇つぶしとか、そんなじゃないよ。……たださ、あまりにもやることがないなら、そうやって慈善活動でもしたら、って意味だったんだけど……」

今度も、ぽかんとなるリンク。

「あ、なんだ、そうだったのか。てつきりお前が『優しそうなお父さんキャラの振りした最低野郎』かと思ったぞ」

リンクは嘆息してそう言った。

ルウの優しさ……つまり、ほっとけない、なんて理由で孤児院レベルまで子供を集め、育てあげれるその能力に、素直に尊敬していたのだ。

「あはは……僕ってそう見える?」

「まさか」

リンクは笑顔で否定する。

「お前はいいやつだよ。長い付き合いだからな。それぐらいはわかる。で、俺はそんなお前の頼みならいくらでも聞いてやりたいんだが……」

リンクがこの世界にこれたのは、ルウが『招いた』から。

リンクは最強の吸血鬼。ほとんどの弱点を克服した、めったにいない希少種とも言っている。

彼に寿命はなく、物理攻撃は効かない。太陽の下だって大手を振って歩けるし、教会で懺悔することだってできるし、ニンニクがたつぷり入った餃子^{ギョウザ}だって食べれるし、夏はエリアと一緒に海水浴にも行くし、どこでも寝れるし、白木の杭なんか痛くもかゆくもない。しかし、ただひとつ克服できなかった弱点がある。

吸血鬼は『招かれないと新しい土地に行けない』という弱点がある。それだけは克服できなかった。その『新しい土地』には異世界ももちろん入る。

つまり、異世界を移動するには誰かに『招かれ』ないといけないのだ。リンクは基本的に暇なので呼ばれたらとにかく行く。

そして今回は『頼みがある』とルウに呼ばれたのだ。

「……簡単なことさ。一緒に学校へ行かないか？ 僕だけじゃちょっと不安なことがあつてね」

酷く不安そうに、ルウは言った。

リンクがこんなにも弱気なルウの顔を見たのは初めてだった。

いつもルウは強気で、けて不安だ、などとは言わなかった。

リンクはそんな、弱くなったともとれる変化を嘆くことなく、言う。

「いいぜ。まあ、3年間ぐらいだったら、別にいいぜ。お前と学校に通うつてのも面白そうだしな。……じゃあ、今日はこれであることができたんでな」

そう言つてリンクは立ち上がった。

そして、一息気合いを入れると、背中から黒いマントは破らずに、悪魔が生やすような翼が一对。

「……リンク、ありがとう。エリアさんによろしく言つといて」

「おう。じゃあな！」

リンクはそのまま飛びあがると、ルウが瞬きする間には空高く、米粒ほどになっていた。

「……これで、少しは大丈夫かな？」
いつになく不安げに、ルウは呟いた。

第16話『親友』（後書き）

はい、どうもお読みいただきありがとうございます。

わからない人もいる可能性もありますので、キャラ紹介を少し。

エリア・ルナ・ジエイド

長髪の青髪青瞳の外見16歳ほどの少女。

リンクを影から、あるいは表立って支える器量よしの妻でもある。異世界から寄せられる依頼をこなす『異界士』をリンクと二人で営んでいる。

普段、仕事の話をする時、仕事中、で口調が変わる。リンクの趣味はここから来た可能性も。

好きなものはリンクで、趣味はリンクの趣味を見ることが。

彼女のほとんどは、リンクが占めている。

よく使う武器は死神が使うような長大な鎌。

第17話 招集

次の日。

私は登校してすぐ、生徒会長……トレース・トレスクリスタルに呼び出しを受けた。

みんなからはまた誤解を受けたけど、まあ沙耶にだけは事情を伝えてあるからそれでいい。どうせすぐ誤解なんてとけるだろうし。

昨日と同じく、円卓のように並べられている長机がある無駄に広い生徒会室に、私は朝からいるわけだ。

「さて、今日キミを呼んだのは他でもない。少し生徒会役員の紹介がしたくてね」

私が生徒会室に入るとすでトレースは傲岸不遜に席についていた。生徒会長らしく、上座に座っている。

彼女はまるで人間のように振る舞っているが、人間ではない。

全てを支配し、思うがままに操る秘宝、トレスクリスタルの人形。もっとも、彼女の生い立ちを鑑みれば、作り出された人形と言うよりは、トレスクリスタルそのものが変化した化身と言ったほうがふさわしい。

彼女はこんなにも傲岸不遜、傍若無人な態度なのに、人の奴隷、道具でいることを望む少し（少し……かな？）変な人。まあ、個人同士の話しなので私はもうどうも思わないが、昨日はそれでもめた。私はトレースがいよいよや奴隷をやらされているものだとばかり思っ、お父さんを問い詰めたのだった。

……実際は彼女が強硬ともとれる手段で勝手に奴隷になったただけだったのだから、始末に負えない。もう勝手にやっ、という感じだ。心配した私、バカみたいじゃない。

私はどこに座ればいいのかわからないので、立ったまま話を進める。

「……こんな朝っぱらから呼び出す意味がどこに？その用事なら

別に今じゃなくてもいいじゃない」

私は至極真つ当な意見を言っただつもりなのだが、トレースは異星人でも見るような目で、私を見た。……なんかむかつく。

「信じられない。キミ、本当に学生か？普通なら『さばれてラッキー』と言つものだろう……少なくともボクはそうだ。……そして、彼らも」

なんかめちゃくちゃダメなことを真顔で言われても困る。生徒会長がそんな認識でどうするというのだ。

「ハン！あんたこそ本当に学生？学生とは勉強して然るべきでしょうが。学校に行けるってことがどんなに幸せなことかわかつてんの？」

「キミは本当に小学生？そんな認識で学校に来ている人間、一体どれほどいるんだろうね？」

「知らないわよ。結構いるんじゃないの？全校生徒の半分ぐらいは最低でもいるでしょうね」

「キミって意外なところでファンシーなんだね。そんなわけないだろう。たぶんそう考えてるのはキミ一人だよ」

「なら、ここの生徒はどうかしてるわ」

学びたいのに学べない苦痛ほど、堪えるものはない。そんなことは身に染みて理解している。あの牢屋にいる時はもし、学校にいたら、と何度夢想したことが。

そんなやり取りをしていると、生徒会室の扉が開いて何人かの生徒が入ってきた。

「……トレース。重要な案件って、なに？」

一番最初に入ってきたのは、トレースの『持ち主』にして私の父さん、ルウ・ペンタグラム。

「ねえ、なんかあったの？」

その後ろに恋人のようにしているのは、お母さんことサラ・イーストスカイ。

恋人の『ように』と表現するのには、理由がある。

お母さんは、お父さんのことが好きだ。

そんなことは一緒に生活していればすぐにわかるぐらい露骨に出
ていた。それに気づかないお父さんもお父さんだが。

でも、お母さんはいつまでたっても告白しない。しかも、し
ようとすらない。

どこまでいつてもいつまでたつても『友達以上恋人未満』。

だから、恋人の『ように』になるわけだ。

「で、私は何をすればいいのかなっ？」

そう元気よく訊くのは、背が私とおんなじぐらいの黄色の髪がよ
く目立つ高校生、リリーお姉ちゃん。

瞬間移動ができる、元気はつらつなお姉ちゃんだ。そういえば私
がお父さんに引き取られたときに自己紹介しあつただけど、すぐ
にどこかへ行ってしまったんだった。

んで、リリーお姉ちゃんとはこの世界で再会した。引つ越してか
ら三日後ぐらいに挨拶にきて、一緒に住むことになったんだ。

他にも一緒に住む人は増えた。ミリアお姉ちゃんに、リリーお姉
ちゃんに、そして……

「……………なんの用、道具」

何故かトレースに嫌悪感まるだしの、ララお姉ちゃん。

白い髪に無表情はいつものことなんだけど、その表情豊かな声に
は、尋常ではない嫌悪と怒気と殺気が交じっている。

今のララお姉ちゃん、怖い……

普段は気のいいお姉ちゃんなんだけど、なんでだろう？

「はいはい、そんなに殺気立たない。お姉ちゃん、悲しくなつち
やうな〜」

そう言ったのは、綺麗な金髪の、コトリお姉ちゃん。

彼女もこの世界にいて、私たちと一緒に生活することになったお
姉ちゃんの一人だ。

……………そして、最後に一人。

「……………さすが内輪生徒会。呼び名が全部家と変わらんな」

赤茶けた短髪に、茶色の瞳。長身痩躯で、体つきはがっしりとしている。

声は低く、まるでホラ貝を吹いた音のよう。

「……なんだ、クレア？まだ俺が怖いのか？……まあ、いいか」
なんでもかんでもまあいいかで済ます超がつくほどのめんどくさがり。

「……あなたも、生徒会に入ってたんだ」

「……生徒会つつつても、内輪オンリーの家族会だな」
そう言つて煙たそうにお父さんたちを見つめるのは。

五芒^{ごぼう} 拓人——

本名、タクト・ペンタグラム。

一緒には暮らしていないけど、この人はれっきとした『ペンタグラム』の長男。

ミリアお姉ちゃんの次に引き取られた、『空気を操る力』を持つ、
長寿の旅人。

それが何を意味するか……。

つまり、彼は私のお兄ちゃん、ということだ。

第18話 敵意

タクト・ペンタグラム。

私を知る唯一の兄で、私が苦手とする性格の人間。

会話はできるのだけれど、なにを考えているのか全くわからない。すぐに『まあいいか』で終わらせてしまうので、めんどくさがりなのだろうと予想はつくが、それ以外のことが全くわからない。

これで弱けりやすこしは楽なのだが、この人は空気……つまり、大氣中に存在する気体の物を、自由自在に操れる、ときたものだから手のつけようもない。

何しろちよつと対象の周りの空気を真空状態にするだけで、一瞬のうちに内からはじけたスプラッタ死体を作り上げれるような能力なのだ。どうしようもない。

だから、私はこの人を恐れている。男が怖いのはいつものことだが、それ以上にこの人は怖い。

「……とにかく、今日集まってもらったのはほかでもない。新しく生徒会に入ったクレアとの顔合わせだ。まあ、自己紹介はいらないな。ではみんな、役職だけ言ってくれ。ボクは生徒会長、トレースだ」

「副生徒会長、ルウ」

「生徒会補佐、サラ」

お父さんとお母さんが、仲良く声をそろえていった。何を言ってるのかぎりぎり聞き取れたけど、ここまでシンクロされると逆に感心する。

「えつと、私は生徒会部活統括、リリーだよ」

語尾にオンプがつくような感じで、リリーお姉ちゃんが言った。

「……………生徒会対教師、ララ」

その役職にはどんな意味があるのだろうと疑問に思ったが、突っ込まないでおいた。今の嫌悪感むき出しのララお姉ちゃん、なんか

怖いから。

「生徒会会計のコトリだよ。よろしくね!」

子供っぽくコトリお姉ちゃんが言った。

「……生徒会書記、タクトだ」

ぶっきらぼうに、お兄ちゃんが言う。

お兄ちゃんはずいぶん家族と関わりを持とうとしない。引越してきた時に挨拶には来たのだが、他のお姉ちゃんのように一緒に住もうとまでは言わなかった。

「うん、重畳。さて、今回朝から集まってもらったのにはわけがある。来るべき終業式にする演説の草案をまとめてもらう」

堂々と、主人もいる前だと言うのに偉そうに言い放った。

「と、というのが建前で、本題は簡単。本今朝5時、この世界に侵入者、つまり『イノベート』とみられる存在が這入^{はい}ってきたことを確認した。聡明なキミたちはすでに気づいているかと思うが、対策を講じなければならない」

いっそ冗談でも言うように、トレースは重要なことをさらりと言った。

……『イノベート』が、この世界に?

「キミたちも周知の通り、世界を壊すには、いくつか方法がある」
私の方をみて、彼女は説明に入る。確認するように言っているが、その実は私に対する説明だ。私だけが、この中で何も知らない。

タクトお兄ちゃんなんか、「フン、これだから何も知らないガキは……」とかもうすでに愚痴り始めている。

「まず、世界に存在する知的生命体、われわれ異世界人が言うところの『観測者』を全滅させること。これが一番ポピュラーな方法だと言われている。これは世界が『誰かに見られていないと存在できない』ことを如実に表している。

次に、世界の根幹を揺るがすこと。これは世界がひとつにまとまっている時にしかできない方法だ。思想、技術、なんでもいいから、その世界の『観測者』全員が知り、世界の根幹だと信じている物を

破壊する。これも、ひとつの方法だ。

そして、次。

世界の中心を破壊すること。

これは人工の世界でしかできない方法だ。なぜなら、自然な世界が中心をとることはなく、中心となる『何か』があるのは、この世界のように誰かに作られた世界だけだからだ。

最後に、世界の『創造者』を殺すこと。

この方法が一番やりづらいはずだ。世界を作るほどの能力を持つ者をそう簡単に殺せるはずがないからな。

以上が、ボクの知るうる世界を滅ぼす方法だ」

世界が滅ぶ条件って、ひとつじゃなかったんだ。

そう思ったのは私だけではないらしく、お父さん、お母さんを筆頭に、リリーお姉ちゃん、ララお姉ちゃん、コトリお姉ちゃんもトレースの話に聞き入っていた。

「では、話を戻そうか。今言った方法の中で、ボク達が気をつけなければいけないのは、どの方法だろう？ 答えは——全部、さ」

戸惑いから生まれる沈黙が、部屋を包む。

「『観測者』もいる、世界の根幹であるこの世界の表向きの支配者、^{ひいりきみかど}柊、^{たたり}帝、崇もいる、世界の中心のこの学校に加え、世界の創造者たるボクもいる。この世界は敵にとつては攻めやすい構造をしているんだろっね。人、支配者、学校、ボク。どれを攻めても、破壊すればこの世界は滅ぶんだから。しかもまともに戦えるのはボク達と暴力の支配者、崇家だけ。いくらボクでも、すぐには知恵は浮かばない。……と、いうわけで、集まってもらったんだ。キミたちに知恵を出してもらったために」

知恵。そんなものを万能の道具から要求されるとは思わなかった。きつと誰もが私と同じことを思っているだろう。

「……………無能な道具。この程度、あなた一人でなんとかできるはず」

氷みたいな冷たい声で、ララお姉ちゃんが言う。

そもそも、なんでこの人はトレースに敵対的なんだろう？

「無能、か。そうかも知れない。しかし、今はそれを恥じて判断を鈍らすわけにはいかないのだ。この世界は他の世界にくらべて滅びやすい。だから、必要以上に用心してもなんらおかしくはない。その道理も理解できず、無能呼ばわりされることに怯えて何もいわなければ、それこそ無能だと、ボクは思う」

「……………見敵必殺。これこそが勝利への道」

それだけを言っ。もう話はない、とばかりにララお姉ちゃんは生徒会室から出ていった。

最後に竦むような氷の一瞥をトレースにくれて。

……ララお姉ちゃん、怖い。

今日は何度もそう思ったし、私に向けられているわけでもないのに最後の視線以上に背筋の怖気るものはなかった。

第18話 敵意（後書き）

……ララ、ちょっと怖いです。

と、いうわけでララのキャラ紹介でも。

ララ・ペンタグラム

容姿端麗、文武両道、冷静沈着、終始無口無表情。しかし、声には感情がこもるある意味ではわかりやすいひと。

能力は『心透視』と言って、人の心を見透かす能力を持つ。この力を使えば人のトラウマをほじくり出して精神的なダメージを狙える。

無表情で無口だが、意外とかわいいもの好き。よってクレアが大好き。

髪の色は白で、瞳の色は銀。

好きな人のタイプは『心の見透かせない人』。

けれど旅を始めてから一度たりとも現れていないらしい。

第19話 提案

ララお姉ちゃんの抜けた生徒会には、沈黙が流れている。

無茶苦茶、気まずい。

こんな雰囲気、長く続いて欲しくない。

と、いうわけで提案してみた。

「……守るところを分担したら？ 幸いみんな力は強いんだし、二人いればたいていの敵はなんとかなるでしょ。一番まずいのはこの学校の破壊なんだから、ここを重点を置いて守ったら？ 敵も高校生やガキばつかのところの方が襲いやすいでしょうし」

と、いかもし私が『イノベート』ならそうする。

私の提案に、意外とみんな乗ってくれた。

「……一理ある。なら、俺とミリアで力のない柊、帝を護ろう」

——そういえば、ミリアお姉ちゃんがいけないのは、どうしてだろう？ こういう時に『未来視』は役立ちそうなのに。

「うん。じゃあ、僕とトレース、サラの三人で街を守ろう。広い街を守るには、君たち二人の力がいる。……いいかい、サラ？」

「へ？ あ、うんそれでいいわよ。全然。うん、まったく問題ないわよ。なぜトレースとかいうやつと一緒になのは知らないけど、なんにも問題はないわよ」

少し怒ったように、お母さんが言った。……きっと、トレースのことを今まで知らなかったんだろ。生徒会の会長さん、それぐらいしか認識していなかったのだから。……必死にお父さん達のことを隠そうとしているお母さんが容易に思い浮かぶ。

「じゃあ、私とコトリ、クレアで学校、かあ。きつついな」。

コト姉^{ねえ}、どう？」

「……まともに戦えるのは、クレアとあなたぐらいね。私の能力は弱いから……戦力外と考えるでもいいわよ？」

コトリお姉ちゃんがおどけるように言った。そういえばコトリお

姉ちゃん的能力ってなんだろう？

「……まあ、私はこれで。戦いは嫌いな」

「え？コト姉、もう行くの？」

「ええ。じゃあね」

「ちよつと、コト姉！コト姉ってば！」

リリーお姉ちゃんの制止の声も聞かずに出ていったコトリお姉ちゃんと、彼女を追いかけて出ていったリリーお姉ちゃん。

「……フン、やつらコトの重大さが理解できていないのか？もつと綿密に策は練るべきだろうに」

タクトお兄ちゃんが、軽蔑するような視線を二人が消えた扉に向ける。

「……まあ、兎にも角にも、分担は決まった。あとは昼休み、もう一度集合だと、今出ていった彼女らに伝えてくれ。では、解散！」
トレースの声と同時に、生徒会の会議は終了した。

……なんか、前途多難？

「生徒会ですって!？」

教室に帰って来たら、柊風羽かざはとその取り巻きたちに囲まれた。

今教室に入ってくる者がいたら、私の席を中心にした人だからが見えるだろう。

何事か、と最初私は身構えたけど、その言葉を聞いて平静を取り戻す。

「血相変えて何かと思ってたら、そのこと?別に、ただ生徒会に入っただけよ。トレースに誘われてね。今さっき生徒会役員を紹介してもらったところよ」

嘘は言っていないと思う。ただ言葉が足りないだけだ。でも、それがまずかったらしい。

「うそでしょ!？ホントに『あの』生徒会に入らせてもらったのですか!？」

何やらさっき以上に顔を赤くして私を問い詰めてきた。……いったい何?

「『あの』って、『どの』?」

こそあど言葉で訊かないで欲しい。該当するのがありすぎて迷うから。

「『あの』校内一の美人美女が集まる、生徒会役員一人一人にファンクラブがある生徒会に、ですか!？」

「え?」

ファ、ファンクラブ?

そんなの、実際に存在するの?てか、全員?

傍若無人、唯我独尊なトレースや、何考えてるのかさっぱりわか

らないタクトお兄ちゃんにも？

「知らなかったのですか？生徒会長は別名『銀の薔薇^{はつばし}』！美しい白銀の髪、白銀の瞳、そして、薔薇を想わせるようなその性格！」

……誰のこと？『薔薇のトゲ』ならわかるけど、薔薇？……ごめん、理解できない。どんなに取り繕っても薔薇には見えない。

「そして次に、『白髪の紳士』ルウ様！何と言ってもその優しさ！その優しさに惚れた女性はいくらを越えろとかなんとか……」

うん、そこには同意。お父さん、見ず知らだった私を娘にするくらい誰にでも優しいから。

お母さんも、きっとそこに惚れ込んだんだろう。……なんか、聞いていると学校で『お父さん』って呼ばないほうがいい気がするんだけど……ま、いつか。

「ああ、『赤髪の炎術士』、サラ様もいい御方です」

え？私、この調子で家族全員の学校での評価聞かされるの？

……でも、みんな高評価だし、聞いていて悪い気はしない。……それに。

家族が学校でどう思われているのか……とても興味がある。

第20話 言訳

私は呆れていた。

「……で、その数々の武勇伝から、炎術士、と呼ばれていすのですわ！忘れていけないのは、ララ様です！『白雪の薄幸姫』^{はるしゅき}と呼ばれる由縁は……」

「ちょ、ちよつと待って！」

私は教室にて、風羽^{かぜは}から生徒会に所属する人間の評価を聞いているのだが……

「なんですの？これからですよ？」

「い、いや、通り名とかはいいから、もっと別の！人柄とか、そういうの教えて！」

さつきから『銀の薔薇』だとか『白髪の紳士』だとか『赤髪の炎術士』などの通り名ばかりを聞かされている。正直、どうでもいい私が知りたいのはそういうことではなくて、この人のここがいいとか、こういうところがダメだとか、そういうのを聞きたいのだ。

……まあ、生徒会が通り名の見本市だということはよくわかったが。

「……そうです。まあ構いませんわ。では、ララ様なんですが、あの無口さと無表情さ！そして何より、不幸そうな雰囲気！」

声高に言っているが、失礼だとは思わないのだろうか？人の家族捕まえて『不幸そう』って……

それに、いうほど無口ではない気もする。

「……なにやら不満そうですね？……そうでした、あなたは実物を見ていらしたのですね」

ほ。ようやくそれに気づいてくれた。これで迂闊なことは言えないだろう。

「では、教えてくださいませ」

「は？」

私は我が耳を疑った。まさかそんな、

「わ、私にトレースたちのことを、教えると？」

首を振ってくれ、たのむ、首を振って！訊かれたら絶対ボロがでるから！家族に迷惑かかるから！

そんな気持ちで言ったのだ。それをこいつは

「ええ。ぜひともお願いしますわ。……もちろん、生徒会長のことを呼び捨てにする理由も含めて、ですわよ？」

とびっきりの笑顔で、そう言ったのだった。

……ああ、どういつ風にでっちあげよう？

「えっと、大丈夫？」

昼休み。生徒会室の前までついてきてくれた黒月沙耶は、私に心配の声をかけた。

「……なにが？」

私は訊いた。なぜ、大丈夫などと訊かれなければならないのだろう？ 私はいたって健康で、どこも問題はないというのに。

「えっと、気付いてないのかもしれないけど、クレア今すっごい疲れた顔してるよ？」

「……そうかも」

私は力なく答える。

疲れたのには理由がある。さっきまで休み時間の度に質問されていたのだ。

朝の休み時間は「あと、えと、その……」とかやってる内に終了。次の休み時間もおんなじ感じ。3時間目の休み時間になってようやく、うまい言い訳が思いついた。

私とトレースは幼い時から席を同ずる親友だった――

はい、どう考えても矛盾しまくりのこの言い訳、苦しいか？と一瞬思ったが、意外とみんなに浸透した。

なぜなら、トレースの存在そのものが伝説化しているため、私生活を知る人間が一人もないから。

それはそうだろう。トレースの存在は私たち『ペンタグラム』の人間しか『見たことがない』のだ。知りようがない。

そんな背景があるからこそ、私の『昔私はここに住んでいて、その時に一緒に遊んでもらっていた』という嘘が通ったのだ。

トレースが謎に包まれていたからよかったものの、もし知られていたら、この嘘は通用しなかったことになる。

……沙耶や風羽に嘘をついた、というのが心苦しいが、これも仕方ないことなのだろう。

「とにかく、心配してくれてありがとう。……行ってきます」

私はけだるげなまま、言う。

「行つてらっしゃい」

沙耶は、ただ笑顔で、励ますようにそう言ってくれた。

その言葉で、私は気を引き締める。これからは旅人^{わたし}の領域。私が、戦う場所。

世界はなにがなんでも、護る。

この世界にいる沙耶を、護ってみせる！

私は生徒会室の重厚な扉を、開いた。

第21話 報告

「……実に残念なお知らせがある」

生徒会全員がそろった部屋で、悲しげなトレースの声が響く。

彼女は誇張抜きで疲れた顔をしていて、道具のはずなのにととても人間くさかった。

「崇、帝の二家に街の守護をもちかけたのだが……断られた」

その言葉にみんなが戸惑うより前に、ララお姉ちゃんが蔑むように言った。

「……………使えない道具。この世界はあなたの支配下にあるはず。あなたの命令を聞かないという思考は存在しえないはず。それなのに……なぜ？」

氷よりも冷たい視線。それに当てられても、態度を少しも変えずに、トレースは言う。

「彼らも彼らの生活がある。正直言って、崇はそれほど強くない。どこまでいってもヤクザが強くなった程度だ。異世界の戦闘にはついてこれないと判断して、強制支配を取りやめた。……どうだ？これで文句はないだろう？と、どうか今キミのご機嫌をとっている場合じゃないんだ」

トレースは珍しく焦っているようだった。主人の家族のご機嫌をとっている場合じゃないって……どんなに緊迫した状況なんだ？

「先ほど、琴乃若の街、柊家、帝家、崇家、そしてこの学園、それぞれの半径1キロ以内に不審人物——『イノベート』を名乗る人間が同時に出現した」

……は？

「なによ、それっ！！普通真っ先に言うことでしょ！？なに平然と言ってんのよ！」

私は呆れながら叫んだ。なに、こいつ？どこが万能の道具？人格持ってる分、性能低下してるんじゃないの？

「……すまない。ボクは今からキミ達に強制的に役割のところを送らせてもらう。……残念だが、拒否権はなし、だ。……かさねがさね、すまない」

「……トレース、君は」

お父さんが何かを言いかける前に。

フッ――

と、私、コトリお姉ちゃん、リリーお姉ちゃんを除く全員が、生徒会室から文字通り消えた。

私は戦闘が始まると聞いて不安そうにしている二人のお姉ちゃんを見て、大丈夫かな、と真剣に思い始めていた。

「……敵が、来たんだ……」

とくに酷いのはコトリお姉ちゃん。完全に……怯えている。

彼女だって長く生きる旅人で、私よりもずっと強いのに。

「大丈夫だって！私もコト姉も、長寿の旅人だからさ！経験が勝利を約束してくれるよ！」

自分だって怖いはずなのに、気丈に振る舞ってコトリお姉ちゃんを励まそうとしているリリーお姉ちゃん。

二人の体はわずかだが、震えていた。

それを無視して、私は言う。今は、感情なんていう些事に気を取られている場合ではない。

「……とにかく、行こう」

少しでも気を抜いたら震えそうになる体を必死で抑えつけながら、私は生徒会室を出る。

……今や戦場と化した世界を護るために。

戦う前から精神状態が良好でない私たちが生徒会室を出て最初に見たのが、廊下に気持ち良さそうに眠っている沙耶だった。

「沙耶っ!？」

私は横たわる彼女に近づき、抱き起こす。

けれど、目覚める気配は一向にしない。かすかな魔力も感じるのだから、いつそうに心配になる。

……もう、敵襲!？」

「気にしちゃだめ、それ、トレースの催眠だから。コトが終わるまでは、『死んでも』目覚めないわ」

リリーお姉ちゃんの言い方に、どこか引かかった。

「……『死んでも』?」

「そうよ。例えば死ぬような目に遭っても目が覚めることはない。そういう風にできてるの。この世界の人たちは」

……つまり、世界の危機が迫ったとき、力のない一般市民は眠らされるのか。酷い話だとは思う。けれど、下手に騒がれて状況が悪化する可能性もある以上、これも仕方ないのかもしれない。

「……とにかく、行きましょう」

沙耶を廊下に優しく寝かせて、私は廊下を下駄箱に向かって歩く。二人はついてこようとせず、リリーお姉ちゃんが止めた。

「どこ行くのよ。『イノベート』がどこにいるか、分かっているの

？」

ぴたりと、私は足をとめる。

「……今からそれを探るの」

私はコートの中に手を入れ、『それ』を探す。

私のコートの中はそれなりに整理しているので、『それ』はすぐに見つかった。

『それ』を取り出す。まるで学者が自説を学会に発表する時のような緊張感と共に、『それ』の名前を言う。

「……『サーチペンデュラム』。ある特定の何かを探し出す、一種のダウジングマシンよ」

私が取り出したのは、水晶を三角錐にしたものをピアノ線で吊るした物。

「……そんなので探せるの？」

リリーお姉ちゃんが不安そうに訊いた。まあ、小学4年生の自作の道具に対する信用なんて、そんなものだろう。

「ええ。……その性能は、100キロ先の鳥の群れを見つけられるほどよ」

試したことのない道具なのでハツタリだが、それぐらいの自信はある。

気の変化を探る純度100%の水晶に、指針を示す効果のある魔法をお母さんにかけてもらったのだ。敵の位置を探るぐらい、朝飯前だ。

「……見つけた！校門前！」

『この世界全体に敵意を持っている者で半径1キロ以内にいる者』と条件づけたらすぐに引かなかった。

私はその結果を一ミリも疑うことなく、結果がでると同時に走り出していた。

……私がみんなを守るんだ！

そんな安っぽい正義感も、今は悪くない、と思えた。

第22話　索敵

—— 崇家 ——

和風作りの家屋の一室、少女が目を閉じ、黙想していた。

「……始まる……悲しい……戦いが……終わることのない……争いが……」

今、この世界は一般人——異世界人以外の人間は覚めることのない眠りにについている。

しかし、少女は違った。どこまでも儚げな印象の着物の少女は、うつすらとだが、目を開けることができた。

その瞳は黒なのだが、妙に薄く、今にも色が消えてしまいそうなほどだった。

「……護って……この世界を……優しい……この世界の人たちを……」

再びその目は閉ざされ、くたんと糸が切れた人形のように横になる。

少女からはじきに寝息が立てられ始めた。

その両手は、祈るようにして組まれていた。

今、街は死んでいた。

道行く人々が皆、なにも考えずに、恥も外聞もなく路上に横たわり、眠っていた。

これは敵襲ではなく、トレースが組み込んだ街の防衛機能。

自分たちが素早く動けるように、余計な人員は全て眠らせたのだ。

「……ここかい？」

転送されたルウが振りかえりもせずには訊いた。

「ああ。誤差20メートル。なかなかの精度だろう？」

えらそうにトレースは胸を張る。しかし、

「それならなぜ敵がここにいない？」

ルウの辛辣な質問に、言葉が詰まる。

「う、そ、それは……」

オロオロとし始めたトレース。何と答えようか、と彼女が迷っていたところに、

「……てかさ、ルウ。いい加減、説明してくれない？」

不機嫌真つただ中のサラが、ルウに疑問を投げかけた。

「……説明つて、なにを？」

いっそすがすがしいまでに、ルウはしらばつくれた。

「……焼くわよ？」

掌に炎の塊をだして、脅す。

わざわざ能力を出してまで訊き出したい理由は、イラっているから、それとも単なる嫉妬心か。

その気迫にまけて、ルウは説明を始める。が、

「ごめん。説明する。彼女は僕の道具にして奴隷だよ。昔、拾ったんだ」

その説明は、まるでお気に入りのオモチャを紹介するかのような簡潔さと気軽さだった。

サラは一瞬意味がわからない、という風な顔をし、けれどすぐに

意味を理解して叫んだ。

「はあ！？ど、どどどどどどどど、奴隷！？それって、あの、絶対服従で主人の言葉には逆らえないっていう……」

「僕たちが行ったことのある世界で、奴隷という言葉がそれ以外の意味をとっている世界はまだないね」

言外に、君の言う通りだよ、と促して言う。

サラは空いた口がふさがらない。しばらくその意味を考え、そして、何を思ったか急激に顔を赤らめた。

「な、な、何よそれっ！？ど、奴隷！？じゃ、じゃあ、ベッドの中でのご奉仕とか、○○○○だとか、×××××だとか、○○×××だとか！？」

さすが思春期+恋する乙女、といったところか。そういった想像はクレアよりもすぐに思いついた。

「……ボクはまだ、そういった用途で使われたことはない。……何度も進言しているのだがな。絶対に応じてくれないのさ。ときたまご主人様^{マスター}が本当に男か分からなくなる時があるよ。……こんなに綺麗な顔してるのにね？」

トレースが酷く残念そうに言う。

その言葉に、サラはさらに顔を赤くして、叫んだ。

「な——！あ、あんたも、る、ルウのことが……！しかも、マスターって、なによ、マスターって！そんな呼び方するんじゃない！……も、燃やす！あんたみたいなラブドル、焼き尽くしてやるわ！」

掌の火炎を一層大きくし、トレースに肉薄する。

——と、そこで。

「ククク……ずいぶんと、楽しそうだな？」

声が、上から聞こえた。

「—————」

さっきまでの和気あいあいとしていた雰囲気を一瞬で消し飛ばす、その雰囲気。

今までのやり取りを完全に無視し、敵を一刻でも早く捉えようと3人は同時に顔を上げた。

自分の姿が3人の視界に入ったことを確認すると、悪魔のような翼をはやした黒髪の少女は嗤いながら、言った。

「ククク……さて、自己紹介、と。私の名前はシイナ・レイル・ジェイドだ。——もちろん、『イノベート』所属の、ね」

底冷えするような威圧感と共に、ルウ、サラ、トレースは敵と邂逅した。

柊、帝の両家はひとつの敷地内に存在している。

日本独特の屋根瓦に、木造作りの豪邸。日本人はこれを見ても『大きい家だなあ』とは思っても『豪華だなあ』とは思わないだろう。それほどまでに様式美を追求した家屋なのだ。日本古来より伝えられてきた建築方式……それに、現代科学の粋を集めて建てられたのが、この両家。

正門に始まり、グラウンド並みの広さのある庭、何百人と寝泊まりができる住宅部分。

その広大な庭に、二人の男女が何かを待つように立っていた。

男は大体17歳ほどで、背が高く、がっしりとした体格である。赤茶けた髪に、茶色の瞳の彼の名は、タクト・ペンタグラムと言う。

女の方は、うっとりするほど美人だ。漆黒の髪に、茶色の瞳。全体的なプロポーションも整っていて、立っているだけで絵になる。

彼女の名は、ミリア・ペンタグラムと言って、琴乃若を代表する占い師であり、私立^{はみ}玻璃座真学校の生徒会顧問なのだ。

クレアが彼女の姿を生徒会で見れなかったのも無理はない。彼女は教師で、放課後も教務に忙殺されていたのだから。

「……なあ、ミリア」

長男、タクトがぶっきらぼうに、心底めんどくさそうに言った。

ミリアの方が姉なのだが、タクトは『姉』と呼ぶことはしなかった。別段ミリアも呼称を改めるように言っていないのだが。

「なに、タクト？」

こちらもぶつきらばうに……と、いうよりは作業に忙しくて構ってられない、という具合だ。何も持っていないが、その顔は真剣そのものだ。

未来を見通し、どうすれば最善かを読んでいるのである。

「……まあ、いいか。未来読むのに夢中なんだろう？」

「そうよ。今から10秒後にシイナと名乗る『イノベート』の少女が来るわ」

「十秒後って、すぐじゃねえか。……まあ、いいか」

のんびりと、タクトは棒……まるで、指揮者がもつ棒つきれのよなものを取り出した。

「……拓人がタクト振るって戦うなんて……面白い冗談ね？」

「……うるさい」

タクトの能力である空気を操る力は、制御が難しいため制御用の何かが必要だった。

音楽にある程度興味のあった彼は、気まぐれで指揮者の持つ指揮棒タクを持ってみた。

すると面白いように思い通りに操れたのだ。それ以来、戦闘には指揮棒を持って臨むようになった。

「……ククク、二人だけか？」

突如そう言って現れた少女に未来を見通すことのできるミリアは見向きもせずに作業を続けていたが、タクトはそうではなかった。しっかりと、敵を視認する。

この時、二人は知るよしもなかったが。

その敵は同時刻ルウ達のところに現れた、
シイナ・レイル・ジェ
イドと寸分違わぬ姿形をしていた。

第22話 索敵 (後書き)

新キャラ登場、シイナ・レイル・ジエイド。二人の彼女には一体どんな秘密が隠されているのでしょうか？そして、一方無防備な家は一体どうなるのか！？

次回、お楽しみに！

第23話　邂逅

——邂逅と同時刻、私立玻座真^{はくま}学校校庭——

クレア、リリー、コトリは、今だ見ぬ敵を夏の日差しが照らすなか、ただ待っていた。

3人の中に、会話はない。

ただただ、いつか来るであろう強敵を待ち、その時襲うであろう恐怖と、懸命に闘っていた。

もうすでに、戦闘は始まっているのだとも言つように。

彼女たちはもう、疲弊していた。

リリーも、コトリも、クレアも、もともと精神の強い方ではない。何かあればすぐにでも絶望を覚えてしまうような……そんな、どこにでもいる少女たちだった。

二人の姉は不安そうに周囲に気を配り、わずかな音でもビクリとなるほど、過敏になっている。

クレアはその小柄な身には合わない無骨な拳銃、コルトパイソンを両手で構え、周囲に気を配っていた。

彼女は全ての兵器を使いこなす『ユージュアクション』の能力を持つているため、普通ならば持つこともかなわない大型の拳銃も、らくらくと扱える。

拳銃を扱うために必要な知識、経験。

そんなものはクレアには必要ない。必要なのは、戦う意思と、冷静な判断力。幼いころから人殺しや戦闘ばかりやってきた彼女は、誰に教わるでもなくそれを知っていた。

敵はすぐに来る。その時は私が応戦しないと！私が学校を、みんなを守るんだ——！

そしてクレアの中は、その思い一色だった。恐怖も、怯えも、その思いの前には靄のようにかすんでしまう。

今なら、どんな敵にも向かっていける。

クレアがそう確信するほど、その思いは強かった。

「来い……早く……来い……！さあ！私はここにいるぞ、『イノベート』！早く私と戦え！！」

クレアの叫びに、リリーとコトリはびくつとなる。

もし、本当に来たら、どうするんだ！？

そう忠告しようとした時だ。

「……よんだ？愚かな少女。道化のように敵を求めて何がしたいの……？」

敵が、現れた。歩いて、校門から校庭まで何者にも阻まれず。

彼女は例にもれず他の所に現れたシイナ・レイル・ジェイドと同じ姿形だったが、彼女だけが、様子が違った。

どこまでも、悲しそうで、どうしてもよさそうで、もう飽きたような、そんな表情。

それでも、あふれ出る悪意と、害意と、敵意と殺意に変わりはない。凶悪で邪悪な雰囲気も他のシイナと変わらない。

急に現れたシイナに気押された二人の姉はすっかり怯え、硬直していた。
しかし。

「死ね」

クレアは完全に相手の口上を無視し、相手との探り合いもせず、話し合いの余地をまったく見出さずに、発砲していた。

恐怖のあまりに先走った、というわけではけしてない。クレアはどこまでも冷静だ。

その証拠に彼女は撃つと同時に身構え、相手の反応を探る。

「……小学生って、『みんな友達、愛は世界を救う』、『手を出す前に話し合おう』とかいうバカげた思想を当然のように信じているような存在だったと……私は思ってるんだけど。」

それがいきなりなに？なんの返事もなく『死ね』？……先行き不安ね」

拳銃、しかも護身用拳銃とは違い致死性の酷く高いもので撃ったというのに、そう言った怨みごとを言うだけで、なにも行動しようとしな

「……な、なに？まあいい、死ね！」

またもや無情に引き金を引いたクレアだが、今度はシイナも動いた。

ただ、うつとおしそうに手を払っただけ。

それだけで、弾の軌道をずらした。

「……………う、嘘」

愕然と、クレアがうめく。

「……私ね、ヴァンパイアなの。『イノベート』所属の、吸血鬼」
悲しそうに、さびしそうにシイナは言う。

「やめよ？あなた達旅人でしょ？なら、こんなちっぽけな世界見捨てて逃げればいいじゃない。なんで立ちはだかるの？私、強いよ？それなのに、なんで？」

悲しそうに言うシイナを無視し、パイソンをシイナに向ける。

こいつのいうことは、気に食わない。

「私はね、この世界を滅ぼされちゃ困る理由があるの」

害意、悪意、敵意、殺意、憎悪、憤怒……それ以外の感情を忘れてしまったかのように、クレアは言う。

「沙耶を、沙耶のいる世界を『ちっぽけ』なんていうやつ、生かしておけるか！」

引き金を引く。

轟音、そして、銃弾がシイナに届く。

心の臓を寸分たがわず狙い、命中させたクレアの能力はさすがの一言に尽きる。

その存在に、クレアは会ったことがあった。

つい、ほんの昨日のこと。その吸血鬼はただ生きている、といった感じの弱い生き物だった。

しかし、その吸血鬼とは明らかに違う何か、シイナからは感じられた。

圧倒的で破壊的な、闇。

闇とは、全ての終焉にして全ての始まりだ。

闇から宇宙——世界は始まり、終わる時も、闇一色に包まれて終わる。

そして、全ての闇の統括者、それが、吸血鬼。
ただ血を吸う無能な化け物では、けしてない。

「ひ……」

クレアはシイナにコルトパイソンを突き付けている。

それに対し、シイナは何もしてこない。

はずなのに。

まったく、自分が優位に立っているという気がしない。

「く……あ……」

何をされているでもないのに、心が折れそうになる。

「……………!!」

本能に従い、全力で逃げようとする体を必死で抑えつけ、引き金を引こうとする。『ユージュアクション』が告げる。あと一ミリ引いたら、銃弾が発射される、と。それに従い、クレアは引き金を引こうと、指に力を入れた。

「ククク……クハハハハ！おもしれえ！この圧力にも耐えるか！ホントに——」

と、そこで。

シイナの姿を見失った。
と、彼女が思った瞬間。

「——おもしれえ!!」

ゴッ。

と。クレアのこめかみに、シイナのひざ撃ちが入った。

視認できないほどの速さでクレアのすぐそばまで来た彼女は、敵の姿が消えて茫然となっているクレアに本人としてはゆつくりと、ひざで蹴り飛ばしたのだ。

シイナは別段本気でやったわけではなく、遊び程度の攻撃だったのだが、クレアの小さな体は5メートルほども吹き飛んだ。

「カハッ!」

視界がぶれ、クレアの体は宙を舞う。地面にたたきつけられて、肺の中の空気が全部吐き出される。

「ぐ、この……バケモノ……!」

それでもクレアは倒れたまま照準を合わせ、拳銃の引き金を引いた。

ドン!ドン!ドン!

爆発音に近い発砲音と共に銃弾が吐き出される。しかし、それがシイナに当たることはない。

全部よけられたのだ。

「な……」

確実に急所を狙い、よほどうまく避け方をしないことには避けられないように撃った。

「ザコめ。そんな豆鉄砲で私を殺せるとでも？」

その弾道を見極め、腕一本でそらしたのだ。

「そんな……」

——勝てない——！

その実力差は、そうクレアが絶望するのには十分すぎるほどだった。

第24話　戦闘開始

—— 同時刻、琴乃若商店街 ——

「来たわね、『イノベート』！燃えるおおお！！！」

飛んでいるシイナをとにかく燃やそうと、サラはトレースにぶつけるつもりだった超特大火炎球をシイナにぶつけた。

空に浮かんだ彼女が、火に包まれる。

「サラッ！？」

ルウがあわてたように言う。サラはルウのいつもの博愛主義かな、と思っていたのであまり気にせず燃やし続ける。

「……キミはあれか？敵にそのまま通用するようなモノをボクにぶつけるつもりだったのか？」

じとりとトレースが睨むが、それも無視。

『イノベート』。

サラはその名前を嫌っている。

ある世界で、『イノベート』のわけのわからない理念のために親友だった少女が無残に殺されたから。

今その犯人は罰として危険な世界にいる（とサラは思っている）が、『イノベート』という名前は今でも嫌いだ。

だからつい、本気でやってしまう。

「ぐ……ぐウ……」

シイナにも効いていることを確認すると、さらに火力をあげる。

「サラ！やりすぎだって！問答無用で攻撃なんて……」

ルウの忠告も、今だけは聞けない。

「ルウ！あんたも攻撃して！トレース、あんたもなにぼさつと突っ立つてんの！とつとと斬るなり撃つなりしなさいよ！」

最大火力で焼きながら、叫ぶ。

火炎に照らされたシイナの輪郭が、どんどんあいまいになっていく。溶け始めているのだと思ったサラは、若干火を緩めた。

「ぐ、ぐああ……！」

だんだん、火が弱まっていく。それは燃やそうとした対象が消え行きつつあることを、示していた。

サラの能力、火炎は対象が燃焼しきるまで消えない性質を持つ炎を出すことができる。今の火炎球はその炎で作っていたのだ。

「サラ！やりすぎだよ！いきなり燃やすなんてどういうこと！？」
珍しく、ルウはサラに怒鳴った。

「……なによ！敵なのよ！？別にいいじゃない！てか、なんでルウは『イノベート』の肩もつの？おかしいじゃない！この世界が滅んだら、クレアがせつかく作った居場所も一緒に滅ぶのよ！？」

サラも、今回ばかりは引き下がれない、と反論する。

「わかってるよ、そんなことは！だから、すこしでも情報が欲しかったんだ！それなのに、殺してしまつて……！」

と、ルウが嘆いた。もう、敵の情報は得れないのか……そう、彼が思った時だ。声が響いた。

「……ククク。一体だれが、殺されたのかな？」

サラとルウが、声のした方向……さっきまでシイナの灰があったところを、見た。

「う、嘘……！？私、ちゃんと焼き殺して……」

茫然と、サラが呟く。その声の主は、今さっき焼き殺されたはずの、シイナだったからだ。

「ククク……いいことを、教えてあげよう。私は『イノベート』の、『イノベーター』だ。……意味は分かるかな？」

サラは、ピクリとなった。

『イノベーター』。『イノベート』の中でも上位に位置する強さだと表す肩書き。

「でもね、私には世界を滅ぼせるような強い力を持っていない。

……ククク、ただの喧嘩なら、そこらへんの小学生にだって負けれる自信がある」

「そんな奴が、なぜ『イノベーター』に？」

トレースが、バカにするように言った。シイナはその口調に顔色一つ変えず……いや、ことさら嬉しそうに、わらいながら言った。

「ククク……なぜなら、喧嘩と殺しあいとは違うからだよ。喧嘩にはある程度ルールがある。しかし、殺しあいにはそれがない。……だから、私は『イノベーター』になれたんだよ。ククク……なぜだか、分かるかい？」

挑発するようにシイナは言うが、誰ひとりとして答えようとしていない。3人とも、どこか言い知れぬ違和感が軽率な発言をためらわせていた。

「ククク……私は世界で唯一『変化を許された吸血鬼』だからさ」その理由に、一同はぼかんとする。

それを無視し、シイナは続ける。なぜ、力のない自分が『イノベーター』になれたのかを話す。

「ククク……知ってるかい？吸血鬼はなぜ、不老不死なのか。なぜ、受けた傷が一瞬で癒えるのか。なぜ、いつまで経っても外見年齢そのままの精神なのか。

それはね、吸血鬼という存在は総じて『変化を許容しない』んだよ。常に一定を求める。不老不死や治癒能力なんかは、その結果でしかない。

ククク……だから、長生きの吸血鬼は死を求めるのさ。死ねない。変わらない。髪型さえも変えれないんだ、それでは飽きてしまうだ

「いでよ……クロスレイピア十字架の双剣！」

その声は、世界に響いた。
その声を引き金に、あらゆる物理法則を無視し、鉄、セラミック、ありとあらゆる素材を元いに、二振りの双剣が、彼女の手握られる。

十字架によく似た、大ぶりの双剣。
本来両手で持つ大きさの剣を、双剣にする。
そんなことができるのは、『ユージュアクション』を持つクレア

か……

「さあ、行こうか」

世界の支配者たる、トレースだけある。

「……早く終わらせて、みんなの援護に行こう。……十分以内に終わらせよう！」

そう言つとルウは双剣を目にもとまらぬ速さで抜き放ち、シイナに肉薄した。

「ククク……クハハハハハハ！」

戦いが、
始まった。

第25話 敗北

—— ルウ達の戦闘開始と同時刻、はなま 玻璃座真学校校庭 ——

何度目だろう？

と、かすれる意識の中、クレアは考える。

何度目だろう？こうやって立ち上がるのは。

血と土にまみれた体を必死で起こす。立ちあがって、拳銃を構え、敵を見据える。

その瞬間、クレアは蹴り飛ばされる。

もう何度目か分からないほど吹き飛ばされ、たたきつけられ、そして立ち上がった。

戦闘、とは言うにはあまりに一方的な攻撃。それをシイナは延々と続けていた。拳銃を自分に向けられると同時に、蹴り飛ばす。

そんな行為を、もう数え切れないほど。

「ククク……なあ、てめえさ、私に勝てるのかと思ってんだろ？無理無理。私、死なないから。まあ、死ぬこともできるけど、まず死なないから」

そう言って希望を断たれても、クレアは心を折らずに立ち上がる。目はかすれ、照準はもちろん、立ち上がる力さえも能力に任せていても、心だけは、あきらめない。

「おいおいおいおい！てめえ、もうほとんど気い失ってるだろ！？てめえの能力に頼り切って戦闘って、どういう神経してんだよ？」

シイナの驚くような声ももう、ほとんど聞こえない。

「わ……わたし……は……護る……んだ……」

うわごとのように呟いて、銃を構える。

すると、一切の容赦なく、シイナに蹴り飛ばされる。

空中を飛び、地面にたたきつけられ、そして、すぐさま立ち上がるうと力を入れる。

「おいおいおい！まじかよ……！てめえ、正気か！？てめえの後ろにいたやつなんかビビってなんもしてこねえんだぜ！？それなのに、なんでてめえみたいなガキが……」

後ろにいたやつ、って……お姉ちゃん……？

靄がかかったような頭で、ぼんやりと考える。

姉は、戦闘に一切参加してない。

それは能力は弱すぎて足手まといになると判断したのか、それとも単に怯えているのか。

クレアはどちらでもあるような気がしたし、どちらでもよかった。お姉ちゃんに、辛い思いはさせられないよ……。

全身が引きちぎれるように痛い。傷口に土やら砂やらが入って痛む。呼吸がまともにできない。能力の補助を含めても、もう力が入りにくい。こんな思いを姉たちにして欲しくない。

「だから！何度も言ってるだろ！？私は、死なねえんだって！無駄死にだぞ！？このままじゃ！」

あきらめろ、と言うようなシイナの言葉に、クレアは嗤って答える。

「だから、なに？……あなたは『死ぬこともできる』と言った……。なら、対処方法は、簡単……。『もう死にたい』って思うまで……痛めつけばいいの……。拷問の仕方なら、いつももされてたから、覚えてるし、道具もいっぱい作ってたし……捕まえたら、じつくりたっぷり、試してあげる。あなたの……その……体で、ね」

その瞬間のクレアはもはや虫の息で、蚊が鳴くような声だったが、シイナに十分の危機感を抱かせるほどの、迫力があつた。

「ククク……おもしれえ！遊んでやろうと思ってたけど、もうやめだ！てめえは私の敵だ！きっちりしつかり、殺してやるぜえ！！」立ち上がろうと、クレアが腕に力を入れた時だ。

「死ねや！」

うつ伏せに倒れていた体の上に、シイナがいた。

——！！

首だけでその方向を向き、愕然となる。

今までのような遊びでなく、本気で殺しにかかっていることがありと分かった。

振りかぶる手は開いた状態で、その爪にはナイフのようになっている。それを吸血鬼の膂力で差し込まれたら……。

戦いの中に身を置いてきた彼女でなくとも、その結果は理解できる。

……死ぬ。

今度こそ、死ぬ。

そう、クレアが理解した時。

ドッ

と。

クレアの中心が、熱くなった。

—— ああ、私、死ぬんだなあ……

どこか遠くの出来事のように、クレアは感じていた。もちろん今でも背中では当然のこと全身が痛むし、苦しいのにも変われないが、それでも、先ほどまでとはまるで違った。

自分が遠くに逝くという自覚。

それをした時、クレアの頭はいつもよりもクリアになった。

—— 怖くは、ないなあ……

クレアはいつも死ぬ時は怖いものだとはかり思っていた。それなのに、実際死ぬと分かって、それほど怖くはなかった。

—— お父さん、お母さんともお別れかあ……

その名前を思い出すと同時に漠然と、記憶が思い浮かぶ。

引き取られた時のこと、その次の日にあった家族の親睦会。

お父さんにもらったプレゼント。ああ、そういえばあんまり使ったことなかったなあ……

元の世界を出てかの旅、辛いこともあったけど、家族が一緒だったから、がんばれたんだろうなあ……

それから、この学校にきてから。

そうそう、いきなり喧嘩が始まって、克樹とかいう男が風羽の胸

倉つかもつとして……

その時、沙耶と友達になったんだ。

友達、なんて初めてだったなあ……嬉しかったなあ……。

でも、もう沙耶とも会えないんだ……。

……私のお葬式で、沙耶は泣いてくれるだろうか？……きっと、負けるのは私だけだろうな。だから、その罰でお葬式してもらえないかも……

……なんかそれ、さびしいな。

そんなことが、次から次から思いつく。

だんだん、痛みがなくなってきた。

意識が薄れてきて、体の感覚がなくなって、どこか心地よくさえなってきた、そして、そして……

「……クレアっ！」

コトリの声を最後に。

クレアの意識は、終わった。

第26話　コトリの能力

クレアの体が、横たわっている。

致命傷となったのは、シイナに貫かれた背中。

そこからとめどなくあふれていた血液は、今はもう、流れていない。それは全身に血液を送る心臓の動きが停止したことを示していた。

「……く、クレア？」

茫然と、コトリが言う。

信じられない、といったふうに。認めたくない、と言う風に。

「……てめえらのせいだぞ、わかってんのか？」

シイナはなぜか、咎めるように言った。

「てめえらがすこしでも助けようとしてたら、私があいつを殺すこともなかったはずだ！」

「……！」

ビクリと、身をこわばらせるリリーとコトリ。

しかし、それだけしかリアクションはない。妹が殺されたというのに、その憎き仇が目の前にいるというのに、戦意を震わすことすらない。殺意を抱くこともない。

「……なんだよ。私は結構、あいつ気に入ったんだぜ？私を、この、究極の私を恐れさせたんだ！敬意を払わずにはいられないってもんだろうが！それを、てめえらはなんだよ！？ビビるだけか？」

何も、二人は言い返さない。

ただ、震えてるだけ。あまりの強さを誇る吸血鬼を目の当たりにして、怯えているのだ。

「……屑だな。お前ら二人は」

そう吐き捨てると、もう何も言うことはない、学校を去ろうとする。

この学校の破壊を命じられてきたはずの、シイナが。

本来ならおかしいことのはずなのに、二人はそれに気づかない。

「……」

シイナは、クレアの心に負けた。

最強を自負し、自分を究極だと信じて疑わない彼女にとって、それは異例中の異例。

だから、シイナはこの学校に何もせずに帰ろうとした。

自分に恐怖を抱かせ、最後の最後まで戦い続けたクレアへの、彼女なりの敬意の表し方である。

最後の最後まで、怒鳴ることさえしなかった二人には、心底あきれ返り、殺意さえ湧いてきたが、クレアが護ろうとしていたものなので、一応手出しはしなかった。もし、ここで二人向かってきたとしても、シイナは二人を殺すつもりはなかった。

呆れながらも校門に向かおうと、歩を進めた、その時。

「ま、待ちなさい！」

勇気を振り絞ったせいかわ、その声は震えていた。涙ぐみながらも、しっかりとシイナに届く声で、コトリは叫んだ。

「……ククク、何の用だ？」

やる気になったか？と、期待に胸を膨らませながら、シイナは振りむく。

コトリの瞳は濡れ、赤くなっている。けれど、さっきはなかった決意の色が、その瞳にはあった。

「クレアの傷、治してからいきなさいよ」

どんな怨みごとをいいながら突っ込んでくるのかと楽しみにして

いたシイナは、そのコトリの言葉に肩透かしを食らった。

「は、はあ！？なんでそんなこと……」

「そうしなきゃ、私がいやなの。戦ってあげるから、治しなさい！」

射抜くような視線で、コトリは吠えた。

「……いいぜ。こいつの傷治したら、戦うんだな？」

もう後戻りはさせねえぞ？という言葉を見線に込めて、シイナは言った。

隣にいるリリーはその視線に負けてびくつと体をこわばらせるが、コトリは全く動じなかった。

「もちろんよ。私の能力、頭脳、全てを駆使してあなたを殺すわ」その啖呵に、シイナは彼女の覚悟を感じとった。

「ひとつ、忠告しとく。傷は治っても、生き返ったりはしねえぜ？」

「分かってるわ。背中に穴があいたままじゃかわいそうだと思っただから、治して欲しいだけ」

「……ククク。いいお姉ちゃんじゃねえか」

コトリに対する評価を少し改めると、シイナは、黒々とした血液をぶちまけて無残に転がっているクレアの遺体に近づく。

コートは血に染まり、開いた目からは開き切った瞳孔が見え、クレアは今どこからどう見ても、死んでいた。

遺体のそばまでくると、しゃがんで手をかざす。血の力を空気經由で伝達し、体の修復を図る。

「……悪かったな。痛かったろう？もう、これで大丈夫だ」

シイナには似つかわしくないほど優しい声色で言うと、クレアの傷はすっかり治っていた。

これで、コトリと戦える。

もう、クレアに対する感慨は一切財抜け落ちた。

あとは、どうやってコトリをいたぶるか……

シイナがそう試案をめぐらそうとした時だ。

「……ありがとう」

コトリが、横たわるクレアとしゃがんでいるシイナの間に入った。
「……あ？」

彼女は右手をシイナがかざした手にあてて、左手をクレアの心臓
においている。

それが何を意味するのか、シイナは一瞬理解できなかった。
いつものシイナなら、敵になるはずのコトリが近づいてきた瞬間、
攻撃を始めるはずだった。

しかし、今のシイナはそれをしなかった。
クレアを殺した罪悪感か、ただ単純に油断していたのか。

「それと、ごめんなさい」

その言葉で、シイナは危機感を抱き、飛びずさろうと足に力を入れる。

——が、もう遅かった。

「——てめえ！何しやがった！」

シイナが吠えるように言った。もう油断ならねえ、殺してやる——
そう思っただけでも、シイナの体はまったく動かない。

触れられているところから光の粒子のようなものが発せられる。
それはクレアの体からも同じようにして発生していた。

「私、言っただけね？能力、頭脳、全てを使ってあなたを殺すつて。
だから、実行に移したの」

もう腹をくくったのか、コトリの顔から怯えの色は消え失せていた。

しかし、どんな感情も、彼女から読み取ることはいらない。

「私はね、自分ではない誰かの命を、何かに与えることができる
の。誰かの命を吸い取って、何かに命を吹き込む……悲しい能力。

私は『転生輪廻』って呼んでるんだけど」

転生輪廻…… 仏教など言う生まれ変わりのことである。

人は死ぬと何かに生まれ変わり、そしてまた別の生を歩んでいく、という考えのことである。コトリの能力は、その転生輪廻を強制的に引き起こす能力である。

もちろん記憶や人格など引き継がれるはずもないし、生まれ持った能力が引き継がれることもない。

そんな絶望的なことを聞きながら、必死に動こうと努力するシイナ。

「……無駄。もう、インストールは始まっている。命を移しとっている間は、移しとる方も、移しとられる方も身動きができないの。あきらめて、クレアの魂になって」

コトリの目的……それはクレアを生き返らせること。死んだ体に魂を入れ、命を吹き込む。

そうすれば、クレアは生き返る。

「く、ククク……バカか？てめえ。輪廻つてのは、記憶も全部まっさらになんだろうが！クレアの体に私の魂入れたところで、クレアが生き返るはずが……」

「生き返る」

妙に説得力のある声で、コトリが言った。

「記憶は体が覚えている。能力も、全部体が覚えている。記憶も性格も何もないまっさらな魂が記憶のある何か……つまり、死体に入ると、魂はその記憶に影響されて、体が覚えている記憶を元に思い出や性格を作り上げるの。この場合だと、殺される直前までのクレアが、生き返るってこと」

光が、一層強くなる。

「く……！くそ！てめえ、覚えてろ！絶対。絶対復讐してやる！覚えてろ！殺してやるからな！ぐ、ぐあああああああああああああ……！」

パタリと、シイナが倒れる。それと同時に、光の粒子が消える。魂の入れ替えが終わったのだ。

そこに残ったのは、呼吸はおろか魂の余韻すら残っていないシイナの死体。

それが、蘇生の代償。

「……クレア、起きて……」

コトリが、朝にするように優しく、囁く。

もうクレアは物言わぬ死体ではない。呼吸をして、しっかりと考え、そして誰よりも勇敢に戦えるだけの勇気を持った、かわいらしい女の子。

「……ここ、は地獄……？」

目ボケ眼で、クレアが言った。

「……おねえ……ちゃん？まさか、シイナに殺されたの？」

どうやらクレアはここがあの世だと思っているようだ。

「クレア、よく聞いて。あなたは一度、死にました」

「うん。分かってるよ、そんなこと……」

コトリは簡単な質問をして記憶に齟齬がないか確認する。

「ほかに、思い出せないことはない？」

「ないよ？どうしたの、コトリお姉ちゃん」

どうやらクレアはどうしてそんなことを訊くのか不思議でしょうがないらしい。

「……あなたは生き返りました。私が能力を使って、シイナさんの命を使って」

そう、厳かにコトリが告げると、クレアは目を見開いた。

「……すごい。コトリお姉ちゃん、そんなに強い能力持ってたんだ!？」

驚くのは、敵の命で生き返ったということよりも、そこらしい。

第27話　戦闘後

「……へえ、コトリお姉ちゃん的能力、『転生輪廻』っていうんだ」

クレアとコトリがシイナの死体を放ったまま、地面に直接座っている。

クレアは胡坐だが、コトリはちゃんとお嬢様座りである。

クレアは体こそ綺麗だが、コートは変わらず血と土で汚れており、洗濯の必要性を大いに感じさせている。

今までコトリはクレアが生き返った経緯を話していた。恐る恐る、慎重に。

けれど、自分が死んでまた生き返ったということを聞かされてもなんら普段通りなので、もし何かあったらどうしようと思っていたコトリは安心しながらも、クレアの質問に答えていた。

いつもならけして答えないような内容なのに、今はスラスラと口がすべる。

きつと、クレアを死なせてしまった罪悪感なのだろう、と見当をつけるコトリは会話に集中し始める。

「フムフム、命を与える能力、か……ずいぶん珍しい能力ね。私、生命をそのまま操る能力なんて初めて見た」

クレアは手帳を片手にいろいろ呻いている。

その手帳には『研究手帳』と書かれており、開いてあるページには『コトリ・ペンタグラムの能力『転生輪廻』についての考察』というタイトルがあり、びっしりと書き込まれている。

異常な速度で書かれる手帳は、次々にページを更新していく。

研究好きなクレアは、気になることがあるとすぐにこの研究手帳を開いて、考えを記していくのだ。

「……で、その能力の弱点は相手に触れなければ使えないこと、戦闘向きでないこと、ってところかしら」

そこまで書くと、クレアはいったん書く手を休め、コトリの方をむく。

「……すごい、ぴったり」

「でしょ？」

「本当にすごいね、クレアの推理力。将来探偵になれるんじゃない？」

そうコトリがほめるのも無理らしからぬことであった。

クレアはコトリの『能力の名称』のみで能力の弱点までを見抜いたのだから。

「そんなことないよ。ただ、名は体を表すつてよく言っし、それは単純に語彙能力の問題よ。弱点のことなら、簡単よ。まず、触れていなければならぬ、つてところは結果から推理したの」

「結果から？」

コトリの疑問に答えるかわりに、クレアは横たわるシイナの体に視線を向けた。

「私が生き返った時、シイナと私、そしてコトリお姉ちゃんの距離はとても近かった。で、シイナの手をコトリお姉ちゃんが触れたのを見て、触らないと使えない能力なんだな、つて見当をつけたの。んで、相手に触れないと使えない能力つて総じて戦闘向きじゃないから、あたりをつけていってみただけ。このくらいのことなら誰にだってできるよ」

「できるかなあ？私、あんまりそういうの得意じゃないから……」

コトリは悲しそうに呟く。

「人それぞれ、得意不得意あるから。私は戦闘は得意だけど、日常生活はあんまり得意じゃない」

「……それつて、得意な人いるのかなあ？」

日常生活が得意です、とは言わないだろう。

そうコトリは思ったのだが、どうやらクレアは違うようだ。

「いるよ。平和な世界にいる人はみんなそう。身に迫る危険なんかまるで警戒せずに、今がこの世の終わりだとしても言いたげに、面

白おかしく過ごしてる。……私はそんなのできない。

どんなに楽しくても、警戒心をとくことができない。ちょっとしたことで拳銃を握りそうになる。……相手が男ならとくにそうなの。私は……こんな平和な世界に合っていないのかもしれないね」

寂しそうに、クレアは言う。

さっきだってそうだ。シイナと戦っている間が一番充実していた気がする。

殺されたのに、楽しかったと思っているのだ。

「……クレア、それは合っていないんじゃないわ」

そうやって思考のつぼにはまっているクレアに、コトリが真剣な表情で言った。

「クレアが今そうやって悩むのは、変わろうとしているから。今まで戦い続けてきて、戦うことに馴れていただけ。こんどは平和に馴れるの。少しずつでいいから、馴れていくの。……きっと、クレアには簡単だよ?」

最後に天使のように微笑んで、コトリは言った。

「……コトリお姉ちゃん……」

クレアは、どこかつきものが落ちたような表情で姉の名前を呼ぶ。

「なあに?」

コトリも、優しげないいつものコトリに戻って、言う。

「ありがとう、コトリお姉ちゃん」
「どういたしまして。クレア」
二人を、平和で暖かな雰囲気包む。

第28話　過去

「……クレア、ごめん」

平和で暖かな雰囲気、リリーの声がぶち壊した。
座っている二人の横、シイナの死体の正面に、リリーがいつのまにかいた。
彼女には似つかわしくない、どこまでも重く、悲しげな声を発して。

「……リリー、お姉ちゃん？」

クレアがリリーを見てもそう言った。

リリーはいつも、元気にあふれていて、朗らかな女の子。黄銅色の瞳に、黄色の明るい髪。背が高校生なのにクレアほどしかないから、余計に幼く見えていた。

それが、今は全く違っていた。

あの陽気な雰囲気はどこへいったのか、重く寒々しい雰囲気が、彼女の周りにとりついていていた。

「クレア、ごめん。いまさらだけど、本当にごめん。わ、私、クレアがいじめられてるのを見ても、何にもしなかった。怖かったから。殺されるかも、って思っただけで体が動かなくなったんだ。ほ、本当よ、信じて……」

消え入るような懇願に、クレアは度肝を抜かれる。

リリーがこんなにも弱気になるのが、信じられなかったのだ。
大事な妹が殺されかけていたのに何もしなかった――
それが、リリーを極限まで追いつめていた。

コトリが能力を使い、生き返らせたことに気付かないほど、リリーは後悔の埒埒にはまっていた。

「許してくれなんては言わないけど、お願い、謝らせて……。私、瞬間移動ができるのに、しなかったの。ごめんクレア。本当にごめん、ごめんなさい……」

今にも消え入りそうな声で、リリーが言う。それはうわごとのように、本当にクレアに向かって言っているのかも、定かではない。

「……リリーお姉ちゃん」

「な、なに、クレア」

かけられた声が怒るような口調だったので、リリーは一段と怯えた表情をする。

「私がどうして死にかけても戦ったか、わかる？ 私はお姉ちゃん達には戦ってほしくなかったのよ。傷ついて欲しくなかった。だからお姉ちゃんが後ろにいてくれたおかげで、私は安心して戦えたの……だから、ごめんなんて言わないで。お願いだから、笑ってよリリーお姉ちゃんはそっちの方が似合ってるよ」

けれど、そんなクレアの言葉にリリーは一瞬あつけにとられた。

「え……？ お、怒ってないの？ 怨んでないの？ 私のせいで、その、クレアは死んじゃったんだよ？ それなのに、怨んでないの？」

「私が死んだのは私が弱かったから。……そんなに痛くなかったし、苦しくなかったから、怒ってないし、怨んでもないよ」

取り繕っているようではけしてない。本心からそう言っていることは、リリーにでもわかった。

「……そう、なんだ。なんだ、怨んでないのか。……ま、一応言っとくわ。ごめんね」

さつきとは違い、軽く、リリーはそう言った。

「うん。……そうだ、リリーお姉ちゃん。他の所に応援行かなくて大丈夫かな？ 私結構不安なんだけど……」

「え？ 大丈夫大丈夫。みんな強いから、きつと圧勝よ。知ってる？ この学校って、ちょっと前に近くの不良の溜まり場みたいな学校

とかなり大規模な抗争があったのよ」

ふと、そんな話をリリーは切り出した。

リリーやコトリたちはクレア達よりも先にこの世界で入っており、この街のことや、学校で起きた出来事をよく知っている。

……いつからこの世界にいるのかは、分からないが。

「その時に生徒会が仲裁に入ったのよ。私も駆り出されたんだけどね、それがもう仲裁と言う名の全面戦争。話し合いの場所に行ってみたら隊列をなした不良どもの群れで、話し合い一切なしで大喧嘩になってさあ」

少しだけ楽しそうに、リリーは続ける。クレアもコトリも、彼女の話に聞き入っている。

コトリもちろんその場所にいたのだが、初めて聞く話のように聞いている。

「で、私とコトリ、トレースの三人でそいつらと応戦したんだけど、トレースだけはもう格が違ったね！めちゃくちゃ綺麗に戦うんだから、ついみとれちゃってさ、あやうく釘バットくらいかけんだよなあ……」

「く、釘バット！？そんな原始的な武器使う不良^{ひと}、まだいるの？」
クレアが驚くように言った。

彼女の中の不良とは、パンチパーマで、背中には登り竜が描いてあって、基本武器はトカレフ……そんなどちらかと言えばヤクザのようなイメージである。

拳銃を使うのがデフォルトだと思っているのなら、釘バットは原始的にみえるだろう。

そもそも、いまだき釘バットを使う人間がどれくらいいるのか。

「あー、ええと、それ、今から5年ぐらい前のことだから」

さらりと、そんなことをリリーが言う。

「……5年まえ？」

「そ。私結構前からこの世界いるのよね。なんか居心地いいし。定住しちゃうおっかなびっくり考えるぐらいにはいいところよ」

定住とは、旅をやめてひとつの世界に住むことである。

不老の魔法がかかっている者は定住することを嫌うが、たまにリリーのように不老にして定住を望む者も少なからずいる。

「……へえ。ま、私も考えてみようかな」

「なにを？」

「この世界に定住するかどうか」

「……は？」

その答えがあまりに以外だったのか、リリーはそんな声をあげた。
「……何？鳩が豆鉄砲くらったような顔して。そんなに以外？まだ私不老じゃないし、もともと逃げてこの世界に来たわけだし、あんまり旅したい、って思わないのよね」

クレアが異世界移動をしたのは、クレアをいのように利用していた男から逃げるためであつた。だから異世界を移動したのはほんの成り行きでしかなく、旅に関しても興味がある以上の感慨を持っていない。

「お父さんと一緒に旅してたんでしょ？」

「3年だけね。その3年で何回も死にかけたわ。……ま、たいていが『イノベート』つながりだったけどね」

3年間の旅で、ほとんどの世界で『イノベート』と出逢ってきたクレア。今回みたいに『イノベーター』が出張ってくるようなことはなかったが、それでも死にかけたことにはかわりない。

「……旅にいい思い出があんまりないからか。……仕方ないっちゃ仕方ない、ね」

リリーはそれだけを言うと、もう何も言わなくなった。
クレアの人生だ。家族といえども他人にしか変わりはなく、人の人生に口出しするなど、あまりほめられたことではない。

「……まあ、気になることは気になるわね」
リリーはそう、遠い空を見て呟いた。

第29話　戦闘、琴乃若商店街の場合

—— 玻座真学校校庭での戦闘終了と同時刻、琴乃若商店街 ——

「ククク……クハハハハ！その程度か！まったくもって弱い！聞いていた噂以下じゃないか！」

琴乃若の商店街。ここはすでに戦場と化していた。悪魔の翼を背に生やし、宙に滞空しているシイナに、ルウ、トレース、サラが攻撃している。

ルウ達の攻撃は一度たりとも外れることはない。けれど、それが決定打になることもない。

生身の人間ならば何度も死んでいるはずなのに、シイナは倒れることなく宙にいる。落とすことすらできない。

「……っ！」

サラが歯噛みしながらもシイナを焼く。

常人ならば悲鳴を上げる間もなく焼失するほどの威力を持った火炎が、シイナの全身を包みこむ。

「ククク……クハハハハハ！それだけか！？もう火炎には馴れてしまったぞ？まだやるのか！？クハハハハハ！」

燃え盛る火の中で、シイナは不敵に笑う。

その笑い声がしばらくして途絶える。

が、すぐに全てが元通りになったシイナが変わらずにそこにいた。

「くっ……何よこいつ！ぜんぜん効いてない！」

「効いてるけど、すぐに回復するんだ！……トレース！あいつの不死性を排除して！」

双剣を携えたルウがトレースに命令する。

「了解。ご主人様マイマスター」

トレースはそう短く言うと、万能の秘宝としての能力を発揮する。

「シイナ・レイル・ジェイドよ。キミは吸血鬼ではない！」

その声は世界に響き、命令通りにシイナの体を吸血鬼ではないものに作りかえる。

「ククク……無駄だ、トレース・トレスクリスタル！私の能力は万能の道具なんかでは変わらないぞ！」

もう不老の吸血鬼ではなくなったというのに、不敵に笑うことをやめないシイナ。

「……なにを！キミなんかボクにかかれば！」

トレースは一気にシイナのいる上空に跳び上がると、大ぶりの双剣クロスレイピア十字架の双剣を振るつた。

「『クロスアーツ十字架の戦舞』一の剣、『クロススラッシュ十文字斬り』！」

名前の通りに縦、横と斬り裂き、シイナの体を四分割する。

血が吹き出、トレースにも返り血が浴びせられる。

もし、トレースの命令通りにシイナの体が変わっていたら、シイナが生き返ることはない。

「……終わったよ、ルウ」

トレースは地面に軽やかに着地すると、ルウの方を向いてそう言

った。

人殺しが嫌いなルウは苦い顔をしていたが、それでもトレースを責めることはなかった。

「ククク……どこがどう終わったのか……ぜひとも聞かせてくれるかな？」

「……！」

トレースは振り返る。

ルウもサラも、その光景を見て目を見張る。

シイナの体が、再構成されつつあったからだ。

「……君はなぜ、生き返れる？ トレースの能力に逆らえる存在なんて、あるわけが……」

「ククク……誰が逆らった？ 確かに私は吸血鬼ではなくなった。

しかし！ それは自分から望んでやったことなのだ！ 自分の意思で人間になった場合なら、私はまた再び吸血鬼になれる。トレースの命令は一度きりだったからな。世界を欺くのもたやすかったよ！ ククク……クハハハハハ！」

「……そんな……」

トレースは愕然となった。

命令が無効化されたわけではなかった。世界に命令を成し遂げたと誤認させられただけだった。

……つまり、トレースは命令の仕方を間違えたのだ。

『キミは吸血鬼ではない』

この命令は一過性のものでしかなく、一度吸血鬼でなくなれば、あとのことまでは命令されていないため、シイナは人間になったあとと吸血鬼になれたのだ。

自分が間違えたせいで……

トレースはひどく後悔していた。

普段から万能無限を名乗っておきながら、重要なところで、ミスばかりしている。

ルウの足を引っ張っているかもしれない、と思っただけで彼女の心はバラバラになりそうになる。

「る、ルウ……すまない……ぼ、ボクがミスったせいで……」

「何を言ってるんだ、トレース。僕は君が人殺しをしなくてよかったとさえ思っているんだ。悔むことはないよ」

ルウは優しく、微笑みながらそう言った。

「あ、ルウ……許して、くれるのか……？」

「許すも許さないもないって言ってるんだ、構わず目の前の敵に集中して」

最後にきつくそういうと、ルウはシイナに向き直り、二振りの細^{レイ}剣^{ピア}を構えなおす。

「私がやるわ！ちりも残さず、燃やしつくしてやる！不死鳥^{フェニックス}、力を貸しなさい！」

シイナに斬りかかろうとしたルウを、サラが止めた。

サラの背中には、恐ろしくも美しい、炎でできた翼が生えていた。

「私は燃やすだけが能じゃないの！こうやって、空も飛べる！」

その翼が一羽ばたきすると、サラの体は宙へと浮かんだ。

「覚悟しなさい、『イノベート』！」
サラは威嚇するように叫んだ。

第30話　戦いの目的

琴乃若商店街の上空に、翼をもつ人間二人が浮かんでいた。

片方は悪魔がもつような、黒々とした翼で、もう片方は炎でできた天使がもつような赤々しい翼だった。

悪魔の翼で滞空している方は、この世界を滅ぼすためにやってきた『イノベート』の『イノベーター』で、シイナ・レイル・ジェイドといった。

炎の翼で空を駆る方は、異世界と異世界を渡り歩き、永遠に近い時間を旅することのできる旅人の一人、サラ・イーストスカイといった。

サラはシイナをにらみ、シイナは不敵に笑っている。

地上ではルウがどうしたものかと悩みながら、ことの成り行きを見守っている。

その隣にいるトレースは道具としての矜持を取り戻し、ルウの命令にすぐにでも対応できるよう、彼の一拳一動を見ている。

そんなルウとトレースを背に、サラはシイナと対峙している。

「……あんたを塵一つ残さず燃やしたら、あんたは生き返れないのよね？」

「ククク……いきなりなんだ？ わかりきっていることだろう。私を殺したければ、最大火力でやることだな。たとえ一瞬でも気を抜いたら……私はそこからまた、蘇る。ククク……まるでゲームだな？ とてつもなく楽しいよ」

どこまでも不敵に、自分が死ぬかもしれないのに笑うシイナの顔はどこか作りものめいていて、人間味にかけていた。

「その言葉……後悔させてあげる！ 『フレアバルカン』！」

サラが翼を一羽撃きさせると、翼から無数の炎の塊が銃弾のようにシイナに向かう。

「……そろそろ、かな」

シイナは誰にも聞こえないようそうつぶやくと、軽く翼を動かした。

その動作だけで、シイナはサラの目の前にいた。炎の銃弾はすべて受けたのか、再生した服も体も穴だらけになっているが、シイナが怯むことはない。

「……………！！？」

それよりも、シイナに接近を許したサラの方が、動揺していた。

シイナの息がかかるような距離で、敵が文字通り目と鼻の先にいるというのにサラは何もしない。

いや、何もできなかったのだ。

シイナの体から発せられる、闇の波動とも言つべき黒き霧囲気に圧倒されて。

「ククク……………一時間だ。私とお前らと戦い始めてから、一時間……………。私の本当の目的を教えてやるう」

シイナはサラの耳元に顔をよせ、囁いた。

「私はな、時間稼ぎに戦ったんだ。ククク……………この街の随所に十キロのプラスチック爆弾を仕掛けさせるための時間をずっと稼いでいたんだ」

「……………！！！」

驚愕するサラをよそに、シイナはいったんそこで下がった。

「ククク……………クハハハハハハハハハハ！愚かだな！私の計画は今すぐにでも実行できる！この世界の根幹であるこの街は私の一言で爆破させられる！さあ、どうするルウ、トレース！」

試すように、シイナは高笑いする。ルウは一瞬戸惑いながら、けれど冷静にトレースに命じた。

「トレース。シイナの口をふさいで。……………穏便にね」

「了解！」

「シイナ、キミはしゃべれな」

「私が規定時間になっても何も言わなくても、爆発するよ？」

世界にシイナの口をふさぐよう命令しようとしたトレースを、シイナの絶望的な言葉が止めた。

「な、なんだと!？」

「念には念を、って言葉があるだろう？この世界を確実に壊せるように、たとえ私たちの誰かがしくじったとしても爆弾がすべてを破壊してくれる手筈になっている。そう、私たちをいくら倒しても、世界破壊の阻止にはつながらないわ。……ククク……本当に、お疲れ様。ククク……アハハハハハハ……」

不敵に、でもどこか悲しげにシイナは笑う。驚きで、ルウ達は二の句が継げない。

ふとそこで、サラが気付いた。

「……あんた達はどうするの？」

そのサラの言葉に、シイナの笑いがぴたりとやんだ。

「……言っている意味が……わからないんだけど？」

とぼけるように、シイナが言う。今まで余裕だったシイナに、初めて焦りが見えた。

「あなたたちも死ぬわよね、その計画じゃ。……まさか、自分の死まで織り込み済み？」

「……ククク……クハハハハハハハハ……。よく、気付いたね」

シイナの笑いが、不敵な笑いから自嘲するような笑みに変わった。

「私は使い捨てなの。不老不死で、永遠に死なないんだけど、私は……」

シイナはあきらめたのか、それともなにか思惑があるのか、誰にたのまれるでもなく語りだす。

「私はシイナ。優秀な『イノベーター』、シイナ・レイル・ジェイドの複製^{コピー}なの」

それが何を意味するか、なんてことはルウ達には理解できなかったが……

シイナには似合わない悲しい表情が、その意味を理解させた。

第31話　舞台裏

—— 琴乃若、どこかの路地裏 ——

男が一人、路地裏で暗躍していた。

目立たなくするためか黒服に身を包み、背を丸くして昼でも暗い路地裏をこそそと進んでいるが、そのいでたちはかえって目立っていた。

…… まあ、今この場では目立とうが目立たまいが、怪しむ人間などいないが。

なぜなら、今この世界の人間のほとんどが眠りにについているからであった。

そんなことを聞かされていないのか、男はこそそと行動し、そして適当な場所にあたりをつけると、しゃがみこんで四角い箱のようなものを地面においた。

これは世界を崩壊させる切り札、プラスチック爆弾である。彼の仲間も今頃、いろんなところに散らばって爆弾をしかけているはずである。

地面に置いたプラスチック爆弾に信管を取り付け、スイッチ一つで爆発するように仕掛ける。もちろんこのスイッチを押すのは男や男の仲間ではなく、今現在この世界の守り人と奮戦している『イノベーター』、シイナ・レイル・ジェイドの複製^{コピー}だ。

「……ふう。これで——」

「これで……なんだ？」

すべての作業を終え、一息つこうとした男の後ろから声がした。

「!!」

男はバツと後ろを振り返る。

すると、そこには男と同じくらい、いや男以上に黒く、怪しい少年がいた。

年のころは16ぐらいだろうか。黒い髪に、黒い瞳。彼は全身を覆うマントを着て悠然とそこに立っていた。

「君はだれだ？こんなところでなにをしている？なぜ起きているんだ？……『イノベート』か？」

少年に矢継ぎ早に訊かれても、男は答えなかった。意図的に無視したのではない。恐怖で答えることができなかったのだ。

その少年の後ろに、巨大な鎌を携えた青い髪をした少女がにらみを利かせているのを、男は見たからであった。

あまりにも美しく、そして即座に死を連想させるほど、その少女は禍々しかった。

「なあ、答えろよ。『イノベート』なんだな？そうだな？オーケー。排除してやろう。今の俺は『人の話を聞かずに話を進めるような性格』だからな。君の返答は求めちゃいないんだ。残念だったな。いや、残念でもないか？いや、どうかな？」

「リンク。殺していい？」

いろいろと悩むリンクと呼ばれた少年に、少女がサラリとそう言った。

その時の表情はどちらかといえば喜んでいそうな節さえあって、それが男をさらに恐怖のどん底に陥れる。

「だゝめ。俺はまだ訊きたいこといっぱいあるんだ。なあ、俺の質問に答えてくれるよな？答えるよな？答えるよ？この世界には何人できた？」

リンクの口元には、鋭い八重歯が二本。その後ろの少女——エリ

アが携えるのは、死神の鎌。

その二人が発するあまりの圧倒感に、そう強くない意思はあっさり
と折れ、情報を吐こうと口を開いた。

と、その瞬間。

プシッ

ひどく近くでその音が鳴ったのを、男は聞いた。

何の音だ？

そう不審に思いながら、許してもらえように口を開いて、情報
を――

「……君、誰にやられた？敵、つまり俺らの仲間にか？いや、そ
れはない。こんな方法で殺すようなやつ、俺の仲間にはいない、と

なると……君の仲間か？いや、そうだ。そうでなければおかしい。

……エリア、気をつける！」

しゃべろうとした男は、リンクのセリフに疑問符がいくつも付く。

……え？

何を、言っている？

「……おい、こいつまだ生きてるぞ。……楽にしてやる、少し待ってろ」

何のことだ？

おい、まてよ、なんで剣を俺に向ける？

おい、待てって、情報をやるから、見逃して――

そんな命乞いは、永遠に言葉になることはなかった。

どさり、と男の体が力を失うのを見届けると、リンクは珍しく気を張り詰めてあたりを見回す。

「エリア、気をつける。暗殺術を身に付けた敵の刺客だ。……来るぞ」

エリアが身をひるがえし、地面にしゃがみ込む。

その上の空間をヒュッ、と何かが通り抜けた。

「……そこ！」

リンクが虚空に手を伸ばし、目の前にいる何かをつかむ。

すると、今まで何もなかったリンクの目の前に、一人の少女が現れた。

その少女の髪は青色で、瞳は黒色だった。顔立ちもえら整っているが、自信のなさそうな表情が、彼女の印象を弱めていた。

彼女の、手術に使うような小さなナイフをもった右手はリンクの手に掴まれており、その切っ先は寸分たがわずリンクの喉笛に狙いをつけていた。

「……っ」

掴まれた、ということを知ると少女はおびえたように身をすくめるが、すぐに気を取り直し、リンクの首にナイフを突き込もうとする。

「……っ。君だな？この男の首を掻き切って殺したのは。仲間なんだろう？なぜ殺した？口封じか？そうなんだな。でも、無意味だ。俺は正直君ら『イノベート』に興味はない。あいつに訊いたのだから単なる確認だ。いいのか？そんな理由で仲間を殺しても？」

先ほどの男は、すっぱりと喉を切られて絶命していた。それをしたのがこの少女だと最初は気付かなかったが、エリアも一瞬反応しきれないほどの速さを彼女が有していることがわかった、すぐに理解した。

この少女はタダものではない、と。

「……リンク、こいつは私が殺すわ」

エリアは基本的に殺しは仕事でしかしたことがなく、仕事中的エリアはほとんど快樂殺人気に近い性格に豹変している。

そのため、今のように私怨で殺そうとすることは、例外的に珍しいことだった。

「……だめに決まってるんだろ」

リンクが真剣に、『自分本来の性格』でエリアに言う。

「エリア。お前ももうまう碌したのか？こいつは俺らの娘だぜ？」
その言葉に驚いたのは、なにもエリアだけではなかった。

第32話 シイナと桜

青い髪のシイナ・レイル・ジェイドはもと『イノベート』に肯定的ではなかった。

生まれた時からその組織にいて、その組織の教育（洗脳ともいう）を受けてきたから、今回のように使い捨てられることが分かっている。でも何も考えずに命令を執行することができた。

しかし……

裏切り者を殺し、やけに威圧感のある吸血鬼二人組にあつてから、シイナの中身は急速に変わりつつあった。

……え？

そう声を漏らしたのは、エリアと、リンクに手を掴まれたままの少女だった。

「……気付かねえのか？この青い髪、お前にそっくりだ。この瞳は、俺に似てる。……シイナとはまた違うけど、こいつはきっと、れっきとした俺達の娘だ」

その言葉に驚愕したのは、少女だけだった。エリアはもう気を取り直して、少女の観察に入って「ふむふむ、確かにね」とか言っている。

少女はかすかに震えながらも、なぜか必死になつて言う。

「な、なにを……いつてるの？わ、私は確かにシイナ・レイル・ジェイドだけど……あなたなんか、し、知らないわ。そもそも、私に親なんて……」

お前に親なんていない。シイナはそう言われ続けてきた。牢屋にいる時も、訓練の時も、実験台にされる時も、いつの時も。

「……シイナは俺の娘だ。今は『イノベート』に入らされて、元の面影はないけどな……」

ひどく悲しげに、リンクが言った。

リンクは知らないことだが、彼女、つまりこの世界に現れた4人

目のシイナは、少し違っていた。

彼女だけが、ほかのシイナと違って青い髪で、容姿も幾分か幼かったのだ。ほかのシイナは皆が皆まったく同じ容姿をしていた。

この時のリンクは、それがどんな意味を成すか、ということに気付きようがなかった。

「……あのな、お前は俺の娘だ。そうだろう？ いや、そうだ。お前は俺の娘だ。そうでなければ、敵だ。敵は殺す。殺されたくないかったら、俺の娘になれ。拒否権はない。久々に俺とエリア、シイナと3人で異界士やろうぜ？ いや、やらせてみせる。絶対にやらせるからな」

世界ごとに変えた性格に戻って、リンクはまくしたてる。

「え？ あ……ええつと……」

仮にも『イノベーター』たるものがなぜ、こんなにもおびえているのだろう……？

はたから見えていたエリアはそう思ったが、特に何かを言おうとはしなかった。この返答を街間違えば、リンクはためらいなくシイナを殺すだろう。けれど、エリアはそうなったとしても別に構わない。なぜなら彼女にとって娘とは、自分が腹を痛めて産んだ黒髪で黒い瞳のリンクの目つきとエリアの容姿を受け継いだ優しい吸血鬼、ただ一人であつたからだ。

自分の娘はこんな、青い髪で子供っぽい体つきで、怯えているような子ではけしてない。

「……その子を娘にするというの？」

たまらなくなって、エリアは訊いた。

もしかしたら、『イノベート』に入らされておかしくなってしまうたシイナの身代わりにでもするつもりなんじゃないかと疑い始めたのだ。

「悪いか？」

「あなたがその子をシイナの身代わりにする、というのなら悪いし、私も認めない」

きつぱりと、エリアは言い切った。

別にエリアはリンクに絶対服従というわけではないのだ。戦闘中や仕事中にはもちろん従うが、育児や家庭のことでは、エリアが譲るつもりは一切ない。

「身代わり？……シイナはもう、いないんだ。身代わりなんて立てても意味ねえよ。……そうだな、じゃあ、サクラ、ってのはどうだ？」

「え？」

完全においてけぼりにされて、シイナ——勝手にサクラになりつつある少女——は、目を瞬かせた。

「お前は、俺の娘になるよな？でも、シイナってのはお前のお姉ちゃんの名前なんだ。だから別に名前を決めなきゃいけない。で、俺はおもうんだが、サクラってのはどうだ？お前、今血に染まってるちょうど桜色だし」

シイナが浴びた男の返り血はもうすでに変色し、茶色になりつつあるが……これが桜の幹の色だと言われれば、そうかもしれないとうなずける。

「……わ、私、は……」

揺れ動く、シイナの心。

リンクもエリアも、結論を急かそうなどとは考えない。これは重要で重大なことなのだ。じっくりたっぷり、悩んで考えなければならぬ。

自分はみんなとどこか違ってて、『イノベート』ではいいことがなかった。それに、この人に敵対して勝てるつもりもない。……じゃあ、ここでこの人の娘になってみたらどうだろう？

シイナは徐々に、そう思うようになっていった。

そして、ふと、こんな想像が頭によぎる。

——ここはどこかの学校だ。

そこで、彼女は登校するのだ。かばんを持って、筆記用具と白紙の宿題を持って。

クラスで一人はいるまじめな人に、彼女はこう言う。

『ねえ、宿題見せてよ!』

そのまじめな人は、しぶしぶながらも、彼女にノートを差し出す

そんな、どこにでもある風景を想像した。

そしてその想像が、契機になった。

シイナの中にあつた『イノベート』に関する呪縛ともいえる刷り込みが、嘘のように消えていく。

しがらみが消え、楽しい未来、明るい希望を示された。

「……私の名前は、サクラ。サクラ・レイル・ジェイドです」

その結果、彼女はそう、名乗った。

それを、リンクは指を振って否定した。

一瞬不安になるが、サクラは次のリンクの言葉を聞いて、さらに笑顔になった。

「ちっちっち。お前の名前はサクラ・フラウ・ジェイドだ。サクラは桜、フラウは花。……お前は今後、サクラ・フラウ・ジェイド。そう名乗れ」

人知れず街を守った吸血鬼は、その報酬に大事な家族を一人、手に入れた。

第33話『シイナ』の終わり

——異端のシイナがサクラになるころ、同時刻、琴乃若商店街

サラはいったん地上に降り、ルウの隣に駆け寄った。シイナは宙に滞空しながら独白を続ける。ルウも、トレースも、そして『イノベート』を憎むサラさえもが、シイナの悲痛な声に耳を傾け、真剣に聞いていた。

「私のオリジナル、『シイナ・レイル・ジェイド』は、とても優秀な『イノベーター』だった。単身で任務にあたっても、片手間で世界を滅ばしてくるような、とてつもない力を持った吸血鬼だったの。彼女がいれば全世界の崩壊も夢じゃない……そう思わせるだけの力が、彼女にはあった。

……でも、『イノベート』はそれだけでは我慢できなくなった。異世界を渡っていて、いろんな情報が耳にはいつてくるあなたたちなら、聞いたことあるでしょう？

『『イノベート』は、圧倒的に人手不足だ』って」

『イノベート』の人手不足は、異世界を渡る旅人達の中でも有名な噂話であった。

膨大な数の世界を滅ぼそうとするくせに、圧倒的に人手がたりない——
それはある意味では笑い話にもならないくらい聞きなれた噂であった。

「……事実、そうなの。だからかの有名な異界士の娘、シイナ・

レイル・ジェイドをだまして、洗脳して、心を都合のいいよう作り変えて……強力な『イノベーター』にしたの」

サラだけが、かの有名な異界士の娘、のところで驚いた。

「……え？リンクとエリアの間に子供って出来てたっけ？」

サラはそう小声でルウに耳打ちするが、

「……え？なにを言ってるんだい、サラ。リンクとエリアは夫婦だろう？結婚したらコウノトリが子供を運んでくるのは当然じゃないか」

ルウはまた的外れな訂正をする。

「……そう」

なれたものなのか、サラもあっさりと流し、再びシイナの方に向き直る。。

「あなた達は……知ってる？『イノベーター』って、強制的に『イノベート』に入らせられた人間に付けられる役職なのよ？」

これには、3人ともが驚いた。

「『イノベート』が人手不足なのは、異常なまでの強い能力を求めているから。世界を滅ぼせる能力を持つ人間なんて、そうそういないのよ。……だから、弱い能力や、ちよつとした弱点があると、それだけで『イノベート』には必要ない、と採用をやめるの。そんな『イノベート』が何をしてでも手に入れたい人材……それが彼ら、強い能力を貪欲に求め、弱い能力には見向きもしない。それが、『イノベート』の採用方針。」

「『『イノベーター』は殊更能力の強い者に与えられる役職である』そんな噂が流れるのは、仕方ないことよね。……半分以上、事実なんだし。」

そして、私たち『シイナ』は特に『量産可能な強力な捨て駒イノベーター』として今も大量に生産されているわ。

……私たち、心臓も動いていれば斬れば血もでるれっきとした生物なのにね、機械みたいに扱われるの。今もきつと、何百という世界でこの世界と同じ作戦が行われている。爆弾や危険な兵器を世界

中に仕掛けて、私たち『シイナ』が起爆スイッチを押す。

いくら不老不死でも、世界の崩壊に巻き込まれたら消滅するに決まってるわ。だから、本当に使い捨てなの」

しゃべり方さえもがしおらしくなって、シイナは続ける。

サラは痛ましそうにシイナを見つめる。

「……私、この作戦の終了と同時に死ぬの。だから、せめてあなた達に勝って、異世界に逃れようって、思ったの。……でももう、諦めたわ」

そこで、シイナはサラを見る。

シイナの表情は笑っていたが、どうみても悲しそうで、まるで泣いているかのようなだった。

「死ぬのなら、『イノベート』らしく、死んでやる。あんたたち『ペンタグラム』にせめて傷一つでもつけて、姉妹たちへ土産話にするわ！……さあ、勝負だ！」

涙ながらに咆哮して、サラに突進する。

命をかけた、最後の一撃。

その速さは常人にならとても見抜けないようなものだったが、不^{フエ}死鳥^{ニックス}の力を借りているサラには、とてもゆっくりに見えた。

「……シイナ……ごめん」

突きだしてきた右の爪を流れるような動きでかわし、その手をつかむ。

サラが謝ったのは、同情か、それとも憐憫か。

「……フェニックス。骨の髄まで、燃やしなさい」

そうサラがつぶやくと。

炎はシイナの腕から這うように現れ、瞬きする時間のうちに全身に回り、骨の中にまで侵入し、燃やす。燃やしつくす。

その速度はシイナの突進とは比にならないほど速く。

ボツ。

と、聞きようによつてはあまりにも拍子抜けする音とともに、シイナは完全に焼滅^{しょうめつ}した。

「……ごめんね、シイナ。私はそれでも、あなたを殺さなきゃいけないの」

サラは感情を押し殺した声で、そういった。
戦いは、終わった。

しかし、なんともいえない不快感が、サラの胸中に残った。

「……ルウ。帰ろう」

悲しげに、サラは言う。

「……うん。そうだね」

ルウも苦い顔をして、そう言った。

彼はすぐさまトレースに自分たちを学校へ転送するよう指示した。
トレースはその命を実行した。

ルウ、サラ、トレースの3人が光に包まれ、ひときわ大きく輝いたかと思うと……

次の瞬間、琴乃若商店街には誰もいなくなった。

第34話　戦うよりもつらいこと

—— 悲しき決着と同時刻、柊、帝家、庭園 ——

その空間で、戦闘はまだ行われていなかった。

この世界の有力な権力者、柊と帝、両家合同の庭で、ミリアとタクトはシイナと向かい合い、無言の応酬を続けていた。

この庭はそうとうな広さがあるが、芝生の整備はきっちりとなされている。

とところどころに生えている樹木はそのどれもが有名な庭師によって手がけられたもので、庭の美しさを際立たせていた。

そんな統制のとれた庭の中、薄着のミリアだけがこの整頓された庭に唯一ある不自然なものである。

両者の間は5メートル。戦闘が始まれば、この程度の距離などあってないようなものだ。

「……なぜ……お前たちは攻撃してこない？」

ミリア達よりさらにに不自然な存在であるシイナが、ミリアたちに訊いた。

「私は『未来視』のミリア。……だから、もし攻撃した場合の未来も見えているわ。そして、私がこう発言した時の未来もね」

ミリアは、十年以内のすべての未来を見通すことができる。

しかし、彼女はこの能力を戦闘以外ではあまり使おうとしない。

未来とは定まっていることなく、刻一刻と変化する。

たとえばもし明日死ぬ『誰か』がいたとして、ミリアがそれを『誰か』に伝たら死なくなる未来が見える可能性もあるのだ。そんな変わり移ろい、とどまることを知らない未来は、ミリアの神経を大幅に削っていく。

普通の人間は現在しか見えていないが、それでも生きるのに精いつばいなのだ。それに加えて未来などという変化し続けるものを見続けるということは、常人以上に彼女の脳と精神を傷つけ、緩やかな死に誘っていく。

だから、よっぽどのがないかぎり、ミリアは未来を見ない。しかし、今は戦闘中なのだ。多少の無理でもしないと、非力なミリアは生き残れない。

だからミリアは今現在、自身の限界を感じていても未来を見ることをやめなかった。

ミリアがあまりしゃべらないのは、それをした時に変わる未来を見るダメージをすこしでも少なくするためだった。

「……私はあなたのすべてを理解しているわ。たとえば、あなたが時間稼ぎにここにいることも、使い捨てのクローンだってこともそして……あなたは本当は戦いたくなんかない、ってことも」

その言葉には、隣にいたタクトはもちろん、シイナまでもが驚いた。

「……なぜ、お前がそれを？それは『イノベート』の人間でなければ知らないことだぞ？」

戦いたくない、というところをわざとぼかして、シイナは訊いた。「未来とは現在の延長でしかないの。そして、未来が見えるということは、現在が見えるということと同じ。今どうすればあなたと事を交えずに済むか……それがわかるから、私はこうやってここにいるの」

そろそろ疲労が隠せなくなってきたのか、ミリアは荒い息をつき始めた。

「いい、よく訊いて。商店街に行ったシイナも、学校に行ったシ

イナも、路地裏で暗躍者達を監視、および保護をしていたシイナも、みんな死んだわ。今残ってるのはあなただけよ」

この時、ミリアの脳裏に浮かぶ未来は、父親——ルウの旧友、リンク・ソル・ジェイドが、青い髪の幼いイメージを持った女の子の肩に手を置いて、『これが今回の件で俺にたてついてきたシイナだったやつだ。今は俺の娘、サクラ・フラウ・ジェイドだがな』とミリア本人を含めた家族全員に紹介しているシーンだったのだが、それを直接言ってしまうって取り返しのないことになる未来が見えたので、その部分だけ嘘をついた。

「ねえ、もうやめましょう？ここで戦っても、世界は滅ばない。無駄死によ？私も戦うつもりなんてないから、ねえ、もうやめて——」

そう言って手を伸ばしたミリアを、シイナはにらみつけた。

「ふざけないで！私はもうどうしようもないんだ！『イノベート』に作られてから教えられ続けた作戦は意味をなさず！そして仲間はみんな死んで！のこのこ帰ったところで『不良品』扱いで『青髪』とおんなじような目に遭う！そして、この上戦うのをやめる！？

やめたくても、戦いたくなくても戦うしかないんだよ！お前ら『ペンタグラム』の誰か一人でも殺さなきゃ、私の存在はこれから先『イノベート』で否定され続けるんだ！そんなのはいやだ！『青髪』みたいなことにはなりたくないんだ！」

必死になって言うが、それでもほかのシイナのように、突撃したり、攻撃したりはしない。

『イノベート』ではシイナたちには戦うことこそが使命だと『教育』される。『イノベート』に従っていれば幸福で、死ねば天国へいける。従わなければ不幸になり、地獄に堕ちる。

そうやってシイナ達は言われ続け、教えられ続けてきた。

そんな、子供のころに刷り込まれた価値観とはそう簡単に変わることがなく、意思や行動、果ては人格など絶対的な支配力を持つ。そして、その価値観に従ってほかのシイナ達は行動し、クレアやル

ウ達と戦い、死んでいった。

しかし——このシイナは、違った。

使命と言われ、戦って死ぬことこそが最高の死に方だと教え込まれても——

このシイナは、戦うことを拒否した。拒否したけれど、その意思を実行に移せないでいた。

しかし、それが実行できないのも彼女が『イノベート』であるから。

そして——そんなことは、ミリアはもうとっくに見ていた。

だから、さっきの血を吐くような独白だってもうすでに聞いていたし、そうなるように誘導した。

けれど、一度聞いたことだからと言って、ミリアの胸の痛みが消えることはなかった。

それはまるで、自分のようだった。

刷り込まれ、その考えに縛られて、身動きができなくなる。

そんなのは、間違っていると気付いていても行動に移せない。この考えこそが間違っているのだと、自分を自分で否定することの苦痛。

それはすべて、ミリアが直に体験したことであった。体験し、悩み、迷い、何もできなくなった。

しかし、ミリアは今はその思考から解放されている。

解放されたきっかけは、ほんの、些細なこと。本当に簡単なこと。だから、自分も、それに倣った。

「私が助けてあげる。私が守ってあげる。」

——だから、私の娘にならない？」

そう、ミリアを救ったルウ・ペンタグラムのように、ミリアはシ
イナを救おうとしているのだった。

第35話　危機回避

「ねえ、私の娘にならない？」

その問いに、一瞬シイナの中の時間は止まった。

完全に思考を停止させ、そして数秒。

「……は？」

シイナが言えたのはそれだけだった。

娘になる、ということの意味が理解できなかったのだ。

シイナに『家族』という概念は、ない。

『イノベート』が彼女達に余計な仲間意識を持たせないため、意図的に知らせなかったのだ。

娘の意味はわからない。

しかし。

ミリアが自分を救おうとしてくれていることを、シイナは十分に理解できた。

「……な、なんだよ、それ？」

もし、ミリア以外の人間だったらこの質問の意味を履き違えたかもしれない。

なぜなら普通の人間にとって『家族』という言葉や『両親』『娘』『息子』という言葉はあって当然で、あることを疑わない。

だから、シイナが『娘』とは何を意味することなのかと訊いていることは、絶対にわからない。

「娘っていうのはね、私と一緒に暮らして、私と一緒にすごして、私と一緒に学校いって、そうやって、『一緒』の時間を増やして、お互いのことをわかりあって、そして新しいことを見つけていくためのものよ。何も知らなくていい。何もわからなくていい。これから私と一緒に、家族と一緒に学んで、知って、わかっていけばいいことなのよ」

「……一緒に、過ごす……それが……家族？」

シイナはまるで子供のように訊く。

「ええ。それが家族よ。……もう一度訊くわ。」

——ねえ、私の娘にならない？」

シイナは、絶句した。

自分の知らない価値観を、自分の知らない何かを、家族になれば知れる？

私の中にあるこの罪悪感は、薄れてくれるのか？

それは興味。

知性をもった生物なら誰もが抱く原始的な感情。

もし、家族になったらどうなるのだろうか？

『イノベート』に帰らなくても生きていけるのだろうか？

ミリアと暮らしても、幸せになれるのだろうか？

これで、助かるのだろうか？

疑問がどんどん膨れあがっていく。けれど、不思議なことにミリアと『家族』になることに対する否定的な言葉は出てこなかった。だから、シイナは差しのべられた手を伸ばして、ミリアの手を握る。

そして、恥ずかしがりながら、それでも勇気をだして言う。

「……………よろしく願い、します……………」

この瞬間。

琴乃若に侵入してきたシイナとの戦闘はすべて終結し、しかけられていた爆弾はすべて、リンクとエリア、そして娘のサクラによって取り除かれた。

戦闘と危険が去ったのち、トレースの魔法は自動的に解除され、琴乃若で眠りについていた人々は目を覚ましはじめる。

目を覚まし、そして立ち上がりしばらくしてやっと、人々は意識

を覚醒させる。

眠っていた、という事実も忘れていたためかすかな驚きはあるものの、それは『あれ、ちょっとぼーっとしてたかなあ?』以上のものはなく、いつも通りに時間は過ぎる。

いつの間にか過ぎていた時間にも大して気に留めることもなく、ただ、普段通りに。

琴乃若全土に危険が迫っていたことなどかけらも知らずに、人々は生活を続ける。

琴乃若の危機は去った。

第36話　小さな疑問

私立^{はりま}玻璃座真学校

「——て」

声が……聞こえる……

「——きて」

私を呼ぶ、声が聞こえる。

「ーヤ、起きて」

この声は、クレアのだ。

優しくて、でもとても不思議な、私の友達。

「沙耶、起きて」

私は、目覚めた。

「……沙耶、起きた？」

玻座真学校、保健室。白一色の部屋のベッドで眠らされていた沙耶の顔をのぞき込みながら、クレアが言う。

「……ふえ？」

沙耶が目を覚ますと、自分を覗き込むクレアの顔があつたのだ、驚くのも無理はない。

「……え？ここ、保健室？……今、昼休み、よね……？」

沙耶がおっかなびつくりクレアに訊いた。

「沙耶、もう放課後よ。ずいぶん寝ていたのよ？昼休みにいきなり倒れられたからびつくりしちゃってさ。大慌てで保健室に運んできたのよ。……ねえ、最近寝不足なんじゃない？夜更かしすぎたの？」

沙耶は未だ眠気がさめきらない頭で少しづつだが理解し始める。

「……えっと、つまり私は気絶するように眠ったってこと？」

「そうよ。ほんとおどろいたんだから。あんまり夜更かしすぎたらだめよ？」

「あ、うん……」

沙耶は夜更かしなど身に覚えがないのだが、眠ったという事実がある手前、言うに言えない。

ふと、クレアの体を沙耶は見回し、あることに気付いた。

「……あれ？クレア、ちょっと服汚れてない？ところどころ黒ずんでるよ？」

クレア愛用のコートに汚れがあつたのだ。

ところどころが濡れたように黒ずんで、シミのように固まっているようにも見える。このとき沙耶が背中に回れば、もっと大きなシミが見えたことだろう。

ほんの軽い気持ちで言った沙耶だったが、言われたクレアは気がでない。

「……え？そ、そうかな？私、普通だと思うけど……？」

必死になってごまかそうとしているのがばればれたが、沙耶

にはクレアがどうして汚れを隠そうとしているのかわからない。

あ、もしかしてお茶こぼしちゃったとか？

そんな推測を否定する材料が今のクレアにはなかった。

だから沙耶はそれだと確信し、フォローするように言った。

「大丈夫だよ。それぐらいの汚れ、私気にしないから」

「……汚れ？……ああ、うん！汚れ！ちよっとコーヒーこぼしちゃって！」

「そうなんだ。私もよくやっちゃって、いっつもお母さんにおこられるの」

まあ、クレアの汚れは本当は血であり、大量の血を見たことがある人間ならばそれが血が固まってできた汚れだとわかるのだが、致死量に至る出血など普通の小学4年生である沙耶が見たことがあるはずもない。

そのおかげで、クレアは事なきを得た。

「あ、そうだ。一人で帰れる？私、これから生徒会あるから一緒に帰れないんだけど……」

「あ、いいよクレア。生徒会の方を優先してよ。私も子供じゃないんだから一人で帰れるって」

大してさびしそうにはせずに沙耶は言った。

本当はさびしい。でも、生徒会じゃあ仕方ないんだ。

……あれ？なんで仕方ないんだろう？

ふと、沙耶はそんなことを思った。

しかしすぐにその思いは霧散して、さらにそれを振り払うように勢いよくベッドから降りた。

「……っと。じゃあね、クレア」

「うん。……また明日」

「また明日」

沙耶はそう言って保健室を出る。

早く明日にならないかな。

沙耶は子供心にそう思った。その思いはさつきとは違い、消えることはなかった。

第37話　戦いが終わって

—— 玻座真学校、生徒会室 ——

保健室で沙耶を見送ったあと、クレアはすぐに生徒会室へと向かった。

—— みんな、無事かな？

それを一刻でも早く確認したくて、クレアは足を速める。

廊下を進み、生徒会室の荘厳で無駄に大きな扉に辿りついた。

—— お願い、誰もいなくなっていますように——

もし、誰か一人でもこの世からいなくなっていたらどうしよう。死んでしまっていたら、どうしよう？

駆け巡るいやな想像を頭を振って払う。

—— 大丈夫。きっと、みんないる。

そう確信すると、クレアは少し背伸びして、扉のノブに手をかける。

重厚な扉の開く音とともに、クレアは生徒会室に入った。

「やあ、クレア。生還おめでとう」

そつ皮肉に言ったのは、白い髪のトレース。

「お帰り、クレア」

そう優しくほほ笑んだのは、ルウ。

「疲れたでしょ？もう休んでもいいのよ？」

そう気遣ってくれるのは、サラ。

「……お父さん、お母さん。……ただいま」

そう言えることが何よりうれしい。

ただいま。その一言を言えることがこんなにも嬉しいことだったなんて、気付かなかった。

「……こ、こんにち、は……」

「……だれ？」

気弱にクレアに話しかけたのは、青い髪の少女。ルウやサラ達よりも一回り小さくて、とても弱そうな印象の女の子。

「わ、わた、わたしは、しい……じゃなかった、サクラ、フラウ

……ジエイド、です。よろしく願います、クレア……さん」

そう言っておそろおそろ手を差し伸べてきたサクラに、クレアは握手した。

「よろしく。私はクレア。……って、なんで知ってるの？」

「あ、あの……りん、じゃなかった、お父さんが、その、あなたのこと言っていたから……」

「人づての話でよく私だってわかったわね？」

クレアがそう訊くとサクラは、

「え、あの……『生徒会で唯一の小学生だ』っていったから……

……わかりました」

えへへ、と恥ずかしそうにはにかんで答えた。

それはともかくこの人本当にだれなんだろう？とクレアが疑問に思った時だ。

「クレア。サクラはさつき俺の娘にした元『シイナ』だ」

そう言ったのは、全身を黒マントで包んだ黒ずくめの少年、リンクだった。

「あ、あの時の変態！なんでこんなところに！」

クレアは叫びながら、サクラをかばうように前に出て、スタンガ

ンを取り出して空中放電して威嚇する。リンクはそれにまったく怯えずに、景気よく笑った。

「ハハハハハハハ！さすがだな、クレア！迷わず俺に向けてくるか！サクラ、よかったな！クレアはお前を恨んでないんだってさ！」

「な、なに言ってるのよ！なんで私が見ず知らずのサクラに武器向けなきゃいけないのよ！」

リンクが何を言ってるのか理解できずに、クレアは叫ぶ。いきなり生徒会室に現れた闖入者^{ちんこつしゃ}に驚くと同時に、なぜ誰も言わないのだろうと不安になる。そして、そんなクレアにおかまいなしに、衝撃的な事実をリンクは言った。

「いいか？こいつはサクラ。元『イノベーター』のシイナ・レイル・ジェイドだ」

「！？」

リンクが誰だかわからないまま、サクラがシイナだと告げられたクレアは絶句して、声もでない。

「……う、嘘。なんでこんなところに『イノベーター』が……」

「わ、私、もう『イノベート』じゃない……です。足抜け……しました」

クレアに疑いの目を向けられる前に、サクラはそう弁解した。

「……そう、なんだ。……うん、サクラはもういいわ。」

問題はあんたよ！誰よあんた！いい加減名乗りなさい！」

クレアはなぜルウ達がおとなしく静観しているのが不思議だった。親しい間柄なのだろうか？と一瞬思ったが、そうなれば挨拶もなしというのはおかしいのではないだろうか。

なんてことをクレアが考えているうちに、リンクは堂々と名乗りあげた。

「ん？俺か？俺はリンク・ソル・ジェイド。弱点という弱点を克服し、不老不死の体を持ち、伝説ともいわれ、世界によってはおめられることも多々あるという……吸血鬼のうちの一人だ」

「きゅ、吸血鬼！？そんなものが実在するはずが……」

「は？異世界人＋特殊能力持ち＋高校生の両親＋60人近い兄弟姉妹のお前にだけは言われたくねえ。お前、俺よりよっぽどファンタジーの世界の住人じゃねえか。まあ、『純粹無垢で危なっかしくて家族が心の支えで弱々しいイメージの清純派ヒロイン』のナリして性格どす黒いし、言動こそおとなしいが言ってることは物騒だから、そういう少女小説には出れそうにねえがな。つつかお前こんなことじゃヒロイン張っていけねえぜ？」

痛いところをグサグサと刺され、クレアはたじろぐ。

そこに、今まで黙って見ていたコトリが、クレアの変わりに反論した。

「いいえ、クレアは今のままでも十分ヒロインになれます！あなたは知らないだけで、ちゃんと『萌え要素』はあるんです！」

……それはフォローになっっているのか、となぜ誰も突っ込まないのかがクレアには不思議だった。

てか、『モエヨウソ』ってなに？燃えるのはお母さんじゃないの？漢字が違う、とそばで見ていたララは思ったが、口には出さずにいた。

大事な妹がオタクの道を歩み始めたら大変だからだ。

アニメ・マンガに夢中になるのはコトリだけで十分だ。クレアにはもっと教養のある……

などなど、一端のお姉ちゃんらしく心配するララをよそに、コトリはリンクにその知識を全開していた。

「いいですか、クレアはまず起きるところからして萌えるのです！起きてすぐの寝ぼけ眼で普段みせない年相応の純粹さで『……おねえ……ちゃん？』とかやられてみなさいよ！一発でおちるから！そして、クレアが寝ている姿はもうそれはそれは食べちゃいたくなるぐらいかわいいの！わかった？これだけあれば、ヒロインはやっていける！素材がいいし、なにより根が素直！それもポイント高い！」

「……なあ、それ、ほとんどクレアの意識が不確かな時、だよな？ 普段はどうなんだ、普段は」

「う……」

そう指摘されて言葉に詰まるのもどうかと思うが、クレアはそんなことよりも、コトリに今後どうやって寝室に入られないようにするか一生懸命考えているところだった。

ちなみに、『ヒロイン』だとか、『萌え要素』だとかの特殊な単語の意味は不明のままなため、会話の意味がほとんど理解できなかったクレアであった。

「クレア！ な〜におちこんでんの？ そりゃあの二人はひどい言い草だけど、クレアのことを嫌いなわけじゃないよ？」

考えこむクレアに、元気になったリリーがお姉ちゃんらしく訊いた。

「あ、リリーお姉ちゃん。私、別に落ち込んでなんかいないよ。意味がわからないからちよつと怖いかな、とは思っけど」

何を言われているのかとても興味があるのだが、コトリ達の話の内容は一朝一夕でわかるようなものではない、ということは肌で感じた。

「ま、わからなくても大丈夫！ 悪口は言ってないし、どっちかというと『どれだけクレアがかわいいか』ってことを話してるだけだから」

「え……」

それはそれで怖いものがある、とはコトリも近くにいるため言えなかったが、それでも少しだけクレアはコトリから距離を保つように2、3歩離れた。

「……あ、そういえばミリアお姉ちゃんは？」

できるだけコトリ達の言い合いを耳にいれないようにするため、ふとした話題をリリーに振る。

「私は知らないよ。……まあ、すぐに来ると思うから、ゆっくり待つところ！ 」

「うん、そうだね、リリーお姉ちゃん」

そう言って納得したクレアを、サクラは物珍しそうに見ていた。

「ん、なにサクラ？」

その視線に気づいたクレアは声をかけるが、

「……な、なんでも、ありません」

と、会話を断ち切るようにサクラは答えた。

「……ま、いいけど」

クレアも特に気にはしない。

戦闘が終わり、平和な時が、過ぎていく。

第38話　平和な言い合い

「いいのかい？止めなくても」

トレースは傍らにいる自分の主人、ルウに友達が話しかけるような気軽さで言った。

「別に、喧嘩しているわけじゃないんだから、止めることはないと思うけど」

ルウもそれを咎めようとはしない。ルウにとってトレースは道具だが、別にかしずいてほしいわけではない。そんなことした日にはサラに怒られる。

それだけ、というわけではないがルウはトレースに敬語は禁止しているのだ。ですますを語尾にに付けない方が早く命令が伝わる、というのが主な理由だ。

「しかし……コトリにはあんな趣味があつたのか。ボクはつゆ知らなかったよ。……ルウ、キミは？」

「ん、知ってたよ。新しいポスターとか買ったら真っ先に僕に見せてくれるからね」

「……ふむ、特に不審は抱いていないようだが……娘がそんな趣味を持つて残念ではないのか？たいていの親は子供がオタクになるのを止めるというが？」

特に、この琴乃若ではそれが顕著だった。未だこの世界の大人達はそう言ったアニメ、マンガに関心がなく、それらは子供の害になる——そう言った頑固な人間が多い。現に、この世界の電気街は某東京の某電気街のように進化していない。

その事実を、ルウは知っていたし、ルウもそちらに精通しているというわけではない。けれど、彼は自信を持って、こう答えた。

「僕は別に止めようとは思わないね。人を傷つける危険な趣味、というわけではないんだから、好きなことくらい好きにさせてあげるさ。アニメ、マンガ、大いに結構。ただ、節度さえ守ってくれれ

ばね」

「……なんというか、数万年前より父親ぶりが板についてきたな。昔はもつとおどおどしていて、何かあればボクに頼ってくれたのに……昔はよかった」

数万年前……それは最初の娘、ミリアの時のことだ。

精神的にもまだまだ未熟で、子供一人を守る実力も経済力も（それは今もあるとは言えないが）なかったのに引き取ってしまったミリア。

彼女を育てるのには、万能の秘宝、トレースの力が絶対に必要だったのだ。

食べるものがない、と言ってはトレースに泣きつき、着るものがない、と言ってはトレースに泣きつき……と、とにかくトレースに依存しまくった。

過去の年数が桁違いなのはいつものことだが。今回はさらに昔のことだ。

サラが生まれてくるよりも、リンク達と会おうよりもずっと前の話である。これを知っているのは当人たちだけだ。

「……僕はあの時、弱かったのさ。よくミリアを育てられたな、って今では本気で不思議に思ってるよ。きっと、君がいてくれたからだね」

そのねぎらいの言葉に、トレースは顔を真っ赤にして、

「……！べ、別に、キミに尽くすのは当たり前だ！ボクはキミの道具で、奴隷で、そしてボクはキミのことが好きなのだからな！」

照れながらも、そう言った。

「うん、わかってるよ」

告白をされたというのに淡白な反応しかないルウだが、それをトレースが咎めることはない。

トレースから告白されたのは、一度や二度ではきかないのだ。トレースは事あるごとにルウへの想いを口にしている。そのため、最初（この時ルウは名実ともに十代後半）こそどぎまぎしたものの、

しだいに慣れ、今ではそれは『おはよう』と同等のあいさつとなっている。

「……ねえ、あんたらつてき、つくづくどういう関係なの？」

その会話を最初から聞いていたサラはついに訊いた。

サラはルウのことが好きだ。しかし、それを伝えようとは思っていない。伝えて、今の『仲間』という関係が崩れてしまうのが怖いのだ。

しかしそれでも、やっぱり好きな人のことは気になる。戦闘中も妙に親密な二人を怪しむのは当然、といったところだろう。

「それからはボクが説明しよう。一度言っただと思うが、ボクはルウの奴隷で、道具で、そしてルウを愛する万能無限の秘宝だ」

ルウがこのことを説明するとどうしてもルウが鬼畜野郎に見えてしまうので、説明の時は必ずトレースがすることになっている。

まあ、誰が言おうがサラのこめかみが震えるのには変わらないが。

「あ、愛する？ 万能無限？……はっ、シイナとの戦闘で一番役に立たない万能無限ですか、それはそれはすごいことですねえ！」

「ボクはルウに能力のほとんどを封印するよう言われてるんだ。

ルウの命令さえあれば、あんなやつ一瞬だ。息をつかせる暇もなくこの世から存在をなかったことにしてやれるとも」

皮肉るサラに真っ向勝負のトレース。

「はあ！？ 何よ、ルウ、ルウ、ルウって！ あんたルウの言葉がなかったら何にもできない役立たずなの！？ 人形じゃないんだから、ちよつとは自分で考えなさいよ！」

「ボクは人形で、道具で、奴隷なんだ。考えるのは部下や仲間、家族がやればいい。ボクがすることは盲目的にルウを愛し、ただルウの言葉のみに存在理由を求めて従うことさ」

サラは知らないことだが、トレースはこのスタンスをルウに仕えてからずっと崩さずにいる。どんな無理難題でも一度として、トレースが命令を無視したことはない。

「こ、この……！ あんた人間としての尊厳はないの！？ 好きなん

でしょ!？」

「好きだとも。それを口にもした。しかし応えてもらう必要などない」

「なんですって？」

「ボクは知ってもらうだけでいい。応えてもらうなど、してもらう必要がない。好きなんだから、従わせてくれ——これさえ伝われば、ボクはそれでいい」

「あんた、とことんおかしいわね、気付いてないの？」

「ボクはおかしくなどない。道具として当然の心構えだ」

「それがおかしいってんのよ!」

「おかしくなどない!」

二人はもはや一触即発。

たがいに一歩も譲らない。

トレースがちよつとのことでは死なないと理解しているのか、サラは彼女に対してだけは炎をよく使う。こんなところで火炎を使われたら、生徒会で集まる場所がなくなってしまう。

「……トレース、やめるんだ。サラも、やめよう?ここ、みんなから喧嘩したら大変だよ?」

「う……」

「む……」

ルウに言われれば、さすがの二人も引かないわけにはいかない。

「……フン!道具なんて前時代的なもの、認めるもんか!」

「ボクの方こそ、想いも告げずに今の状況を甘受しているキミなんか、認めるものか!」

たがいにそっぽを向き、サラはルウの右に、トレースはルウの左に、それぞれついた。

「……あのさ、どうして仲良くできないんだい?」

そしてルウは、今までの会話すべてを聞いていながら、この言葉である。

「……………」

ため息が二人の間からもれたのは言うまでもない。

で、その様子を見ていたクレアは、

「……娘と息子が60人近くいて言い合う内容か？」

ぼそりと、突っ込んだのであった。

ちなみにリンクとコトリの『クレアの萌え要素』についての論争は今や『アニメキャラにおける萌え要素』という逸れているのか逸れていないのかいまわからない内容になっていた。

「……でな、俺は思うんだよ。ツンデレってのはツン成分が多い方が分かりやすいんだよ。俺もたまーにエリアにやるんだがな？そんなときは愛情一割、ツン成分9割だぞ？」

「それこそ人それぞれじゃないですか！ツン成分なんて急に増やされたら混乱するだけです！エリアさんがかわいそうです！」

「はあ！？エリアなんか俺にべたべたなの仕事でただぞ！？普段なんかクールビューティなのはいいが俺に対する愛情が感じられねえんだよ！仕返しだ仕返し！」

この場に本人がいないせいか、リンクも普段は言わないようなことも言っている。

「そもそもあなた達の存在がおかしいのです！こころろ性格変えるのが夫婦共通の趣味なんて、どこの小説にだっていませんよ！」

「あ？悪いか！暇なんだよ、こっちは！つうか、お前に趣味とやかく言われたくねえ！おとなしくクレア眺めとけ！」

会話はほとんど暗号文だけど、それは全力で阻止させてもらっわ、とクレアは固く心に誓った。

ふと、リリーが思い出したように、クレアに言った。

「……ま、平和が戻ってきてよかったね、クレア」
「……まだきていない面々もいるけど、とりあえずはそうね」
クレアもリリーの言葉に、同意したのであった。

第39話　戦わずして得たもの

それからしばらく、二組の間で雑談とも言い合いともとれる会話が続いた。

生徒会の面々はその様子をほほえましく見つめながら、平和になった世界を感じていた。

一番最初に帰宅したのはララだった。

「……………私はもう帰る。暗くなったから」

ララの言葉で、みんなは一斉に外を見る。

すると、いつのまにか外は真っ暗で、街灯のみが灯りとなる夜になった。

「…………ララが帰るなら、僕も帰るよ。サラ、君はどうする？」

「もちろん、帰るわよ」

そう言って二人はララと一緒に生徒会室を出た。

「…………さて、食事に行こうか、サクラ」

「ふえ？食事って？」

「きまつてる、吸血鬼が血を吸わないでどうする。一から手取り足とり教えてやるからついてこい」

バサリとマントを翻すと、リンクはすでにそこにいなかった。

「ふ、ふえ？ああ、もう、お父さん…………」

ふつ、と、サクラの姿がぶれたかと思うと、リンクと同じように、姿が消えた。二人で人間を襲いに行くのだろう。

目の前で人間二人が消えて、クレアは少し茫然としたが、すぐに気を取り直して、

「…………て、あれ？止めなくてよかったの、コト姉ちゃん」と、訊いた。

「いいじゃない？殺しはしないだろうし」

「…………そっか。じゃ、リリーお姉ちゃん、コト姉ちゃん、一緒に帰ろう？」

クレアはリリーとコトリの手を取って、生徒会室を出ようとする。扉の前まで来ると、クレアは振り返り、

「トレースはどうするの？」

と、一人たたずんでいるトレースに訊いた。

「……お気づかい、感謝。しかし、ボクの持ち場はここなんだ、離れるわけにはいなくてね。キミは家へ帰って、家族団らんを楽しむといい」

優しく、まるでルウのようなほほ笑みをたたえて、彼女は言った。

「う、うん……」

特になにも言わず、クレアは生徒会室をあとにした。

一人残されたトレースに、感情の色は見えない。

「……さて、もうひと頑張り、だな」

背をんぐ、と目いっぱい伸ばして、息を吐く。

生徒会室の机に座って、彼女はもくもくと作業を始めた。

ルウ、サラ、ララ、コトリ、リリー、クレアの五人は帰宅すると同時に、絶句することになった。

その原因は、ミリア。

「紹介するわ、お父さん。この子はアゲハ。私の娘で、あなたの孫よ」

正確には、その傍らにいる黒髪黒眼の少女だった。

別に、ミリアが子供を連れてきたことに驚いてるのではない。
その少女が、どこからどうみても昼間襲ってきたシイナにしか見え
ないからだった。

これに真っ先に反応したのは、シイナに死ぬ思いをさせられた、
クレアだつた。

「あんた……！何の用だ！私を殺しといてその家族に取り入るな
んて、正気！？今すぐその狂った頭吹き飛ばしてやる！」

小学生のちびっこい体には大きすぎるほど無骨な拳銃を迷うこと
なくシイナに向ける。

向けられて、シイナはピクリと反応するが、具体的に何かしてこ
ようとはしない。

「あ、あんた、い、一体どうやってミリアお姉ちゃんに取り入っ
たの？まさか、洗脳？許せない、殺してやる！」

しかし、クレアが引き金を引けなかった。

シイナに対する恐怖が、昼の戦闘で植えつけられてしまったのだ。
「大丈夫よ、クレア。この子はアゲハ。シイナじゃないわ。もう
シイナじゃなくなったの」

震える手で拳銃を握るクレアに、ミリアがそう言った。

「ほ、ほんとうに？」

「ええ」

知性を感じさせるミリアの瞳に、曇りはない。それがクレアにそ
れが真実であることを悟らせた。

「ほ、本当だったんだ。……ごめんなさい、アゲハ」

「うん、よ、よろしく」

アゲハも急に家族が増えたことで緊張しているのか、声も震えて
いる。

「……ここに住むことになるのですが、いいですか、お父さん」

「構わないよ。よろしく、アゲハ」

新しく住人が増えることにまったく異を挟まないのは、こうなっ
た経緯がある程度予測していたからだろっか。ルウもクレア同様ま

まったく何も聞かされていないのだが、ルウは普段と変わらず平然としている。

「……よろしくおねがいします、おじいちゃん！」
勢いよく頭を下げたアゲハに、ルウはぽかんとする。

「……おじい……ちゃん？」

「え？違いましたか？お母さんのお父さんはおじいちゃんだってお母さんから聞きましたけど……」

「……いや、違うないさ。ただ、心の準備が足りなかっただけで……」

ルウのたじろぎも仕方ないといえよう。

外見15歳で、精神年齢もそれに近いのだ。娘には慣れていても、孫にはなれていないのだ。

「……とにかく、説明してよね、ミリ姉」

リリーの言葉に、玄関に立ち尽くして茫然としているみんなは同意した。

「……わかりました。では、リビングでお話しましょう？」
ミリアの誘いで、ようやく凍っていたルウ達は動き始めた。

第40話　些細な、けれど大きなすれ違い

私立玻座真学校の南400メートル、琴乃若商店街の北400メートル。

おおよそ琴乃若を地図にした時、必ず中心にくるのが、ここペンタグラム家である。

外からみればごく普通の一軒家だが、その実は全くことなる。

7人前後の人間が生活するのに、ごく一般の家屋ではすこし手狭だ。

そこでルウはトレースに命じて、空間を捻じ曲げ、家をほんの少しだけ広くした。

12畳ほどだったLDKは、その倍に、二階に4つしかなかった部屋は10部屋に。

廊下はまるでアパートのように広々と横に長い。

そんな特殊な家のリビング。

キッチンカウンター式で、出来上がった料理がすぐに運べるようになっていて。

7人座りの長テーブルにミリア、アゲハを除く6人は向かいあって座っていて、皆一様にミリアとアゲハをさまざまな感情をこめて見つめている。

「……まず、私から説明するわ」

みんなが見やすいよう、縦に長いテーブルのそばに立ち、ミリアは言った。

「この子は、私が娘にしたの。それは、この子が放っておけなかったからなの。……私を助けてくれたお父さんなら、わかるでしょう？」

ミリアの一番近くに座っていたルウに問いかけるように訊いたミリア。

「うん。君の気持ちはよくわかるよ。いやってぐらいにね。……」

でも、僕は向かってきた敵に手を差し伸べたことはないよ。それはなぜかも、君には教えたはずだけど？」

その言葉に、隣にいたサラは首をかしげる。

そうだったっけ？ルウなら敵にも容赦しそうだけど……

しかし、こう思ったサラは、すぐに思い直す。

サラの見ていたなかでは少なくとも、敵を救おうとはしなかった。甘いのはかわらないけれど。

「ええ。覚えています。『敵を救おうとは思ってはいけない。なぜなら敵とは自らを傷つけようとする害悪であり、その敵意は薄れることはない。たとえ薄れたとしても、それは見せかけだけである。もし仏心を見せてしまったら、その恩は仇でしか帰ってこない』……でしょう？優しいお父さんにしてはひどく懐疑的で攻撃的な教えだったので、よく覚えています」

「僕だつて人格を持つ生物だよ。敵に対して恐れもすれば、あまりの緊張に攻撃的になることだってある。人を信じれなくなることだってあるだろう。そして間違つたことを吹き込んでしまうこともね。でも、その言葉が間違っているとは思わないよ」

つまりルウは遠まわしにアゲハを家族に迎え入れるのは反対だと言っているのだ。

優しく、そしてたくさんの子供たちを救ってきたルウが、だ。

「……ルウ？どういうつもり？なんでだめなの？別にいいじゃない」

サラも意外過ぎて動揺しているのだろう、声はわずかに震えている。

彼女も、ルウに救われた一人なのだから。

「……だめだよ。アゲハ、いや、シイナ。君は帰ってくれ。『イノベート』と通じてる可能性のある人間をこの家に入れるわけにはいかないんだ。……ミリア、わかってくれるかい？」

アゲハには厳しく、ミリアには優しく、ルウは言う。

「……わかりません。お父さん、私は今まであなたはいつも正し

いものだとばかり思っていました。……それも、やはり子がもつ幻想、だったのですね。アゲハは私の娘です。もう、私の家族です。娘に出ていけというのなら……私もついでに、勘当していただけますか？」

「なぜ、敵に情けをかけるんだい？ 君はいつか裏切られるかもしれないんだよ？ それでも、君はその子を守るのかい？」

ルウは珍しく頑固に、そう言った。

ルウは家族を守りたいだけなのだ。

そして、ミリアは新しくできた家族を守りたい。

たがいに悪意はかけらもなく、善意がすれ違っているだけ。

「……もちろんです」

……だから、その時に訪れるいさかいは、限りなく深く、大きなものになる。

「……そうか。じゃあ、サヨナラ、だよ。今まで楽しかった。本当にありがとう。君がいなければ、僕は今ここにいないことも理解している。けれど、お別れだ。」

……出て行ってくれ、ミリア」
その言葉に。

ミリアはもちろん、サラも、クレアも、誰も何も言わなかった。

「さようなら、お父……いえ、ルウさん。私も、とても楽しかったです。あなたに助けられていなければ、私は今頃この世にいないでしょう。……でも、さようならです。」

あなたが考えをまげない限り、私は帰ってくることはありませんし、帰ろうとも思いませんので」

そう言々とミリアは絶句している皆に一礼だけして、アゲハの手を取り駆け出した。

リビングの扉が乱雑に開け放たれて、数秒。玄関を開ける音と、閉まる音が聞こえて、ミリアの姿は完全に消える。

「……………さよなら、ミリア……………」

悲しげな表情をしているのは、ルウだけではなかった。サラも、クレアも、リリーもコトリも表情のないララでさえもが、悲しみに包まれてた。

けれど、誰も何も言わない。

なぜこうなったのか、いまだに理解できないのだ。皆がわかつているのはただ一つ――。

——ミリアがこの家からいなくなってしまった、ということのみ
だった。

第41話　加速する疑い

「……おかあ、さん……」

ミリアのかたわらにいるもと『イノベート』、アゲ八がかすれた声をあげた。

「……大丈夫。私は、間違っていないわ」

ここは琴乃若の路地裏。ミリア本人は適当な人目につかないところに入ったつもりだったが、くしくもそこは、昼間にサクラとリンクが邂逅した場所であった。

昼間ならぶちまけられた血のりが路上に見えるが、夜ではただのシミにしか見えない。

「お母さん、どうして私を捨てなかったの？捨てても、よかったんだよ？どうせ、終わるいのちだったんだから」

「……おとうさ……ルウさんが、言っていたの。『命を拾うということは、その命の未来を握るということなんだ。責任を持たなければ、その命を冒瀆するのに等しい。だから、一度拾った命を自らの都合で捨てようとしてはいけないよ』って。私はそれを信じて行動してるの」

そう気丈にミリアは振る舞うが、その内心は穏やかではなかった。激しい悲しみが彼女の胸中に席卷し、今は現状の打開策すら見えてこないのだ。

「……私はあなたを育てるわ。捨てたりなんかしない。だから、安心して甘えていいのよ？」

「そんな……」

こんな路地裏で甘えろと言われてもそれはどだい無理な話だろう。「ここですつと暮らすわけじゃないんだから、大丈夫」

そう軽く言っただけで、ミリアはできることなら今すぐにでも泣きだしたかった。

ルウとの仲違い……それはミリアが見た未来の中でも最高の未来

だった。

もし、さっきのように出ていかなければシイナは家族全員から敵視され、そう遠くない未来に殺されていた。

もし、ルウを納得させようとすれば、サラとクレアに反対をくらってもう二度と修復不可能な状態になっていた。

口論になり、その結果ミリアが家を出ていく……

それが、ミリアの能力が導き出した最上の未来であつた。

ミリアは、今日まで直接『イノベート』と相まみえたことがなかった。

それは、『イノベート』がどのような組織であるかよく理解できていないということでもある。

ルウは数多くの家族を、サラは自身の親友を、クレアは自分の命を、傷つけられた。

クレアやララ、リリーやコトリたちでさえ、『イノベート』による印象を持つ人間はいない。どこるかシイナがクレアを殺したことによって、コトリとリリーは憎悪の対象としてしか見ていない。

ミリアは、その事実を知らなかった。未来は見えても、その人物の心情まで見えるわけではない。アゲハを仲間に引き入れるということは家族を敵に回すことだと、アゲハを引き取ってからミリアは悟った。

いくらその時戦闘の疲れでほとんど能力が使えなかったからといって、彼女らしいことではない。

「……アゲハ……」

彼女の心は後悔と、それを感じている自分を戒める心のみ。

家族にののしられ、斬られる未来、自分の一言で家族がバラバラになる未来、目の前でアゲハが殺される未来……

そのすべてを見た彼女に、現状を変えようとする気力はもう、なかった。

「……ずっと、いつしょよ？」

そのミリアの言葉はアゲハには、呪詛のようにも聞こえた。

一方、ルウの家では。

「お父さん、どういづつもり！？なんでミリアお姉ちゃん追い出したりなんかしたの！？」

クレアがルウに突っかかっていた。

クレア以外の人間はある程度はミリアの勘当に納得しかけていて、特に反論しようとはしなかった。

むしろ、ルウにあたるクレアの方を意外に思っている。

「……君はシイナに殺されたんだろう？痛かったろう？苦しかったろう？それを君に与えた人間の仲間を、君は家族にできるのかい？一緒にご飯を食べて、一緒のお風呂に入って、一緒の家に寝て、そんなことができるのかい？」

ルウは今回だけは決して譲ろうとしない。いくらクレアが言っても、考えを変えようとはまったくせず、クレアの説得に努めている。

「たしかに私を一度殺したのはシイナだし、最初は間違った。でも、一度会ってみて、話してみたら全然違う！私を殺したのはシイナ。でも、アゲハじゃない！アゲハはもう『イノベート』じゃないんだ！家族一人新しく増えるぐらい、別にいいじゃない！」

「家族が増えるのは構わないよ。それがほかの家族に害を与えるから問題なんだ。僕の家族に手出しはさせない。それは僕がミリア

を引き取ったときに決めたことだ。誰にも変えさせはしない」

「なら、私も追い出しなさいよ！」

「……なんだって？」

クレアの急な言葉に、ルウはいぶかしげな顔をした。

「君が出ていくことはないよ。君は家族を傷つけようとは思っていないし、『イノベート』でもない。……どうしてそんなことを言うんだい？」

クレアはその言葉に、自分のことをまるで理解してくれない、と感じた。

「私は生きるためならなんでもやったわ！苦痛を我慢することだって、この体を好きにさせることだって、人殺しだっていとわなかった！もし、私がつかまって、精神的にも肉体的にも絶対に従うしかない、と感じたらお父さんたちを殺せと命令されたとしても従うわ。……こんな私は、家族失格、でしょ？」

クレアはミリアと自分の生き方、考え方を認めてほしかったのだ。生き残るためにはプライドも感情も人間性さえ捨ててきたクレア。その生き方はいつか家族に迷惑をかけるかもしれない。その時、それでも家族として認めてくれるのだろうか……。

クレアはそれが知りたくなってしまった。

ミリアはただ放っておけないだけだったのに、それを否定したルウを見て、本当に家族として生きていけるか不安になったから。

「……………そんなこと、ないよ」
疑いを持ったクレアの瞳には、ルウの言葉はやけにしびしびしく
聞こえた。

第42話　クレアの決意、黒服の誘い

「……うそだ」

クレアが言う。

「嘘だ！お父さんそんなことちつとも思っていない！」

クレアがルウの言葉を否定する。

「……シヨックだな。娘にそう言われるなんて」

そうルウは言っているが、特に傷ついたようすは見えない。

「お父さん、本当にそう思ってるなら、証明してよ！ミリアお姉ちゃんと、アゲハを家族だって認めてあげて！そうしたら、お父さんの言葉も信用できる！」

「それはできないよ。アゲハはこの家にはおけない。家族を脅かす存在は、ここにはいけない。君は特別だけだね」

ルウの言葉に、クレアはシヨックを受けたように目を見開いた。
特別。

その言葉はいつもクレアを傷つけてきた。

特別だったから、屋敷に拾われ。

特別だったから、人殺しをさせられ、そして生き残り。

特別だったから、今、こんなにも苦しんでいる。

いつものクレアなら、ここで激昂し、拳銃を向けていただろう。
しかし、今は違った。

今、クレアはミリアを取り戻すために、こうやって口論しているのだ。その目的を見失ってはいけない。いつものように感情的になっ
てはいけない。そういう思いがクレアの胸にあったからだ。

「……もし、アゲハが敵だったら。敵であるとみんなが一樣に認めたら」

ルウの瞳を、クレアは見つめた。

穢れのない純粹無垢な瞳、とはとてもいえないけれど、クレアの瞳にはルウにはない息吹が感じられた。

「もし、そうになったら、私が始末をつける。私がアゲハを殺す。

……これで、どう？」

「殺す？アゲハは不老不死だよ、一体どうやって殺すんだい？」

「……人が人でいられるのは、記憶と感情、思考があるから。なら、ありとあらゆる苦痛を長時間与え続けられて、それらを破壊すれば、あとに残るのは抜け殻となった身体だけ。不老不死の人間を殺すのは、こうやるしかない」

そのあまりに残酷な方法に、ルウはもちろん、聞いていたサラまでもが目を見開いた。サラ達は身体を塵も残さず滅ぼすことだと思いついてから、驚きはさらに大きくなる。

「……ずいぶんと、残酷な方法だね。それを一体だれがやるんだい？僕はいやだよ、人を狂うまで痛めつけるなんて真似、したくない」

「私がやるわ」

まったく迷わずに、クレアは言った。

「私ならできる。方法も、道具も、それを実行する心もある。……

……だから、ミリアお姉ちゃんとアゲハを、家族として認めてあげて」
クレアはもう一度、懇願した。

ルウは腕を組み、目を閉じて考える。

もし、アゲハを家族として迎え入れた場合、彼女が『イノベート』の刺客だった場合、そして言葉通りにクレアが彼女を殺害した場合

……

それらもろもろを考えて、ルウは答えをだした。

「……そうだな。僕は――」

……ここ、は？

ミリアは朦朧と目覚めた。

路地裏の壁を背に、正座のまま眠ってしまったようだ。
なぜ、正座なのか。

ミリアは、親子がするようにその膝をアゲハの枕にしていたからだ。

甘えていいと言われたアゲハは、悩みに悩んだすえ、膝の上で眠ってみたいと言ったのだ。

家族という知識を何も知らないはずの彼女が、なぜそのようなことを言ったのか。

それはおそらく、家族とは肌で触れ合うものという想像が、アゲハの中に少なからずあったからであろう。

すやすやとかわいらしい寝息を立てて眠るアゲハの髪を、ミリアがそつと、なでる。

いとおしそうに、本当の家族がするように。

「……アゲハ」

今、ミリアは未来を見ていない。ミリアの能力は使っていると異常に精神力を使うため、普段は未来を見ないようになっているのだ。こつやつて路地裏で寝ることになったのも、未来がほとんど見えていなかったから。

ルウと口論していた時は今の状況が最上に見えた。

しかしその未来は昼の説得のせいで疲れていたミリアが見たものであって、完全な状態での未来視ではない。

だから、ミリアの後悔は一層深くなる。

もし、自分が完全に能力を扱えていたら。

そうすればもっと幸せな未来が見えていたのだろうか。

そうした思考は幾度となく続き、とどまろうとはしなかった。

……だから、気付かなかったのだ。

「……おい、お前、ルウの娘だろ？」

その黒一色に染められた少年に。

「……誰……」

かすめるような声で、ミリアが黒一色の少年、リンクに訊いた。

「俺はリンク。……たしか、ミリアだったよな。こんなところで

どうしたんだ？まさか、ルウと喧嘩でもしたか？……って、シイナ

？」

「この子は、アゲハよ」

アゲハ、というところを強調して、ミリア言う。

「いや、シイナだって。……まあいいや。とにかく説明は俺んち

でやるよ。どうせ寝るとこないんだろ？泊って行けって」

「え？」

普段なら、ミリアはけしてついていかなかっただろう。

いくらリンクがルウの友人といっても、ミリアは彼をほとんど知らないのだ。警戒するのが当たり前だろう。

しかし、今は状況が違った。

ルウと別れ、アゲハと暮らすと決めても暮らすあてがないのが事実。

そんななかで。

リンクの誘いはまるで、天使の導きのようにも聞こえた。

第43話　吸血鬼という種族

——異界局、琴乃若支店——

異世界の依頼をこなし、お金を稼ぐとともにあまりある時間をつぶすためにリンクが開業した職業、異界士。

その依頼受諾の拠点となるのが、ここ、異界局である。

しかし異界局とは言っても、ここはどこからどう見ても一般家庭の住宅にしか見えない。

中は、いろんな意味で一般家庭のものではないが。

「ふうん。そうか。ルウがそんなことをな……」

異界局の玄関を、リンクが開けた。

玄関先、そして廊下、部屋の間取り、家の造り。ここまで見ても普通の家とはかわらない。

「うつ……な、なにこのにおい？」

ただ、一つだけ違うのは、この異臭。

鉄のような、金属質の独特な香り。

「いいやつだろ？超天然の芳香剤だ。俺もエリアも結構気に入ってんだぜ？」

リンクはこの異臭を異臭とは感じていないようだ。むしろ、いい臭いだと感じていて、この臭いがあることになんの疑問も持っていない。

他人の家は臭うというが、これもそうなのだろうか。

そうアゲハを背に負ったミリアは思った。

「これ……なんの匂い？」

出どころのわからないものは怖いので、ミリアはそう訊いた。芳香剤というからには何かの植物から採れるものなのだろうか？

「ん？わからねえのか？血だよ、血。人間の。そこらへんにいたやつさらってきて、血を絞ってんだよ。この血の匂いがまたいいんだよ。食事にもなつて一石二鳥だ」

そんな自然極まりないミリアの疑問を、斜め四十五度から打ち碎いたリンク。

「ち、血！？しかも絞ってつて、今！？」

「いや、もうそろそろ絞り切ってるはずだけど……エリアがこないから、今仕上げるところかな？」

仕上げて、なに？とはとても訊けなかった。

ここで、ミリアは思い出したのだ。

リンク・レイル・ジェイドという種族を。

この黒一色の人のおさそうな少年は、吸血鬼なのだ。人の血を吸い、人を捕食する種族なのだ。

「え、あの、私用事思い出したから帰るわ。お誘いありがとうございしました！」

クルリとその場で右向け右。

「待て、冗談だよ」

ダッシュで異界局を出ようとしていたミリアを、リンクが笑いながら止めた。

「……え、冗談、なの？」

ひきつった表情で、ミリアは振り返った。

「当たり前だよ。お前の中の吸血鬼ってどんなんだ。俺は別に人間を捕食対象としか見ていない成り立てとは違うんだ、人は友達、それが俺ら古代種に広がっている考えだ」

「そ、そうなの、よかった……」

ほっと、ミリアは胸をなでおろした。

吸血鬼にはいろんな種類がある。

吸血鬼の血液をなんらかの方法で摂取し、吸血鬼となつて百年以内のものを『成り立て』、吸血鬼になつて百年以上のものを『吸血鬼』、いつからどこから現れたか全く把握できない、吸血鬼として

この世に生を受けたものを、『古代種』という。

ミリアはそのへんの事情をルウから聞かされたことがあるのでわかったのだが、それでも成り立てと古代種との思考に差があることは理解できていなかった。

「これはサクラが食事の時にミスリやがってな、ちょっと頸動脈傷つけちまって殺しちまったんだよ。……まあ、俺でもたまにあるからしかたねえんだけど、臭いがなあ……」

事実もかなりえげつない気がするのだが、それは仕方ないきもしないでもなかった。吸血鬼に慣れ親しんでいるから感覚がマヒしているのだろう。

「……ま、とにかく上がってくれ。その子を寝かせて、話はそれからだ。……あ、そうそう。俺達は客人の血を吸う鬼畜じゃないんで、安心してくれ。じゃあ、またあとで」

リンクはミリアにそう言つと、奥にある臭いの源……つまり、殺されてしまった人間の処理に向かった。

ミリアはかすかに聞き耳をたて、リンク達の会話を聞く。

「……え？こいつまだ生きてるの？」

「……そうよ。まったくしぶといたらありやしないわ」

「ど、どうしよう……こ、ころし、ちゃうかも……」

「ま、こいつ程度の存在ならなかったことにできるな。かなりしんどい作業になるけど、まあ、ここは道具の箱庭だ、変わりぐらいいくらでもいるだろう」

「そうね」

「え、それはいったいどういう……」

三人の恐ろしい会話に、ミリアは聞かなきゃよかった、と後悔する
のであった。

第44話　吸血鬼の食事とルウの考え

二階にある客室にミリアを案内したリンクは、後始末のためにリビングへと通じる扉をあけた。

「……エリア、お前がいながらなんでこんな風になったんだ？」
リンクが口元を押さえながらしかめっ面でそう言った。

「仕方ないじゃない。娘の初めてのお食事だもの、気が済むまでさせてあげたいじゃない。きつと『イノベート』じゃろくにご飯も食べさせてくれなかったのよ。だからこんなにも食欲があるんだわ」
対する青髪少女、エリアは冷淡にそう言った。エリアはリンク以上に長く生きているくせに『人間はただの食糧』という考えを捨て切れていない。

だからこの血が飛び散り、肉が部屋中に転がっているさまを見ても、被捕食者に対する同情は湧いてこない。

「そんな、お母さん……私、大丈夫だよ、ご飯たべなくても……」
「口元を血で染めあげたお前に説得力ねえよ。つうかこいつマジで生きてんの？ どう見たって死んでるだろ」

リンクは部屋を見渡した。

床は赤一色で、ところどころに茶色の木目が見えている。

壁も赤一色で、ところどころに壁紙の白色が見えている。

あまりにも赤いその部屋の中には、返り血を浴びたサクラと、まったくきれいなままのエリアがいる。

で、サクラに食われた人間はというと。

首から大量の血をぶちまけて、死んでいるようにしか見えない。しかしときどき思い出したように身体がビクリと跳ねるので、どうやら死んではないようだ。

「こいつね、なんか吸血鬼の血をどこかで摂取した可能性があるわ。成り立てにしては生命力あるし、吸血鬼にしては体力ないし、どっちつかずのあいまいなやつね。どうする？」

エリアは淡々と、まるで明日の食事のおかずでも聞くような軽さで訊いた。

「……ったく、家出娘もいるんだから、スプラッタは控えてくれよ。俺もあんまり得意な方じゃないんだしさ」

リンクは血を見るのが好きだ。しかし、スプラッタ、つまり内臓は肉片が飛び散るのはあまり好みではない。

「……リンクが言うなら、片づける」

「はいはい、エリア、片づけてくれ。……お願いだ」

懇願するように上目づかいで言うリンクは、かっこいいより、かわいいという方がしっくりくる。

「うん、もちろ……じゃなかった、し、しかたないわね。サクラをこれ以上血を見せたくないから片づけてあげる。サクラのためよ、絶対にリンクのためなんかじゃないんだからね、勘違いしないでよ？」

使い古されたようなセリフを言いながら、エリアは片づけに入った。

床の血に触れ、数秒。

するとぶちまけられていた血はすべて、きれいさっぱりなくなっていた。

吸血鬼の基本的な能力の一つに、血を操るというものがある。血液を自在に扱い、盾にも矛に形作れる。今はその能力を使って、エリアのマントの中に圧縮して保存したのだ。この血はいずれ、戦闘の時に消費される。

「ありがとうな、エリア。愛してる」

「……!!!!!!」

さっきのっけどんな態度はどこへやら、エリアは首まで真っ赤に染めた。

「……そうだな、僕は……ミリアは認めよう。でも、アゲハは認めない」

ルウはそう、きっぱりと言い切った。

ペンタグラム宅のリビング。ルウはクレアに見据えられ、説得された。

それでも、ルウはアゲハを家族として迎え入れることは認めなかった。

「なんで！？なんでよ！私、ちゃんと覚悟を示したよ！？それなのに、お父さんは報いてくれないの！？」

「いつもいつも、努力が結果につながるとは限らないよ。僕はそうやって挫折してきた人を何万とみてきたから、わかる」

言葉に詰まるクレアに、ルウはさらに追い詰める。

「そもそも、よく考えてごらん？アゲハを狂死させる？そんなことしたらミリアが泣き叫んで止めるよ？それを振り切って……つまり、親から子供を取り上げるつもりかい？」

「あつ……」

今気付いたとでもいうように、クレアは短く声をあげた。

「子供を取り上げた張本人がいる家で、君は暮らせるかい？たとえば僕やサラが残酷な方法で殺されたとして、それをやった人間と

楽しく会話できるかい？」

「……！」

「ミリアなら恨み過ぎて家族を傷つけないようにするために家を出るだろうね。あの子は優しいから。アゲハも消えて、ミリアも消える。……ね、今と変わらないだろう？」

クレアは絶句して何も言えない。

自分の考えの甘さに、いまごろ気付いたのだ。

敵であったシイナになら、クレアの方法でもかまわなかったのかもしれない。でも、今は家族にも敵にもなる可能性のある存在なのだ。初めから敵扱いしていて、うまくいくはずがないだろう。

ここで、クレアは完全に自分の失敗を悟った。もう、ミリアは家に帰ってこない。

そう、誰もが思った。

「……でもね。僕に一つ考えがあるんだ」
その言葉に、一同は一斉にルウを見た。

第45話　ルウの家族

みんなの視線がルウに集中する中、彼は淡々と考えを述べる。

「僕はね、思うんだよ。家族って、ぶつかりあって成長していくものなんだ、って。子供が反抗期を迎えるのも、ぶつかり合って理解しあうためのものなんじゃないかな、って僕は思う。だから、ね？」

「……なにがしたいの？」

クレアがルウの言わんとしていることが理解できずに、そう訊いた。

「だからさ。みんな、何も僕の決定に従う必要なんて、どこにもないんだよ？」

君たちは僕に反抗したことが今までなかった。もしかしたら僕はそれに動揺しただけだったのかもしれない。僕の決定は間違っている……そう思うなら、行動してくれ。僕はそれを止める。けれど、振り切って、すすむんだ。

間違っていると思う親に従う必要なんてないよ。

僕と君たちとは、家族であって命令したりされたりの関係じゃないんだから。

きつと、僕は怒るだろう。でも、家族みんなが、アゲハを家族にしたいと心の底から思っ、て、そしてもし敵でもいいというのなら……もしかしたら、僕も考えを変えることがあるかもしれない。今の時点で、僕は考えを変えるつもりはない。僕がいたいのは、それだけさ」

ルウの言葉は、クレア達をはっとさせた。

今までルウに言葉を言っ、て、覚悟を示したのはクレアだけ。リリーも、コトリも、ララも、何も言わなかった。だから、今までルウが考えを変えなかったのだ。

それに気付くと、リリーは行動を起こした。

「お父さん！私、お姉ちゃん迎えにいつてくる！アゲハも一緒にね！」

ガタリと立ち上がり、リリーがルウの言葉を待たずに飛び出いった。

「……やめときなよ、ララ」

リリーに続こうとしたララを、ルウが止めた。

「……私は、あなたに感謝してる。そして、今でも。

……けれど、今は、今だけはお父さんには従えない。恩を仇で返すことになったとしても、ミリアが大切だから」

ララはそう言い残し、家を飛び出ていった。

「私も、もう家族を失いたくありません！じゃ、じゃあね、お父さん！」

制止されると意思が揺らぐと思ったのか、コトリはララに隠れるようにして出て行った。

「……君は？」

ルウがいまだに呆けているクレアに訊いた。

「……なによ、ちゃんと認めてるじゃない」

どちらかというと三文芝居だったが、それでも3人が気付いた様子はなかった。気づけたのはクレアとサラだけ、だったのだ。

「認めてる？何を言ってるんだい？僕はミリアの存在は認めただ、アゲハまで認めたつもりはないよ？ミリアに関しては怒らないけど、アゲハを連れてきたら本気で怒るよ？……それでも、君は行くのかい？」

ルウの言葉に嘘はない。アゲハを連れてきたら怒るつもりだ。

「……行くわよ。行かなきゃ。……でも、アゲハはね、家族がほしいだけなの。……それがわかってやれないなんて、やっぱり男はだめね。……お父さんにだけは、わかってほしかった」

そう言い残して去るクレアの目の端には、涙が、一筋。

玄関が開き、そして閉まる音がして、この家にはルウとサラ、二人きりになった。

「……なによ、ほんととはどっちでもいいくせにさ」

サラはからかうようにそう言った。

「ははは……サラにはばれてたか……。うん、そうだよ。僕はもうアゲハが家族に入ってもいいって思ってる」

「じゃあ、なんでわざわざあんなこと言ったの？クレア泣かせてまで言うことだった？」

「うん。僕の家族はね、もっと喧嘩をするべきなんだよ」

サラはこれには驚いた。平和主義のルウがこんなことを言うとは、まったくもって予想外だったからだ。

「あんたが『喧嘩するべき』？何考えてんのよ」

「……じゃあ、考えてみてよ。僕の決定に喧嘩もなくみんなが従っていたら、この家はどうなった？ミアの未来視は戦闘の疲れでまともに使えないのに、あんな別れかたして、そのままで。

きつと家族仲はどこがぎすぎすしたものになっただろうね。クレアは家族のことが信用できなくなつて、リリーもコトリもラも僕を敬うばかりで、何も見ようとしんない。最終的には、クレアは出ていくよ。未来視なんてなくても、それぐらいは読める。だからね、ここは一度ぶつからなきゃ。つらいけど、全力で喧嘩して、もっと家族のこと知らなきゃ。僕はクレアのことならよくわかる。いつつも喧嘩してるからね。でも、ミアも、コトリもリリーもコトリも僕はクレアほど理解できていないんだ。彼女たちとは喧嘩したことなんてないからね。

……喧嘩は別に悪いことではないよ。それが殴り合いや殺し合いにならなければ、の話だけだね。

それに……家族一丸となつて頑固親父に立ち向かう。この出来事がどれほど彼女たちの絆を深めることになるのか……。今からでも楽しみなね？」

ルウの言いたいことはサラにはいまいち理解できなかった。けれど。

「……あんた、かなり策士よね。普通そこまで考えないわよ？」

それだけは、
理解できた。

第46話　探しても届かなかったもの

「……あ……」

ミリアは朦朧とした気分で目覚めた。異界局の二階、客室。ここは普通の洋室で、何の変哲もない。その部屋のベッドに、彼女はアゲハを守るようにして抱きながら、眠っていたのだ。

「痛っ……」

彼女の眠気を覚ましたのは、染みいるような頭痛だった。

「……つらいわね……」

頭痛がづらいのか、今の現状がづらいのか。おそらく両方であるう。

極度に能力を使いすぎたミリアの脳は、今休んでいる最中である。だから今は能力を一切使えないし、休もうとしている脳を無無理やり動かすため、激しい頭痛におそわれる。

これはミリアが戦闘の度に経験してきたことだが、何度体験しても慣れない。

「……アゲハ……」

あまりの頭の痛みに、ミリアは再び気を失うように眠りについた。今は朝。

リンクの家に泊めてもらって三日目だというのに、いまだ現状打開策は見当たらなかった。

「……どうしたの、クレア？　なんだか元気ないよ？」

「……………え？」

クレアはそう訊かれてはとなった。

ここは昼休みのクレアの教室。彼女は自分の席について、昼食もとらずに考え込んでいたのだ。それを沙耶が気になって訊いたのだらう。

「なんでも、ないわ。気にしないで」

クレアは訊いてきた沙耶に気丈にそう言っが、内心の焦りは言葉では言い表せないほどであった。

もう、三日……ミリアお姉ちゃんは今どこに！？

父親のルウと口論し、ミリアを取り戻すと息巻いて出て行ったものの、肝心のミリアは一向に見つからなかった。ルウとサラを除く家族総出で街中を探してもいないので、どこかに宿をとっているんだらうと判断し、その日は引き上げた。

次の日、街中の宿屋という宿屋を探しまわり、ミリアを探した。

けれど、どこにもいなかった。なら、どこか他人の家に住まわせてもらってるのだらうという事で、その日は引き上げた。

その次の日、つまり昨日。街にある家という家を探しまわり、ミリアの存在を確かめようとした。しかし、目的の人物はおるか、目撃証言さえもつかめなかった。

いよいよ、クレアたちはあせってくる。余裕ぶっていたルウでさえ、心配そうにしていた。

どこにいるのだらう？　どこにいつてしまったのだらう？

昨日の夜、クレアがふと漏らした言葉は、家族にいい知れぬ緊張

をもたらした。

『……もしかしたら、攫われちゃった、とか……』

それに気付いた瞬間クレアは夜中の3時だというのにミリアを探そうとしたが、それはルウに止められた。

そして、その次の日、つまり今日。人を監禁しやすい廃墟という廃墟を探すことになった。

……しかし、問題がひとつだけ、あったのだ。

今日は月曜日。学校の始まる曜日である。

最初はクレア達はさぼってでもミリアを探すつもりだった。しかし、それをルウが止めたのだ。

『まさか学校休むつもりじゃないだろうね？僕は嘘なんかつかないし、君たちにつかせるつもりもない。ミリアを探すなら学校が終わってからにするんだ。ミリアを取り戻したいのはわかるけど、学業をおろそかにしてはダメだよ』

この状況でルウに弱みを握られるわけにはいかなかったクレア達は、しぶしぶながらも今こうして学校に来ている。

もう昼なのだが、クレア達はこの時間帯になるまでが異常に長く感じていた。

クレアが考えていたのは、最悪の未来。

もし、ミリアが誰かに攫われてしまった時のこと。

もし、ミリアが誰かに壊されていた時のこと。

もし、ミリアが殺されてしまった時のこと。

そんな暗い未来は、クレアには簡単に想像できた。

もし、ミリアを見つけたとして。ミリアがミリアでなくなっていたらどうしよう……

今飛び出たら、ミリアを救えるのだろうか？

今走ったら、声が聞こえるのだろうか？

今行動しなければ、手が届かないのではないだろうか？

そんな想像が、クレアの中で渦巻いて、焦りの原因となっていた。

「……おねえ、ちゃん……生きていて……」

そんなつぶやきを、沙耶は聞き逃さなかった。

「……なにかあったの？クレア、話してよ。私たち友達でしょ？」

「……ごめん。沙耶、私、話せない。話したら、それが現実にな

ってしまいそうだから……」

それきりうつむいてしまったクレアに沙耶はそれ以上追及しなかった。

「言いたくないのね？別にいいわよ、話したくなったら、話せるようになったら、話してね」

「……うん」

一度は踏み込んでくるけれど、引いたらそのままにしてくれる、

そんな沙耶の優しさがクレアには心地よかった。

「ミリア、お姉ちゃん……」

もう一度、決意を込めてクレアはつぶやいた。

同時刻、ルウの教室では。
軽い混乱が巻き起こっていた。

第47話　噂と、解決への糸口

「なあなあ、ルウ」

玻座真学校高等部、ルウが所属する2年3組前の廊下。トイレに行こうとしたルウはそう呼ばれて立ち止った。

クルリと後ろを向き、声の主を見る。

声の主は彼のクラスメイト、夏目大河であった。

クラスに友達の少ないルウがもつ、数少ない友人の一人であった。

「なんだい、夏目？」

「ミリイ先生、どうなったかしってるか？もう今日で無断欠席三日だぜ？何かあったんじゃないかな？」

ミリアは英語教師として、この学校に所属していた。彼女は家族と過ごす時間を少しでも増やしたかっただけなのだが、ルウのクラスでは彼女の人気は男子女子問わず、相応の人気があった。

「ミリアかい？……そうだね、きつとどこかで休んでるんじゃないかな、あの子のことだ、きつとリンクのところに泣きついてるんだろう」

言ってから彼は、しまった、という顔をした。

ルウも、ミリアがいなくなつて動揺していたのだろう。そうでなければ、ただの友人でしかない夏目に、ミリアとの関係を気付かれるような発言を、するわけがなかった。

「……おい、ルウ。『ミリア』？『あの子こと』？……ちよつと、男同士腹を割つて話そうじゃないか」

夏目はそういうと、ルウの肩に手をおいて、がっちりとホールドする。

「……僕はそういうの、苦手だよ？」

汗ジトになつて、ルウはそう言い返す。

「いゝやだめだ。どう考えても今のはおかしい。百歩譲つて『ミリア』は許せるが、『あの子』だけは許せねえ。……どうということ

だ、ルウ？」

恨みのこもった視線で訊かれてルウは言葉に詰まった。それもそうだ。もし本当のことを打ち明けたとして、一体だれが信じるだろうか。

……いや、待てよ。

ルウの中で、名案がひらめいた。

「夏目。黙っていたが……ミリアは僕の娘なんだ」

シン、と教室が静まり返る。ちなみに、サラは運の悪いことに別のクラス所属である。

もし彼女がこの場にいたら叫んでいただろう。

『何言ってるのよ、ルウ！』という感じで。

「……………は？」

「いや、だからね？ミリアは、僕のむ、す、め。子供。だから『あの子』、わかる？」

「あ、そうかそうかわかったぞ」

何かに気付いたように、夏目はつぶやいた。そして、

「そんなくだらない嘘ついてまで、ミリィ先生との関係、隠したいんだな！？ようしわかったいいだろう、ここは騙されておいてやる。絶対こんな女子もいる昼間にするような話じゃないだろうから、修学旅行までまってやろうじゃないか！でもなルウ。ミリア先生はお前のものじゃねえぞ！？それをわきまえろよ！？」

そういつて、すぐにどこかへ去っていく夏目。目の端には涙の筋が。

……もつといい言いわけ考えとかなきゃ。

ルウはそう、ぼんやりと思うのだった。

五時間目。英語の授業、つまりミリアが受け持っていた授業だ。

2年3組の時だけ、ミリアは妙に緊張した雰囲気を持っているので、それがまた噂の原因になっていたりするのだが、今は全く別の噂が、クラス内で広まっていた。

ルウとミリアの関係かと思えばそうではないらしく、噂の内容はただ一つ。

『ミリアのかわりの非常勤講師が来る』

と、言うものだった。

男なのか、女なのか。授業がうまいのか下手なのか。それすらもわからない状況が、噂好きの彼らの熱を上げることとなった。

そして、その噂の真実が、明らかになる。

そ非常勤講師は、噂の斜め右をいく存在だった。

「hello, my name is Eria Luna Jade. nice to meet you.」

青い髪、青い瞳、そして、全身を包む真っ黒なマント。

「……エリア？」

「はい、なんですか？えっと、ペンタグラムさん。でも、できればエリアさん、と呼んでくださいね？」

完璧な演技で青髪吸血鬼は自己紹介をしたのだった。

……いったいエリアがなんの用だ？
ルウはそう思わずにはいられなかった。

第48話 エリアの目的

「……わかりました、エリアさん」

ルウも、エリアのように演技して答えた。

「ん、いい子ですね。でもペンタグラムさんは少し英語の成績が悪いわね。あとですこし話しましょうか」

天使を思わせるような笑みで、エリアは言った。クラスの男子はみんな、この笑顔に胸を弾ませる。彼らは知らない、この笑顔が時と場合によつては死神よりも怖いものになるということを。

ルウは確かに成績が悪いが、呼び出しを食らうほどではない。つまり、これはエリアが何か話があつてのことなのだろう。

「……………はい」

ルウはなんでもないように、そう答えた。

面白いとは言い難いけれどつまらないとも言い切れないようなエリアの授業が終わり、休み時間。

生徒会室に、ルウとエリアは来ていた。案の定、エリアはリンクに言伝を頼まれ、ここへきたようだ。

そして、誰にも聞かれないように、呼び出されたはずのルウがここへと案内したのだ。

「ここが、僕の第二の家です、エリアさん」

生徒会室の荘厳な扉を指さして、ルウが言った。

「あら、そう」

とても興味なさそうに、エリアは返した。

「……リンクが何か用でも？」

「ええ。ちよつとね。すぐ終わるわ」

「そうですか。さて、入りましょうか」

「ええ。早く終わらせてリンクのところに……じゃなかった、サクラのところに戻らないと」

そう言って、エリアが部屋に入ろうとした時だ。

「なんで、それぐらいしてくれないのよ!」

少女の、それもずいぶん幼い怒号が扉越しに聞こえた。

生徒会室は普段は完全防音。しかし、部屋の主であるトレースの意思によつては外に音を漏らすこともできる。

おそらくトレースはルウが来たこともすでに知っているだろう。その状況で音を漏らすということは……

「聞き耳たてろ、つてことだね。さすが僕の道具。いい仕事をする」

と、言つてもほとんど筒抜けなので扉に耳をつけなくてもはつきり明瞭に聞こえてくるのだが。

「……何度も言っているだろう。ボクはキミのその命令は聞けない、つて。あきらめてくれるか？」

トレースのあきれるような声。

「だから！命令じゃなくて、お願いなの！ミリアお姉ちゃんの居所を教えて！それだけでいいの！」

クレアの懇願するような声。

「だったら、なおさらごめんだね。強制されてやったのならおとがめも少ないだろうけど、もし自分の意思でやったとなれば、もう廃棄処分ものだよ。ボクはまだまだルウに使われていたいからね。遠慮しておくよ」

「所有者の家族の危機なのよ！？放っておくの！？」

「ルウが探せと言えば二秒もあれば探せるさ。でも、その命令がないんだ。ボクの持ち主はルウであつてルウの家族じゃない。ボクが義理だてする意味はないね」

「……！ミリアお姉ちゃんが、壊されていたらどうするのよ！」
クレアの悲痛な、心からの叫びだった。きつとミリアのことが心配で心配で、いてもたつてもいらなくなつて、すぐる思いでトレースに言いに来たのだろう。

「………ボクは、どうもしない。壊れたのなら直せばいい。なくなつたのなら代用品を作ればいい。……キミの命だつてそうだろう、クレア？」

「……な、なんの、こと？」

クレアの声には動揺がありありとわかるほど震えていた。

「なんのこと？キミがそれをボクに訊くのかい？わかっていくせに。本当はキミ、シイナとの戦闘で……」

「言わないで！」

クレアの叫びが、響いた。

「……お願い、誰にも言わないで。お父さんにも言わないで。もう無茶は言わないから……もう帰るから……」

心の底からの懇願。クレアは答えを聞くことなく、逃げるように生徒会室を出た。

「……あ」

彼女が生徒会室からだと、そこにはエリアとルウの姿があったのだ。あつけにもとられよう。

「どうしたんだい？目が赤いよ？」

先ほどの会話を終始聞いていながら、ルウはそうほほ笑んだ。

クレアは指摘されると目をこすり、あははと快活に笑った。

「あ、あの、寝不足、かな？最近ミリアお姉ちゃん探してばかりだったから……」

「……」

エリアはその名前に、目を見開いた。だが、それに二人は気付かなかった。

「じゃ、じゃあね、また、家で」

そういうと、クレアは足早に去ってしまった。

「トレース」

ルウは扉越しに呼び掛ける。

「なんだい？」

トレースも扉越しに答える。

「クレアの隠し事って、なんだ？言え」

いつになく語気を強めて、ルウは命令した。

「ルウ。悪いが言うことはできない。約束だからね」

しかし、その命令に彼女が従うことはなかった。

「……………それでいい」

道具である彼女が命令を反故にしたというのに、ルウはうれしそうだった。

それはルウが約束を破るなと命令したからであって、トレースが自分の意思でしたわけではないだが、それでもルウはトレースが人間に近付いていくようでうれしかった。

「とにかく、エリアがお話があるそうだ。……………まあ、すぐに話をつくらしいけどね」

ルウはそう言って、エリアを生徒会室に招いた。

第49話　二人の親

生徒会室。

エリアとルウは長テーブルに向いあつて座つた。

「……で、ご用件は？」

ルウが何かの重役のような口調で言う。

「さっきの子が探していた人……ミリアといったかしら？あの子、うちで預かつてるの。……シイナの形見と一緒にね」

「……シイナの形見？」

エリアの言つた意味が理解できず、ルウは訊いた。

「ええ。私の娘、シイナそっくりの女の子。……聞いた話じゃクローンって言っじゃない。だから氣にかけているのだけね……」

「……娘？エリア、子供がいたのか？」

「ええ。あなたみたいにどこからか拾つてきたんじゃない、ちゃんとおなかを痛めて産んだ子よ。……もう、あの子はいなくなつてしまつたけれどね」

「……そうなんだ……」

シイナ。彼女は『イノベート』の『イノベーター』であり、不老不死の吸血鬼でもある。シイナがエリアの娘だつたとすると、ルウ達はリンクの子供を殺したことになるのだろうか。

「……氣にしないでいいわよ。あれは、シイナなんかじゃない。

シイナはもつと、明るくきれいに笑つたわ。……あんな、苦笑と愛想笑いしかない子、私の娘であつてたまるものですか」

エリアの中では、シイナとは数多くいるクローンたちではなく、自分が産んだたった一人……そう思っているのだろう。ルウはそれが間違つているとは思えないし、間違つていたとしても正す義理はないので黙っている。

「……そう。……で、ミリアがどうかしたかい？粗相でも？」

「まさか。雨に打たれた子犬みたいにおとなしくしてるわよ。シ

イナ抱き締めて、『この子は私が守るんだ』ってうわごと言いながら。食事もとらないから心配なのよ。私たちが吸血鬼だから、血でも出てくるとでも思ってるのかしら？」

「ミリアはそんな吸血鬼ってだけで判断するような人間じゃないんだけど……。もしかして、なにかあった？」

ルウはそれとなく、訊いてみる。

「……とくに。あ、私たちの食事風景見たぐらい、かな？」

それは食事とはとうてい呼べない惨状だったのだが、それを今のルウが知っているわけがない。

「それが原因だろうね。警戒してるんだよ、自分が食べられないようにって」

「……そう。でもね、そんな風にご飯も食べない人間、私の家に置いておけないのよ。正直言って邪魔。だからルウ、引き取って」

「無理だね」

ルウは即答した。

エリアはそれにあっけにとられた。

「……無理？あなたが？」

その答えは家族思いで、優しい父親であるルウには、あまりにも似つかわしくない回答だった。

「うん。無理だよ。もう彼女は……僕の、かぞく、じゃ、ない、

……」

やはり、家族じゃないと断ずるのには、まだ抵抗があるようだ。

けれど、つかえながらでもルウははつきりと家族ではないと言った。

それにエリアはしばらく頭を悩ませた。まさかルウがこんな風な回答をするなど思ってもみなかったのだ。本当ならもう話はついていくはずなのに。

「……そう。ならいいわ。彼女には残念だけど………今晩の主食は、久々の女の子になるわね。それも長身で、茶色の瞳のきれいな女の子。……おいしそうね」

吸血鬼としての言葉で、ルウを釣ろうとエリアは考えた。こうい

う風にいえば、絶対にルウはミリアを引きとろうとするだろう……
エリアはそう確信していた。

「……どうぞお好きに。僕はなにもしないよ。食事にするならすればいい。でも、なにがあっても家族には手を出すな」

これも、意外だった。まさかルウがミリアを見捨てるようなことを言うなんて。

ここまで言ったら、エリアももう引き下がれない。

「……そう。じゃあお話は終わりね。ミリアは今日家族でおいしくいただくから。……それから、英語の成績、もっとちゃんとしたら？」

最後にそう脅してみるが、

「余計なお世話だよ。じゃあ、あの放蕩娘によろしくね」
ルウはまったく、動じなかった。

一体ルウになにか！？

冷静なエリアも、そう思わずにはいられなかった。

第50話　転機

エリアが去った後の生徒会室。

「……ルウ？」

トレースの声が響く。今、彼女は隣の部屋で待機していて、ルウには声だけを届けている。

「どうした？」

ルウの声は、普段よりもいくばくか低く、暗かった。

「なんであんなミリアを見捨てるようなこと……」

「ような？ 違うね。僕はミリアを見捨てたんだ。……それはいくら取り繕っても消えることのない、純然たる事実であり、僕の贖いがたい罪でもある」

この時のルウのしゃべりかたは、トレースのものに似ていた。いや、普段のトレースの口調はルウをまねたものなのか。

「……クレアたちの成長のためだろう？」

「そうだよ。でも、もし本当にミリアが食べられてみなよ。僕はいつたいていどうやって償えばいいんだろうね。……そもそも、誰に償えばいいのだろう？ ミリア？ クレア？ もっとたくさん？」

「そんなに悩むなら、なぜあんなことを？ 後悔するぐらいならやめておけばいい」

「いいんだよ。後悔ぐらい、なんでもないさ。僕はミリア達に成長してほしいんだよ。ミリアも、コトリもリリーもラモクレアもみんな、もっと成長してほしい。人間的にもっと強くなってほしい。今のままでは、ただ共依存しあうだけの、いびつな家族になってしまう。それじゃ、だめなんだ。……なあ、トレース？」

エリアの時や、みんなといるときのような取り繕うような笑顔は一切なしで、悲痛で、悲しげな表情を浮かべ、彼は言った。悲しうだけれど、今のルウはとても人間らしかった。

「……なんだい？」

「人が一致団結し、成長するには何がいると思う？」

ルウの突然の問いかけにも、トレースは真剣に考える。

「……教育？」

「違うよ。それは『敵』さ。共通の、強い敵。それさえあれば人間はそれを倒すためにあらゆる努力をする。そして、その敵が去った後も、その時築いた団結力と成長は残る。敵のいない世界なんて安全ではあるだろうけど、どこかつまらないものなんだろうね」

「……かもしれないな。でも、今のはやりすぎではないか？ ミリアがトラウマにでもなったら……」

「……大丈夫だよ。僕の娘たちは、うまくやるさ。……そうだ、トレース。サラに頼もう」

ルウは突然、そんなことを言った。

「サラ？ なぜ急に彼女が出てくる？」

トレースは不機嫌に言った。トレースはサラのことをよく思っていない。喧嘩した仲だからでもあるが、なによりルウを取り合う（トレースは道具として、サラは恋人としてルウを独占したい）仲なのだ。相いれないのも仕方ないことである。

「彼女が一番ミリアたちのことを思ってる。行動には出さないけど、言動には出てる。……だからね。………ばそぼそ」

ルウはトレースの耳に、何事かを囁いた。

「……理解した。では言ってくる。朗報期待していてくれ、ご主人様」
スター

その声を最後に、トレースの気配が途切れる。ルウの命令を遂行しにいったのだ。

「……さて、教室に戻ろうか」

ルウは歩いて教室へと向かった。

私は学校を終えると、すぐに家に帰った。

いつもの道、いつもの風景が、とても長く感じる。早く、早く家に帰ってミリアお姉ちゃん探さなきゃ！

「ハア……ハア……ハア……」

もつと、もつと早く！

景色が流れる。どんどん速度を上げていく。私の体はかなり頑丈なので、少しの無茶はきく。今私はへたな自転車ぐらいなら余裕で抜ける。……でも、まだまだ足りない！

「くう……」

学校を出てから全力疾走なので、そろそろ息が切れてきた。でも、もうすぐ家だ、あとちょっと！

「ハア……ハア……ただいま！」

ばん！と派手に扉をあけて帰宅をお母さんに知らせる。

「行つてきます！」

ランドセルを放り出し、そのまま家を出る。

「待ちなさい！」

それを、お母さんが止めた。

私は扉に手をかけたまま、顔だけで振り返る。

「なに？急いでるから、早くして！」

「……ミリアはね、リンクのところにいるわ」

その言葉に、私は顔をしかめた。

「はあ！？あの変態！？あんなやつのお姉ちゃんいるの」

！？安心してられないじゃん！居場所わかってても心配ごと減らないし！とにかく、ありがとうお母さん！」

「え、リンクの家知ってるの？」

「知らない！けど、見つければ！」

私が作った道具の中に、『場所探査機』というものがある。

これは腕時計型の探査機で、動かないものの場所を探すことができる。これが今まで使えなかったのは、『ミリアのいるところ』では動かないものではないため、探せなかったのだ。

「『リンクの家』で探査開始！」

命令ののち、3秒後、その場所が腕時計のディスプレイに表示された。

「……………！！ここから二百メートル！？なんでこんなに近いの！？」

文句をいいつつ、クレアはその場所へと向かった。

「クレア！夕飯までには帰ってらっしゃい！」

サラはそう言って、見送った。

私は、ついにリンクの家、ミリアの居場所を見つけた。

あとは、説得するだけだ。

「……………待っててよ、お姉ちゃん！」

もう、一度とお父さんにあんなこと言わせない。だから。
帰ってきて。いや、連れて帰って見せる！

第51話　到着

あわただしくクレアが出て行ったあとのルウの家。

サラは携帯電話片手に、誰かと話していた。

「……これでもいいのよね、ルウ？」

「うん。ありがとう、サラ。これで、彼女たちは成長できる……」

電話の相手は、ルウ。学校は終わったが、まだ生徒会の仕事が残っているのだ。ちなみにサラは二日前に仕事は終わっていて、先に帰宅したのであった。

「……でもさ、ルウ。子供って親があれこれしなくても勝手に成長するもんよ？私がそうだったんだから」

「そうかもしれないね。君が言うんなら、説得力あるよ。でも、僕はこうして、成長を促してやりたいんだ。どんなにおせっかいだとわかっていてもね。……じゃあ、すぐに帰るから。準備して、待っててよ」

そう言って、電話が切れた。

「……まったく。家族のくせに素直じゃないんだから」
そう言ったサラの顔には笑みが浮かんでいた。

私はリンクの家を見つけると、拳銃、それも五十ミリの化け物銃で扉を撃ち抜いた。

轟音がとどろき、目の前にあつた扉は跡形もなく消し飛んでいた。私の傑作のうちの一つ、五十ミリ拳銃、その名も『ゾディア』。大木さえも一発でなぎ倒せるほどの破壊力がある。……強すぎて使い道がない、というのが欠点であるのを除けば、最高の一丁だ。ミリアお姉ちゃんをさらつた変態に氣遣うほど、私は人間ができていない。

お姉ちゃんを救うはずみとか言つて殺してやろうかしら、あの男。『リンク！リンク・ソル・ジェイド！出てきなさい！ミリアお姉ちゃんを返してもらうわよ！』

玄関は弾丸の余波にあたり、ボロボロになっている。もはや廃墟に近くなつた家で、私はお姉ちゃんを探す。

「……なんのようだ？クレア」

「来たわね、変質者」

黒髪、黒瞳、黒マントの全身黒に身を包んだリンクは、私の呼び出しにすぐに応えた。

「何のよう？それはさっき言つたでしょ。さあ、早くお姉ちゃんを返せ！」

拳銃を突きつけて、叫ぶ。

「へえ、お姉ちゃん、ねえ。たしかミリアってもうお前の家族じゃないんだらう？」

「違うわ。まだミリアお姉ちゃんは私のお姉ちゃんよ」

「ルウが言つたんだらう？家長の言うことには従う。それが人間の家族だろ？」

リンクの言葉に、私はすぐに切り返した。

「それは昔の悪風よ！今そんなこと言うやつ、いないわよ！」

「昔のならわしには従うものだろ？てか、ルウは正しいと思うぜ？」

「なんでよ」

「だって普通敵になるやつを家族には出来ねえよ。俺は別だぜ？俺は、死なねえからな」

リンクはひょうひょうと、そう言った。

「……心は死ぬわよ？殺してあげるわよ？」

じゃらじゃらと、コートから道具を取り出して、脅す。

「おいおいおいおいおい！どう考えても小4の持ち物じゃねえだろ！？針に、鉋、斧、それに……これなんだ？」

道具のひとつをリンクは指さして訊いてきた。

「これ？いいわよ教えてあげる。これは鋼鉄アイアンメイデンの処女。聞いたことあるでしょ？針だらけの拷問道具。昔、結構使われてたみたいだから、作った」

「作ったって、おい……」

「不思議？」

「不思議も何も……」

「これで、あんたの心の息の根止めてあげる」

「……！」

アイアンメイデンをリンクに投げつけて、私は人の気配のある二階へと上がった。あれは気をそらすための罠。目的はお姉ちゃんだ。ってことを忘れてはいけないのだ。

「……待ってて、もうすぐだから……！」
私は、二階にあった部屋の扉を開けた。

第52話　酔狂

「お姉ちゃん！」

バアン！

ミリアの部屋の扉が、大きな音とともに開かれた。

部屋のベッドに腰かけていたミリアとアゲハは、ビクリと肩をすくませたが、部屋に入ってきた人物を見て、目を見開いた。

「く、クレア？そ、そうしてここに……」

「あ、あなたは……」

「お姉ちゃん！大丈夫！？何にもされてない？アゲハは無事？ちゃんと生きてる？」

クレアはミリアに近付くと、そう矢継ぎ早にまくしたてた。

「え、ちよつとクレア？」

「早くでよう！こんな変態のいるとこ、いちやだめ！アゲハを連れて、早く！」

「え、え？」

クレアは答えを待つことなく、ミリアの手をとり、引っ張る。

「あ、アゲハ！」

「あ、うん！」

手を取られながら、ミリアはアゲハを呼んだ。彼女は言われなくとも、ついてきた。

「いい？私が引きつけるから、二人は家に向かって走って！」

「え？」

さきほどから二人は疑問符が絶えない。

「いいから！早く！」

クレアは下に降りると、リンクの姿を探す。

「今あいつはいないわ！早く！」

「え、だからなんで……」

「早く！」

クレアにせかされ、戸惑いながらも、玄関が崩壊したリンクの家を出た。

「……クハハ、やるねえ、お譲ちゃん」

リンクは悪ふざけなのか、物語に出てくるような吸血鬼の口調で言った。

何を勘違いしたのかは知らないが、どうやらクレアはリンクを敵だと思っっているようだ。

ここでまともな人間なら、誤解を解こうとするだろう。しかし、リンクは違った。

「よくも俺の夕食を奪ってくれたな？」

完全に、遊びで悪役になることを決めたのだ。

「……覚悟しなさい！ミリアお姉ちゃんが家に着くまで、私が相手してあげる！私の本気、見せてあげるわ！」

じゃらじゃらじゃらと、コートから大小さまざまな道具を取り出す。

道具、というよりは兵器に近いそれらは、すべてがクレアの手によくなじんだ。それは彼女が『ユージュアクション』を持っているからだけでなく、すべてが彼女自身の自作だからだろう。

「……さあ、勝負よ吸血鬼！」
クレアは、意思高らかに叫んだ。

第53話　覚悟と、戦闘と

「……今更なんの用だ、ミリア」

家に転がり込むように入ってきた彼女に、彼らしからぬ厳しい声でルウは言った。

「……おと、ルウさん」

「何の用かと訊いている。用がないなら出て行け。僕の家族に触れるな」

ミリアは急に悲しくなってきた。彼のこんな態度は、一緒に旅をしたミリアは一度や二度は見たことがある。けれど、それが自分に向いていることなど、今までなかった。

もう、このまま帰ってしまおうか。

そう、ミリアが思った時だ。

「お父さん！」

くじけかけたミリアを励ますように、リリーの声が飛び出てきた。

「……なんだい、リリー？」

「私はお父さんに感謝してる！でも、ミリア姉ちゃんにもおんなじぐらい感謝してるんだ！いいじゃん、別にアゲハ一人ぐらい！」

「敵になるかもしれないんだよ？」

打って変って優しく、諭すように言うルウ。彼は家族と敵とでは態度にひどく差がある。その差はサラは初めて見たが、サラ以外の面々には見慣れたものだった。

「いい！別に、敵に回ってもいい！私はみんなで暮らしたいんだ！コト姉とミリア姉ちゃん、アゲハにララにクレア、お父さん、サラさん！みんな一緒に暮らしたいんだ！もしできないなら、私はこの家を出ていく！もう目の前にいる人間を助けられない家にいる意味なんてない！」

「……………私も、リリー姉さんに賛成。私も、アゲハ、ミリア姉さんを含むみんなと一緒にいたい。できないなら、

私がここにいる理由はない」

控えめだけど、強いララの主張。

「私、ミリアお姉さんと、アゲ八さんとがいなければこの家はもう『ペンタグラム』じゃないと思う。『みんなの幸せのための家族』じゃなくなると思う。……私は『ペンタグラム』の娘であって、独断ですべてを決める亭主関白の娘になったつもりはないわ」

コトリが言ったのは、ルウがずっと前に言った理想論。

「……そうかもしれない。僕は、幸せな家族がほしい。親はいないけど、家族はできるから。幸せな家族と一緒に、ずっと過ごしていたい。……君たちは、ミリアとアゲ八に、家族でいてほしいんだね？」

正直な話、ルウはここまで強く主張されるとは思っていなかった。せいぜい、こうしたらだと提案するのが精一杯、と思っていたのだ。それをやるかに凌駕する強い主張。彼女たちの心のよりどころであるこの家を出ていくと言わしめるほど、彼女たちの決意と覚悟は半端なものではなかった。

「……クレア次第だよ」

「え？」

三人が口をそろえて言う。

「君たちの意思はわかった。でもクレアのことをまだ訊いていない。彼女がもし反対だったら、諦めるんだ」

その言葉に、三人は大はしゃぎした。

「やった！もう決まったようなんだ！」

「……………これで、ミリアが帰ってくる」

「新しい家族も増えるわ！」

彼女たちは、クレアが反対するなどということはみじんも考えていなかった。

ところは変わって、リンク邸、異界局。

もはや家と呼べなくなった建物で、黒装束の吸血鬼とコートを羽織った少女はまだ戦闘を続けていた。

両者ともが激戦で疲弊し、肩で息をしていた。無限の体力と生命力を誇る吸血鬼であるリンクさえも、だ。

「はあ……はあ……はあ……お、お前もんだよ……はあ……ふ、普通……お、俺に……ついてこれるなんて、はあ……オリンピック選手だって、はあ……あり得ねえぞ……」

「はあ……あ、あんたこそ……よく、五十ミリ銃弾何発も、はあ……食らって、生きてれるわね……化け物じゃないの？はあ……」
言いざま、クレアは再び拳銃を構え、照準をつけると同時に発射。
「グアッ……！！」

リンクの上半身と家の壁が吹き飛び、壁に風穴があく。

リンクは一瞬でもとにもどったが、疲労までは回復しないようだ。

「……っ。ミリアを探さなくていいのか？」

もはや体力勝負では戦えないと、リンクは口を開いた。ここまで追い詰められたのは、実に5635兆2436億5687万9982年ぶりだった。その時はまだ力の使いかたが慣れていなかったからだか、まさか全力でやってここまでやられるとは、本気で予想外だった。

「別に」

リンクの問いにクレアは簡潔に答え、銃弾を一発撃つ。

リンクはぎりぎりですれをよけ、続ける。

「いいのか？ミリアがどこにいくのか分かってねえんだろ？また探す羽目になるぜ？」

「いいの。お父さんのところにいるから」

クレアはまたも簡潔に答え、銃弾を一発。今度もぎりぎりですれ。

「ルウから逃げてきたんだろ？また逃げたかもしれねえぜ？」

これで、クレアを揺さぶるつもりだった。

……しかし。

「お姉ちゃんは家に帰るわ。お父さんだけなら、帰りはしないでしょうね」

「なら、早く――」

につこりとほほ笑んで、クレアは引き金を引いた。

「——でも、私達は『ペンタグラム』。暖かい家族がいる限り、ミリアお姉ちゃんはきつと戻る」
クレアはリリー達を一切疑うことなく、戦いきった。

第54話 家族、絆、そして……

「いたた……強いな、クレア」

勝利を確信したクレアが帰宅したあとのリンク邸。

リンクはボロボロになった黒装束を力を使って修復すると、やれやれと頭を振った。

「……まさかあんな子供にやられかけるとはな。俺も耄碌したものだ。……なあ、エリア？」

リンクは後ろの空間に話しかける。

「ほんとにね。あなたそろそろ引退かしら？……まあ、クレアの強さは意外だったけど」

これが、リンク唯一の誤算だった。

まさか小学4年生、それもいまだ不老の魔法もかけてもらえていないルウの娘にやられるとは思わなかった。

油断していたのは最初だけで、すぐに気を入れなおしたのだが、普段の圧倒的な戦闘は展開できなかった。

「……なにがあっただろうな」

心配そうにリンクがつぶやく。

「え？」

「いったいあの子に何があっただろうな。ちょっと腕が立つぐらいだったら何も思わねえが、俺と対等に戦える腕なんて、普通女が持てるもんじゃない。……いったい何が、あの子をあそこまで強くしたんだ？多分、まともな理由じゃねえはずだ。……その理由、今でも引きずってなきゃいいが……」

リンクはたいてい戦えば相手の環境を推測できる。それはよくマングなどで言われる『こぶしで語り合う』というものだが、今回クレアが語ったのは、彼女の強さ、それだけだった。

「……まあ、縁があったらまた会っさ。考えるのは、その時でいいや」

「……そう」

クレアの強さが十分にわかっただけでリンクは十分だった。別に相手の過去が知りたいわけではないのだ、クレアのことは考えても詮無いことと、思考を放棄した。

「さて、この家はどうすりゃいいんだ？まさか俺が喧嘩吹っ掛けておいてルウんとこに弁償させるわけにもいかないしなあ……」

「……まあ、サクラもいることだし、少しづつ建て直しましょ」

エリアは淡々といい、さっそく手近にあった元・玄関の木片を手にとった――

クレアが家に戻ると、ミリアがいた。

玄関にクレアを迎える格好で、みんなが集まっている。その中にミリアの姿があることを、クレアはすぐにわからなかった。

「……お姉ちゃん」

一瞬彼女は驚いた表情になって、そしてすぐにうれしそうな顔になる。

「……クレア。君に訊きたいことがある」

ミリアに飛びつこうとしたクレアを、ルウの質問が押しとどめた。

「……なに？」

ミリアに進む足を止め、ルウの方を向いてとげのある言い方でクレアは言った。

「君はミリアとアゲハが家にいてもいいのかい？アゲハは元君と戦った『イノベート』だよ？もし敵になったら——」

「いいわ」

言葉を言い終わらないうちに、クレアは答えた。

「私はアゲハもミリアお姉ちゃんも認める。もし敵になったとしても、殺さない。拷問もしない。話を聞いて、間違っていたら正し、正しかったら協力する。教えてくれなくても、絶対に暴力は使わない。敵でなければ、一緒に笑って、一緒に泣いて、一緒に怒って、一緒に喧嘩する。」

——それが、家族でしょ？」

ルウは、何も言えなくなった。リリー達は笑顔ではしゃぎ始めた。ルウは疑問に思った。男が怖くて、異常に敵に対して敏感な彼女が、『敵でもいい』と？

「……どうして、そんなにもアゲハを信じるんだい？君たち、一度も会話したことないだろう？それなのに、どうして？」

その質問に、玄関は静まり返った。ルウの様子が今までと違っていたからだ。彼は本気で疑問に思った。演技でも、成長を促すためのものでもなく単純にルウ個人として、なぜこんな見ず知らずの人間を信じれるのかが心底疑問だった。

「……それはね」

クレアはミリアの手を握り、一度姉の瞳を見る。

自信なさげだが、強い意志の感じれる瞳。その瞳を見て、クレアはさらに確信した。

ルウの方を向き、つないだ手を彼の方に向けて、言う。

「これは、お姉ちゃんと私との絆なの。このつないだ手はすぐに離せるけど、絆は切れない。私はお姉ちゃんを信じるし、お姉ちゃんも私を信じるという、誓いの。だから——私は、お姉ちゃんが信じたアゲハを、信じる！アゲハは家族にしても大丈夫だと感じたお姉ちゃんのご感覚を信じる！私はミリアお姉ちゃんとアゲハを、信じきる！たとえ敵に見えたとしても、信じてみせる！」

そこまでクレアが言った時だ。

パチパチパチ

拍手が、部屋の奥からした。

「よくいったわ、クレア」

それはクレアの母親、サラのものだった。

「信じた人の信じたものを信じる——口では言えても、実際にするのはとても難しいことね。誓った限りは、貫きなさいよ？」

クレアには、サラが急に母親らしくなったように感じた。

「あ、うん！もちろん！」

クレアは自信たっぷりに答えた。

するとサラはルウの方を向き、指をさしてしかりつけるように言

った。

「ルウ！あんだね、ここまで娘に言わせといて方針変えないなんてバカなこと言うんじゃないでしょうね！？」

ルウはサラの言葉に一瞬面食らったような顔した。

まさかサラにこう説教されるとは思っていなかったのだ。サラには何も指示をしていなかったのに、クレアに対する思いに心打たれて言ったのだろう。ルウは驚きの顔から緩やかないつものほほ笑みに戻ると、照れくさそうに言った。

「……………しかたないな。みんなが言うなら、認めてあげてもいいよ。ようこそ、我が家へ、アゲハ・ペンタグラム」

プイ、と顔をそむけてルウは言ったが、声には親愛の情が込められていた。

歓声が、娘たちの間で起こった。みんなが抱き合い、長女と新しい家族を歓迎する。

「よかったな、ミリア姉ちゃん！お帰り！」

「……………帰ってきてくれてありがとう」

「お帰り！ミリア姉さん！」

みんな口ぐちにおかえりと、帰宅を喜ぶ言葉を抱きしめながら言っていく。

「ちょ、ちょっとみんな！」

ミリアは、一度、抱きついてくる妹たちを止めた。

「どうしたの、お姉ちゃん」

「ちょっとしなきゃいけないことがあって」

ミリアはそう、嬉しそうにいった。

広い玄関で、ミリアはルウの前に立つ。アゲハも、それに倣って隣に立つ。

そして、元気よく、言う。

「よろしく願いします、お父さん」

「よろしく願いします！おじいちゃん！」

二人の少女は笑顔で、そう挨拶をした。

——こうして、『ペンタグラム』がまた一段と、騒がしく幸せなものになった。

第54話 家族、絆、そして……（後書き）

はい、ご愛読ありがとうございます、作者のコノハです！

これでいったんはパートは終わりと相成ります。

次からはそうですね、夏らしいと言えば夏らしい、学生らしいあるイベントから、になりますね。

そのイベントとはなんでしょう？想像してみてください。

では、今まで愚かで稚拙な文章を読んでいただき、ありがとうございます！
ざいました！

では、次の話へ、行きましょか。

コメント、ご感想お待ちしております！読者様の一言が、作者の勉強になります！よろしく願います！

第55話　夏休み直前の行事

ミリアお姉ちゃんが戻ってきて、アゲハが家族になってからもう三日が過ぎた。

最初こそアゲハの容姿に戸惑ったりもしたが、雰囲気が全然違うのですぐに慣れた。

面白いことにアゲハとはよく話が合う。趣味とか、美的センスとかがよくかぶるからだろう。アゲハも趣味はお裁縫とか言ってたし。朝一番に起きて朝食の支度をするのがアゲハの日課（まだ三日しかたっていないが）だった。お父さんは『僕の仕事兼趣味が……』とか嘆いていたが、アゲハの作った料理を食べると意外とまんざらでもない様子だった。

で、アゲハのその技術はどうやら生来のものらしい。

『イノベート』の『シナ』達にはもともと、そういう風に生活力があるよう『作られる』んだとか。

つまり、潜入するときに料理をつくれなかったり、ほどけた衣類を繕えなかったりしたら支障がでるから、遺伝子レベルに刻み込んでしまおう、というわけだ。

閑話休題。

ミリアお姉ちゃんは未だに未来視が使えない。どうやらアゲハと逃げていたときに見た未来があまりにも残酷だったためか、未来を見たくないというお姉ちゃんの深層意識が能力を封じているんだとか。時間がたつか使わざるを得ない状況になると使えるようになるようだけど、後者の方法では復活してほしくない。

現在はエリアに代わってもらっていた教職に復帰し、英語を教えているはずだ。

閑話休題。

私は三日間普通に過ごした。普通に学校に行って、普通に帰宅して、普通にご飯食べて、普通に家族とお話して、普通に道具や武器

の整備、調整をして、普通に道具や兵器の新作造って、普通に試して、普通にお風呂に入って、普通に寝た。

どこまでも普通でつまらなかったのだが、それはまあいいとしてだ。

今私はとてもあせっている。

今は放課後前の学活。担任の先生が、教壇で話していることが、私をあせらせていた。

「えーっと、明日から個人懇談を兼ねた家庭訪問が始まります！あしたからは4時間だけど、遊びすぎないようにね！」

昨日も言われた説明だ。個人懇談と家庭訪問の意味がわからなかったので、昨日家に帰って辞書で調べたら、こう出てきた。

『学校の教師や少年保護施設の職員が、児童・生徒の家庭環境を理解し、家庭と連絡を保ち教育上の効果を高めるため、その家庭を訪問すること』

『打ち解けて親しく話し合うこと』

……………え？

って、私は思った。

私の家庭環境って……………。

父、ルウ。白髪青い瞳の高校生。

母、サラ。赤い髪に赤い瞳の高校生。

長女、サラ。黒髪に茶色の瞳の英語教師。

姉、コトリ。金髪に金色の瞳の高校生。

姉、リリー。黄色の髪の黄色の瞳の高校生。

姉、ララ。白い髪に銀の瞳の高校生。

姪、アゲハ。黒髪に黒い瞳の現在職業なし。高校生になる予定。

所得、不明。謎の財源あり。

って、あれ？なんで父よりも長女のほうが外見年齢上なの？しかも全員が全員髪の色が違ったり、目の色が違ったりで、どこをどう頑張っても似ていない。

しかも、親しくって、一体何を話すの？

どう考えても前途洋々な気がするのだが……大丈夫だろうか？

第56話 家庭訪問

玻座真学校職員室。

事務机がいくつも並び、教員はその机の上でテストを作ったり、連絡用のプリントを作ったりしている。

そして今は、担任を持つ教員は最も移動が多くなる時期であった。家庭訪問はされる側は数分で済むが、する側は移動やら準備やらでかなり時間がかかるのだ。いかに効率よく回るかが家庭訪問で失敗しない秘訣であり、その道順を決めるのが一番悩むところであった。

「はあ……」

そして、その悩みに直面している教員が、ここにも一人。

クレアの担任、小藤楓^{ことづかみ}である。

黒く長い髪を後ろで一つにまとめた髪型に、ぱつちりと大きい黒の瞳。背は高く、スレンダーな体型。生徒思いで、ときどき熱血が入るいい先生である。

「一番最初がクレアさんかあ……」

彼女が頭を悩ませているのは、何も道順などという単純なものではない。クレアというある意味で問題児な生徒の家を最初に回らないといけないのが、なんとも不安だった。

手早く済めばいいが、クレアの家環境を考慮するとそうならない可能性の方が高い。

だから一番最後に回したいのだが、クレアが

『お父さんが家庭訪問は早い方がいいって言ってた。できれば一番最初に、だつてさ』

と言っていたので、最後にするわけにもいなくなってしまうのだ。

「不安だなあ……」

家庭訪問開始まであと30分。今から移動しても余裕で向こうの

家に着くだろう。

「……よし！いくか！」

パチンと両手で自分の頬を叩き、気合いを入れる。
個人懇談を兼ねているのである程度の時間はとれるのだ。大丈夫、大丈夫。

楓はそう言い聞かせると、クレアの家に向かった。

楓はクレアの家に着いた。

クレアの家はどこにでもあるような一軒家で、二階建ての普通の家だった。

楓は高校生であるクレアの両親がこんな家を持っていることに、ひどく驚いた。まだ自分だってマンション暮らしなのに。

ピンポン。

楓はインターフォンを押し、しばらく待った。

『はい』

すぐに返事があった。高校生らしい、まだ幼さの残る声だった。

「あの、クレアさんの担任の小藤楓です。家庭訪問に来たのですが……」

『ああ、クレアの担任さんですか。話は聞いています。少々お待ちください』

楓は言われた通り門扉の前で待つ。すぐに扉が開き、年に似合わない白髪頭の少年が出てきた。

「はじめまして、クレアの父です。どうぞお入りください」

「はじめまして…… よろしく願います」

少年が玄関の方へと楓を手招きし、楓は家に入った。

家の中に入ると、なぜか妙に広がった。外から見た限りではこんな広さはなかったのに、玄関からして広さがおかしい。まるで無理やり広げたような印象を受ける。

「ではリビングでお話ししましょうか」

導かれるまま、楓はリビングへと招かれた。

どう見ても彼は高校生で、楓よりは年下のはずなのに、どうしても下手に出てしまう。年齢に似合わない落ち着いた感じが、そうさせるのだろうか。

リビングはさらに広がった。8人かけのテーブルに、カウンターキッチン。コンロはとても大きくて、かなりの大鍋でもおけそうだ。

「かけてください」

少年が木製の椅子にすわり、楓も少年の向かい側に座る。

「あの、クレアさんは？」

「今上で道具作りをしています。……呼んできますようか？」

ええ、と楓が言くと、少年は「トレース」と短くつぶやいた。

すると、今まで誰もいなかったはずの少年の後ろに、少年そっくりの中性的な人間が現れた。

「トレース、クレアを呼んできてくれ。早めにね」

トレースと呼ばれた人間はそう短く命令されると、すぐに「了解」と言って、また消えた。

「あ、あの、さっきの人は……？」

楓がおっかなびっくりに訊いた。

「ああ、彼女はトレース。僕の友達で、今ちよつと遊びに来ていたんです。手品が得意だから、見せてやりたいって言ってきたかなかったですよ」

ああ、あれは手品だったんだ、と内心納得する。いや、納得せざるを得なかった、というところか。

「なあにお父さん！私いま忙しんだけど！？」

リビングに、かなり怒った様子のクレアが入ってきた。

彼女は楓の姿を見つけると、態度を一変させ、

「え、もう家庭訪問？時間早くない？……て、え？もう二時？うそ、いつのまに二時間も……っと、いらっしやい、先生」

そう言った。どうやらクレアは夢中になると時間を忘れるタイプのようだ。

「ええつと、では、始めます。クレアさんのことですが、学校での態度は比較的良好です」

クレアが少年から一つ椅子を開けた隣に座ってから、楓は話を始めた。

「勉強はとてもよくできています。ほかの子が知らないようなこともよく知っていて今からでも中学生になっても大丈夫、とも思います」

楓がそう言うと、

「中学生？高校にでも通える自信あるわよ、私」

そう胸を張ってクレアが言った。

「クレアはよく勉強できるみたいだね。僕は全然だから、誇らしいよ」

少年はそう言って、クレアの頭をなでた。

「……む、子供扱いしないでよ……」

そう言うクレアだが、手を振り払おうとはしなかった。

そんな様子をほほえましく見ながら、楓は次のことへと話を移す。「えつと、ですね、クレアさんはクラスでの付き合いに問題があ

りまして……」

「……問題？よく喧嘩するとかですか？」

「いえ、クレアさんはまったく喧嘩をしたりはしません。ただ……男の子とほとんど話さないのです」

そう楓が言った瞬間。

「私は男が嫌いなもの。嫌いなものと言葉を交わすほど、私は聖人君子じゃないわ」

感情を押し殺した声で、クレアが言った。

「……嫌い？」

「ええ。私は男が嫌い、怖い、嫌気がする。なんであんな喧嘩ばかりしてて、『武器がかっこいい』なんて言う連中と話さないといけないのよ」

それは、小学4年生がもつにはあまりに純粹で強烈な敵意だった。

「……クレアさんは、男の子が嫌いなんですね？でも、どうして

……」

「なんであなたにそんなこと教えなきゃいけないのよ」

理由を訊こうとした楓をさえぎり、クレアは辛辣に言った。

「……楓先生、訊かないであげてください。なにがあつたかは知りませんが、訊かれたくないことなのでしょう」

その言葉に、楓は不審に思った。

「……もしかしてあなたも知らないんですか？」

「……ええ。約束、ですから」
家族との約束を守り続ける少年に、楓は感心に近い感情を抱いた。

第57話 続・家庭訪問

「約束……ですか？」

楓は娘の事情を知らない理由に、疑問に思った。普通家族である人間の事情を知らないでそのまま過ごせるものだろうか、と。

「ええ。約束です。なにひとつ訊かない、でも家族として一緒に暮らそう。そう、クレアを引き取ったときに約束したんです。……約束は、守らないといけませんからね」

引き取った、ということは養子なんだ、と楓は二人の異常に近い年齢差を納得していた。

「ということは、クレアさんのことは誰も知らない、と？」

「いえ、サラ……母親が知っています。どうもサラにだけは心を許せるみたいで……」

そう少年が言うと、

「お母さんだけじゃない！ミリアお姉ちゃんにもリリーお姉ちゃんにもコトリお姉ちゃんもララお姉ちゃんにもちゃんと話した！」

クレアが即座に訂正を入れた。

「そうなの？じゃあ知らないのは僕だけ、かあ……ま、約束だからね」

そう言うだけで訊こうともしない少年に、楓は感心する。普通大人でも訊かずにはいられない状況であろう。好奇心旺盛な年頃なのに訊こうとする気持ちを抑えられるなんて、この人はよっぽど人間ができているんだろうな。

そう心の中で評価していると、ふと疑問がわいた。

「そう言えば、そのサラさんって人は？」

楓は小等部の教員なので、高等部の生徒とはかわりがないのだ。もし彼女が高等部も受け持っていたら、『赤髪の問題児』、サラ・イーストスカイの名を忘れるはずがないだろう。

「サラは今補習です。なんでも全教科で赤点取ったとか……。」

髪だけでなく紙まで赤いなんてな』って嫌味言われたらしいですよ。まったく、少しは勉強すればいいのに」

まるで本当の親のような口調で、少年は言った。あまりにその言葉が似合っていたので楓もつい、

「あはは、そうですね」

と愛想笑いをしていた。それは、教師が親にする対応であった。

「さて……ほかに何かお話はありませんか？」

少年が話を切り替えて言った。

「えっと……今は特にありませんね。あ、夏休みのことですが、これ、小冊子造りましたので目を通していてください」

テーブルの上に、『夏休みのしおり』と書かれた定番の小冊子を出す。少年はそれを受け取り、パラパラとめくる。

「……クレア、危険なことや火遊びはだめなんだってさ。武器作りは夏休みの間は控えないとね」

最初のほうの『夏休みの注意点』のところで、少年がクレアに言った。

「え、うそ！？……あ、ほんとだ。えゝ私の唯一の趣味が……」

武器作りなんてやめてください！と言いそうになったが、よく考えたら子供のすることだ、せいぜいエアガンでも造っているんだろう。そう見当をつけると、楓は、

「ほどほどにして下さったら構いませんよ。あんまり危険なのはいけません」

と、そう注釈した。

「ありがとう、先生！うん、あんまり危険なのは造らない！せいぜい腕が吹き飛ぶ程度で我慢しとく！じゃ、もういいよね、行きますす！」

そう言うつと確認もまたずにクレアは二階へと上がっていった。

「…………え？腕が吹き飛ぶ、程度？」
気付かなくてもいいような疑問に、楓は気付いた。

第58話 終・家庭訪問

「えつとあの、腕が吹き飛ぶ程度って……」

楓がおそるおそる訊く。まるでそれが触れてはならない話題であるかのように。

少年は楓の神妙な態度を気にせず、普通に答えた。

「ああ、冗談ですよ。クレアはおもちゃを作るのが好きでね、しよっちゅう新しいのを造ってはその武器の強さを逐一教えてくれるんです。ふふふ、びつくりさせてすみませんでした」

少年はほほ笑んで言った。

「そ、そうですか。では、私はそろそろ……」

楓が席を立とうとすると、

「あ、送りましょうか？」

少年が優しそうな笑みを楓に向けたままそう提案した。

楓はしばらく悩んだが、

「いえ、心遣いはありがとうございます、これからも回らなければいけないところがあるので……」

そう丁重に断った。

「そうですか。では玄関まで見送らせてください」

少年はそれで気落ちすることなく、微笑みを崩すことなく楓に言った。

「ありがとうございます」

楓はそう言っただけで席を立ち、玄関に向かう。少年もそれに続き、楓の後ろを歩くように進む。楓は玄関まで来ると脱いでいた靴をはいて、微笑みを絶やさないう少年の方を向いた。

「今日は時間をとらせてすみませんでした。もうすこし早く済ませるつもりだったんですが……」

「いえいえ、気にしないでください。僕はまだ学生なもので時間だけは有り余ってるんです。今日はどうもわざわざありがとうございます」

いました」

礼に対して礼で返す日本の礼節。それを二人はかわすと、

「……では、失礼します」

楓は一礼すると玄関の扉をあけ、不思議な広さのある家を出た。

少年は扉が閉まるまで楓を見送っていたが、扉が閉まるともうそこにあるのは普通の家で、不思議な広さのある家ではなかった。

「……なんか不思議……」

まるで、狐に化かされた気分だった。外から見れば普通なのに、一歩入れば不思議だらけ。それは家も中の住人も同じ。

クレアもそうだが、なにより楓が疑問に思ったのは、父を名乗る少年だった。

「………なんであんな笑いかた知ってるんだろ？」

少年が絶やさなかった、微笑み。とても自然で、それなりに整っていたが、それは楓がしたような愛想笑いではなく、もつと表面の

……何かをごまかす笑い方。

そこまでは楓にも気づけたが、なぜそんなことをしてるのかまではわからなかった。

「……ま、いつか」

不思議と、少年に対する疑問が氷解していった。それは急に、でも不自然ではなかった。

楓は次の家を目指して歩を進めた。家庭訪問はまだ始まったばかりだ。

……なぜ、少年、ルウに対しての疑問がなくなったのか？

その答えは明白だ。

いくら彼女とて、ここ琴乃若の住人であり、トレースの暗示作用を受けていることにはかわりないのだから。

第59話　沙耶と旅行！

流れるような白い雲。どこまでも続く、空と海の混じった水平線。照りつける太陽。そして、夏の風物詩、青く、広く、そして何よりも冷たい海。

「うわー！！！」

私はここ、琴乃若のはずれにある海に海水浴にきていた。この時期になるとここは観光客でにぎわうらしく、今も海水浴にきた人たちがこの着替え場所兼海の家からでも見えた。

「ははは、あまりはしやぎすぎてこけても知らないよ？」

普段着のお父さんが浜辺に向かって走り出した私に注意した。

「もう、クレアだってもう子供じゃないのよ？そう注意しなくてもいいんじゃない？」

同じく普段着のお母さんがお父さんをたしなめた。

「そうだね。……みんなは？」

「えつとね、ミリアお姉ちゃんたちはまだ水着に着替えてるよ！もうすぐ来ると思うから！」

この海には私、お父さんお母さん、ミリアお姉ちゃん、リリーお姉ちゃん、ララお姉ちゃん、アゲハ、それからあと一人、の8人で来た。お父さんとお母さんは泳ぐ気ゼロで、水着すら持つてきていない。どうやらお母さんは水が苦手で、お父さんは泳ぎが下手だから嫌らしい。

ちなみに私はいつものコートを羽織っている。コートは防水性だし、中に水着も来ているのでこのまま海に入っても何ら問題はない。すこし周りから変な眼で見られるぐらいだ。

「クレアー！」

「あ、沙耶！」

海の家から花柄ワンピースのかわいらしい水着で出てきたのは、私の親友、黒月沙耶。

彼女は私の浜辺まで走ってくると、一緒に泳ごう？と提案してた。

「あ、待つて。お姉ちゃんたち待たなきゃ」

「あ……うん！そうだね、皆で泳いだ方が楽しいよね！」

沙耶は最初は残念そうにしていたが、すぐに明るい顔になった。

「待たせてごめんね、クレア、沙耶ちゃん」

最初に出てきたのは、ミリアお姉ちゃんだった。

長い黒髪とミリアお姉ちゃんに合う清楚な白のセパレートタイプの水着を着ている彼女は、男どもが群がらないか心配になるほどきれいだった。

「どう、似合う？」

お姉ちゃんはそう言ってくるりとその場で一回転。

「似合う、似合うからあんまり目立たないで！」

もし男どもに目をつけられたらどうするのよ！

「え〜どうしてそんなこと言うのクレア？ミリアさんきれいだよ？」

「きれいだから困ってるの！」

私の気苦労、二人は全くわかってくれない。

そんな風に私が四苦八苦していると、海の家の方から声が聞こえた。

「お〜い！クレア！ミリア姉ちゃん！」

「みんな楽しんでる？」

「……………恥ずかしい」

リリーお姉ちゃんはスポーツ好きらしく競泳用の水着で、コトリお姉ちゃんが派手なオレンジのビキニ、ララお姉ちゃんは上は普通のスポーツブラのような水着で、下はジーパンを短く切ったような水着だった。ララお姉ちゃんが白のキャミソールしかけているところ見たことがない私としては、かなり新鮮な姿だった。

恥ずかしいというのだから、お姉ちゃんなりに冒険したんだろう。似合ってるからいいけど。

「…………さて、みんなで泳ご！」
私は沙耶の手を引いて海へ突進する。うわー！とかきやー！とか
声をあげていたかもしれない。沙耶も私とおんなじ感じた。
いつもよりも浮かれた私をお父さんたちはぽかんとした顔で眺め
ていたが、そんなの気にならない。

なぜなら今は、人生初の夏休み、なのだから。

第60話 前日の話

夏休み――

私は最初からそれがとても楽しみだった。

お父さんの話を聞いたからでもあるし、お母さんが学校生活で一番楽しいのは夏休みだって言っていたからでもあるし、なにより沙耶と遠出の話して盛り上がったからであろう。

あつという間に訪れた終業式の日、終礼が終わってからの教室でランドセルを背負った沙耶がこんな話を持ちかけてきた。

「ねえクレア、夏休み一緒に遊ばない？」

そこで私は誰かと一緒に遊んだことが一度もないことに気付いた。一緒に何をして遊ぶのだろう。

「……いいわよ」

興味の湧いた私はそう答えた。研究好きの私は興味のあることは研究しないと気が済まない性質たちなのだ。

「じゃあ、どっか遊びに行こうか！」

沙耶が満面の笑顔で訊いてくる。

「どこかって、どこに？」

私は遊びに行く時の相場なんか全く知らないの、そう訊くしかなかったのだ。

「うーん、この時期はやっぱり海、かなあ……」

「……海い？」

海に行つて何をするというのだろう。宝探し？海竜狩り？船で外国？

「なんでそんな不思議そうな顔するの？」

「え、だって海で何するのよ」

「泳ぐにきまつてるじゃない！」

……え、泳ぐ？

「……それだけ？」

「うん！楽しいよ！私も毎年行ってるけど飽きないもん！一緒にいこーね？」

「……お父さんに訊いてみる」

その時私は、そうとしか言えなかった。

んで、その日の夕飯のときにその話を切り出した。

「へえ、君が友達とねえ……」

友達と海に行つていい？と訊いたお父さんの反応が、これだ。

「いいの？悪いの？」

「いや、悪いとは思ってないよ、でももつたいないなあ……って」
「もつたいない？」

「うん、海にはちゃんと行くつもりだったから……」

お母さんがお父さんの言葉の続きを代弁した。

「そうなの？じゃ、今年は水着が無駄にならずに済むってこと！
？やったー！」

リリーお姉ちゃんが箸を持ったままガツポーズをする。

今年は、ってことは去年は無駄になったんだ……

「……………海、行く」

短く、でもうれしそうにララお姉ちゃんが言った。顔を赤らめて
いるのはなんでだろう？

「……そういうわけだから、私たちの方にそのお友達が付いてき
てもらっ、ということでしょうか？」

ミリアお姉ちゃんがそう提案した。

「うん！じゃあ沙耶に言ってくる！」

そうときまれば連絡しなきゃ！

私は椅子から飛び出すように降りると、自分の部屋へと向かった。

「……というわけで明日私の家族と一緒にに行くことに成ったんだけど……いい？」

『うん！全然オツケーだよ！……クレアの両親ってどんな人？怖くない？』

ああ、やっぱり気になるかな、そこ。

「大丈夫大丈夫！お父さんは男にしては優しいし、お母さんは子供っぽいけどいい人だよ！」

『そうなんだ〜へえ〜楽しみ！……あ、お母さんだ。じゃ、また明日！』

「うん、また明日7時、私の家に来て！」

『うん！』

ガチャリ。

こんな感じで、約束は取り付けた。

ベッドに横になり、天井を見上げる。

あゝ明日が楽しみ。早く朝がこないかなあ……

こうやって朝を望むのは何度めだろう。お父さんに引き取られてからはとても多くなった気がする。屋敷にいた時は明日なんて来なければいいか思っていたのに、ずいぶんな変化だ。

……これが幸せ、ってやつかな？

きっとそうなんだろう。

両親がいて、家族がいて、友達がいて、夏休みに自由に遊べる。

こんなこと、屋敷にいた時は想像もしてなかった。屋敷にいた時は生きていることも恨めしくて、なんでこんな目に遭うんだろう、そればかり考えていた。何度も死を望んで、でも怖いからできなく

て。

……でも、もう死にたいなんて思わないだろうな。

なんたつて、幸せなんだから。

第61話　海水浴、開始！

海、海、海！

見渡す限りの青い水！

一体、この海に向こうには何があるのだろうか？

ああ、知りたいな！

「クレア、行きすぎではいけませんよ」

「あ、わかつてるって！」

浅瀬で遊んでいたら、私の思考を読み取ったみたいにミリアお姉ちゃんが忠告してきた。

「あはは、なんかクレアそのまま向こう岸まで泳いでやる、って顔してたもん、誰でもわかるよ？」

「む、そうなの？」

そんなわかりやすい顔してったっけ、私？

ふと気になって周りを見渡すと、皆がほかの観光客にまぎれてだかはつきりと見えた。

みんな思い思いの方法で、思う存分海を楽しんでいる。

お父さんお母さんは浜のビーチパラソルの下で二人つきり（ほか）に観光客もいるのだが、で楽しそうに会話している。

リリーお姉ちゃん、コトリお姉ちゃん、ララお姉ちゃんの三人は姉妹仲良くビーチボールで遊んでいる。……ララお姉ちゃんがアクティブに遊んでるとこ初めて見た。結構楽しそうに遊ぶんだなあ……。顔は無表情のままだけど。

ということはミリアお姉ちゃんとアゲハだけが私たちのお守をしてくれているのか。

「アゲハ、遊んできたら？」

ミリアお姉ちゃんが母親っぽくそう言っていると彼女は、

「え……いいの？じゃあ……」

そう言っただけでララお姉ちゃんのところへと向かって行った。

「ごめんね、お姉ちゃん」

私は一応そう言っておく。お姉ちゃんだって遊びたいはずなのに、私たちがいるせいで遊べなくなってしまったから。

「子供はそんなこと気にしないでいいの！私はクレアと沙耶ちゃんと遊べるだけで十分よ」

「私も！」

沙耶がうれしそうに言う。

「クレアはうれしくないの？」

「……そんなわけじゃない。うれしいわ、ありがとう、ミリアお姉ちゃん」

「どういたしまして」

私はコートのまま、遊びを再開する。

んゝ今度はもぐってみよう。どこまで潜れるかな？

浅瀬だからそう深くはないけど、試してみたい。

そう思うと同時に、私はもぐった。

「くすくす、あんなに楽しそうにしてる。よかったよかった。来て正解だったね、サラ」

ルウは海を見ながら、となりで子供たちの遊ぶ様を見てほほ笑んでいるサラにそう言った。

「……そうね」

サラも海を見たまま答える。

彼女は『家族』と海に来たということよりも、『ルウ』と海に来たということがうれしくてうれしくてたまらないのだ。

サラは感情が高ぶりすぎるとかえって冷静になるようで、今もその状態になっていた。

「……ルウさあ……私女の子よ？しかも完璧フリーの。一緒に泳ごうとかみじんも思わないわけ？」

サラが不満げにつぶやいた。ルウが朴念仁なのは今に始まったことではないが、海に来てまでその朴念仁っぷりを発揮することはないでしょうに、とか思いながら。

「出会ったときに川で自殺未遂していたのはどこの誰だったかな？水が苦手なのに泳ぎに誘えるわけないだろう？」

痛いところをつかれてぐうとうなるサラだったが、すぐに、

「今なら大丈夫かもしれないわよ？泳ぐ？」

そう強がった。

「……水着も持ってない人がどうやって？」

もう、サラには何も言えなくなってしまった。

「この……この……この……」

『この』、に続く罵倒の言葉が『朴念仁』以外に思いつかず、黙るサラ。もしここでルウに

『ボクネンジンって何？』と訊かれた場合まともに答えられるかどうかわからないからだ。

「……つく」

サラにできることと言えば、そっぱを向いて不機嫌を知らせるところぐらいだった。

——リリー、ララ、コトリ、アゲハの場合——

「たあ！」

ポーン、と丸いビーチボールが海上で上がる。

それをしたのは背の高い、ペンタグラム家の三女コトリだった。

金に輝く髪は太陽の光を反射して輝き、その先端は海の中でたゆたっている。

つまり彼女たちが水上バレーをしているのは足が届かないほどの深いところだった。身体は全て母なる海に預け、己の腕力、バランス感覚だけでボールを打つ。

「とあ！」

コトリのトスを受けたのは、超がつくほどのスポーツ大好き子、リリーである。

リリーはコトリからのふらふらと揺れるトスをなんとなく敵陣に返すと、すぐさまレシーブができる体制にうつる。溺れるかもと心配しているコトリとは大違いだ。

「……………！！」

無言で正確に受けやすいよう機械みたいに冷静にトスを上げたのは、終始無表情のララ。

一見無表情に見えるが、トスがきれいに決まったのを見て「……………よし」とうれしそうに言うところから見ても、楽しんでいるようだった。

「行きます！とりゃー！」

その練習の時のようなトスをすさまじい勢いでアタックしたのは、最近あたらしく家族になった吸血鬼、アゲハだった。

夜の住人のはずの吸血鬼が真昼間から海で遊ぶなど本来はあり得ないことなのだろうが、アゲハは『唯一変化を許容された吸血鬼』、シイナのクローンである。その本質に変わりはないようである。

彼女のアタックはリリーのブロックむなく海中に潜った。

「あゝあ！負けちゃった！」

悔しそうにリリーは言うが、どこか楽しそうな声だった。

——ふと、その時。

「……………え」

ララが、雑多な観光客の中に異質な『心』を見た。

ララは『心透視』という人の心を見透かす能力を持つ少女である。夏の海のようにたくさんさんの心を一度に見る状況は慣れていたが、今のように特殊な心の持ち主に会ったことは少なかった。

「……………気のせい」

はやる気持ちを抑えながら、彼女はそうつぶやいた。

そう決めると、ララはもうそのことは気に留めず、リリー達との水上バレーに集中した。

そんな風に各々《おのおの》が過しているうちに、あつという
間に時間が過ぎた。

第62話　夜の浜辺で

昼間にぎわっていた海も、夜はめっきり客は減る。

しかし、カップルたちには大盛況である。

浜辺に座ってみればその理由がわかるだろう。

前を見れば広大な夜の海が見え、上を見れば幾千幾万の星と灯りをとす月が見え、横を見れば恋しい彼／彼女がいる。

どこを見てもうつとりするほどきれいで、なおかつそれは恋人も楽しめる。最高のデートスポットと言えるのではないだろうか。

たとえ一人でいたとしても、海の魅力は消えはしない。

前を向いて寄せては返す波と戯れてもいいし、上をみて無限の宇宙に思いを馳せてもいい。浜で砂に絵を描くのも面白いかもしれない。こちらはいささか子供じみているが。

広大、流麗、それが海。昼間はその恩恵にあずかり、夜はその美しさを全身で感じる。

それを楽しむために、海のそばに旅館があるのだ。

「……………ここにいた」

しかし――

「……………あなた、誰」

楽しむ、という以外の目的で今ここにいる人間も、少なからずいる。

その人物は、短めだけれどこの夜でも十分に映える銀の髪を持っていて、瞳もその色と同じで、銀色だった。

昼は冒険してラフな水着に挑戦していたが、今はいつもの普段着、純白のキャミソールだった。このまま寝巻にも使えるため、服装に頓着しない彼女としては便利でこの服を重宝している。

彼女の名を、ララ・ペンタグラムといった。

他人の心を盗み見ることのできる、特異な少女。

ララに話しかけられた人物はひどくはかなげだった。

波打ち際でララの方を向き、彼女を観察——いや、ただじつと見ている。ほほ笑んでいるはずなのに、そこにはかすかな悲しみの色さえあって、それが彼女のイメージをより一層はかなげなものにしていた。

黒髪の長髪で、瞳は夜に同化する黒という自己主張の激しい色のはずなのに、その13歳ごろの少女の印象は『はかなげ』以外に変わることはない。

存在しているはずなのにどこか存在を感じれない。

輪郭があるはずなのに、それがぼやけて見えるような錯覚さえ起きる。

少女は小首をかしげる動作をした後、ララに向かって一言、

「……………私が誰か……………？……………それが一体……………誰にわかると……………言うのでしょうか……………」

声もか細く、注意して聞かなければ今すぐにでも消え入りそうなものだった。

本当に人間だろうか？

ララがそう思うのも、無理からぬことだった。

「……………あなたは人間。それはあなたの心が証明している」

感情の抜けた、いつもと変わらない口調。それを少女は不思議に思った。

「……………ねえ……………どうしてそんなに……………心を消そうとするの……………？」

……………そんなに心は……………いらない？……………

少女の問いは、ララの心を大きくかき乱した。

「……………いらない。心なんていらない」

いつになく真剣に主張するララの声には、何の感情の色もなかった。あるとするなら、無職の雪のような白だろう。

「……………私は心が好き……………誰もが持っていて……………誰

一人として同じものはないから……でも、あなたはど
うして……… いらなんなんてこと言うの………？」

「……… なぜ、ここにいるの？あなた、
なぜここに来たの？」

少女の問いには答えず、ララは問い詰める。

少女はしらばつくれたように首をかしげると、ただ一言まるで人
ごとのように、

「……… 私は死ににきました……… ここで、海で果てるため
に………」

ララはそれを聞いても何も動じない。それは言葉よりも少女の心
の中の方がよっぽどはつきりと感情が詰まっているからだった。

つまり——深い悲しみと、諦め。

海で果てたい、そう思うほど少女の状況は切迫しているのだろう
か。はかなげな印象もそのためなのだろうか。

「……… なぜ諦めるの？」
少女の悲しみの心にたまらなくなってララが訊いた。

「……… あきらめるしか……… ないからで
す……… あきらめないと、あの子にも、迷惑が………」

その時、淡く切なく少女の胸が痛んだのを、ララの目ははつきり
と見た。

ララも少女につられて胸が締め付けられるように痛んだ。

少女は恋をしているのだろう——『あの子』という誰かに。

ふと——おかしいことにララは気がついた。

年端もいかぬ少女が死に場所を選ぶ状況なんて、不治の病ぐらい
なものと思当をララはつけていたがそれだと少女の諦めにはつな
がらない。

——まさか。

と、ララは今度こそ気付いた。

はかなげな少女の体がかすかにふるえていて、そして少女はそれ

を必死で隠そうとしていることに。

「……………誰があなたを狙っている？」

そう、ララが訊いた瞬間。

——どうしてこの人は私のことを知っているんだろう？

発せられるはずのない声が、ララの耳には届いた。

それは、とても澄んで、突き抜けるような高さの美しい声だった。

「……………あなたの名前を教えて」

「……………それは……………言えません……………」

——崇なんて名前出したら、すぐに逃げらちゃう。……………そ

んなのはしたくないなあ。さびしいから……………一人で死ぬのは嫌だから……………

そんな声を、またララは聞いた。

「……………崇家の人間。大丈夫、私は逃げたりしない」

——！！………なんで、この人は私のことがこんなにわかるんだろう？

「私はあなたの味方。一体誰に狙われているの」

少し強く、ララは言った。

「……………」

——もしかしたら、助けてくれるのかな……………だったら、

助けてほしいよ……………もう、こんな生活やだよ……………助けてよ……………

少女の無言のSOSを、ララは確実に聞いた。そして、まったく微塵もかけらも迷わずに、言いきった。

「……………助ける。絶対に助けて見せる。だからもう、安心していいよ」

それは、ルウがララを娘にする時に言った言葉と変わらないことを、ララは言ってから気付いた。

——助けて、見せる
ララは胸中で、たしかに誓う。

第63話　暴力の崇

崇家。
たたり

古来より武によってこの琴乃若をおさめ、現在もその暴力の力を駆使し、街の中心となっている――

という、設定のもと、造られたのが崇だった。

柊、帝、崇の俗に言う三家は、おもに頂点の一家、そして頂点に従う二家で分かれている。

その力は絶大で、暴力は世界の中でも随一だが、崇家が頂点に立つことは古来においてもなかった。

しかしその暴力という力の性質上、崇家が一番発言力を有するのは当然の成り行きというものである。

崇家の造りは基本的には極道、やくざを変わりはないが、犯罪行為を一切していないということで大きな差異がある。彼らは暴力を振るう相手をけして間違わないのである。

そんな崇家だったが、今現在彼らにはほかの両家には絶対に言えない秘密があった。

家の根幹、党首のことである。

崇家党首はほかの両家の党首とはわけが違う。暴力を統括する立場に生まれたのだから、幼い時よりその腕を磨く。ひたすら戦闘術や殺人術を教え込まれるのである。模擬戦闘から、実際の戦闘までさまざまな訓練を修めて初めて、崇家党首を名乗ることが許されるのだ。ただ党首の家に生まれればいいというわけではない。できそこないは殺されこそしないが追放され、一般の生活を強いられることになる。

そして先代崇家党首、崇　若土^{わかと}は歴史上でもたぐいまれなる才を持っていた。

戦闘技能はもちろんのこと、人心掌握にもたけていて、すぐに部下の忠誠心を極限まで高めた。そして暴れ馬のような崇を完全に統

括し、それだけでなく史上初めて三家の頂点を崇家にするほどの能力を見せた。

しかし、そんな若土も齡四十にして何者かに暗殺され、この世を去った。

あまりにも唐突過ぎる死に、誰もが耳を疑い、自らの頭の不調を信じた。しかしどれほど否定しても若土が死んだという事実は動かせない。

呆けていても時間は過ぎる。崇家の人間はすぐにも新たな指導者が必要だった。

そして、若土の子供はたった一人。歴代の崇家党首は何人も子供がいるのに対し、若土だけは一人しか子供がいなかったのだ。

それだけでなく、その子供はまだ十二歳になったばかりで、訓練も初めたばかりの年頃だった。

その子供が成人し、崇家を引つ張っていけるようになるまで待つていたら、家は崩壊してしまう。優秀すぎた若土の後釜に正統後継者以外の人間が居座るなど、忠誠心の高い崇の人間は考えもしなかったのである。

しかたなく、その子供を崇の党首に選び、その子の補佐を大人がやるということでは一時は決まった。

しかし、問題は山積みだった。

その子供は病弱で、とても崇の厳しい訓練に耐えられるような体ではなかったのである。

それだけでなく、子供は全てのことに無関心で、崇のことに興味を抱かず、治めようともしない。

年端もいかぬ子供を三家党首の会議に出すわけにもいかず、学校に通わせ、教師と一緒に離れで勉学に励ます以外、大人達はなにもしることがなくなった。

子供は勉強はまじめにやるらしく、成績はどんどん伸びていった。そして、ようやく大人達が指導者としてなら崇家に十分ふさわしいかもと希望を見出した時だった。

その子供が、『死に行きます、さようなら』と書置きを残して失踪した。

とたんに祟家はパニックになった。

唯一の希望を見出したと同時にその希望がついえたようなものだ、彼らの絶望は計り知れない。

幹部の人間は総じて部下に子供を探すように命じ、そして普段はめったに前線に出ない彼らも、率先して探しに出た。

街という街を探し、宿という宿を探し、家という家を探し――
まるでつい最近のクレア達のようにであった。探す人数ははるかにこちらの方が上だが。

何日も何日も探しても見つからない子供について大人達は諦めかけていた。

もう、死んでしまったのではないだろうか。

そう、誰もが思った。その時だった。

「海へ行つてみるみたいです！」

そう、部下の誰かが言った。

その言葉に、祟家の人間はまた希望に満ちた表情になる。

「じゃあ、さっそくお嬢様を……」

「まちなさい」

今すぐにでも保護しようとはやる部下を、幹部が押しとどめた。

「お嬢様はおそらく何か事情があつてあのような奇行に走られたのでしょうか。その事情も察せずに不用意に近づいて手首を切られても困ります。……しばらく、その事情を遠くから見守りましょう」

そういう彼は、子供の一番のお付きの部下で、よく頭が切れた。子供のことを慮るその心意気だけでなく、監視させることに抵抗を抱かせない言い回しをすぐ思いつくあたりも、周到と言えた。

「……では、一週間ほど、見守りましょう」

その決定に誰もがうなずき、反対する人間は誰もいなかった。

これが、つい一週間前のことである。
そして今日夜10時、事は動き出す――

第64話　動き出す事件

夜の浜辺、点々とカッパルがいることを除けば無人の空間に少女とララはいた。

少女はどこまでもはかなげな印象を持ち、そして今すぐにでも消えてしまいそうなほど、その存在が希薄だった。

ララはそんな少女を救おうと誓い、今その事情を聞くつもりとているところだった。

少女もララも、とても涼しげな顔で向かい合っているが、少女の心中は決して穏やかなものではなかった。

「……………私の……………学校でのお友達……………その子が……………人質に取られて……………」

人質。その言葉でララは平和な日常が終わりを告げたことを悟った。自ら呼びこんだこととはいえ、後悔の念がないわけではない。

「……………そして……………彼らはただ一言、『死ね、そうすれば助けてやる』……………そう、言いました……………」

「……………」
ララは絶句する。普段から無口なほうだが、あいた口がふさがらない状況というのは珍しいことだった。

「……………なんて名乗ってた……………」

「……………」
『あんたの親父につぶされた者』……………

「……………とだけ……………」

ララは少しほつとする。また『イノベート』の仕業ではないかと心配していたのだ。

その心配は杞憂だったわけだが、だからと言って少女の不安が消え去ったわけではない。

「……………」
「……………一緒にその子を探そう……………」

「……………」
「……………え……………」

少女が言葉を失うのも無理はない。そんな探そうと思って探せる

ものではない。祟家の力を総動員しても少女一人見つけるのに時間がかかったのだ、少女一人では何年かかることやらわからない。それはララが加わったとしても同じである。

「……………私の妹に、人探しが得意な子が一人いる。その子を当たれば、見つければ」

ララにはクレアなら探せると確信していた。吸血鬼の家にいたミアを探し出し、そして助け出した彼女ならできると信じていた。そうときまればクレアに言いに行くだけだ、とララが振りむいた時……………

「……………誰」

黒服達が、何十人も二人を取り囲んでいた。ララは警戒し、少女をかばうように両手を広げた。

「……………大丈夫です……………私の部下……………」

……………です……………」

そう少女は油断しきって言った。少女の中の風景でこの黒服達が存在するのは森に木があるのと同じように当たり前のことで、なんの疑問も抱く余地はそこにはない。

……………もし、本当に彼らが祟家の黒服達なら、ララもこうは警戒しなかったはずだ。

「……………あなたの部下はあなたをとらえようとするものなの」

心を見透かすララには、黒服達の意図が完全に見えていた。

——この女をとらえて殺せば——

——俺達には一生遊んで暮らせる金が——

そんな黒い意志を見て、ララは一瞬酔いそうになる。しかし、今少女を守る人間が自分しかない以上、倒れたりスキをみせるわけにはいかなかった。

「……………どういうことですか……………」

……………?」

「……………この人達はあなたを殺そうと画策し……………」

ている。味方ではない」

そうララが言うと、黒服達の間にはさざめきが走った。

「おい、なんで俺達のこと知ってる？」

リーダーらしき人間がララに詰め寄った。

「まさか、こいつ」

「俺の心を、読んでいるのか？」――

ララがリーダーらしき人間の声で、そう言った。その言葉は男が思ったことと、一言一句同じだった。

「……………化け物、が……………！」

リーダーが何やら部下に指示をした。そうすると、黒服達の間には殺気が走る。

それを少女は感じることはできなかったが、心の読めるララにはひしひしと、殺気以上のより詳しい感情をダイレクトに感じていた。

「……………化け物は、どっち」

そうつぶやくと同時に、黒服達がララと少女に躍りかかった。

「……………！！！！」

ララは抵抗しようと試みるが、あまりの手の多さに、何もできなかった。

あっという間につかまり、後ろ手に手を回される。

「……………！！」

つかまる瞬間、ララは何かを落としたが、黒服達は気付く様子を見せない。

「……………いや……………離して……………」

……………！！

少女はララが諦めてもまだ抵抗していたが、黒服達に何か布を口にあてられると、静かになった。少女が意識を失うのを確認すると黒服達は少女を担ぎ、どこかへ連れ去ろうとする。

「……………つく」

ララも口に布を当てられ、意識を失った。

――私はどうなるのだろうか？

そんな風に、ララは思った。そう思っただけで、恐怖もなければ逃げようとも思わなかった。なるようになる、そうどこか諦観めいた考えが、ララの中にはあった。

「そんなバカな！！早くあの屑ども捕えろ！拷問しろ！殺せ！早く！急げ馬鹿ども！」

そう口汚く叫んでいるのは、少女のお付きの男だった。冷静沈着の仮面を全力で放り投げ、あらん限りに叫んでいる。

まるで、あの黒服達が完全に想定外だったとでもいうように。

「なぜお嬢様をつけ狙う銀蠅が存在することを感じれなかった！お嬢様はその手の訓練はできないのだぞ！その代わりに貴様ら愚図をお嬢様の周りに張らせていたのに、何たるざまだ！

貴様らお嬢様に何かあってみろ、その首引きちぎって体を引きまわし、街頭にさらしてその醜態を街中に知らしめてくれるわ！とつとと探せゴミ虫ども！あの存在するのめいかかわしい地球の塵どもをとつと探して、苦痛という苦痛を味わわせ、死という死を経験させてやるのだ！

それもできないというのなら、われらゴミは一族郎党一人残らずこの海に沈んでもらうぞ！さあ、早くしろ！」

指示をしながらまるで訓練中の軍隊のように罵声を浴びせる彼に、部下は戸惑いながらも従っている。

少女の敵を見逃した落ち度が、そうさせているのかもしれない。

「やつらを殺せ！ゴミを掃除したところで、ほめられこそすれ罪にはならん！とっととみつけて掃除しろ！排除しろ！お嬢様を守り抜け！」

あの少女をさらった黒服達は、崇家の人間ではなかったのだ。黒服を装い、少女をさらいやすくするための変装だったのだ。そのことに黒服達が少女を眠らせ、さらう一瞬前まで気付かなかったという事実が、彼らの熱意を上げているのだろう。

「……………すこし静かにしてくれませんか？娘たちが寝ているので……………」

「殺せ！殺せ！砕け！ヤキを入れる！……………つて、君、なんの用かな？」

少年が声をかけると同時に、仮面をかぶりなおせるその意思には感服ものだが、もうすでにその少年は叫び声を聞いていた。

「……………あの、攫われた人って……………崇家のお譲さんですよね？」
「だったらどうしたというのです？子供はそろそろ眠る時間ですよ、こんなところでいいのですか？」

あくまで冷静に、男は少年を引き返そうとする。

「いや、協力させてください。どうもうちの娘と一緒に、攫われちゃったみたいで……」

少年、ルウ・ペンタグラムは優しくそうにそうほほ笑んだ。

第65話　崇とルウ

旅館、琴乃若。ごく普通のありふれた、いい具合にさびれた人気の旅館である。

けして支障はでないが景観的に少しさびれていて、絶妙に『旅館つばさ』を醸し出している。

そしてその一室、リゾートと休息の楽園であるはずの部屋は、二人の人間によって殺伐と剣呑の楽園へと姿を変えていた。

崇家の一人娘のお付きと、ルウによって。

「……………ふうん、それですか。事情はわかりました。つまり僕の娘はあなたたちに巻き込まれた、ということですね」

淡々と、痛いところをつくルウ。

「……………ね、ねえルウ。こ、この人達あれでしょ？あの、や、や、やくざって言うか……………その、任侠っていうか……………」

サラはこの黒服に怯えっぱなしだ。顔は普通の好青年なのだが、いかんせんまとっている雰囲気がリンクやシイナのものに近いため、親近感は湧かない。正直これで顔がいかつかったらサラは裸足で飛び出していただろう。

「……………ま、気にするほどでもないよ。今はただの誘拐された親同士だし、仲良くやっていけるさ」

気楽ルウは言うが、サラはいつこの男がドスとかチャカとかいう武器を取り出さないか、気が気でない。

「……………それに、拳銃突きつけられて話し合いするのにはなれてるし」

クレアはよくルウに拳銃を向ける。……………まさかその経験が生かされるとは向けた本人も思っていないだろう。ちなみに今クレアは隣の部屋で眠っている。いくら早熟しているといっても小学4年、眠る時間は早いのだ。

それに加えてみんな疲れているからか、今起きているのはルウと

サラだけである。みんなクレアと一緒に眠ってしまった。もつと正確に言うのなら、クレアを寝かしつけようとして一緒に寝てしまったというところか。

「……さて、どうやって探しましょうか。まあ、僕も草の根を分けて探しますけど……」

ルウが神妙な面持ちで聞いた。

「私の部下を使って今探しています。……見つけ次第連れてくるように命じていますので、見つかったら来ると思います。……あ、ご安心を、ちゃんとあなたの分は残しておきますので」

「ありがとうございます」

何やら目的語が抜けただけで、不穏当な会話に聞こえるのは気のせいだろうか。

「えっと、言いたくなかったら言わなくていいけど、『何』を残しておくの？」

サラはその好奇心を抑えることができず、訊いた。訊いてしまった。

「ん、それはもちろん——」

「あのゴミ虫どもに決まっています。……ルウさんだって罰を与える権利がありますから。……あ、道具はどうします？こちらで用意しましょうか？」

「いえいえ、娘に借りますので。クレアは本当にいろんな道具を作っていますから、人に罰を与える道具だって、いくつもありませんよ」

罰、というよりは報復。誘拐犯がここに連れてこられた日には、この部屋はとたんに拷問室へと早変わりするのだろう。もはや罰を与えるなどという生易しい単語で済ませていいのかもあやしい。

「……」

訊かなきゃよかった、とサラは後悔するのであった。

ルウはララ達が攫われた浜辺を探していた。

もはやここには彼女達の残り香だつてないだろうに、それでもルウは神妙な面持ちで浜辺を探す。

「……何してんの？」

その奇妙な行動に、サラが訊いた。彼女は不思議そうに視線を落として何かを探すルウを見ていた。

「……ん、昔のことだよ」

視線を砂浜に落としたまま、ルウが語り始める。サラはそれを首をかしげながらも、聞く。「昔、今みたいなことがあったんだ。その時からララにはもし何かあったときに僕に居場所を教えられるようにする発信機を落とすと言つてあるんだ」

ララがいつも着ている白いキャミソールには、居場所を発信する発信機と、その電波を受信する受信機とが仕込まれていて、緊急時には受信機の方を落とし、ルウに居場所を知ってもらふ、という理屈だ。今彼が探しているのはその受信機である。

「……あれがあれば、すぐに彼女は見つかるよ。……何もされてなきやいいけど、大丈夫かな……」

「何弱気なこといつてんのよ、あんたらしくない。そんなにあの

子が攫われたのがショックなわけ？」

その言葉で、ルウの動きが止まる。

サラは今回のことさえも、ルウの計算であるような気がしてならなかった。ミリアの時のように、また何か策略しているのでは……そう思っていた。

「……当たり前だよ。僕はサラのことが心配で心配で仕方ないんだ」

いつも微笑みをたたえている彼の顔に、今は悲しみの表情しかなかった。

「彼女は人の心が読める。それは人の悪意も伝わりやすいってことだ。自分に対する悪意にさらされ続けてあの子の心に支障がでないか……心配だよ」

サラは人の心が読めるゆえに、人よりも心にダメージを負いやすいのだ。

「……ルウ、早く見つけましょう、私も受信機探すの手伝うわ。

……どんな形してるの？」

サラも危機感をおぼえ、砂浜に視線を落とす。

「……ありがとう。小さい箱の形をしてるから、すぐに見つかると思う」

ルウも受信機探しを再開する。

それからしばらく、といっても10分程度砂浜を探し続けると、サラが波打ち際に、月明かりを反射して淡く輝く物体があることに気付いた。

「あ！これじゃない、ルウ！」

サラはそこまで行くとそれを拾い上げ、ルウに見せる。

「あ、それだ！貸して！」

ルウはサラの手からその小箱をひつたみると、それをじっと見つめる。

「……ここから4キロ南。……いこうサラ！崇の人たちを集めて！」

ルウはそう言うと、南に向かって走り出した。信じられないほど速く、そして乱れがない。

「どこ行くのよ、ルウ！」

「さきに行ってる！獲物とお譲さんは南4キロの廃工場にいて伝えて！早くしないと全部終わっちゃってるよ、とも伝えといて！」

あまりのスピードに、ルウもはや声だけになった。

「……伝えろって、もしかして私が祟たたに？」
今度はがっくりと、肩を落とすサラであった。

第6話　攫われた先で

「なんですって！？もう見つけた！？」

旅館のルウの部屋で待機していた祟家お嬢様のお付きが、素っ頓狂な声を上げた。

その原因を作ったのは、ルウの伝言を伝えたサラであった。

「え、ええ。それと、早くしないと獲物がみんななくなってしまうよ、と……」

おっかなびつくりにはサラは言った。彼女は炎を使う以外はまったく普通（？）の女子高生なのだ。やくざと相對する経験がないため、怯えるばかりである。

「……わかりました。伝言ありがとうございました、サラさん。疲れたでしょう、もうお休みになつてはいかがですか？」

サラの中のやくざのイメージと違い、彼は妙に優しくサラに言った。。

「……ありがとうございます……」

事実、昼間目いっぱい遊んだせいかもしれないがサラは疲れていた。男の言葉に甘え、ふらふらと倒れ込むように向かいのクレア達の眠る部屋へと消えていった。

サラがいなくなると、優そつな青年はもうどこにもいなかった。

いるのは暴力の祟家、そのお嬢様のお付きの険しい表情のやくざであった。

「さあ、祟ろうか」

祟、その名の由来はまるで呪術のように陰険でしつこく、そして驚異的な力を持っていたからである。そして、お嬢様の次に発言力のある彼が祟ることを宣言するということは、誰かが間違いないこの世から消えてなくなることの意味していた。

「……あの銀蠅を、地上のゴミを、世界の塵をあるべき場所へと還すのだ。そう、ゴミはゴミ箱へ……な」

暗く、怪しく笑う彼は間違いなく、サラの想像していたやくざそのものだ。

「トレース！」

すさまじい速度で走る中、ルウが叫んだ。

「何だ、ルウ？」

それと同じ速度でついてきているのは、彼の道具、トレーストレスクリスタルだった。

ルウは今車並みの速度で走っているのだが、それについてくるトレースもまたさすがと言えた。

「いいかい、僕は今本気で怒ってる」

口調こそ穏やかで冷静だが、もしここにララがいたら、そのあまりの怒気に気を失っていただろう。それほどまで、ルウはララをさらった連中に怒りを感じていた。

「僕の大切な家族を傷つけて……許せない。許すものか」

一切の余計な言葉を省いた敵意。

「トレース、僕に力を貸せ。能力解放を認める」

「……了解」

ルウはトレースに人でももらいたいと思っている。だから彼はトレースの能力を封じるように命じ、普段は人並み以上の力を出せないようにしている。

そして今、ルウが能力解放を命じたということは、ありのままのトレースの力が振るわれるということだ。

そう、万能無限の秘宝、トレスクリスタルの力が。

「許せるものか。殺してやる」

鬼気迫る表情でつぶやくルウに、普段の優しそうな面影はまるでなかった。

私は暗い倉庫で目が覚めた。

周りにいた男たちが倉庫に放りこんでおくかと思っていたから、倉庫だとあたりをつけた。

私は後ろ手に縛られていて、足首でも縛られていた。ずいぶん女相手に用心なことだ。

私の隣にはすでに息絶えた祟の少女がいる——と覚悟してそちら

を向いたのだが、心の音が聞こえたのでまだ生きているようだ。

目は閉じられているため、おそらく眠っているのだろう。夢の中でぐらい平和であってほしいものだ。

周りをもっと観察してみる。

暗くてよくわからないが、ただ正面の壁に光が漏れていることから扉があるということがわかる。ここから這って行ったとしても、扉を開けることはかなわないはずだ。これは別段希望でもなんでもない。

次。

窓は天窓があるだけ。月明かりさえも入ってこないところを見ると上に何か乗っているのだろう。あんなところにもし登れたところの上に乘った何かが邪魔だ。これも希望ではない。

次。

コンクリートでできた壁は、非力な私で破れるほど弱くはない。

……自力で脱出は不可能。あとは父親に願いを託すことだけか。

自らの生命を他人にゆだねるのはとても気分が悪い。

もし失敗して死んだら、私は間違いなく父親を恨むだろう。そんな真似は出来るだけしたくない。

父親には本当に世話になった。今の自分があるのは父親のおかげだといっても過言ではないばかりかそれ以外には言いようがない。

「……………ん……………」

少女が目を覚ました。不快そうな顔をしながら、周りを見渡す。

——ここはどこ？わ、私はどうなるの？ま、まさか、殺される？

やはり女の子、こんな状況に立たされて冷静でいられるはずないか。

「……………大丈夫、もしもの時は私が身代わりになる」

——え、そんなことしてもらっても悪いよ……

「……………いいです……………私、もう覚悟はできてますから……

「……………」
本当によくできた子だ。こんな状況で他人を気遣える人間は少ない。

「……………」そう。でも、私はきつと身代わりになる」

こんな時、クレアはすごいと思う。クレアの過去の話は聞いていたが、こんな状況が3年も続いて、それで正気を保てるなんて、すごいことだと思う。

……………それとも、異常な状況を正常だと思うことで心を保っていたのか？

……………今クレアのことを考えていても詮無い。なんとかどこからか打開策を見つけないければ……………

「……………」あの……………私たち、ってやっぱり……………」

——殺されるのでしょうか——

……………心配になるのも無理はない。もし父親がこなかったら間違はなく私たち二人は仲良く殺される。……………殺されるだけで済めばよいが。

「……………」心配しないで。きっと助けはくる」

こんな時、年齢の上な私は不利だ。悲劇のヒロインになって泣き叫ぶことすらできない。……………たとえ一人でとらえられたとして、悲劇のヒロインになるのはまっぴらごめんだが。どうせなるならコメディのヒロインのほうが平和的だ。

「……………」そうでしょうか……………」

——本当に、大丈夫かな……………？不安だよう……………助けてよ、しゅう君——

こんな切実な心の願いを盗み聞きするのは本当に申し訳ないと思う。

「……………」あなたの名前は」

そう言えば聞いていなかったことを思い出し、せめて気晴らしになればと、少女に訊く。

「……………」崇まどか円……………私、まどかって言います……………」

「……………」

円、か。いい名前。幸里^{さち}なんて名前よりはよっぽど。

「……………」そう。よろしく、円

まるで普段となんら変わらない風に、私は言った。こづいづときは何気ない一言で安心するはず。

「……………」よろしく……………ララさん……………」

そして、そのもくろみはどうやら成功したようだ。

ああ、父親早く来ないかな。

第67話　暴走、それとも

廃工場に、男たちはいた。

崇家の制服に似せた黒服に身を包み、そこらにあったパイプいすに座ってたばこをふかしながら6人ほどのチームでトランプを興じている。

「……たくよお、なんであのガキとつとと殺^やらねんだ？」

カードを出した男が、不満げに言った。こうやって待機するのが嫌なのか、それとも早く殺したいのか。

「それは何度も言っただろう。依頼人からの命令で、『目覚めさせてからじっくりと恐怖を味わわせてからゆっくりと苦痛を与えて殺せ』って。……ガキにする注文じゃねえよなあ」

「はっ！ いいじゃねえか！ 俺がゆっくり愉しんでいいって言ってるようなもんだろうが！」

げらげらと笑い始めた男に、少し優しめの男が忠告する。

「やめとけよ。とつとつとやらなきゃしっぺ返しが来るぜ？ なんつ たつて相手は天下の崇家なんだからな」

正直、ここにいる誰もが緊張せずには居られなかった。

ここに連れてきた少女はただの少女ではないのだ。

暴力の振るう、最凶の崇家である。そんな家の令嬢をさらい、殺すということは崇家に喧嘩を売るようなものである。もし捕まったらただ殺されるではすまないだろう。それだけですめば恩の字である。

もうすでに居場所を突き止められ、いままさに崇家が全力で暴力を振るおうとしていることに気付いていない男たちは、それでもまだ樂觀していた。

いざとなれば、令嬢を盾に逃げればいい、とさらに崇家の怒りを買うような考えで。

「……ま、なんとかなるだろ。こつちには切り札もあるんだし」

祟家への切り札。それはララのことだ。

祟は一般への被害を一番に恐れている。もし一般市民である白髪の少女に被害が及ぶようなことは、まず避けようと考えるはずである。

だから、令嬢と少女、二人を人質にすればまず助かる、そう思っていた。

「そうだろ！じゃあ、早く飯買ってこい！金ならあるんだ早くしろ！」

げらげらと、男たちは笑う。

「ったくしゃあねえな……」

げらげらと笑いながら、男が廃工場からでようとした、その時――

「君たちはいったい、なぜどうしてそんなに笑っていられるのかな？今すぐ僕に殺されるっていうのに……」

声が、響いた。

その声はまぎれもなくトレースを従えたルウの声であつた。しかし、まるで雰囲気違った。

普段の優しい表情、柔らかな物腰、諭すような口調もなく、ただ怒りを、ただ敵意を、ただ殺意を表現したルウの雰囲気。

ルウの後ろにいるのは、本当にトレースだけなのか。彼に味方した死神がついていやしないか。そう思わせるほどに、ルウの雰囲気は恐ろしく、黒く、どこまでも暗かった。

吸血鬼リンクよりも黒く、禍々しい雰囲気を持ったルウ。

そんな彼に男たちは恐怖することさえも忘れていた。

「ねえ、答えてよ。どうして笑っていられるの？ 今から君たち皆殺しなんだよ？ それなのにどうしてそんなに愉快に笑っていられるのかな？ 教えてよ」

声は、声だけは優しくそうである。しかし、男たちはまるで刃物を突き付けられ、脅されているようにしか感じ得ない。

「……まあ、前置きはこんなものでいいかな。答えて。ララと崇の娘はどこ？」

男たちは威圧され、答えることすらできない。

「……うん、無視かあ。ま、いいか。……そうだね、ゲームをしよう。それがいい、だよ、トレース？」

後ろで従者のように待機しているトレースに、ルウが朗らかに訊いた。

「……キミがいいというなら、いい。ボクは何も反対しない」

「うん、オーケーだよ。じゃあ、ゲームをはじめよう」

男たちの方に向き直り、楽しそうにルウは宣言する。

「一人。一人だけ、助けてあげる。うちの娘と祟の娘、その居場所を最初に教えてくれた人を助けてあげる。……前提は覆らないから、安心してね?」

そう言っつていつものほほ笑みを彼らに向けるが、誰一人として聞いていなかった。

「俺知ってる! 倉庫の中だ! 南館の中央口!」

口ぐちにわれ先にと、そのたった三つの言葉を言う。それは全て重なり、合唱したようにも聞こえた。しかし。

「トレース、一番最初に発言したのは誰?」

心から楽しそうに、ルウは訊く。まるで童心に帰ったように、あどけなく。

「……右から三人目、黒髪長髪の男だ」

そうトレースが答えると、ルウはからからと笑った。

「アハハハハハハ！よかったね、右から三番目の黒髪長髪の男さん！じゃあ、その人を除いて――始めようか、虐殺を」

最後の部分だけトーンを落として、ルウは宣言する。その瞬間。チン、と、何か金属の音が聞こえた。

と、同時に何人かの男が、血まみれになって倒れ伏した。ほぼ一瞬で近付き、斬り、納刀し、元の入り口まで戻ったのである。そんな芸当ができるのは、トレースの能力を使って身体能力を極限まで高めたルウだけである。

「う、うわあああああああああああ！！！」

一気に、廃工場の中は阿鼻叫喚になった。命の危険のない右から三番目黒髪長髪の男だけが、涼しい顔で逃げ惑う仲間を見ている。そんな様子を見ながら、ルウはまたからかと子供のように笑った。

「ああ、久しぶりだな、こうやって運動するの。最近戦闘はサラとか娘にまかせつきりだったからなあ。たまには運動しとかないと動きが鈍っちゃうからね」

まるで整理体操でもしようとするかのような軽さで、ルウは視認できないほどの速度で双剣を振るう。いつもはセーブしているが、これが彼の本当の速度だった。この速度でいつもやるとたちまち敵が死ぬので抑えているのだ。

このルウの様子を見てみると、普段力を抑えているのが優しいからなのか、戦いをもっと楽しみたいからなのかどっちなのかわからなくなってくる。

「……ああ、やっぱりスカツとするね、こういうの。いつもは封じている力を解放するのって面白いね。……君もそう言えば能力を封じていたね。気分はどうだい？」

片手間で人を殺しながら、ルウは後ろのトレースに訊いた。

「……最高だよ、ルウ。キミがボクを使ってくれているというところが、何よりの幸福だ」

その会話のスキに、何人かの男たちが逃げようと出入り口に向か

った。

「そうなんだ。じゃあもつと幸せにしてあげるよ。さあ、逃げたあいつらを殺せ。命令だ。絶対に違えるな。さあ、行け！」

朗らかな笑顔のまま、ルウは男たちを指してそう言った。

「仰せのままに、ご主人様^{マイマスター}」

何の疑問も抱かず、どころかとてもうれしそうに、トレースは命令を実行する。

トレースが人を殺すのに何も目標のそばまで行って手を下す必要は全くない。

なぜなら彼女は万能無限の秘宝で、なんでもできるから万能無限なのだ。できないことなど何もない。そう、たとえ――

「その人間ども、自殺しろ」

そう、何気なく命令したことでも、それは実行されるのだ。
命令されたとたんに一心不乱に逃げようとしていた男たちの動き
がぴたりと止まる。

そして、しばらくして、倒れ伏した。自ら舌を噛み切ったのだ。
自殺したのは間違いなく彼らだが、それをさせたのは間違いなく
トレースの支配能力だ。

「……どうだ、ルウ？」

ルウの方を向き、ほほを染めて照れくさそうにほほ笑む。

「完璧。さすが僕の道具、いい仕事をする」

そんなトレースの頭をくしゃくしゃとなでるルウの手は、来た時
と全く変わらずきれいなままだった。

一人残された右から三番目黒髪長髪の男は、ただ茫然と今の一方
的過ぎる殺戮を見ていた。何も言わない。

——助けてくれるというのだ、気が変わらないうちに逃げよう——
そういう打算のもと、彼は黙って廃工場をあとにしようとした。

「あ、まって」

ルウが引きとめる。

ビクリと、男がひきつるように止まる。

「……な、なんですか？」

「ん、なんでもないよ、ただ、ちゃんと殺しとかなきゃって思っ

て」

まるで簡単なことのように、ルウは言った。

男はとたんに逆上した。

「おい……！てめえ、俺を助けてくれるって言ったじゃねえか！
てめえ約束破んのかよ！」

そう口汚く言う彼の息の根を止めようとしたトレースを、ルウが
手で制した。

ルウは男に向かって当たり前のような口調で、朗らかに言った。

「何言ってるんだよ。約束も何も言ったじゃないか。『前提は覆らない』って。君たちの前提は、『僕に皆殺しにされること』だよ？だから、君が僕に殺されるのも当たり前じゃないか。……そもそもさあ。人の娘攫っておいて生きて助かるうなんて、虫がよすぎると思わない？僕は怒ってるんだ、今は許してやるうなんてこれっぽちも思わないね。じゃあ、締めはトレース、君がやってよ。……そうだね、ううん、いい殺しかたが思いつかないなあ。人殺しなんて久しぶりだからアイデアが……って、そうだ！祟の分忘れてた！」
今まで完全に忘れていたような言い方でルウは右から三番目黒髪長髪の男にとつてとんでもないことを言った。

「よし、トレース、こいつをとらえて逃がすな。後で祟に引き渡す」

そう、氷のような口調で言ったルウに、すでに慈悲の文字はなかった。

「ああ、楽しかったなあ。……と、冗談はさておいてララを助けないと……」

本当に冗談だったのだろうか。それをトレースは心の底から訊きたかった。

第68話 解決

……心が消えていく。

次々、次々と心の声が消えていく。

一瞬、心の悲鳴が大きくなったかと思うと、遠く離れた私にも聞こえるほど大きな声で、心が最後の叫びをあげる。

——助けて！——

それ以来、その声は聞こえなくなる。

そんな一瞬がいくつもいくつも続き、そしてとたんに一切聞こえなくなる。

それは全ての敵が息絶えたことを私に教えていた。

……きつとまた父親が怒ったんだろう。でなければこんな速度で心が消えていくはずがない。

私にとって怒った父親は恐怖の代名詞でしかない。

全てを破壊し、全てを殺し、全てを終わらせることのできる存在。普通の父親は怒ったところで何もできないし、私の父親とてその普通の範疇を超える能力は一切有していない。

けれど、忌まわしきあの道具が父親の怒りの情熱そのままを実現させてしまうのだ。

自ら奴隷だ、ルウのことが好きだなどとたわごとをほざき純粹無垢な父親をたぶらかす汚らわしき道具。

あの道具のせいだ。

……っ。何を感情的になっているんだ、私は。

今はその道具のおかげで命が助かったのに、感謝するどころか恨もつとするなんて……

どうかしてる。

暗い倉庫に閉じ込められたせいで不安になっていたのかもしれない。

「……………助かるのでしょうか……………」

心の声が聞こえない円は不安そうにつぶやく。

「……………大丈夫、すぐ助かる」

確信を持って私は言う。

あまり心を読みすぎてもかわいそうなので私の視線は扉に向けたままだ。あまりに危機が迫ると心は声を発するが、そうでないときは読まない限り心が見えることはない。

——さて、驚かそうかな？——

不意に、そんな心が見えた。

「……………お父さん、普通に入ってきて」

私は大丈夫だけど隣にいる円がどうという反応をするか不安だから、父親の冗談をやる前から止めた。

「む、さすがララ。元気にしてるみたいだね」

血の匂いをぶんぶんさせた父親が扉を開けて入ってきた。

私と同じ白い髪は今は赤い模様がまばらにある。

青い長Tシャツにも赤いしみがあつて、さっきまで何をしていたかを物語っていた。

「……………あなたは……………？」

上ずった声で円が訊いた。

「僕はルウ。ルウ・ペンタグラム。ララの父親さ」

正直、どう見ても同年齢にしか見えない人間に父親と名乗られるのは気恥ずかしいものがある。

「……………父親……………ですか……………」

——え、でも、ララさんと年齢一緒に見えるけど…………——

まあ、そういう反応が普通だろう。それにしても私の父親というだけで円は警戒心を解いている。それほど血にまみれたこの男は信用に足るように見えたのだろうか？

「そうさ。僕はまぎれもなくララの父だ。……………まあ、外見のことは気にしないで。僕はよく子供と間違われるんだ。さあ、こんなところからは早くでしょうか。あまり長居したい場所じゃないだろう？」

優しくほほ笑みかける父親はまるで天使のようだった。血にまみ

れていなければ、私の心臓も跳ね上がっていたかもしれない。

「……………でも……………しゅう君が……………」
そう円が言うと同時に、

「ああ、そういえば僕迷ってしまってたね」

急にどうでもいい話を始めた。円はぽかんとなって父親を見る。

「その道でここみたいなところを見つけたんだよ。君たちがいるのかなって思つて扉を開けてみたら……………」

そこで父親は扉の外の私たちから見えないところから何かを引っ張った。

「……………うそ……………」

それは、きを失った少年だった。13歳ごろのあどけなさそうな少年だ。

——「しゅう君!」——

心の声と、円の叫びが重なる。

今まで平静を保っていたのに、しゅう君なる人物が現れたとたん、それが崩れた。

「……………まあ、これは僕からのプレゼント、というわけで……………さあ、帰ろうか? 親御さんも心配してるよ」

父親らしく、父親はそう言ったのであった。

それからその後日談を少々語ろうかと思う。

と言つてもそうそう語ることなどないに等しいのだが、まあ、一応。

助かった私たちはまず旅館に帰つて、家族との再会を果たした。私も円も半ば死ぬことを覚悟していたので、家族と会えるのがとてもうれしかった。

どう見てもやくざの人間に円が抱きついて泣いて再会を喜ぶところを見ると、私もそれをやらなければならないのかと思つたが、そういうことを父親とはしたくなかつたのでお礼を言うにとどめた。クレア達に抱きつこうかとも思つたが、彼女たちは寝ていて私が攫われたことすら知らないようだった。

しゅう君と呼ばれた少年は目覚めるとすぐに円を探し、円はしゅう君が起きるのを見ると落お付きにした以上に熱い抱擁を交わした。……きつと恋仲なのだろう、と私は推測する。

で、サラは父親が赤いしみを体中につけていることを見て戸惑っているようだったが、すぐに慣れたようだ。……慣れたように見せている、といった方がいいだろうか。まったく、そんな気遣いを見せている間があつたら早く思いを伝えて恋仲になつて結婚すればいいのに。早くサラのことを母親と呼びたいものだ。……まあ、しばらくは無理だろうが。

そして、私たちは明日からまた海水浴を楽しむのだ。

攫われたぐらいで家に帰るものか。……円は違うみたいだが、もう簡単に死ぬなどと思うような出来事が起きなければいい。

私は切実に、そう思ったのだった。

第69話　平穩という名の……

ララが攫われ、ルウに救われた次の日。

朝からルウが泊っている旅館はうるさくなっていた。

「えーーーーー！！！！ララお姉ちゃんが、攫われた!？」

クレアの叫びが眠そうにしているララに響く。

ララは一応報告しておこうかと家族を集めたのだが、それをさっそく後悔するのであった。

クレアと沙耶は心配そうにおろおろしているし、ミリアもリリーもララが攫われるということに驚いう手いるようだし、コトリとアゲハは冷静にララを気遣っている。

「……………クレア、私何もされていないから」

「……………ほんと?」

「……………ほんと」

そうララは言う、畳の上に横になった。

「……………私疲れたから寝る。今日はパス」
そのまま寝息を立てるほど疲れていたのだろう。ララはクレアが声をかけても起きることはなかった。

「……………このままで大丈夫かな?」

コトリが訊いた。今日も海で泳ぐのですぐにここに来れるが、それでも何分かかかってしまう。不安にさせるのではと心配なのだ。

「大丈夫だと思うよ」

「お父さん……………」

コトリの不安を、隣の部屋からルウの気遣うような声が和らげた。ルウは部屋に入るとララをいとおしげに見つめながら、コトリを安心させようとする。

「ララは強い子だからね。多分眠いだけだと思う。何か狼藉を働かれたというわけでもないし、心配することはないよ。……………まあ、いくら言っても聞かない子もいるけど」

ルウは今来た旅館のふすまに視線をやる。

すると、そこからどこまでも存在が不確かな、はかなげな少女――崇 円が入ってきた。少女は入ると部屋にいる人間に目もくれずにララのそばまで駆け寄った。

「…………… ララさん……………」

心配そうにララを見つめ、そうつぶやく。

「………… 大丈夫だよ、円ちゃん。ララは疲れているだけだから。君のせいじゃない」

ルウはそう諭すが、円が聞き入れる様子 wasn't. まるでララは自分が面倒をみると主張するかのように、ララのそばから離れようとはしない。

「いいかい、たとえララに何かがあつたとしても、君のせいじゃないんだ。なに君が気に病むことないんだよ？」

円はふるふると首を振ることで否定した。

「…………… 私が存在しなければ…………… ララさんは……………」

「僕はそういう考え方嫌いだよ。君が悪いわけじゃないのになんて君が自分の存在を否定するのさ。…………… そんなこと言っているとララが怒るよ？」

そう言われるとたんに円は口をつぐんだ。

「…………… でも…………… 私はここから動かない……………」

…………… ララさんの面倒は、私が見る……………」

しかし、それだけは円の中で曲げることでできないことだった。

ララがこうなつたのも自分のせい、だから付き添ってあげなきゃ…………

…………… そんなかわいらしい考えだった。

「…………… はあ。しかたないなあ。じゃあ、僕は遊んでいるからしっかりと頼むよ、ララのこと」

そう言つとルウはさつさと部屋を出て行ってしまった。下でサラを待たせていることを思いだしたせいだが、それに気付く可能性のあつた人間はすでに眠っている。

「…………… ねえクレア、私たちもいかない？」

沙耶が重たい空気に耐えきれなくなったのか、そう言った。

「……そうね」

円の気持ちをくみとって、クレアはそれに同意した。沙耶を連れて下まで行く。

「……ミリア姉ちゃんはどうするの？」

リリーが訊いた。リリーとコトリはここに残るつもりだった。今日はララと一緒に泳ぐ約束だったのだ、彼女がいないのに遊ぶわけにもいかないだろう。

「今日は単独で遊ぶわ。たまにはアゲハに母親らしいこととしてあげたいし」

寝起きなのか不機嫌そうに顔をしかめているアゲハの手を引いて、ミリアは部屋を出て行った。

「……みんな結構ドライなんだね……」

リリーがそう恨めしそうに言ったが、コトリも同じことを思っていた。

まあ、眠ったまま目覚めないととなるとそれはみんなここにいろつ。しかしララは眠ると言ったただけなのだ。とくに心配することでもないだろう。

……つまり、彼女たちが人一倍ララのことが心配なのだろう。

「………………ララさん…………」

円はどう見ても心配しすぎだが。

パシャパシャと、水が跳ねる音がする。

キヤーキヤーと、楽しげに悲鳴を上げる声がする。

いつもと変わらない、いつもの海水浴場。

そして、彼女たちも例にもれず楽しんでいた。

「……あつた！」

クレアが暑そうなコートを羽織ったまま、砂浜から何かを拾った。

「なにになに？何拾ったの？」

隣にいるスクール水着の沙耶が興味たつぷりに訊いた。

「これ？……なんだろう？武器じゃないからわかんない……」

クレアが手にしているのは、星のようでどこか生物めいている白い物体……つまり、ヒトデの死骸だった。きれいなものには変わりないが、正体を知ったらあまり触りたいものではないだろう。

クレア達は今日は海に入るのもそこそこに、宝探しをしていた。砂浜を探って、いろんな綺麗な宝を探そう、という子供らしい遊びである。宝と言っても貝殻だとか、今拾ったヒトデの死骸だとか、そんなものばかりなのだが、二人はとても楽しそうに砂浜を探している。

「ねえねえ、これなんかきれいじゃない？」

沙耶が手にしているのは、きらきらと光る何かの破片。

「それ、ガラスじゃない。危ないわね……」

たまにそんな海に似つかわしくない物まで拾ってしまうのも、クレアたちは面白かった。

「てことはまた係員さん？」

「そうね。行ってきたら？」

「うん！」

沙耶は嬉々とした表情で海の監視員のところに駆け出した。

海は未だに人が多いが、昨日ほどではない。まだ朝だからだろう。今ここにいるのは近くに住んでいる人間と、クレア達と同じように

近くの旅館やホテルに泊まった人たちだけだ。それでも百人近くいるのだから、人が夏に海を求める情熱を感じれるというものだ。

クレアが海を眺めているうちに、沙耶が戻ってきた。手にはなにか光るものが。

「ねえねえ！きれいな拾ったよ！見てみて！」

そう言っただけで出したのは、ペンダント。銀のチェーンと、装飾品のちりばめられたペンダントトップ。あまりに豪華すぎてクレアたちがつけても背伸びした子供にしか見えないうら。

「……それ、どこで拾ったの？」

そして、こんなきれいなものが落ちていて、あまつさえ拾ってきたなどと……一歩間違えれば泥棒である。

「そこに落ちてたの！とにかくクレア、つけてみて！きっとあうよ！」

沙耶は止めようとするクレアを無視して豪華なペンダントをつけようとする。

「ま、待って！私には似合わないから、沙耶がつけてよ！……それに、拾ってきたのは沙耶なんだし」

クレアがしつこく断ると、沙耶はそれ以上しつこくつけようとはしなかった。

「……じゃあ、私がつけるね」

そう言っただけでチェーンをかぶるようにして首につける。大人ようにつけられたものなので、子供である沙耶の頭ぐらいなら十分通るのだ。

「……え！？」

チェーンが沙耶の首に収まったと同時に、変化が起きた。

「……何よこれ！？」

クレアは何が起きたのか理解できず、叫ぶばかり。

「……え？」

変化が終わると、沙耶の首に豪華なペンダントはもうなかった。沙耶の首に代わりに巻かれていたのは、黒くて分厚い拘束や隷従

を示す――

首輪、
だった。

第70話　首の枷

「なに、それ？」

クレアがいぶかしげに訊いた。

沙耶は首に手をやってしきりに呻いているばかりで答ええない。しばらく呻いたあと、涙交じりの声で沙耶が言った。

「……とれない……」

茫然となった表情で、沙耶は言った。

「え？」

「とれない！これ、どうやってもとれない！」

首にはめられた首輪を取ろうと躍起になったはいいものの、沙耶の力ではどうやっても取れなかったのだ。

クレアはそれを聞いてナイフで切ろうかな、と思ったが首を傷つけるわけにはいかないし、沙耶に武器を持っていることを知られたくなかったため、沙耶の首に手をやって、力を入れた。

沙耶は驚いたように身をすくませたが、すぐにクレアに身を任せた。

「……！！」

ぎゅーっと引っ張る。

引っ張る。力の限り、引っ張る。

「く、苦しい……」

沙耶のその声で、クレアはハッとなって手を離れた。

「ご、ごめん……。でも、本当にとれない……」

今度はクレアが茫然とする番だった。

クレアは武器を持っていない状態でも普通の大人よりも強い力が出せる。それでも無理だったのだ。

「……これ、なんだろう？」

クレアは首輪をよく観察する。

沙耶は恥ずかしそうに頬を赤らめたが、すぐにクレアの真剣な目

に落ち着きを取り戻す。

沙耶の首にぴったりと合った首輪。材質はどこか金属めいた物質で、鉄やそれらの金属に触れ、見慣れているクレアが見てもただひたすらに硬く柔軟性に優れているということ以外わからなかった。これはどう見ても人間の力では外しようがない。

……切るしかない。

そう結論するのに時間はかからなかった。

「……とにかく、いったんお父さんの所に行きましょう。きっといい知恵出してくれるわ」

方法がない沙耶は、うなづくことしかできなかった。

なぜペンダントが首輪になったのかなどという疑問は、今の沙耶には浮かんでこなかった。

昨日と同じようにサラとビーチパラソルの下で安穩と海を眺めていたルウは、安息はすぐに訪れないことを悟ることになる。

「お父さん！これ見て！」

砂浜で宝探しをしていたクレアが切羽詰まった表情でルウにそう

言った。

よっぽど急いできたのか沙耶もクレアも汗だくである。夏真っ盛りの今コートをぴっちり着こんでいるクレアと涼しげな水着を着た沙耶と汗の量が一緒だというのが体力の差を物語っている。

「……どうしたんだい、そんなにあわてて」

ほほ笑みながらルウは言った。サラはまたか、という表情でクレアを見ている。

「これ、見て！首輪！沙耶に！」

沙耶の首にはめられた分厚くとうてい外せそうにない首輪を見て、ルウは驚いたような顔をした。

「……クレア、そういうプレイは感心しないわよ？まだ小学生なのに奴隷プレイって……これもルウのせいだわ。トレースがいるから娘の性的嗜好がおかしく成っちゃったのよ！」

「何勘違いしてるのよ！私は誰かを縛るなんて趣味じゃない！」

「そうだよ。一体だれが奴隷プレイなんて……」

ルウはしららしくそう言った。

「……それをあんたが言う？」

「うん、もちろんさ。僕はトレースを奴隷にして『遊んで』いるわけじゃないよ。仕方なく、だからね」

どうも『プレイ』の意味を勘違いしているルウであった。

「とにかく！これ、外せる？なんか外れなくて気味悪いの」

「簡単だよ。トレース」

短くルウが命じると、彼の後ろには白髪銀瞳の少年のような少女のような人間がいた。

いや、彼のような彼女のような何者かは、人間ではない。

ルウに従い、ルウのために生き、ルウの命令をなんでもこなす万能無限の道具……トレース・トレスクリスタルである。生物学的な性別は女。それもルウが男だからであり、もしルウが女なら男になっただろう。

「なにかようかい、ご主人様」
マイマスター

トレースは恭しく一礼すると、沙耶の首に目をやり、クレアに言う。

「……それを外せばいいのだね？お安い御用……と言いたいのだがね、今の僕は能力を封じられていて普通の女子高生以上の力を出せないのだよ」

「……あ、そうだったね」

ルウはまたも白々しくそう言った。

トレースの力を封じるように命令したのはほかならぬ彼なのだ。昨日の夜大暴れしたルウはラウを助けたあと盛大に後悔した。

——また、やってしまった。

ルウは普段は温厚だが、こと家族のことになるとたんに感情的になる。トレースの力を存分に振るい、そしてその敵を殲滅した。正直、戦っている最中は楽しかった。けれど、戦いが終わると同時にやってきたのは底なしの後悔。もう二度と殺すものが。そう彼は心に誓った。

そのために、ルウはひとつの命令を自らの道具にする。

『今から一週間、一切の能力を封じる。僕が何を言っても解除するな。これは命令だ。たとえ僕が殺されそうになっても、君が壊れそうになっただとしても、だ』

早い話、この命令が今に続いているということなのだ。

「つく……」

クレアは齒噛みする。ぎりぎりど、本当に悔しそうに。

「まあまあ、そんな顔しないで。別に命にかかわることでもないし、別にいいじゃないか」

そう軽くルウは言った。

「……命にかかわらなければ、それでいい？」

クレアはその言葉に、反応した。

「そんなわけないでしょ。沙耶にこんな奴隷みたいなこと、これ以上させられるものか！……もういい！私帰る！家に行けば研究室があるから、そこで沙耶の首にある不純物取り除いてやる！」

「え……研究室って……？」

疑問に思う沙耶に構う余裕がないのか、沙耶の手を引いて早々に海水浴場を去ろうとする。

「……しかたないなあ。わかったよ、帰ろうか」

ルウは立ち上がり、クレアをゆつくりと追いかけた。

「……いいの、お母さんとかほつといて？」

「それもそうだね、サラ！一緒に来るかい？」

後ろでいまだにぽかんとしているサラに、ルウは顔だけ振り向いて言った。

「あ、うん……」

いまだに娘の行動力と思い切りのよさに驚いているのか、しみじみとサラは言った。

「……ほんと、なんであんなに他人に一生懸命に成れるのかしら？繋がってないはずなのに血を感じるわ……」

トレースに言伝をいくつか伝えたと、ルウは来た時同様、8人乗りの車の運転席に乗り込んだ。もちろん免許はある。

サラも急いで車まで走ると、助手席に乗った。クレア達はすでに後ろの席に乗っている。

「……さて、行こうか」

そう言うルウは車のエンジンをかけ、発進させた。

もうすでに事は始まっているというのに、とても呑気な速度で。

第71話　正体

クレア達が帰宅すると同時刻、どこかの地下でその組織は動いていた。

暗く広い部屋には百人近くの人間が事務机に座って作業をしている、

彼らの正面の壁は、大型ディスプレイとなつて琴乃若のいろいろな場所をリアルタイムでうつしていた。

青い作業服を着ている彼らの目には、はっきりと焦りの色があつた。

そして、いくつもあつた画面の中で、変化が起きた。

その変化をよりよくとらえるため、ほかの画面は排除され、その画面のみが表示される。

「……やつと見つけた」

一番後ろで偉そうにふんぞり返っているこの組織の長は、狡猾そうな瞳をディスプレイに向けた。

「局長！これが、例の……？」

作業員の誰かが、局長と呼ばれた男に訊いた。

「……ええ。これが例のものです」

局長は冷静に答える。

「……さて、回収に行きますか」

かたり、と座っていた椅子から立ち上がり、数人の作業員についてくるよう指示する。

「……世界を救うのは、われわれだ」

そう局長がつぶやいて出て行った時、ディスプレイは琴乃若の浜辺を映していた。

琴乃若に五時間ほどかけて帰ってきたクレアは、沙耶を連れて車を飛び出すと一目散に玄関に向かった。

「クレア、どうしたの!？」

沙耶が事情が分からず訊く。

「先に入ってて!私お姉ちゃんのところ連絡しとくから!」

勝手にいなくなつて心配しているのでは、と思ったので先に連絡しておこうと思ったのだ。もうすでにトレースから事情を聞かされているとはつゆ知らず、クレアは自作の携帯でミリアを呼ぶ。

沙耶はすぐに来るだろうと、靴を脱いで、家上がった。廊下を進み、リビングで曲がり、そこで――

「きゃああああああああああああああああああああああああああああああ!？」

「沙耶っ！？」

そこで、沙耶の悲鳴が聞こえた。

携帯をほっぽり出して、リビングへ向かう。

『もしもし……クレア？どうかした？』

そんな声が聞こえたが完全に無視。

リビングに入り、クレアは信じられないものを見る。

「誰よあんなたち！」

2メートルほどの大男二人組が、ペンタグラム家のリビングを占領していたからだ。

片方は力の強そうな大柄な人間。彼は沙耶の首根っこをつかみ、つりさげるように捕まえている。

もう片方は細っこいもやし男で、大柄な男の隣でどこか達成したような表情を浮かべていた。

——殺してやる！

クレアは二人を見た一瞬でそう判断した。

さまざまな武器、兵器拷問道具が収納されたコートの胸あたりに手を伸ばし、拳銃を取り出そうとする。

——だめだ！

それもすぐに判断できた。沙耶には自分の黒いところを見られたくない……その思いが、拳銃に伸びた手を下げさせた。

「なんの用！？」

代わりに鬼の形相でにらみ、怒鳴る。

もやし男は怯えたように身をすくませたが、大柄の男はピクリともしない。

二人とも、『誰』とも『何の用』にも答えない。クレアはその反応に、組織ぐるみの犯行で、こいつらには発言権かないのでは、と

推理した。

「……いやはや、怖いお譲さんだ……」

その推理は、どうやらあたっていたようだ。

「……あんた、誰？」

「私、宇宙開発局局長、宇剣^{うつるぎ} 信也^{しんや}と申します。……お父様とお母様はおられますかな？」

宇剣と名乗った黒いスーツぴっちりと着込んだメガネの優男は、とても紳士的にそう言った。

ここ、ペンタグラム家では普段高校生の父と、教師の長女が席を同じくし、元敵の少女がその標的を祖父と呼ぶ、不思議な空間だった。

しかし、今はそれ以上に不思議なことがここでは起こっていた。
クレアの親友、沙耶をまるで犬でも扱うようにとらえ、そしてその指示をした親玉とルウ、サラ、クレアは席を同じくして、話し合いの機会を設けていた。

クレアは今すぐにでも大男たちに飛びかかって、撃ち殺して沙耶を助けたいのに、父親のルウがそれをさせなかった。

「……では、お話を聞きしましょうか、なぜ、僕なんです？沙耶をさらったのなら、沙耶の両親に当たるべきでしょう」

話し合いをまずして、情報を引き出す……ルウがいつも必ず敵にすることだった。

「……それがですね、沙耶のご両親が言ったのですよ、あなたたちに任せると。……それです」

この世界の住人はルウに逆らえない。……だから、沙耶の両親はそう言ったのだろうか。

宇剣はここで意味深にはほ笑んだ。

「では、目的を言いましょう。沙耶様をこちらに譲っていただきたいのです」

「却下」

クレアが即答する。

「……なぜですか、お嬢様」

クレアはその言動に怯えながらも苛立っていた。こんな風にクレアを嬲った『あの男』は近付いてきたのだから。

「沙耶は私の親友。それ以上の理由は必要ないわ」
当然であるかのように、クレアは宣言する。

「……もし、沙耶様の首にあるのがこの地球を消滅させるほどの巨大な爆弾だったとしても、ですか？」

クレアが、凍りついた。

「……………説明して」

冷静に、動いた心を気取られないよう注意して訊いた。

「よろしいですか、私どもで調べた限り、沙耶様の首についてい

るのは爆弾で、その威力は我々がすむ地球を粉々に、跡形もなく吹き飛ばしてしまうほどののです」

机にずいと上半身を乗り上げ、主張する。

「……それで、何がしたいの」

「正直言つて、先ほど試しましたが外すのは無理です。……なので、沙耶様には」

ここで、初めて宇剣が言い淀んだ。

「……何よ」

沈黙に一秒でも耐えられないのか、クレアが先を促した。

「……沙耶様には、宇宙に行ってもらいます」

「意味分かんない」

クレアは、立ち上がった。

「何よそれ？う、宇宙つて、真空の海よ？宇宙服なしで外に出たら空気圧の関係で内部から爆発してしまうような、そんな死の海なのよ？そこに、行けですつて？あんたら頭おかしいんじゃないの？女の子よ？それも、まだ子供なのよ？そんな子に、死ねつて？あんなたち、そう言ってるのよ！？正気！？」

「われわれは、本気です。……そもそも、あなたの正気をこそ疑いたい。沙耶様一人が犠牲になることで、全ての人類が助かるのです。……そう、隣にいるお父様やお母様、そしてあなたやあなたのほかのご学友まで、みんなです。親友一人のために、世界を滅ぼすつもりですか！？」

クレアは何も言えない。沙耶は大事だ。でも、お父さんも、お母さんも、ミリアお姉ちゃんも、コトリお姉ちゃんもリリーお姉ちゃんもララお姉ちゃんもアゲハもみんな大事だ。どっちかひとつを選べと言われて、選べるようなものではない。

「……結論を急ぐ必要はありません。爆弾がいつ爆発するかかわらない以上、すぐにでも撃ちあげたいのですが、……まあ、いいでしょう。一日差し上げます。一日で、沙耶様をどうされるかお決めください」

そう言って、宇剣は沙耶を解放させ、家を出ようとする。

「……あなた方の判断が、地球を救うということを、どうかお忘れなきよう……」

捨て台詞のようなその言葉が、クレアの胸に突き刺さった。

第72話 クレアの決断

私は茫然と、ただ茫然としていた。

何かを選ぶ、ということに苦痛が伴うことはもうすでに知っていた。知っていたのに。

こんなにも、こんなにも苦しい。

どうして沙耶に爆弾が？どうしてそれが外れない？どうして地球と沙耶、どちらかを選ばなければいけない？……そもそも、

——沙耶がこんな目に遭ったのは、誰のせいだ？

……答えはあまりにも明白。私だ。

あの時、すすめられるまま首輪をつけていたら。沙耶はこんな目に遭わなかった！

また、私は間違えたのだ。愚かな人間はいつまでたっても愚かなまま。

あの時あの男の言葉にだまされた時のクレシアと何一つ変わっていないんだ！

もし私が沙耶の立場ならその場で宇宙局に行っていたのに！私の汚れた命ひとつで地球が救えるのなら、安いものだ！

でも、沙耶は違う！沙耶はただの女の子、ただの私の親友なのに！

……もしかして、私の親友だから、こんな目に遭ったのか？

私という存在そのものが、罪悪なのか？だから、周りにも贖罪のとばっちриがあるのだ。

もし、そうなら誰でもいい。誰でもいいから、沙耶と私、立場を取り替えてよ。

……ねえ、誰か……

「……クレア、君はどうするんだい？」

お父さんが訊いてきた。何を、どうするというの？

「沙耶のことはつらいと思う。でも……」

「沙耶の前よ。……めったなこと言わないで」

私はそれだけを言って会話を打ち切る。

どうやら、沙耶を向こうに引き渡すかどうかの判断は私に任せてくれるみたいだ。説得して、私自ら沙耶を差し出させたいのだろう。「沙耶、遊ぼうか。何して遊ぶ？ゲーム？トランプ？なんでもあるわよ」

「……え？」

急に切りだした私に、沙耶はぼかんとしている。

「何よ。せつかく沙耶が遊びに来てくれてるのに、何にもしないんじゃないでしょ。遊ぼうよ」

「……で、でも、私の首輪が……」

「関係ない。たとえそれがなんであっても、私は沙耶の友達。…友達が家に来てたらおもてなしするものでしょう？」

遊ぼうとしない沙耶を、私は無理やりな理論で言いくるめる。

「……うん……じゃあ、ゲームしょ？」

最初こそおっかなびっくりだったが、そう提案できるほどには元気が戻ってきたみたいだ。

……きつとすぐ元の元気な沙耶に戻る。今は知りすぎて混乱してるだけだ。

私は逃避にも近い楽観で、家庭用ゲーム機を取り出した……

「……ねえ、クレア、沙耶。もう、逃げるのはやめよう」

それから、数時間。私と沙耶の間には、笑顔が取り戻っていた。それを再びお通夜みたいな雰囲気にしたのは、お父さん。

また、男。男はいつも私の邪魔をする。私はゲーム画面を見たま
ま、答える。

「逃げるって何から？ゲームの敵から？もうレベルは十分だから、これ以上戦ってもあんまり意味は……」

「わかってるはずだよ、二人とも」

もう、お父さんの中では冗談を言う余裕もないらしい。

私は途中のゲームの電源を切り、後ろで神妙な顔をしているお父さんの方を向いた。沙耶も同じように振り向く。ゲームを消されたことには何の文句も言わないところを見ると、あまり集中できていなかったのだろう。……ごめん、沙耶。気を紛らわせてあげれなくて。

「……何よ」

苦し紛れに、訊いてみる。もう私も沙耶もわかっているのだ。そう選択を先延ばしにもしていられないということ。

「沙耶の爆弾のことだよ。どうするのさ、君たちは」

「トレースに言っただけ外させたら？こんな時ぐらいでしょ、あの万能無限の道具が役立つのって」

「トレースには外せないよ」

……は？

私は茫然となる。また、何か不都合があるのか、この期に及んで？

「彼女は今何もできない。……僕が命じたせいだけど、どんなことがあっても能力を使うな。……そう命令したから。ちなみにその命令は僕でも解除できない。そう命令したからね」

……何よ、それ。何よそれ。何よ。

つまり、トレースはお父さんの命令のせいで、何にもできない木偶人形くになっただけのこと！？

「つまり、それは……」

つまり、私たちの力だけで、万能無限なしでこの首輪をなんとかしなきゃいけないってこと！？

世界を担う宇宙局が解析できなかった首輪を、まだまだ修行中の私が解析できるわけがない。私でも沙耶を救えない。お父さんも頼りにならない。唯一の希望だったトレースが役立たずって、この状況は――

「……絶望じゃない……」

私はつぶやいたのだろうか？心の中だけで言ったのだろうか？それすらもあいまいで、何もかもがおぼろげだ。

こんな状況、どうにもならない。

人一倍危険や危機を味わっているからこそ、わかってしまう。

「……ねえ、やっぱり気の毒だけど、沙耶には宇宙へ行ってもらって……」

「……あ、あの……私……」

大丈夫よ、と励まそうと手を握って、私は初めて気付く。

沙耶の手は、体は、細かく震えていた。

――私は、愚か者だ。

親友だと吹聴して、友達だと公言しておきながら、こんなことも気付かなかった。

怖くないはずがないのだ。

私は世界か沙耶かを選んでいるが、沙耶は世界とともに心中するかしないかを『選ばれている』のだ。他人に命を握られる恐怖を、絶対に死ななければならぬ恐怖を、私は知らないわけではなかったのに！

気付けなかった。また、失敗して、後悔するところだった。

――もう、迷うものか！もう、怖がらせるものか！

守るって、決めたんだ！

「お父さんなら、きつといい案を出してくれるって、心のどこかで期待していた」

私を救ってくれた時みたいに鮮やかに、信じられないくらいあっさりといい知恵を出してくれる……そう、思っていた。

「でも、それは間違い。私としてことが、男を信用するなんてね。

……じゃ、私は選ぶわ。時間がないのでしょうか？」

私はそう言いながら、震える沙耶の手をつかむ。

え、と沙耶が言ったような気がした。

「……私の選択は——こうよ！」

そのまま、沙耶を連れて玄関に飛び出す！

「——クレアっ！」

お父さんの声が聞こえるけど、無視！

沙耶と私は靴を速攻ではいて、玄関を飛び出た。

私の選択。それは、沙耶と一緒に逃げることに。

あてはなかったけど、時間さえあればなんとかなる。

——私は未だ樂觀の抜けきらない頭で、選んだのだ。

第73話　ルウの動揺

クレアがいなくなってから、数時間が過ぎた。

もともと僕は探すつもりもなかったのでそのままだったが、サラはどうにも心配なようだ。

何を心配しているのだろうか？自分が死ぬことかな、それとも娘の安否かな、もしかしたら世界の先を心配しているのかもしれない。それにしても、なぜクレアは逃げたんだろう。よく考えたらこの世界のどこにしようが、どの世界のどこにしようが沙耶が死ぬことには変わらないということのはわかるはずなのに。

もしかして、親友が死ぬとわかったショックで混乱しちゃったのかな……？そんな弱い子ではなかったはずなんだけどなあ。

まあ、今はどこにいてもしれない愛娘よりも、今片づけなければならぬ問題がひとつ。

目の前でサラの淹れたお茶をすすっている、宇剣という男のことだ。

この男、どういうわけかクレアが出て行った数分でこの家に乗り込んできた。もしかしたら、張っていたのかも知れない。いや、間違いない張っていただろうね。僕が彼でもそう思うから。

「……さて、何のご用でしょう？」

僕はとぼけたふりをする。

「あなたのお嬢様と沙耶様の行方を知りませんか？」

きっと知っていて訊いているのだろう。それを容認したかどうか

……それを知りたいのだ、この男は。

「沙耶は家に帰らせましたよ。最後の夜ぐらい、家族と一緒に過ごさせたいじゃないですか」

もつとらしく言い訳する。

「……お嬢様と一緒に逃げになっているようですが？」

ほら、やっぱり見張ってたんじゃないか。まったく、これほど情

報を引き出しやすい相手つても珍しい。この前のシイナ以上だな。行方をわざわざ訊いてくるあたり、その張り込みはきつと素人だね。祟とか雇われてたらどうしようかとも思ってたけど、その心配はないようだ。

「そうなんですか？クレアは沙耶を送っていくと言っていたもので……」

「……そうでうか。なら、仕方ないですね」

本当に信用しているのかどうか怪しいそぶりで男は言った。まあ、これで信用しなければ体裁が保てないからな。本当ならもっと詰め寄りたいのだろう。……まあ、詰め寄ってきてても返す自信はあるけどね。

「では、手分けして探しましょう。僕も、娘が心配なので」

これは本音だ。沙耶とクレアがいくら仲良くて、世界を滅ぼす爆弾と一緒ににはさせられない。なんとか見つけて説得しないと……

……まったく、普通の子供なら適当に言いくるめればいいんだけど、クレアはかなり知識あるからなあ……。

宇宙が息できないだけだと思ってた僕が理詰めで説得できるわけないし、さて、どうしたものか。

「それにしても……あなたは子供の説得すらできないのですか？」

「あなたの宇宙局は子供一人犠牲にしないと地球を守れないんですか？」

嫌味に嫌味で返す光景つてきつと怖いんだろうね。だってさつきからサラ怯えっぱなしだから。

「……ふん」

そう吐き捨てて、彼は部下のところへ戻って行った。きつと心の中ではもつとひどいことを言ってるんだろうね。

宇剣を信用できないって言ったクレアの見る目ってかなり信用できるな。そう僕は思った。

「さあサラ、彼女たちを見つけようか」

僕はいつものようにほほ笑んでサラに言った。彼女は何か怯え

たまま、僕に訊いてきた。

「さ、探し出してどうするの……？」

なんだ、そんなこと訊きたいのか。きまつてるじゃないか。クレアは守って、沙耶は捕まえる。宇宙に行く沙耶には残念だけど死んでもらうよ。彼女はこの先にもクレアの邪魔になりそうだからね、この際だから消えてもらおう。

「もちろん、二人ともが助かる方法を探すに決まつてるさ。娘の友達をむざむざ死なせるわけにはいかないからね。爆弾ぐらいなるとかなるさ」

そう言おうとしたのに、口は全然違うことを言っていた。

……え？

自分で驚く。

なんでこんな繕うようなことを僕は言ってるんだ？

「……そうよね、娘の友達一人助けられなくて何が親よ。そう思わない？」

「……うん……」

まるで口が別の生き物になったみたいに、勝手に言葉を紡いでいく。なんで？疑問は晴れない。何があつた？わからない。

「そうと決まれば行きましょ！」

……まずいな、サラの前では行動できるかどうか怪しい。

僕は直感的にそう思った。

このままサラと一緒に行けばなにもかもがうまくいなくなる。

そんなことは簡単に予測がつく。

……よし。

「ねえ、サラ。僕一人で行くよ」

いつものようにほほ笑んで、僕は言う。

「なんでよ？」

「人員は一人でも多い方がいい。海にいるミリア達を呼んできて。クレアと一緒に探そう」

彼女たちはもうすでにトレースが読んでいる手筈だ。だから今か

ら行っても行き違っただけだろう。でも、その間僕は自由に動ける。なんでもできる。

今はとにかくクレアを見つけて沙耶を捕まえるだけの時間がある。三時間もあれば見つけれるだろう。その間に全て終わっているはずだ。

「……うん、わかったわ」

なんの疑いもせずに車に乗り込むサラ。ちなみに免許を持っているのはサラだけだ。僕は特に車の必要はないので、免許は持っていない。

「行つてきます」

いつもの言葉。

「行つてらっしゃい」

いつもの返事。

なのにないはずの心が痛むのはなぜだろう？

—— もういい。

今は考えている場合じゃない。

早くクレアを見つけて、沙耶を捕まえないと。そのためには相当な速度がいる。

……しかたない、ね。

僕はいつもより少しだけ、本気で走ることにした。

玄関を出て、そこらを探しまわっている宇宙局の彼らを完全に無視して、走り出す。

すると。

景色が、車が、世界が、
どんどん後ろに流れてく。

第74話 二人の休憩

クレアは走っていた。

3年前のように、路地裏を全速力で。

命の危機があるのも、追われているのも一緒。

一つだけ違うのは、もし捕まった時に失う命が自分のものではない、ということ。

だからクレアは3年前以上に、全力で走っていた。

息が途切れても体を動かし、足がふらついてても意地で立て直して、今までのどの危険よりも必死に逃げていた。

「っ……！く、クレ、あ、もう、駄目、はしれ、ない……！」

そんな彼女にごく普通の小学生がついていけるわけがなかった。

繋がれた手を離し、路地裏の汚い地面に座り込む。

「はあ……はあ……」

振り返ったクレアも息が切れ切れで、もう運動できるような状態ではない。

それでも、クレアは言った。

「立って……！今走らなきゃ死ぬのよ！？それでも、いいの！？」
クレアだって、もう走りたくない。というか走れない。でも、沙耶を守るためなら頑張る。助けるために、今はきついことを言って立たせようとする。

「……む、無理よ……て、ていうか、クレア、は、なんでこんなに、走れるの……？学校では、私と、おんなじぐらいだったよね、50メートル走……」

沙耶は50メートル十秒ちょっとで、クレアもだいたい同じぐらいの記録だった。しかしクレアの記録は、十分に手を抜いて、であった。本気で走ったのなら50メートル7秒を切るだろう。

戦闘に次ぐ戦闘の人生が、彼女の体を異常なものに作り替えたのだった。

「……っ、今は、そんなこと、話してる、場合じゃないでしょう！？」

クレアが手をつないでいなければ、とっくに沙耶は敵につかまっている。引っ張っている分も体力を使うのだが、そのことは二人とも気付かない。

「……ねえ、クレア。ちよつと、ちよつとだけ、休もう？」

沙耶の体は汗だけで、疲労は限界に達していた。もうちよつとでも運動すれば脱水症状を起こすだろう。だからクレアは、沙耶の言うとおり休むことにした。

「……ちよつとだけ、そこで休みましょ」

クレアが示したのは、もうすでに捨てられて久しい廃ビルだった。

二人は見晴らしの良い屋上で休むことにした。ヘリを使われたら一発だが、それ以外ならしばらくはここでのしげるはずである。

コンクリート製の床に、コンクリート製の縁^{へり}。縁は低いが、子供のクレア達が背を預けても頭がでない程度には高かった。

床に座り、その縁に背中を預ける。

少しでも寝ようとして沙耶は眼を閉じるが、眠れない。どれだけたっても眠気が襲ってくることはなかった。

代わりに考えるのは、首輪のこと。

もし、これが爆発したら？もし、私がここにいてるせいで地球のみんなが死んでしまったら？

『——どちらを選ぶのが地球のためになるのか、よくお考えください——』

宇剣の言葉が頭の中でリフレインする。まるで、『お前は地球に

とつていない存在だ』とでも言われているように感じる。

そして、今沙耶の中にその感覚を否定する材料はどこにもなかった。より、自分の存在が不必要なものだと思うようになってくる。

「……ねえ、クレア？」

不安になつて、沙耶は隣で休んでいる不思議な親友、クレアに話しかけた。

「なに、沙耶」

もうクレアは息切れすらしていない。沙耶自身もコートから取り出された水を飲んだが、いまだに呼吸は荒いままなのに、すごい回復力だ。

そう驚くのも一瞬で、沙耶は疑問をクレアにぶつけてみた。

「……私、今本当に生きてていいのかな？」

それだけが不安だった。こうやって必死で逃げているが、それは果たしてやっていいことなのか。もし爆発したらどうやって責任をとればいいのか。不安で、不安で。

「……昔、コートの話したことあるでしょ？」

沙耶はつい最近されたコートをどうして脱がないのか、という質問に対しての話を思い出していた。あの時急に倒れたので、沙耶はともあせったのだ。自分のせいだ、と。

「うん、あの時はごめんね」

「いいのよ。……あの続き。」

私はね、いろんなことをさせられたの」

過去に折り合いがついたわけではない。でも、沙耶にだけは知っておいてほしかった。拒絶されてもいい、ただ、沙耶に沙耶自信を否定してほしくなかった。その思いでクレアは言う。

沙耶は息をするのも忘れて、クレアの話に聞き入る。

「詳しいことは言いたくないけど、その時何度も、何度も思ったわ。……私は生きていていいのだろうか、死んだ方がはるかに楽なんじゃないか、って。」

でも、今も私は生きてるわ。……それはなぜだかわかる？」

ふるふると、沙耶は首を振る。

「それはね。私はわがままだったからよ」

その理由に、沙耶は首をかしげた。

「クレアはわがままなんかじゃないよ」

「いいや、わがままよ。いつもいつも、きつとどこかで誰かが助けてくれる。もし助けてくれないのならこんな世界滅びてしまえ、そうずっと思ってたもの」

いつもクレアは思っていた。自分を助けて。それができないなら全てなくなればいい。

「だからね、沙耶ももつとわがままになっていいと思うの」

なにも救いになっていない答えて、沙耶の不安を取り除けるだろうか？

それだけが、クレアの不安だった。

けれど、意を決してクレアは言葉を口にする。

「自分を助けて。できないなら一緒に世界と滅んでやる。それぐらいでいいのよ。沙耶は完全に被害者で、どこも悪くないんだから、何も世界のためなんか死んでやる必要な何一つないのよ。私を助けるのが当たり前、それぐらいがちょうどいいのよ」

沙耶はその言葉に面食らう。

「え、でも、私、クレアには……死んでほしくない……」

「たとえそうでも、沙耶が一人で死ぬ必要はないわ。……もし、どうにもならなかったら、私も一緒に死んであげる。……一人で死ぬのは、さびしいでしょう？」

『死んであげる』『死ぬ』などの言葉がこつこつと出てくることに、沙耶は驚いていた。そしてそのどれもが真剣で、クレアなら本当に一緒に死ぬんじゃないかと思わせる。

「……そうかもしれない。でも、もしそうになったら一人で死ぬわ。

……誰も巻き込みたくないの」

「……そう」

クレアはひどく残念そうだった。なぜか拒絶されたように感じた

の
だ
ろ
う。

「でも、できるだけ頑張ろうね、きっとなんとかなるよ！」
沙耶はそう言ってクレアを励ました。

「……なんともならないよ。君は僕が連れていく」
その瞬間、ルウが廃ビルの屋上、クレア達の後ろの縁に立っていた。

第75話 捕縛

ルウが縁の上に立っていた。

いつ、どうやってかは二人には全く分からなかったし、そんな些事二人にはもうどうでもよかった。

ただ、ルウに怯えるだけだった。

クレアも、沙耶も、もうすでに疲労は困憊、逃げる体力なんてありはしないのだ、一体怯える以外に何をすればいいのだろう。

「さあクレア、沙耶を渡すんだ。大丈夫、僕たちは沙耶に何もしない。指一本触れないことを約束するよ」

まるで宇宙局の人間のようにルウは言った。

今までと違い、今のルウには計算や筋書きは一切なかった。沙耶に爆弾がはめられたということが予想外なら、こんなに早くクレアが逃げ出すなんてことも予想外だったからだ。

クレアはもつと自分の命を大事にする人間だと、ルウは思っていたのだ。しかし、実際世界の危機になってもクレアは沙耶の命を優先した。それも予想外だった。

「……約束？そんなのに一体どんな意味があるのよ。お父さんたちが沙耶に触らなくても、宇宙に放り込まれたら死んじゃうでしょう！」

座ったまま沙耶をかばうように抱いて、クレアは叫ぶ。もう立つことも難しいんだな、とルウは見当をつけた。

「もう疲れただろう？休みなよ。沙耶はかわいそうだけど、仕方ないんだよ。……ね、クレア、わかってくれるよね？」

説得しようと、ルウは試みる。

一番予想外だったのは、ルウ自身だった。今こうして説得しようとしているが、本来なら力づくで沙耶を奪い、宇宙局に引き渡す算段だったのだ。なぜこんな風にいるか、ルウ自身が訊きたかった。

「わかるもんか！沙耶は渡さない！」

クレアは必死に、絶対離すものかと沙耶を抱きしめる。

「……」

その様子に、ルウは一番したくない方法で沙耶を奪うしかない、と確信した。

琴乃若にはいくつかの不条理ともいえる法則があり、その一つに『ルウには逆らえない』というものがある。世界の創造者たるトレスが主人に気に入られようとして勝手に作ったものであった。

そしてルウはその法則を利用して、沙耶を自らこちらに呼び寄せようとしているのだ。

「……ごめんね、クレア。」

……沙耶、こっちへ来るんだ」

その言葉を聞いたとたん、沙耶から眼の色が消える。

まるで人形になったみたいになって、クレアの手を振り払った。

「……え？」

クレアは茫然としている。

沙耶は立ち上がって、引き寄せられるようにルウの方に手を伸ばす。子供の身長だから、ルウには少し届かない。あと少し。あと少しで逃げれたのに。あと少し頑張ったら、逃げ切れたかもしれないのに。

ルウがかがんだら、もう沙耶はつかまってしまっ——

「沙耶!!」

そう思ったクレアはあらん限りの声で叫んだ。

——どこかで、誰かに呼ばれた気がした。

『沙耶、こっちへ来るんだ』

私の中では、その言葉だけが絶対の支配権を持っていた。ぼんやりとした視界と思考で私はその言葉に従おうとする。
あっちへ行かなければ。

——なぜ？

あそこへ行かなければ。

——どうして？

ルウが呼んでる。

——だから？

従わなきゃ。

——どうして？

そうしないと、世界が滅びる。

——どうして？

私の爆弾が、爆発するかも知れない。だからルウは私を殺そうと
している。

——なら、なんで従うの？

そう決められているから

——何に？

心の奥の、もっと奥。人間としての、根幹の部分に。

——それなら、仕方がない、かな？

仕方ない。私には、逆らえない。

——そうだね。あと、一步。

「——沙耶！」

『もっと、わがままになってもいいと思うのよ』

……その言葉が、私の心を揺さぶった。

わがまま？それって、もっと望んでいいってこと？

もっと思っていていいってこと？

じゃあ、私は……

——私は、生きたいな。もっとクレアと一緒に笑っていたい。
狭かった視界が晴れたような気がした。

「……………い、嫌です！」

急に正気に戻った沙耶は、開口一番そう叫んだ。それに気付いたクレアは一瞬の動作で沙耶を自らの腕に引き戻した。

しっかりと沙耶をかき抱くと彼女は、氷よりも冷たい蔑むような眼でルウをにらみつける。

「何したの」

その眼には一切の容赦がなかった。たとえ父親でも、命の恩人だとしても、殺す覚悟があるように見える。

「何もしてないよ。僕は沙耶を呼んだだけ。君だって見てただろう？僕に怪しい動きはなかったはずだよ」

ルウはそれにクレアの怒りなどまるで脅威にならない、とでも言いたげに淡々と答える。

態度こそ気に入らなかったが、言葉の内容からこの現象の原因をクレアは推理できた。

「あの木偶道具かつ……………！！」

トレースしかこの世界を自由に変えてルウの思い通りにさせようなんて思いついても実行できないのだ。彼女以外にだれが思い浮かばう。

「……………ねえ、沙耶を渡して。クレア、君だってどっちを取ればいいのかわかるはずだよ？」

「うるさい！とにかく私は沙耶を守る……………っ！？」

いつの間にか。

本当にいつの間にか。

クレアは宇宙局の人間に囲まれていた。

ここで、ルウの本当の目的をクレアは悟る。

——時間稼ぎ！

宇剣が来るまでの、ほんの数分をルウは稼いでいたのだ。そして、こうやってどうにもならないようにして捕まえるために、必要以上

大人数をひきつれて。

「……最低!!」

クレアは動きにくい体を無理やり動かして、立ち上がる。沙耶はもう立つこともできない。

「食らいなさい、この」

「捕まえて」

コートに手を伸ばすと同時に、ルウが短く命じた。

宇宙局の人間が、一斉にクレアと沙耶に襲いかかる。

あつという間に人の山ができて、彼女たちは動けなくなった。

「いやあああああああああああああああああああああ
あ!」

その叫びがどっちのものであったかは、沙耶にもクレアにもわからなかった。もしかしたら二人とも叫んでいたかもしれない。

二人の意識はしだいに遠のいていった。

第76話　終わりへ

やめて！助けて！誰か！

クレア、助けて！私を助けて！

クレア、クレアクレアクレアクレアクレアクレアクレア！

助けてよお！助けて！死にたくない！あなただってそうだったんでしょ！？なら助けて！死にたくないよお！

やめて、いやあああああああああああああああ！

「うわあああああああああああああああああああああ
！！！！」

がばっ！

「クレア！？」

飛び起きた私に、誰かが心配そうに私の名前を呼んだ。

愚か者ではないと信じて、でも実際は何一つ変われなかった者の名前だ。

まだ鼓動が激しい。寝ていたはずなのにどっと疲れた。なぜ？

「ゆ、夢………？」

夢………？本当にそうだろうか？

沙耶に何か危機が迫って、そして私は、沙耶を助けなきゃ、って

「クレア、大丈夫かい？」

私の親友を、殺そうとした、私の父親――！

「ああああああああああああああああああああ！！」

「クレア、どうしたんだい？」

語氣を強めて、脅す。何も答えなくても殺す。殺してやる。

白々しく、こいつは言った。

「ねえ、君はどうしてそんなに沙耶をかばうんだい？」

なぜ？それを訊くのか？なぜ！？

「……そう。……じゃあ、行くといい」

「え？」

「君が本気をだせば、きっと助けれる。でも、本気を出さなければ」

「ば助けられない。……言っている意味、君ならわかるよね？」

私は愕然となる。

お父さんはこう言っているのだ。

私が武器を使えば沙耶は助けられる。使わなければ助けられないと。

武器を使って助けたら、きっと沙耶はもう私の友達ではなくなるだろう。武器を使って、殺人さえもするような人間と友達でいる人間なんて、いるわけがない。

沙耶の命か、友情か。お父さんはどちらか選べと言ってるのだ。

「……そんなの、決まってるわよ」

私は一秒たりとも迷うことなく、言い切る。

「私は沙耶を助ける」

決意と同時に、私はこの白い部屋を飛び出した。ここは宇宙局。感覚でわかる。人が多い方多い方へといけば沙耶に会える。会える。会える！

それは感覚で確実にわかっていた。だから私は右手に拳銃を、左手には日本刀を持って駆ける。

絶対、沙耶を助けて見せる。たとえ友情がなくなるとしても。

第77話　終わりまで後少し

僕はどうなったのだろう。

それだけがずっと頭の中を渦巻いていた。

僕はクレアを行かせるつもりは全くなかった。力づくでも止めるつもりだった。その方が確実に世界を守るからだ。

それなのに、僕は行かせた。世界よりも、子供のわがままを通させてしまった。

なぜ、僕はそんなことをしたのだろう。

「やっぱ考えてたんじゃん、ルウ」

倒れた僕を起こしてくれたのは、赤髪の少女、サラだった。

僕が助けて、それからずっと仲間として旅をしている女の子。

……そう、なぜかサラがいる、と思った瞬間、僕はクレアを通す気でいたのだ。

なぜだろうか。仲間嫌われたくない、とでも思ったのだろうか。まるで思春期のようなじゃないか。

くだらない。

「……ねえ、サラ」

僕はたとえ声が小さくても確実に答えてくれるだろうというある種の確信を持ってサラに言った。

「なに、ルウ」

予想通り、彼女は答えてくれた。でも、何か物足りない気がする。

「僕は行かせてよかったのだろうか」

短く訊く。これはかなり難しくて意地の悪い質問だと自分でも思う。どっちを選んでもだれかが不幸になる可能性は必ずあるので、どっちが不幸になるべきかと聞いているようなものだ。

「いいに決まってるわよ」

根拠があるのだろうか思わず問いたくなるほどあっさりとサラは答えた。

「クレアは今まで私たちに要求するということがなかったわ。…
…問い詰めはしたことあったらうけど」

うなずく。そう言えば、クレアの我がままなんて初めて聞いた気がする。いつも喧嘩しているが、それは口論であって、何がほしい、これがほしい、こうしてほしい、という要求は一切なかった。彼女はなぜか異常なまでに生活力があるので自分のことは自分でするし、自分が好きなことも自分でする、親である僕らには頼らない。

「私たちは初めてクレアにこうしてほしい、と要求されたのよ。
…： やっぱ、親としては最初のわがままぐらい聞いてあげたいじゃない？」

「…： そのせいで世界が滅んだとしても？」

「滅んだとしても、よ」

まったく、臆面もなくサラは宣言した。世界と、家族と。僕がどちらかを選べと言われたらまず間違いなく家族を取る。…： クレアも同じ心境だったのだろうか。

「…： じゃあ、親としてやることは、一つだね」

この事件は本当に不思議なことばかりが起きる。…： でも、悪くはない。

…： 悪くはない、本当に？

…： 本当さ。本当に悪くない。ないはずだ。ないから、君は答えるんだらう？

「そうね」

親としてできることを、果たすために。

娘の決断に親ができることなんて、たった一つしかないじゃないか。

無力な親ができることなんて――

全力で、娘をサポートするぐらいしか、できることなどない。

いつからか、何も感じなくなっていた。

沙耶が死んでしまうことを避けたかった。今でも避けたい。だから私は闘おうと決意したのに、何も感じない。

なぜ、なんて無駄な疑問は持たない。感情がなくなればためらいがなくなる。殺すことを躊躇している場合じゃないのだ、今は。

早く、早く。早く！

その思いだけが私の行動を決める。早く沙耶を助けたい！

「まて！このガキ！！」

男が一人、立ちはだかる。ここを通れば沙耶のロケットたどりつく！

なら、こいつは殺す。邪魔だ！

拳銃で狙いをつけ、そして、引き金を――

「クレア！」

ゴウッ！

引き金を引こうとした時、私の目の前で、男と分断するように炎の幕が上がった。

後ろを振り向く。

「……お母さん？」

「なに簡単に人殺ししようとしてんのよ！ここは私が引き受けるから、あんたはさっさと沙耶ちゃん助けなさい！」

ボゴウ！

さらに火力が強くなったかと思えば、私一人が通れるだけ、炎がよけた。これで通れる！

「ありがとう、お母さん！」

お礼を言つて、私は炎を潜り抜ける。熱いかと思えばまったくそうではない。むしろどこか暖かくて、心地いい。

さあ、あとちょっと！沙耶、待ってて！

私は足をさらに早く動かした。

第78話　叫びと決意

目が覚めると、そこはあの世だった。

……そんな展開を期待していたのに。

私はまだ、生きていた。

どうやらここは宇宙船の中みたい。無機質な壁に、円筒形の天井。狭くて何も無いところを見ると、中にいる人間が長くないということとを想定されて造られているようだ。

中にいる人間——つまり私。

私は今日、ここで死ぬのだろう。

そして、その最後の瞬間はそう先ではない。すぐに来る。ならば早く来てほしい。

怖い。期待しちゃう。怖い。

死にたいわけじゃない。でも死ななきゃいけないんだ。

私がいけ二エになれば、みんな救われる。そう宇剣さんも言っていた。そしてクレアのお父さんも言っていた。

なら、私はいけ二エになる。クレアやみんなを守るために、私は死ぬ。

「……死ぬ、かあ……」

そう言えば私、今まで何にもしてこなかったなあ。何かできることがあったはずなのに、できなかった。ああ、もったいない。ああ、もったいない。

こうやって死ねば、みんな本当に救われるのかな、死ぬ時って痛くないのかな、苦しくないのかな

……それだけが疑問だ。

「いやだなあ……」

嫌だ。嫌だ。

世界が救われる。いいことだ。
みんなが助かる。いいことだ。

でも、どうしようもなく嫌だ。嫌だ。思っちゃいけないことなんだろうけど、私一人で死にたくない。一人で、宇宙で死ぬなんて嫌だ。

じゃあ、叫んでみようか。どうせ声は外に漏れないようになってるのだろう。きつと、私がいくら助けを求めても意味がないように。

じゃあ、叫んでみよう。もう、我慢しなくていいんだ。みつともなく叫んだところで、誰も責めたりしないだろう。

「……嫌だよ、助けてよ！誰か助けて！死にたくない！生きていたい！誰か！助けてよ！クレア！助けて！死にたくないよお！……誰か……助けて……」

叫んで、叫んで、意味がないことを知る。……わかっていたけど、つらい。

私は本気で叫んだ。でも、誰も来ない。わかっていた。知っていた。でも、それでも改めて自分は死ぬべき人間なんだと知らされてもつとつらくなった。

死にたくない、でも我慢しなきゃいけないんだ。

嫌だけど、死ななきゃ地球が壊れちゃうんだ。

『もつと、我がままになつていいと思うのよ』

クレアの優しい声が頭をよぎる。

……だめだよ、クレア。私が我がままになったら、みんな死んじゃうんだよ。だめだよ、嫌だよ。私が死ぬよりも、もつと嫌だよ。

……ごめんね、クレア。

誰も助けに來ない空間。もつと叫んでいいだろう。もつと泣いていいだろう。

「……つつく……ぐす……助けて……死にたくない……」

私の声だけが反響して、なんだか馬鹿らしく聞こえた。

はあ、はあ、はあ、はあ……

あと、少し……あと、少し。あと少しあと少しなんだ私の体たえちぎれても動け動け動け動け動け動け！

ここは無機質なロケット発射場の最上部。沙耶のいるロケット上部に辿りつく道はこの橋しかない。

だから。

「いい？私はいま本当に本気なの。邪魔する人間を殺すことをためらわないし、たとえ人質を使ったとしても私を止めることはできない。怖い人間は今すぐ道を開けなさい。殺されたい人間だけ、私の前に立ちはだかれ！」

だからこんなにも、大人数で橋の前をまるでバリケードのようにふさいでいるのだろう。

正直私の体はもう動くかどうかわからない。

沙耶と捕まるまですつと走っていて、そして大して休まずに何百メートルとあるこの施設を走り、そしてここまで来るために螺旋階段をずつと走って登ってきたのだ。武器を片手にでも、私は限界に近かった。

でも、沙耶のためなら限界なんてこえてやる。守ると誓ったのだ。目の前にいる男ども全員を殺してでも、沙耶は助け出す。

その意思を伝えるために、私は無骨で長大な50口径拳銃を男ど

もに向ける。

「うつ……」

さすがにうろたえて男どもは後ろに数歩下がる。

「死にたいのは誰？ 来なさい。その自殺願望かなえてあげる」

私は挑発するように言う。けれど誰も乗ってこない。……くだらない。

「……悪いわね」

心は決まった。誰か一人を見せしめに、私への恐怖を植えつける。反抗できない、と思い込ませてここを突破する。

「私の名前はクレーシア・ペンタグラム。よく覚えておきなさい。あなたたちを殺す、愚か者の名前よ」

引き金を、引――

「待つんだ、クレア」

ぴたりと、私の動きが止まった。

「……なに？」

止められたのではない。私が止めたのだ。

お父さんの声に、私は耳を貸したのだ。

「やめときなよ。人殺しはきつと後悔するよ。……それに、沙耶になんて言いわけするんだい？」

それは、助けたあとにここが血まみれだったら沙耶が戸惑う、と言っているのだろうか。

「大丈夫よ、ちゃんと私が殺した、っていうつもりだから」

どうせ、ここまでやって何も知られないわけにはいかないだろう。だったらもはや沙耶と友達ではいられない。助けて、そのあとはもう別人だ。なんの友情もない、他人になるんだ。

「……そんな悲しいこと言わないで。僕は君には幸せになってもらいたいんだよ。……だからね」

そう言っ、お父さんは懷から何かを取り出した。

……紙切れ？

お父さんはそれを男どもの一人に渡した。男どもはそれを受け取

つてしばらく不審げに見ていたが、とたんにみるみる青ざめて、ついに、

「お、お、お勤めご苦労様です!!」
なんて最敬礼された。

「……え？」

男どもは私に敬礼したまま、そそくさとどこかへ行ってしまった。その様子はまるで私がか重要な人間で、もし粗相をしたら首にされるのではと恐れているようでもあった。

「……何したの？」

「ただ紙切れを渡したただだよ」

お父さんはあんなことをしたにも関わらず、そんなことを言うてのける。

「……嘘」

「嘘じゃないさ。僕とつてはただの紙切れさ。それが彼らには違った、ただそれだけのことだよ。……子供が難しいこと考えなくていいんだよ。君たち子供はもっとわがままで、もっと自分に素直になっればいいんだ」

まるで見透かしたように、お父さんは言った。

まさかずっと見ていたのではあるまいな。

否定できる材料があまりにも少なすぎるため不安だったがこれ以上質問してなにかとてつもないことにいきあたったら大変なので流しておく。

とにかく、沙耶だ。

私は駆けて、沙耶のいるロケットの扉までいく。私からみてとても大きい扉に、子供一人がぎりぎり通れるような窓が一つあった。そこから中を覗き込み、叫ぶ。

「沙耶！沙耶！」

中の沙耶は横になって、なにやら細かく震えて……いや、泣いている？

口も動いて……『助けて、死にたくない』……そう叫んでいるの

か？

「沙耶！……くそっ！こんな扉、いったいどうやったら……」
撃ち抜くか？

いや、中にいる沙耶にも当たるかもしれない。この方法は使えない。
……じゃあ、どうやって……

「……僕、宇剣と話してくるよ。扉を開けるように、って」
「え？」

「じゃあね」

悩んでいて、返す暇もないうちに、お父さんはタタタと軽快な足取りで走ってどこかへ行ってしまった。おそらく局長室だろう。

……まつしか、ないの？

沙耶を救いたいのにな、待つしかできない自分を殺してやりたくな
った。

第79話　救出

ひどく、腹立たしかったように思う。

もはや過去系の感情に、僕は今の行動を制御されているような気がして、なんだか不思議な気持ちになった。

クレアが奮闘していて、人を殺すとまで決意して、それで報われないというのはなんだか理不尽なような、あつてはならないような気がして、静観を決めていた僕は行動した。

即席で作った宇剣局長の『通行許可』……

あの男の筆跡は一度みたことがあったからよかったものの、もし筆跡がばれたらどうしようかと、一度はひやひやしたもののだが、なんだかこの方法で学校に入ったこともあることを思い出し、自信を取り戻した。

とりあえずバリケードは外せたが、沙耶と出会うためにはあの扉を開けなければいけない。

いくら稚拙に見えても、あれは宇宙船の外部に取り付けられる扉だ。拳銃程度では煤ぐらいはついていても傷一つつかないだろう。

そうなればあとは宇剣に頼んで開けてもらうしかない。また娘の役に立てることをうれしく思う反面、あの男を説き伏せなければならぬ苦労を考えて辟易するところもある。

…… なんとかなるさ。

なんとたつて僕は、『ペンタグラム』の家長なんだから。

「…… 何か用ですか？」

そう決心して三秒もしなうちに、僕は決意を鈍らせていた。

クレアのいる橋のすぐそばの扉を開けると、この宇宙局を全貌で
きる局長室があった。そこには宇宙局の局長にして僕の説き伏せる
べき相手、宇剣が沙耶を乗せたロケットを映したモニターを眺めな
がら局長室の椅子に座っていた。入ってきた僕を気にも留めず、何
が面白いのかロケットを見続けている。

この男、もはや隠す意味がないと思ってか敵意をむき出しにした
口調でそう言った。

「いえ、何も？ただ、少し世間話がしたかったですから」

僕はいつもの笑顔でそれに負けないように心がける。ここで負け
て沙耶を死なすわけにはいけないのだ。ここで沙耶が死んだら間違
いなくクレアのあとの人生に差し支える。

「……世間話などしている時間はないのですよ。誰かが私の『通
行許可』を勝手に発行したようで……」

おや、ばれていたのか。……まあ、この部屋にはモニターもある
し、外の様子は筒抜けだったのだろう。

「まあまあ、あれはあなたの部下を守ってあげたのですよ。でな
ければあなた、今頃血の海を見ていることになりますよ？」

「小娘ごときになにができるか。まったく、あなたも最近の子供
の典型ですね。自分の信じたことしか信じない。そのほかは意味が
ないものだと考える」

ははは、まさかこんな所で説教されるとは思わなかったな。的外
れも度合いが過ぎると笑いがこみ上げてくる。

「……何がおかしいのですか？」

「いえ、何も？」

うつかり表情に出ていたようだ。それにしてもこの宇剣という男、
思っていた以上に面白い。

まさか僕が本当に世間話にしに来たわけではないと悟っているは
ずなのに背中を向けたままにいる。死にたいのかな？ここにいろ
のがクレアだったら殺されてるよ、あなた。

「さて、世間話をしましょう。……お願いがありましたね、ロケ

ツトのドアを開けてほしいのですよ」

「無理だな」

おや、ついに丁寧語が抜けた。……よっぽど怒らせたのだろう。おそらく、この男は地球を救うということに絶対の正義を感じているのだろう。だから、幼い子供を死なすことになるの罪悪感も抱いていない。

「なぜでしょうか、その理由をお聞かせ願いたい」

「決まってる、地球のためだ。地球のために、あの小娘には死んでもらわねば」

おやおや、地球を救う英雄になんて言い草なんだろう。僕ならもう少し敬意を払うけど、この男は違うみたいだ。

「へえ、そうなんですか。なら、彼女の友人に最後のお別れぐらい、言わせてあげたらどうです？」

「……最後のお別れ、か。……まあ、いいだろう」

よかった、この人がまだ人間で。もし人間以外だったらどうしようかと思ったよ。……まあ、これで僕の役目は終わり、あとはクレア次第。……じゃあ、頑張ってね。

「ありがとうございます」

心にもない言葉を述べて、僕は部屋を出た。

「沙耶！」

「クレア！」

私たちは急に開いた扉のおかげで、再会することができた。

沙耶の体を抱きしめ、その背をなでる。

大丈夫、沙耶はここにいる、幻なんかじゃない。

「沙耶……逃げよう。ここにいたら殺される」

本当は宇宙に放り出されるのだが、私的には一緒だった。

さ、いこ、と私は沙耶の手を取り、そして――

「……だめ」

そして、逃げられなかった。沙耶に拒まれた。

「……え？」

振り返ると、沙耶は今にも思いつめた表情で、悲しそうな表情で、私の手を振り払っていた。

「……ごめん、クレア。私、いけない」

……まさか、ばれたのか？殺人をしようとしたことを、知られたのか？だから、血に汚れた自分とはいけない、そう言っているのだろうか？

「い、今はそんな、いやとか言ってる場合じゃ……」

「違うの！私、生きてちゃいけないんだ！」

私はその言葉を聞いて、さっきの予想通りだったらどれほどよかっただろうか、と思うのだった。

「な、何言ってるのよ……？」

私の声はかすれていたかも知れない。小さすぎて聞こえなかったかもしれない。それぐらい動揺していた。

「私、もう生きてちゃいけないの！死ぬしかないの！私は死ぬべき人間なの！」

「……そ、そんな……」

沙耶は、きつと、心を造り変えたのだ。……死ななければならぬ、と思い込ませて、死にたくない、という思いを封殺したのだ。

だから、……だけど。

「私、沙耶の爆弾外せるかもしれない」

だから、私は沙耶を助けなきゃ、って思う。

こんな悲しい覚悟を沙耶にさせて、私だけが何も示さないなんて、おかしい。たとえ嫌われても、たとえ二度と口を利けなくなっただとしても、私は、沙耶を救いたい。

「ちよつと、ごめんね」

そう言つと、いまだ驚きで二の句が継げない沙耶の首に手を当てる。

私の能力、『ユージュアクション』。私はこれのせいで今まで散々な目に遭つてきた。

でも、今だけはこの能力に感謝できた。感謝の気持ちしか湧いてこない。

この能力のおかげで、私は沙耶を助けれるのだ。

頭に情報が流れてくる……

爆弾。

爆弾、爆弾としての情報が、頭の中に次々に湧いてくる。沙耶の首にある爆弾の全てを理解する。まるで当たり前のように、解除方法がわかる。まるで当たり前のように、外し方がわかる。

「ごめんね、ちよつと怖いかも」

私はそう断つて、コートからゴツめのナイフを取り出した。片刃の鋭いナイフだ。沙耶の首の皮と、爆弾の帯の間にその刃を滑り込ませる。ちよつと手元が狂ったら沙耶の首に傷がつく。

「く、クレア、いつたいどこでそんなの……」

「今は黙つてて。すぐに終わるから」

右、左、右……刃を滑らせ、表面を削っていく。

すぐに、薄皮一枚のところに行き当たり、それが爆弾の基部だとわかる。

これを破壊すれば沙耶は助かる。同時に地球も助かる。

あと、少し……少し！

「……やった！」
沙耶を長らく苦しめていた枷が、ようやく外れた。

第80話 終宴

あれから、数時間。

即座に造り上げた考えなどそう持続するはずもなく、沙耶は首の枷が外れると涙をこぼして、よかった、よかったよう……と泣いていた。

爆弾はもう解除してしまつて意味をなさないが、念のためということで宇宙にあげられた。誰も乗っていない無人の宇宙船は、今も広大な死の海を漂っているはずである。

私と沙耶は私の家に帰り、生還を心から喜んだ。お父さんや家族のみんなが歓迎してくれたので、沙耶はとても楽しそうだった。でも、いったんほとぼりが冷めて冷静になったとき、沙耶はこう切り出してきた。

それは私の部屋で眠るときのことだった。布団に二人で入り、電気を消した時のこと。

「……ねえ、クレア。あなた、どうして爆弾のことがわかったの？」

この質問に、私は正直に答えることにした。もうどう隠してところでなにも意味はないし、下手隠して誤解されたら嫌だ。

どうせ嫌われるなら、ちゃんとした理由で嫌われたい。

「私ね、特殊な力があるんだ」

前置きなしで、私は言った。

「冗談じゃなんでもなく、私には力がある。全ての重火器、兵器を自由自在に扱える『ユージュアクション』って能力が、私にはある」

それから先は一呼吸おいて、一気に言った。

「そして、私は今までなんども、この力を使ったことがある」

ああ、これで沙耶との友達関係もおしまいだな、と私は覚悟した。武器を使つ出来事なんてひとつに限られている。殺人の時だ。人

殺しと進んで付き合おうなんて人間、いるはずがない。

「……クレア、一つだけ、嘘なしで答えてね」
うなずく。

「あなたは、自分の都合で、自分の欲望を満たすためだけに、人を殺したことがある？」

自分の都合で、ならある。でも、自分の欲望で、はない。

「ない。人を殺してまでしたいことなんて、生きること以外にはなかった」

「……そう……」

悲しそうにした沙耶の顔が、暗闇でもよくわかる。

さあ、次にはなんて言われる？

もう二度と話しかけないで、かな？近づかないで、かな？

「……クレアには、私の知らない過去がある」
うなずく。

「それは、私が想像してるよりも、今日私が感じた恐怖よりもっと恐ろしい目に遭ったのかもしれない。……だから、クレアのしたことは間違っているのかも、しれない、けど、それは仕方のないことで、じゃなくて、確かに人を殺すのは悪いことだよ、でも……私が言いたいのは……私は、自分を守るためには人殺しも仕方ない、って思ってる悪い子なの」

……つまりそれは、私と……

「……沙耶は、まだ私と友達で、いてくれるの……？」

「当たり前だよ」

涙腺が緩んだ気がした。

私と同じと言ってくれる。私は罪を犯した。でも、沙耶もその罪を許容すると言ってくれた。

私は初めて家族以外の人に私の過去を語った。今までは嫌われるんじゃないか、怖がられるんじゃないか、って思っただけと言えなかった。

……でも、沙耶に知ってもらえて、よかったと思う。

もう、私は沙耶に引け目を感じる必要はないんだ。

もう、そんな必要はないんだ。

「……お休み、沙耶」

「お休み、クレア」

目を閉じると、すぐに沙耶の寝息が聞こえた。きつと、疲れていたのだろう。

私も同じように疲れていたので、意識を失うように眠りに就いた。

僕はベランダでお酒を飲みながら景色を眺めていた。

ここのベランダはそんなに上等なものじゃないのでそんなに広くなく、二人入れるかどうかの広さだった。ここは外にあるので空間操作が効かないのだ。後ろには広大な自分の部屋があるのに、ベランダだけこうも狭いと自分がいかにズルをしてここに住んでいるか、ということをさまざまと実感させられる。

ちびりちびりとビールをあおりながら、ホタル族の灯りを眺める。ベランダにともるかすかな火の光は、名前の通りまるでホタルのようだった。それにしても人工的過ぎる光なのは文句を言ってもしょうがない。

「……る、ルウ……」

「ん、なんだい？」

後ろから声をかけられて、僕は振り返る。

声の主は僕の友人にして仲間、赤髪のサラだった。

赤の瞳に、かすかに赤らんだ頬は、上気しているようにも見える。

……こんな時間に何だろう？

今の時刻は午前一時。そろそろリンク達が活動を開始する時間帯で、サラはもちろん僕も普段なら眠っている時間帯だ。

僕は娘の友達救出祝いにこうして一人で飲んでいたのだが、サラはなぜここにいるのだろうか？

「と、となり、いいかしら……？」

普段の威勢はどこへやら、サラはおどおどと頼りなさげに僕に訊いてきた。

「いいよ。……飲む？」

サラにも景色が見えるように端へ移動すると、そばに置いていたクーラーボックスから缶ビールを取り出し、サラに差し出す。

「いいわよ。……今、酒の力を借りるわけにはいかないの」

サラは不思議なことを言って断った。まあ、彼女は酒にはてんで弱いし、僕も無理には進めないけどさ。

彼女は僕の隣に来るとかなりそばまで、それも腕と腕が触れ合うぐらいまで近寄ってきた。

「……どうしたの？」

さびしいことでもあったのだろうか。だからひと肌が恋しくて、こんなことをしているのかな？

「……ルウってさ、どうしてそんなにいつも微笑^{ほほえ}んでるわけ？」

……へえ。

「微笑^{ほほえ}んでる？ そうかな、僕はそんなつもりないのだけれど？」

僕ははぐらかすように言った。きっとサラは何か用事があって来たんだ。それも、僕らの未来につながるぐらい重要な話。もしかしたら、僕の正体がばれたのかもしれない。

「微笑^{ほほえ}んでる。いっつもルウは笑って、誰かを励ましてる。誰かのために笑ってる」

過大評価だよ。僕は自分のためにしか微笑んだことはないよ。

そう言いそうになって、ぎりぎりでとどめた。

「ねえ、私の前ではいつつも笑ってるよね、ルウって。……そう、クレアやほかの子たちの前では怒ったり、悲しんだりするんだけど、私がいるときはいつつも笑ってる。……私、ルウの怒った顔見たことないよ?」

「そんなことないよ。ミリアの時、僕は怒ってたじゃないか」

「違う。あれは本当に怒ったときの顔じゃない。……まだ、微笑みの表情を残してた」

「……君は僕に怒ってほしいのかな?」

まさか、サラは怒ってくれないことにいらだちを覚えてる……つて、そんなわけないか。子供じゃないんだし。

「そんなわけないでしょ。私Mじゃないんだし。……でも、悲しい、というかさびしいのよ。……あんたが、私にだけは感情をあらわにしないって、なんか、他人みたいでさ……」

「……そんなことないよ。僕はちゃんと、君にも感情を見せて……」

「違う! あんたが見せる私への感情つてのは、あんたが敵に見せるものと、なんの違いもないの! 昨日今日での宇剣への対応見て気付いたの! あんた、私を敵だと思ってない! ?」

……まさか、気付かれるとは思わなかったな。

僕はたしかにサラとほかの子供たちと感情の差をつけていた。:

…それに気付いたサラはすごいと思う。

でも。

「違うよ。……僕は君を敵だなんて思ってない。……君は大切な友達さ」

微笑みと一緒に、僕は言った。

サラは友達。仲間。敵には決して成りえない。

「……私は、それじゃ満足しないの」

サラは、僕の方に向き直った。サラの赤く染まったきれいな顔が

僕の目の前にある。

「と、言つと?」

僕はいつもどおりに微笑んで続きを促した。

「私はね、……私は……」

僕はサラの言葉をじつと待つ。

どんなことを言われるか、察しがついたわけじゃない。どころかサラが何が言いたいのかさっぱり分からない。今日サラがなんのためここに来たのかいまだにわからない。

……でも、ここは待った方がいい。待たなきゃだめだって、どこかで誰かが言っていた。

「……私は……」

口を動かし、覚悟し、決意し、言いかけて、また口を動かし、覚悟しなおして、決意する。

それを三回ほど繰り返したのち、サラは僕に、言った。

そして僕は聞いた。

「私は、サラ・イーストスカイは、あなた、ルウ・ペンタグラム

のことが、
.....

好きです
「

世界が、止まった気がした。

最終話　告白

世界が、止まった気がした。

「……え？」

もう一度言つてよ。だれが、誰のことを好きだつて？……いや、きつとそうじゃない。馬鹿な僕は勘違いしているだけなんだ。そう
だ、そうに違いない……

「あの、それは」

「私は、異性として、あなたが好きです」

もう一度、今度はどう勘違いもしようもない言い方で、サラは言
った。どう聞きなおしてもきつとサラは言いなおさない。それどこ
ろかもつと語気を強めて、主張してくるだろう。

なんで？なんで僕？なんで僕なんかを？好き？好き？

嘘だ。

とつさにそう言いそうになった。

でも、よく考えるルウ・ペンタグラム。

もし、今日サラがこの言葉を言うためにここにきたとして、それ
を僕が否定してしまったら。

彼女の気持ちを踏みにじることになるんじゃないか？

振るなら、振る。受け入れるなら、受け入れる。中途半端な気持
ちで、とつさに思いついた言葉で、サラの気持ちに応えてはいけな
い。答えることは許されない。

「……それは、もう僕とは仲間ではなくて恋人としていたい、とい
うこと、だよな？」

できるだけ冷静に、でもいつもの微笑みはできずに、僕は訊いた。
「うん。……もう、仲間じゃなく、友達じゃなく、恋人として。
そしてゆくゆくは、あなたの名前がほしい。本当のクレアのお母さ
んに、あなたの本当の意味でのパートナーになりたい」

そんな冷静を保つのが精いっぱい僕とは対照的に、サラは訊け

ば訊くほど冷静に、どんどん僕への想いを強めていく。なぜ？

言いだすまではあんなに動揺していたのに、なんで一言想いを伝えただけでこんなにも冷静になれるんだ？

「……僕は、僕は……」

言ってしまおうか。言うべきなのだろうか。言わなければならぬことなのだろうか。僕の正体を。僕が何者かを、サラが何に恋をしたのかを、教えるべきなのだろうか。

……なにを、バカなことを。

サラは身を削る思いで僕に気持ちを、本当に深い気持ちを話して、打ち明けて、告白してくれた。僕はそれに真剣に考え、報いねばならない。

……なら、話さないわけにはいかないだろう。それを話したら、もしかしたら僕を嫌うのかもしれない。嫌うとまではいかないまでも、恋人の話はなしになる可能性は十分以上にある。

……さあ、話そうか。長めに詳しく話そうか、短く要点だけ話そうか。

……早く答えてあげるべきだ。僕は短めに話すことにした。

「……サラ、今から言うことをよく聞いて」

「うん」

なんの疑問も持たずにうなづくサラ。ああ、なんでこうも無抵抗なんだ。まるでトレースみたいじゃないか。僕になら何をされてもいい。……そんな、自己犠牲の愛や恋心、僕はいらないぞ。必要ない。もう間に合ってる。頼むから、そんな君じゃないようなこと、しないでくれ。

「……まず、言わなきゃいけないことがある。……僕は、……僕は……」

さすがに、言い淀む。……トレースにしかしたことのない話を、人間にするのは初めてだ。……正直言っ、怖い。

……でも、サラはもっと怖かったに違いないんだ。僕だけが臆病風に吹かれるわけにはいかないんだ！

「サラ、悪いけど僕は、……人間じゃ、ないんだ……」

ああ、言ってしまった。ついに口に、言葉にってしまった……
予想通り、サラは目を丸くして驚いている。口に手を当て、信じられないとも言いたげに。

「え、え？ ルウ、人間じゃ、ないって……どうゆうこと？」

「簡単さ。僕は人間じゃない。……化け物さ」

正確に何かはわからないけど、人間でないのは確かだ。

「湖でおそわれた時のこと、覚えてる？」

僕は3年前のことを引き合いに出して説明することにした。

「……うん。たしか、世界そのものが畏になつてた、あの世界だよね？」

「うん。……そのとき、僕腕切り落としたけど、すぐに治ったよね？」

「……うん」

「あれは、僕が人間じゃないっていう、確かな証拠……」

あの時サラに魔法をかけてもらったが、あの魔法はただ回復速度を速めるというだけで、すぐに腕が生えてくるというものではなかった。……それなのに僕の腕はあっさりと生えてきた。

「僕は、人間じゃ、ないんだ。……君に恋をしてもらって、想いに答えていいのかどうか、わからないんだ」

「……ねえ、ルウは私のこと、どう思ってるの？」

急に、サラは訊いてきた。なぜ、今になってそんなことを？

「僕は人間じゃない、だから、君の想いには……」

「ルウは、ルウよね？今まで黙ってたのはなんか腹立つけど、でも、ルウよね？私はルウは私のことどう思ってる、って訊いたの。」

『人間』に訊いたんじゃないわ

僕は言いわけしようとした口を閉ざした。……僕は、サラのことを、どう思ってるか？

「……どう、何だろう……？僕は、君のことが好き、なのかな……？」

好き、って気持ちがどんなのかはわからない。

サラの前では優しくあろうとしたのは、仲間だったから？

サラの前では明るく微笑んでいようと思ったのは、友達だったから？

サラの前では人間であろうとしたのは、家族だったから？

サラの前では胸があつたかくなるのは、……それは……

僕が、サラのことが、好きだから？

「……僕は、君のことが……」

好き？嫌い？どちらかで訊かれれば間違いなく好きと言える。

でも、恋人として？と訊かれればわからない。

わからない？僕はほとんどの感情を自覚できるのに？なぜ、サラに対する気持ちだけ、こんなにもあいまいで、こんなにも大切で、こんなにも口にしにくいのだろう。

もしかして、いや、もしかしなくても、僕は、目の前の少女、サラに……サラが、東空沙羅だった時から……僕は。

「……僕は、君のことが、好きだ。……異性として」

サラのことが、好き、なのかもしれない。

かも？違う、好きなんだ。

だって、あんなにももやもやした、つかみどころのない感情だったのに、言葉にしたとたん、『恋』っていう名前を与えられたとたん、感情が爆発するようにあふれたんだ、かも、じゃなくて、好き、なんだ。

好き、好き。僕は、サラのことが好き。好き。好き。

化け物の僕は、人間のサラに恋をした。

いや、恋をしてる。

「僕は君のことが好きだ」

もう一度、言う。

サラは目に涙をためて喜んでいる。

好きと言われて、好きと言って。

僕らは、相思相愛、というやつなのだろうか。

……きつと、そうさ。

通じ合った、想い。確信した、想い。僕はずっと、君のことが好きだった。

「……サラ」

「……ルウ」

いつものように、名前を呼ぶ。でも、意味はさっきまでと全然違う。

サラが顔を近づけてきた。

なぜか、僕も顔を近づける。

……何をしようとしているのだろう。僕は、サラはその答えの出ない問いは、数秒後に答えが出た。

唇の、暖かい感触とともに。

「……やれやれ、だよ」

ルウとサラが口づけ合うその様子を、誰かが見ていた。

白い髪 of ルウの道具、トレースである。

彼女はルウの部屋から二人の顔が近づくまで二人の様子をずっと観察していたのだ。

「まったく、いったい何年かかるんだろうね、ここまで来るのに」
彼女はルウが好きだ。そしてその彼が自分ではない誰かと結ばれたというのに、不満げな表情はどこにもなかった。

どころか、幸せそうであった。

「やっとボクにも本当の幸せが……」

彼女はルウの道具である。だから、ルウの幸せこそがトレースの幸せであり、そのために日々奮闘するのであって、ルウの彼女になるというのはトレースの望むところではなかった。

なぜなら、ルウが本当に好きなのはサラ一人だと気付いていたから。

……そう、ルウが琴乃若に帰ってきた瞬間に、トレースは気付いた。ルウがサラに対する気持ちに。

しかし、ルウはそれに気付いていなかった。気づこうともしなかった。だから彼女は事あるごとにルウを誘惑するような言葉を吐き、サラに危機感を抱かせていたのである。

それが効いたのか、効いていないのかはともかくこうして二人は抱き合い、口づけあっている。

「うん、実に喜ばしいことだ」

ここから先を覗くのは主人に対して失礼、というものだろう。

「……さて、幸せも手に入ったことだし、そろそろ仕事にもどるか」

そうつぶやくとトレースは生徒会室に戻るためルウの部屋を出る。その顔はとても穏やかで、まるでルウの心情を表しているかのようだった。

最終話〜告白〜（後書き）

今回で『異世界を渡る旅人達〜クレア編〜』はおしまいです。タイトルと違って最終話はルウとサラの話になりましたが、まあ、幸せならいいじゃないですか。

さて、次の話ですが、おそらく別の物語になると思います。

舞台、登場人物は変わりませんが、きっと旅人の物語にはならないのではないのでしょうか。……まあ、そんな不確定な予告は話半分で聞いておいて、重要なのは読者の皆様を楽しませることのできる物を僕が書けるかどうか、というところですから。

今までこんな稚拙な文章をご愛読、ありがとうございます！
これからも一層精進して、よりよい作品を書けるように頑張っていくます！

感想、ご意見お待ちしております！

もう一度、言わせていただきます、ありがとうございます！
またお会いしましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4166h/>

異世界を渡る旅人達～クレア編～

2010年10月28日05時02分発行